

選侍、乾清宮に在り。一燭謂はく、「太子は與に居を同じうす可からず」と。乃ち太子を奉じて、暫く慈慶宮に居らしむ。明日、周嘉謨・左光斗等疏して、選侍をして宮を移さしめんと請ふ。光斗の疏中に、武氏の語有り。選侍怒り、太子を召し・光斗に重讒を加へんと欲す。漣、色を正しうして諸奄に謂ふ、「太子は今已に天子と爲る。選侍、何ぞ召すを得ん」と。明日、又、合疏上る。選侍、已むを得ず、即日、嘯鸞宮に移る。帝乃ち乾清に還る。(一燭・漣) 此れ移宮の一案なり。梃撃は、龐保・劉成が死してより後、浮議已に息む。明年、之案、徐紹吉に効せられて去る。天啓中、之案、官に復し、乃ち前事を追理し、復讐の疏を上りて謂はく、「梃撃の一事は、何等の大變ぞ。乃ち劉廷元、瘋癲を以て獄を蔽め、胡士相、亦、朦朧に詞を具す。實に、外戚鄭國泰が私に廷元に結びて大逆を爲さんと謀りしに縁のみ」と。此れ又、梃撃の一案の争端の始なり。光宗崩じ、閣臣方從哲、李可灼に銀幣を賞せんと票擬す。御史王舜等、可灼を劾す。乃ち改めて可灼をして疾を引きて歸らしむ。已にして孫慎行入朝し、從哲を追劾して謂はく、「可灼は太醫に非ず。紅丸は是れ何の藥ぞ。從哲乃ち敢て進御せしむ。從哲は應に弒逆の罪に坐すべし」と。王紀・楊東明・鍾羽正・蕭近高・鄒元標等の疏、之に繼ぐ。黃克纘等は即ち從哲の爲めに辨す。此れ又、紅丸の一案の争端の始なり。李選侍、宮を移る時、内豎李進忠・劉朝・田詔等、金寶を盗み、乾清門を過ぎて作る。帝、法司に下して案治せしむ。諸奄懼れ、則ち「帝、先朝の妃嬪を薄待し、選

【五】 左光斗の傳は明史第二百四十四卷に載す。

侍が宮を移る日、跣足にして井に投ずるを致せり」と揚言し、以て外廷を搖惑す。御史賈繼春、遂に、選侍を安んずる書を上る。黃克纘入り、其言、亦、之に附和す。帝怒り、繼春の籍を削る。已にして帝漸く前事を忘る。王安、又、魏忠賢に排せられて死す。劉朝・田詔等、乃ち忠賢に賄して、疏を上りて冤を辨す。是に於て、繼春等起用せられ、奄の勢に倚り、楊漣等と難を爲す。此れ又、移宮の一案の争端の始なり。此三案は、本各、其是有り。梃撃は、疑を鄭氏に致さざる能はずと雖も、然れども安んを龐保・劉成等が險を行ひ功を倖ふに非ざるを知らんや。故に當時、孫承宗已に謂はく、「事、太子に關す。問はざる可からず。事、貴妃に連なる。深く問ふ可からず。龐保・劉成よりして下は問ふ可し。龐保・劉成よりして上は問ふ可からず」と。此れ亦、善く調停を爲すの說なり。紅丸の案は、韓爌が具に藥を進むる始末を述ぶるに據れば、謂はく、「可灼が藥を進むる時、諸大臣皆在り、皆未だ阻止せず。而るに愼行獨り從哲を責むるに弒逆を以てするは、本深文に屬す。故に疏出づるや、舉朝共に其の過當なるを覺ゆ。特だ其の春秋の許の世子が藥を嘗めざるの例を援引するを以て、其論自ら没す可からず」と。宮を移すの一事に至りては、光宗、位に在ること日淺く、李選侍素より權勢無く、鄭貴妃の萬歴中に在りて數十年薰灼するに比せざるなり。即し暫く乾清に居るとも、亦豈に遂に能く簾を垂れ制を稱せんや。特だ熹宗年尚ほ幼なり。其の久しくして挾制するを慮らざる可からず。此れ楊漣等が宮を移すを趣すの深意なり。既に宮を移して後、自ら當に待するに恩禮を



以てすべし。乃ち忽ち、先朝の嬪御を薄待するの流言有り。則ち賈繼春が選侍を安んせんことを請ふも、亦、未だ過ぎたりと爲さず。故に倪元璐が此三案を論するや、謂はく、「挺撃に主たる者は、力めて東宮を護す。挺撃を争ふ者は、神祖を安んせんと計る。紅丸に主たる者は、義に仗るの詞なり。紅丸を争ふ者は、情を原ぬるの論なり。宮を移すに主たる者は、變を幾先に弭むるなり。宮を移すを争ふ者は、平を事後に持するなり。各、其是有り。偏に非とす可からず」と。此説最も情理の平を得たり。乃ち此三案、遂に日後無窮の攻撃を啓く者は、萬曆中、無錫・顧憲成・高攀龍等が、學を東林書院に講じ、一時の儒者の宗と爲り、海内の士大夫之を慕ふに縁る。其後、鄒元標・馮從吾等、又、京師に在り、首善書院を建て、亦、學を講ずるを以て事と爲す。趙南星、考功郎より罷め歸り、名益高し。元標・憲成と與に、海内、之を三君に擬す。其名行聲氣、以て天下を奔走せしむるに足る。天下の清流の士、羣がりて相應和す。遂に總て目して東林と爲す。凡そ東林に忤ふ者は、即ち共に指して奸邪と爲す。而して挺撃・紅丸・移宮に主たる者は、皆東林なり。萬曆の末、東林已に齊・楚・浙の三黨に斥け盡さる。(葉向) 光熹の際、葉向高再び相たり。劉一燝等と、心を同じうして政を輔け、復た東林を起用す。趙南星が吏部に長たるに及びて、又盡く、東林を攻むる者を斥く。是に於て、斥けられし者、報復を謀り、盡く魏奄に付き、其力を借りて以て勝を求む。向高等相繼いで國を去り、漣・光斗等、又、誣害せらる。凡そ南星の斥くる所の者は、拔擢せざるは無く、推す所の者は、禍に遭は

ざるは無し。迭に勝ち迭に負け、三案遂に戰場と爲る。倪元璐の謂はゆる、「三案、逆奄未だ用ひざるの先に在りては、水火よりも甚たしと雖も、墳麓を害せず。逆奄志を得て後は、逆奄、人を殺すには、則ち三案を借り、羣小、進を求むるには、則ち三案を借る。此二借を経て、而して三案全く非なる」なり。

三案俱に故事有り

光宗、東宮に在る時、挺撃の變有るは、固に非常に出づ。然れども此れ亦故事有り。萬曆元年正月、王大臣といふ者有り。内侍の服を爲して乾清宮に入り、獲らる。東廠に下して訊す。中官馮保、此に縁りて高拱を害せんと欲し、家人辛儒教をして以て高拱が刺を行はしむる所と爲さしむ。錦衣都督朱希孝等會鞠す。大臣疾呼して曰はく、「我に富貴を許し、乃ち我を掠治するか。我何の處にか高閣老を識らん」と。希孝懼れ、敢て訊せず。廷臣楊博・葛守禮等、張居正に力言す。居正、馮保に諷す。保乃ち生漆酒を以て大臣を瘡にし、移して法司に送り、斬に處す。(高拱) 是れ宮禁の變先に已に之れ有りしなり。但だ李希孔の疏に謂はく、「王大臣、徒手にして宮門に闖するは、則ち張差の・棍を持って肆に撃つ者の比す可きに非ず。究めて主使有るか否かを知らざるなり」と。紅

- 【一】 高拱の傳は明史第二百三卷に載す。
- 【二】 李希孔の傳は明史第二百四十六卷王允成傳に附載す。



丸も亦故事有り。孝宗崩する時、中官張瑜等、誤りて薬を用ふるを以て、獄に下さる。楊守隨、會訊して之を杖す。(傳) 御史任惠、又、張瑜及び劉文泰が薬を用ふること宜を失ふの罪を明かにし正さんと請ふ。(傳) 世宗、晩年、方士の薬を服す。崩するに及びて、法官、方士王金等を子・父を弑する律に坐す。(傳) 是れ薬を用ひて殞を致すも、亦、故事有るなり。然れども高拱謂はく、『世宗、臨御すること四十五年、病を抱きて歳を経、壽考にして終を令くす。乃ち王金等の害する所と爲ると謂ひ、誣ふるに正終を得ざるを以てす。天下後世、帝を視て如何なる主と爲さん』と。此れ又一説なり。蓋し世宗の・方士の薬を服するは、誤、平日に在り。故に迹の尋ぬ可き無し。孝宗・光宗の・薬を服し、遽に崩するは、誤、臨時に在り。其迹、見易し。崔文昇・李可灼の案をして閣臣或は楊守隨の杖責の例に仿はしめば、則ち諸臣當に亦異言無かるべからん。而るに反つて賚ふに銀幣を以てす。物議を招く所以なり。移宮の例に至りては、即ち光宗初めて登極する時、鄭貴妃も亦尙ほ乾清宮に在り、李選侍の爲めに、皇后に封せんことを請ひ、選侍も亦、貴妃の爲めに、皇太后に封せんことを請ふ。尙書周嘉謨等、共に鄭養性を詰責し、貴妃をして宮を移さしむ。貴妃、即日、慈寧に移り去る。是れ移宮も亦已に故事有るなり。第だ光宗は長君に係る。故に鄭貴妃、移らざる能はず。熹宗は則ち冲主なり。選侍或は保護を以て詞と爲し、同じく處ること日久しくば、挾制の漸を啓き易からん。故に

【三】 楊守隨の傳は明史第百八十六卷に載す。  
 【四】 任惠の傳は明史第百八十八卷載銑の傳に附載す。

連等早く之を慮るのみ。然れども選侍去りて而して客氏入り、卒に、魏閹と與に政を亂るに至る。蓋し國運將に傾かんとするは、固に人の能く預め料る所に非ざるなり。

張居正久しく病み百官の齋禱の多きこと

明の天啓中、魏閹の生祠、天下に遍きは、人、皆、之を知る。而して萬曆中、張居正、病に臥するや、京朝の官、建醮禱祀し、延いて外省に及び、靡然として風に從ふは、則ち已に其端を開く。蓋し明の中葉以後、士大夫、權に趨き勢に付き、久しく已に相習ひて風を成し、黠者は媚を獻じ、次は亦禍を避くるに迫られ、而して敢て獨り崖岸を立てず。此れ亦、以て風會を觀る可きなり。案するに明史に、『居正病み、四たび月を閱れども愈えず。百官竝に齋醮し、祈禱を爲す。南都・秦・晉・楚・豫の諸大吏、建醮せざるは無し』と。而して明朝小史の載する所更に詳かなり。『萬曆十年、居正病むこと久し。帝大に金帛を出し、醫藥の資と爲す。六部の大臣・九卿・五府・公侯伯、俱に爲めに醮を設く。已にして翰林科道、之に繼ぎ、部屬中行、又、之に繼ぎ、諸雜職、又、之に繼ぎ、仲夏赤日中、職業を舍てて奔走す。其同郷・門生・故吏、再舉三舉する者有り。司香大僚、爐を日中に執る。當に表章を拜すべければ、則ち長跪して起たず。道士に賄して數端を更めて以て膝力を息むる者有るに至る。拜する所の章は、必ず副本を書し、其家人に賂して、之を相公に達す。或は見て之を領し、

張居正久しく病み百官の齋禱の多きこと



筆を取りて其一二の麗語を點す。是より争うて詞客を募りて之を爲り、其の一たび顔を啓かんことを冀ふ。旬日ならずして南京、之に仿ふ。山陝楚圍淮漕撫按潘臬、醜せざる者無し」と。于慎行の筆塵に又記す、「建醜の時、朱御史有り、馬上に於て、首に香盒を頂きて醜所に詣る。已にして使を奉じて都を出づ。畿輔の官、例として牢籠を致せば、則ち大に罵りて曰はく、「爾、吾が相公の爲めに齎するを知らずや。奈何ぞ肉食を以て我に餽るや」と。」此等の情狀、其の魏閣の生祠を去ること、亦豈に異なる有らんや。

明の言路の習氣先後同じからず

〔一〕鄒緝等の傳は明史第百五十二卷に載す。

明の制、凡そ百官・布衣、皆、上書して事を言ふを得。鄒緝等の傳の贊に謂はく、「太祖、基を開き、廣く言路を開く。中外の臣僚建言するに、職掌に拘らず。草野の微賤も、亦、書を上るを得。沿うて宣英に及ぶまで、流風未だ替らず。升平日久しく、堂陛深嚴なりと雖も、而も縫掖の布衣、刀筆の掾吏、朝に封事を陳べ、夕に帝閣に達す。聰明を廣め壅蔽を防ぐ所以なり」と。(各列傳に、練綱が監生を成の人を以て事を言ひ、卿讓が儀衛司の餘丁を以て事を言ひ、張昭が前衛の吏を以て事を言ひ、賀揚が布衣の老人を以て事を言ひ、范濟が諫き、其有職の官員は、侍講劉球が麓川を征するを諫め、王振を譏切し、郎中章綸・大理卿廖莊が沂王を儲位に復せんことを請ひ、翰林羅倫が李賢が情を奪ふを劾し、修撰舒芬等が南巡を諫め、楊慎等が大禮を争ひ、員外郎楊繼盛・經歷沈練等が嚴嵩を劾するが如き、皆、言官に非ず。明史の列傳、數記す可からず。)而して科道の言を以て職と爲す者は、其責尤も専らに、其權尤も重し。職官志の序に謂はく、「御史は天子の耳目なり。凡そ太

臣の姦邪なる、小人の黨を構ふる者は、劾す。凡そ百官の狼狽貪冒なる者は、劾す。凡そ上書して成憲を亂る者は、劾す。考察に遇へば、則ち吏部と同一に黜陟を司る。大獄・重囚、外朝に會鞠すれば、則ち刑部・大理と同一之を平讞す。政事の得失、軍民の利病は、皆、直言して隱す無きを得。又六科の給事中有り。凡そ制敕、失有れば、則ち封駁す。大事を廷議し、大臣を廷推し、大獄を廷鞠するに至るまで、皆、預るを得」と。此れ言官の職掌を見る可きなり。然れども有明一代の建言する者を統觀するに、先後の風氣、亦、同じからず。洪武より以て成化・宏治の間に至るまでは、朝廷の風氣清實にして、建言する者、多く好惡の公に出で、是非の正を辨じ、盡く矯激を以て相尙ぶにあらざるなり。(劉球・章綸等が奏する所、成化中、給事中李俊等が佞幸李孜省・僧繼曉を劾し、御史姜洪・曹鼐等が大學生萬安・劉吉を劾し、而して王恕・王壘・李秉等を薦めて大に用ふ可しとし、御史毛宏が、錢太后的將に別葬せんとするを以て、百官を邀へて、伏して文華門に哭し、卒に英宗の陵に耐葬するを得たるの類の如し。張倫等の傳の贊に謂はく、是時、門戸未だ開けず、名節自ら勵まし、未だ嘗て意旨を政府に承け、擲嚙を權璫に效すこと、末造の爲す所の如き者有らず。故に其言、) 正徳・嘉靖の間は、漸く多く意氣を以て事を用ふ。(正徳中、南巡を諫めて、午門に罰跪し杖せらるる者、百餘人、嘉靖中、大禮を議し、伏して左順門に哭する者、四十餘人の如きの類、已に叫詆の習多し。)張聰の謂はゆる、「言官徒らに黨を結びて勝を求め、内は則ち公卿を奴隸とし、外は則ち司屬を草芥とし、情に任せて恣橫」なり。此れ固に臺諫の惡習なり。然れども亦、未だ概論す可からざる者有り。劉瑾が政を亂るが如き、(劉瑾が政を亂るが如き、)御史蔣欽疏して之を劾し、廷杖せらるること三十、再び劾し、又杖せ

〔二〕張聰の傳は明史第百九十六卷に載す。

〔三〕蔣欽の傳は明史第百八十八卷に載す。



らるること三十。越えて三日、又、疏を草す。燈下、鬼聲を聞く。欽、是れ先靈の勸阻するを知り、筆を奮うて曰はく、「業に已に身を委す。復た死を顧みるを得ず。即ち死すとも、此疏易ふ可からざるなり」と。遂に之を上る。又、杖せらるること三十にして死す。許天錫、瑾を効せんと欲す。必ず禍を得んことを知り、乃ち戸を以て諫めんとし、夜、登聞鼓を撃ち、縊死し、而して疏を以て預め家人に囑し、身後に於て之を上る。(各本傳に)世宗の時、楊最等、既に齋醮を諫むるを以て杖死す。嚴嵩、國に當り、又、楊繼盛、沈鍊等を殺す。而して御史桑喬・謝瑜・何維・柏瑜・時童・漢臣・陳紹・葉經・鄒應龍・林潤等、給事中王翰孟・陳瓊・沈良才・厲汝選等、猶ほ先後疏劾し、廷杖謫戍せられ、死に至れども悔いず。

- 【四】許天錫の傳は明史第八十八卷に載す。
- 【五】楊最等の傳は明史第二百九卷に載す。

(俱に各本傳)且帝深く言官を疾み、以へらく、杖戍は未だ其言を遏むるに足らずと。乃ち長繫して以て之を困む。沈東が獄に在ること凡そ十八年なるが如し。傳贊に謂はく、「主威愈震へども、而も士氣衰へず」と。見る可し、諸臣、過激を免れずと雖も、而も死力を出して、以て朝廷の得失を争ふ、究に及ぶ可からざることを。萬曆中、張居正、權を攬ること久しく、下を操ること濕を束ぬるが如く、己に異なる者は輒ち之を斥け去る。科道、皆、風を望みて靡く。情を奪ふ一事、疏して劾する者、轉つて翰林部曹に出づ。(翰林吳中行・趙用賢・員外郎艾穆)而して科道曾士楚・陳三謨等、且つ交章して留を請ふ。居正が歸葬するに及びて、又、其の朝に還るを趣さんと請ふ。居正が病む

に迫りて、科道并に之が爲めに建醮祈禱す。此れ言路の一變なり。繼ぐに申時行・許國・王錫爵が先後入りて相たるを以てし、務めて居正の爲す所に反し、和厚を以て物に接す。是に於て、言路の勢又張る。張文興・丁此呂等即ち章を抗して閣臣を劾す。而して閣臣と言路と、遂に水火と成る。萬曆の末年、帝、政事に怠り、章奏、一概に省せず。廷臣益々務めて危言激論を爲し、以て自ら標異す。是に於て、部黨角立し、另に一の門戸攻撃の局と成る。(葉向高傳に、「帝、章に得失を見る所無し。益々黨を樹てて相攻む。未だ幾く」)此れ言路の又一變するなり。

- 【六】許國の傳は明史第二百九卷に載す。王錫爵の傳は第二百十八卷に載す。
- 【七】高攀龍の傳は明史第二百四十三卷に載す。顧憲成の傳は第二百三十一卷に載す。
- 【八】趙南星の傳は明史第二百四十三卷に載す。

(熊廷弼・王化貞の一案の如き、朝臣各々祖する所有り。江乘謙謂はく、「今日の事は、經撫の和せざるに非ず、乃ち經撫を好惡する者の和せざるなり。戰守の議の合はざるに非ず、乃ち經撫を左右する者の議の合はざるなり」と。滿朝薦傳にも亦謂はく、「是時、遼左盡く失はれ、國事方々高攀龍に殷なり。而るに廷臣方に黨を植てて浮議を逞しくし、全く國事を以て急と爲さず」と。)高攀龍・顧憲成、學を東林書院に講じ、士大夫多く之に附く。既にして挺擊・紅丸・移宮の三案、紛如として聚まり詆ひ、東林と忤ふ者衆し。共に指して邪黨と爲す。天啓の初、趙南星等、政を柄り、廢斥して殆ど盡く。魏忠賢の勢盛なるに及びて、斥けらるる者、咸、之に倚りて以て東林を傾けんと欲す。是に於て、蛾の・火に赴くが如く、蟻の・羶きに集まるが如し。而して科道轉つて其鷹犬と爲る。(魏忠賢傳)周忠建謂はく、「汪直・劉瑾の時、言路清明なり、故に久しからずして即ち敗る。今は則ち權璫反つて言官を藉りて報復を爲し、言官、又、權璫を借りて聲勢を爲す」と。此れ言路の又一變し、而して風斯に下れるなり。(諸の附く者は閹黨)崇禎



帝、登極し、閹黨は盡く除くと雖も、而も各門戸を立て、互に攻め勝を争ふの習は、則ち已に牢として破る可からず。是非蜂起し、叫呶蹲沓し、以て亡ぶるに至る。(袁繼威の疏に云はく、「三十年來、徒らに呂大器等の傳の論に謂はく、「萬歴より以後、國是紛呶し、朝端水火のごとし。寧ろ社稷の淪胥するを坐視するも、而も門戸の角立を破除する能はず。故に桂林に播越し、旦夕支へざるに至りて、而も吳楚の黨を樹て相傾くるは、猶ほ仍ほ南京翻案の故態なり」と。熊廷弼の疏に言はく、「朝堂の議論、全く兵を知らず。敵緩なれば則ち開然として戰を催し、敗るるに及びて、始めて愾然として敢て言はず。臣が收拾して甫めて定まるに及びては、則ち愾然たる者又開然たり」と。又、疏して言はく、「臣以ふに東西南北の殺さんと欲する所の人、諸臣能く封疆の容を爲せば、則ち之を容れ、門戸の容を爲す能はざれば則ち之を去る」と。盧象昇も亦疏して云はく、「臺諫の諸臣、難易を問はず、死生を顧みず、専ら以て全きを求め備はるを責む。長材有りと雖も、何によりて展布せん」と。此數疏を觀れば、明末の言路の惡習を見る可きなり。)

明末、書生、國を誤る

【一】謝疊山の傳は宋史第四百二十五卷に載す。

書生徒らに文理を講じ、時勢を揣らさず、未だ人の家國を誤らざる者有らず。宋の南渡するや、秦檜、和議を主として以て偏安の局を成す。當時の議者、顔を反し仇に事ふるを以て檜の罪と爲さざるは無し。而して後の力めて恢復を主とする者は、張德遠一たび出でて輒ち敗れ、韓侂胄再び出でて又敗れ、之を卒ふるに仍ほ和議を以て疆を保つ。賈似道が始めて和を求むるに迫りて、旋た之を諱み、孟浪に兵を用ひ、遂に國を亡ぼすに至る。(二)謝疊山が、兵交はること數年に於て、一介の使無きを痛惜する所以なり。有明の末造も亦然り。外には我が朝の兵有り、内には流賊の擾有り、南を討てば則ち北を慮り、北を拒げば則ち南を慮る。早く我が朝と通和し、全力を以て賊を辦するを得しめば、

尙ほ掃除す可かりしならん。且つ是時我が

太宗文皇帝、未だ嘗て必ずしも中原を取らんと欲せず、崇禎帝も亦、未だ嘗て我が朝と好を通ずるを欲せざるにあらず。大凌河の役に、祖大壽、我が朝に降る。後、正に反ると雖も、而も其子姪は已に我が朝に仕ふ。是れ宜しく案するに敵に通ずるの罪を以てすべし。而して帝仍ほ之を用ふ。是れ固に、大壽を藉りて講和の地と爲さんと欲するなり。(三)邱禾嘉傳 大兵、牆子嶺に入るに迫りて、

盧象昇入り援く。楊嗣昌、陰に互市の策を主とす。象昇、帝に見えて曰

はく、「臣、戰を主とす」と。帝、色變じ、良久しうして曰はく、「歎は乃ち外廷の議なるのみ。其れ出でて嗣昌と議せよ」と。(四)盧象昇傳 是れ和議の策、帝已に嗣昌と之を謀るなり。(四)何楷傳に、嗣昌方に款議を主とし、建武の款塞の故事を歴引す。楷、御史林甫友と與に之を駁す。 陳新甲が兵部尙書と爲るに及びて、南北交、困するを以て、使を遣

はして、我が朝と和を議す、傅宗龍、之を奏す。大學士謝陞、帝の前に在り、曰はく、「倘し肯て和を議せば、和も亦恃む可し」と。帝遂に和事を以て新甲に諭し、密に之を圖らしめ、而して其の洩らす勿からんことを戒む。是れ帝更に明かに時勢の和せざる可からざるを知るなり。言官方士亮、倪仁禎、朱徽等、陞に謁す。陞告ぐるに、「上、奉先殿に在りて祈籤し、和意已に決す。諸君幸に多言する勿かれ」といふを以てす。士亮等輒ち羣起し、陞を劾して去る。(謝陞及び

- 【一】邱禾嘉の傳は明史第二百六十一卷に載す。
- 【二】盧象昇の傳は明史第二百六十一卷に載す。
- 【三】何楷の傳は明史第二百六十六卷に載す。
- 【四】陳新甲の傳は明史第二百五十七卷に載す。



二臣傳に) 新甲が遣はして和を求めしむる所の馬紹愉、密語を以て新甲に報ず。新甲の家人誤つて發抄す。(二臣傳、此の如し。明史には則ち云はく、「帝) 是に於て、言者大に譁しく、交章して劾奏す。帝、羣議に迫られ、且つ新甲が主の過を彰すを惡み、遂に新甲を市に棄つ。(新甲) 是より、帝、復た敢て和を言はず、且つ亦、人の能く和事を辦する者無く、而して手を束ねて亡を待つ。當日の事勢を統べて之を觀るに、我が

太宗既に和を許すの意有り、崇禎帝も亦未だ嘗て和を議するを願はざるにあらず、徒に、朝論紛呶し、是非蜂起するを以て、遂に敢て和を定めず、以て、國力困極し、宗社淪亡するを致す。豈に書生の紙上の空談、人の家國を誤るの明驗に非ずや。

〔六〕 萬元吉の傳は明史第二百七十八卷に載す。

案するに、明季に、書生、國を誤るは、獨り和を議する一事のみならざるなり。(孫傳庭、關中を守る。議者謂へらく、宜しく輕しく出づべからずと。而して已に、其の逗撓するを議する者有り。賊既に河を渡る。諸臣、關寧・吳三桂の兵を撤して迎へ撃たんと請ふ。而して已に、其の地を蹙むるを議する者有り。賊勢、原を燎くがごときに及びて、羣臣或は南幸せんことを請ひ、或は皇儲の・南京に監國せんことを請ふ。皆、權宜の善策なり。而して已に、其の邪妄なるを議する者有り」と言へるが如し。此一疏に即きて之を觀れば、諸臣、時勢を度らず、徒らに臆見を逞しうし、人の家國を誤りて顧みざるを見る可きなり。

明代の宦官

○有明一代の宦官の禍は、唐に視べて稍や輕しと雖も、然れども劉瑾・魏忠賢に至りては、亦、東漢の末造に減せず。初め明祖、令を著はし、内官は政事に與るを得ず、秩は四品に過ぐるを得ざらしむ。永樂中、鄭和を遣はして西洋に下らしめ、侯顯をして西番に使せしめ、馬騏をして交趾に鎮せしむ。且つ、西北の諸將は多く洪武の舊人なるを以て、疑慮無き能はず。乃ち鎮守の官を設け、中人を以て之に參す。京師の内に、又、東廠偵事を設く。宦官始めて進用せらる。宣宗の時、中使四に出で、花鳥及び諸の珍異を取ること亦多し。然れども袁琦・裴可烈等、犯す有れば輒ち誅す。故に敢て肆ならず。正統以後は、則ち邊方の鎮守、京營の掌兵、倉場を經理する、營造を提督する、珠池銀礦、市舶織造、處として之れ無きは無し。何元朗云はく、「嘉靖中、内官有り、朱象元に語りて云はく、「昔日、張先生(璉)、朝に進めば、我們、打恭せんと要す。後、夏先生(言)は、我們平眼に他を看る。今、嚴先生(嵩)は、我們と手を拱して始めて進み去る」と。案するに、世宗、内侍を馭すること最も嚴なり。四十餘年間、未だ嘗て任するに事を以てせず。故に嘉靖中、内官最も斂戢す。然れども已に先後同じからざること此の如し。何ぞ況んや正徳・天啓等の朝をや。稗史に載す、「永樂中、内官を差して五府・六部

〔一〕 明史第三百四卷第三百五卷宦官傳、第三百六卷閣黨傳を參照せよ。



に到らしむるに、俱に府部の官を離ること一丈にして揖を作す。遂に公侯駙馬に遇へば、皆、馬を下りて旁に立つ。今は則ち府部の官を呼喚すること屬史の如し。公侯駙馬、遂に内官に遇へば、反つて之を迴避し、且つ稱するに翁父を以てす。大臣に至りては、則ち并に叩頭跪拜す」と。此れ、有明一代の宦官の權勢の大概を見る可きなり。總べて之を論ずれば、明代の宦官、權を擅にするは王振より始まる。然れども其時、廷臣の之に附く者は、惟だ王驥・王祐等數人のみ。其他は尙ほ肯て首を俯せず。故に薛瑄・李時勉等、皆、誣害せらる。汪直が權を擅にするに及びて、之に附く者漸く多し。使を奉じて出づれば、巡按・御史等、迎へて馬首に拜し、巡撫も亦戎装して路に謁す。王越・陳鉞等、結びて奥援と爲す。然れども閣臣商輅・劉翊尙ほ連章して劾奏す。尙書項忠・馬文升等、亦、之を薄んじ、而して陷るる所と爲る。則ち士大夫の氣、猶ほ盡くは屈せざるなり。劉瑾に至りては、則ち焦芳・劉宇・張綵等、之が腹心と爲り、善類を戕賊し、賄賂を徵責し、流毒幾ど天下に遍し。然れども瑾、翰林の屈せざるを惡み、而して通鑑纂要の謄寫謹まざるを以て、諸の纂修官を譴謫す。見る可し、是時、廷臣尙ほ未だ靡然として風に從はざることを。且つ王振・汪直は好んで名士を延攬す。振は薛瑄・陳繼忠の名を慕ひ、特に之を物色す。直は楊繼忠の名を慕ひ、親ら往きて之を弔ふ。瑾は康海の名を慕ひ、其の李夢陽を救ふの一言に因りて、立ちどころに之を獄より出す。是れ亦尙ほ敢て朝臣を奴隸とせざるなり。魏忠賢が權を竊むに迫りて、三案に劾せられ、察典に謫せられたる諸

人、其力を借りて以て正人を傾けんと欲し、遂に羣がり起りて之に附く。文臣には則ち崔呈秀・田吉・吳瀆夫・李龍・倪文煥を、五虎と號す。武臣には則ち田爾耕・許顯純・孫雲鶴・楊震・崔應元を、五彪と號す。又、尙書周應・秋卿寺曹欽程等を、十狗と號す。又、十孩兒・四十孫の號有り。内閣六部より、四方の督撫に至るまで、逆黨に非ざるは無し。駸駸乎として、篡弒の禍を成す可し。明史に載す、「太祖の制、内官は書を読み字を識るを許さず。宣宗始めて内書堂を設け、小内侍を選び、大學士陳山をして之を教へしむ。遂に定制と爲す。是を用て多く文義に通ず。(四友齋叢説には則ち謂はく、「永樂中、を教ふるを聽さしむ。王振始めて教職を以て内に入) 數傳の後、勢、積重を成すと云ふ」と。然れども其の禍を致すの由を考ふるに、亦、盡く文義に通ずるに由るにあらざるなり。王振・汪直・劉瑾は、固に稍や文墨を知る。魏忠賢は則ち目、丁をも識らず、而して禍更に烈し。大概總て、人主の童昏にして、漫に事を省せざるに由る。故に若きの輩、以て愚弄して威權を竊むを得。憲宗の稍や能く自ら主たるが如きは、則ち汪直始め肆恣なりと雖も、後終に一たび斥けて用ひず。武宗の瑾に於けるも、亦能く擒にして之を戮す。惟だ英・熹の二朝は、皆、冲齡を以て位を嗣ぐ。故に振・忠賢、行を肆にして忌む無きを得たり。然れども正統の初、三楊、國に當るや、振尙ほ心に之を憚り、未だ敢て逞しくせず。三楊相繼いで歿するに迫りて、而して後、跋扈して制す可からず。天啓の初、衆正、朝に盈つるや、忠賢も亦未だ大に横ならず。四年以後、葉向高・趙南星・高攀龍・楊漣・左光斗等、相繼いで去り、而し



て後、其毒痛を肆にす。計るに振忠賢が權を擅にするは、多きは六七年に過ぎず、少きは僅に三四年にして、而も其禍敗已に是の如し。設し正統・天啓の初、二賢即ち大權、握に在らしめば、其禍更に言ふに勝ふ可からざる者有りしならん。然れば則ち廣く正人を樹て、以て政の本を端しくし、而して亂の源を防ぐは、固に天下を有つ者の要務なるかな。

案するに、明代の宦官、權を擅にするは、其富も亦人の聽聞を駭かす。今、記載に見ゆる者は、王振の時、朝覲する毎に、官來り見る者、百金を以て率と爲し、千金なる者、始めて醉飽するを得て出づ。(稗史)是時、賄賂初めて開け、千金已に厚禮と爲す。然して振、籍没せらるる時、金銀六十餘庫、玉盤百、珊瑚の高さ六七尺なる者二十餘株。(明史)則ち其富已に訾られざるなり。李廣歿して後、孝宗、其賂籍を得たるに、文武の大臣、黃白米各千百石を餽る。帝曰はく、『廣の食幾何にして、乃ち米を受くること許の如くなる』と。左右曰はく、『隱語なるのみ。黃とは金、白とは銀なり』と。(廣傳)則ち振に視べて已に更に甚だし。劉瑾の時、天下の三司官入覲すれば、例として千金を索む。甚だしきは四五千金の者有るに至る。(蔣欽傳)科道出で使して歸れば、例として重賄有り。給事中周燭、事を勘して歸る。淮安知府趙俊、千金を貸すを許す。既にして與へず。燭、計、出づる所無し。桃源に至りて自刎して死す。(許天錫傳)偶一たび出で使すれば、即ち重賂を需む。其他、知る可きなり。稗史に又記す、『布政使は須く二萬金を納るべし』と。則ち更に四五千金に

止まらざるなり。瑾敗れて後、籍没の數、王鏊の筆記に據れば、大玉帶八十束、黃金二百五十萬兩、銀五十萬餘兩、他の珍寶、算無し。計るに瑾が柄を竊むこと、六七年に過ぎず。而して積む所已に此の如し。其後、錢寧、籍没せらるる時、黃金十餘萬兩、白金三千箱、玉帶二千五百束。(明史)亦幾ど瑾の半に及ばんとす。魏忠賢が柄を竊むに至りては、史、其籍没の數を載せずと雖も、然れども其權、瑾よりも勝れば、則ち其富更に瑾よりも勝ること知る可きなり。顧ふに賄を納るること、亦、必ずしも奄寺のみならず。凡そ勢の在る所は、利即ち之に隨ふ。錢寧敗れし後、江彬、武臣を以て幸を得、籍没せらるる時、黃金七十櫃、白金二千三百櫃なりし。(彬傳)が如きは、宦官に非ざるなり。世宗の時、宦官、權を擅にする者無し。而して嚴嵩、相たること二十年、明史の記する所の籍没の數は、黃金三萬餘兩、白金二百萬餘兩、他の珍寶は數計す可からず。此れ已に駭く可きに屬す。而して稗史の載する所、嚴世蕃、其妻と與に、金を地に窖し、百萬毎に一窖と爲す。凡そ十數窖。曰はく、『老人をして之を見しめざる可からず』と。嵩至るに及びて、亦大に駭き、多く藏し厚く亡ふを以て慮と爲す。則ち史傳の載する所、尙ほ實數に非ざるなり。今案するに沈鍊、嵩を劾して謂はく、『其の御史の權を攪り、州縣の小吏と雖も、亦、貨を以て取索し、撫按の歲例、有司遞に相承事し、而して民財日に削らるるを致す』と。楊繼盛、嵩を劾する疏に謂は

- 【一】 江彬の傳は明史第三百七卷侯倖傳に載す。
- 【二】 老人は嚴嵩をいふ。
- 【三】 楊繼盛の傳は明史第二百九卷に載す。



く、「文武の遷擢、可否を論せず、但だ賄の多寡を問ふ。將弁、嵩に賄すれば、士卒を賤削せざるを得ず。有司、嵩に賄すれば、百姓を培克せざるを得ず」と。(五) 徐學詩、嵩を劾する疏に謂はく、「都城、警有り、嵩密に財を運して南に還る。大車數十乘、樓船十餘艘」と。(六) 王宗茂、嵩を劾して謂はく、「文武、賂を以てして其門を出づれば、則ち必ず軍の餉を尅す。陛下の帑藏、諸邊の一年の費を門を出づれば、則ち必ず軍の餉を尅す。陛下の帑藏、諸邊の一年の費を支ふるに足らず、而して嵩の積む所は數年を支ふ可し。其の官爵を賣るの令を開かんよりは、何ぞ其家を籍して以て患を紓ぶるに如かん」と。(七) 周冕、嵩を劾して謂はく、「邊臣、事を失ひ、賂を嵩に納るれば、功無きも賞を受く可く、罪有るも誅せざる可し。文武の大臣の贈諡、遲速與奪、一に賂の厚薄を視る」と。(八) 張翀、嵩を劾して謂はく、「文武の將吏、率ね賄に由りて進む。戸部、邊餉を發すれば、朝に度支の門を出で、暮に奸嵩の府に入る。邊に輸する者は四、嵩に餽る者は六。邊鎮、人をして嵩の門下を伺はしむるに、未だ其父に饋らざるに、先づ其子に饋る。未だ其子に饋らざるに、先づ家人に饋る。家人嚴年、已に數十萬を踰ゆ」と。(九) 董傳策、嵩を劾して謂はく、「邊軍の歲餉數百萬、半は嵩の家に入る。吏・兵の二部、簿を持して嵩に就きて填註す。文選郎萬家・職方郎方祥、人稱して文武管家

- 〔五〕 徐學詩の傳は明史第二百十卷に載す。
- 〔六〕 王宗茂の傳は明史第二百十卷に載す。
- 〔七〕 周冕の傳は明史第二百十卷に載す。
- 〔八〕 張翀の傳は明史第二百十卷に載す。
- 〔九〕 董傳策の傳は明史第二百十卷に載す。

と爲す。嵩の賫多く、水陸の舟車、載せて其郷に還ること、月に虛日無し」と。(一〇) 鄒應龍、嵩を劾して謂はく、「嵩の籍は本袁州なり。乃ち廣く良田・美宅を南京・揚州に置くこと、無慮數十所」と。諸疏を合はせて之を觀れば、嵩が賄を納ること、實に古よりの權奸の未だ有らざる所なるを見る可し。其後、(一一) 陳演、相を罷め、賫多きを以て、行く能はず。國變の後、鬪賊の得る所と爲る。亦、皆、宦官に非ざるなり。是に知る可し、賄は權に隨つて集まることを。權、宦官に在れば、則ち賄も亦宦官に在り、權、大臣に在れば、則ち賄も亦大臣に在り。此れ權門の賄賂の往鑒なり。

魏 闡 の 生 祠

魏忠賢の生祠の建つは、浙撫の潘汝禎に始まる。汝禎、機戶の請に因りて、祠を西湖に建て、疏して朝に聞す。詔して名を普徳と賜ふ。此れ天啓六年六月の事なり。是より、諸方、尤に效ひ、遂に天下に遍し。其年十月、孝陵衛指揮李之才、之を南京に建つ。七年正月、宣大總督張樸・宣府巡撫秦士文・宣大巡按張素養、之を宣府に建つ。大同應天巡撫毛一鷺・巡按王珙、之を虎邱に建つ。二月、薊遼總督閻鳴泰・順天巡撫劉詔・巡按倪文煥、之を景忠山に建つ。宣大總督樸・大同巡撫王點・巡按養素、又、之を大同に建つ。三月、鳴泰、文煥、巡按御史梁夢環と與に、又、之を

- 〔一〇〕 鄒應龍の傳は明史第二百十卷に載す。
- 〔一一〕 陳演の傳は明史第二百十三卷に載す。



西協察雲、警山に建て、又、之を昌平通州に建て。太僕寺卿何宗聖、之を房山に建て。四月、鳴泰、巡撫袁崇煥と與に、又、之を寧前に建て。(鳴泰共に建つ。宣大總督樸、山西巡撫曹爾禎、巡按劉宏光、又、之を五臺山に建て。庶吉士李若琳、之を蕃育署に建て。工部郎中曾國禎、之を盧溝橋に建て。五月、通政司經歷孫如洌、順天府尹李春茂、之を宣武門外に建て。巡撫朱童蒙、之を延綏に建て。巡城御史黃憲卿、王大年、汪若極、張樞、智鋌等、之を順天に建て。戶部主事張化愚、之を崇文門に建て。武清侯李誠銘、之を藥王廟に建て。保定侯梁世勳、之を五軍營大教場に建て。登萊巡撫李嵩、山東巡撫李精白、之を蓬萊閣に建て。寧海縣督餉尚書黃運泰、保定巡撫張鳳翼、提督學政李蕃、順天巡按文煥、之を河間天津に建て。河南巡撫郭增光、巡按鮑奇謨、之を開封に建て。上林監丞張永祚、之を良牧、嘉蔬、林衡の三署に建て。博平侯郭振明等、之を都督府の錦衣衛に建て。六月、總漕尚書郭尙友、之を淮安に建て。是月、順天巡按盧成欽、山東巡按黃憲卿、順天巡按卓邁、七月、長蘆巡鹽龔萃肅、淮揚巡鹽許其孝、應天巡按宋禎漢、陝西巡按莊謙、各、之を所部に建て。八月、總河李從心、總漕尙友、東撫精白、巡按憲卿、巡漕何可及、又、之を濟寧に建て。湖撫姚宗文、郎陽撫治梁應澤、湖廣巡按溫阜謨、之を武昌、承天、均州の三邊に建て。總督史永安、陝撫胡廷晏、巡按莊謙、袁鯨、之を固原の太白山に建て。楚王華奎、之を高觀山に建て。山西巡撫牟志夔、巡按李燦然、劉宏光、之を河東に建て。每一祠の費、多き者は數十萬、少き者は數萬、民財を剝し、公帑を侵し、樹木を伐るこ

と算無し。開封の祠を建つるや、民舍二千餘間を毀ち、宮殿九楹を創む。儀、帝者の如し。參政周鏘、祥符縣の季寓庸、恣に之を爲す。巡撫、首を俯するのみ。鏘、魏良卿と善し。祠成るや、熹宗已に崩す。猶ほ書を良卿に致し、忠賢の爲めに滲金像を設く、而して都城數十里の間、祠宇相望む。之を内城の東街に建つる者有り。工部郎葉憲祖竊に嘆す。忠賢、之を聞き、立ちどころに其籍を削る。上林の一苑、四祠を建つるに至る。童蒙、祠を延綏に建て、琉璃の瓦を用ふ。詔して祠を薊州に建て、金像、冕旒を用ふ。凡そ疏詞、一に、聖を頌するが如く、稱するに堯天舜德至聖至神を以てす。而して閣臣輒ち駢語を以て襄答す。運泰、忠賢の像を迎へ、五たび拜し三たび稽首し、文武の將吏を率ゐ、階下に列班し、拜すること初の如く、已りて又像前に詣り、祝稱す、「某事、九千歳の扶植に頼る」と。稽首して謝し、還りて班に就き、復た稽首すること初禮の如し。運泰、遊擊一人を以て祠を守らんと請ふ。後、祠を建つる者、必ず官守有り。其孝等、方に祠を建て上梁す。而して熹宗の哀詔至る。既に哭臨し、服を釋き吉に易へて拜す。監生陸萬齡、「孔子は春秋を作り、忠賢は要典を作る。孔子は少正卯を誅し、忠賢は東林黨人を誅す。宜しく祠を國學に建て、先聖と竝べ尊び、竝に忠賢の父を以て啓聖公の祠に配すべし」と謂ふに至る。司業朱之俊、輒ち爲めに舉行す。最後に巡撫楊邦憲、祠を南昌に建て、周程・朱の三賢の祠を毀ちて、其地を益し、澹臺滅明の祠を嚮り、其像を曳きて之を碎く。疏至る比、莊烈帝已に位に即き、且つ閱し且つ笑ふ。後、祠を建つる者、皆、逆案に入



ると云ふ。(一)閩鳴  
(泰傳)

閩 黨

崇禎の時、逆案を定め、凡そ魏忠賢に附く者は、五六等に分つ。首逆凌遲する者は二人、忠賢及び客氏なり。首逆同じく謀り、決すること時を待たざる者は六人、崔呈秀・魏良卿・客氏の子都督侯國興・太監李文貞・李朝欽・劉若愚なり。近侍に交結し、秋後處決する者は十九人、劉志選・梁夢環・倪文煥・田吉・劉詔・薛貞・吳滄夫・李夔龍・曹欽程・許志吉・孫如洵・陸萬齡・李承祚・田爾耕・許顯純・崔應元・楊寰・孫雲鶴・張體乾なり。近侍に結交し、次等、

〔一〕閩鳴泰の傳は明史第三百六卷閩黨傳に載す。

軍に充てらるる者は十一人、魏廣微・周應秋・閩鳴泰・霍維華・徐大化・潘汝禎・李魯生・楊維垣・張訥・郭欽・李之才なり。又、次等、徒三年に論じ、贖うて民と爲る者は、大學士顧秉謙・馮銓・張瑞圖・來宗道・尚書王紹徽・郭允寬・張我續・曹爾禎・孟紹虞・馮嘉會・李春燾・邵輔忠・呂純如・徐兆魁・薛鳳翔・孫杰・楊夢衰・李養德・劉廷元・曹思誠・南京尚書范濟世・張樸・總督尚書黃運泰・郭尙友・李從心・巡撫尙書李精白等、一百二十九人なり。等を減じ職を革め、閑住する者は、大學士黃立極等、四十四人。忠賢の本族及び内官の黨附する者、又、五十餘人。案既に定まる。其黨、日夜、翻を謀る。頼に帝、之を持すること堅く、動かす能はず。福王の時、阮大鍼起用せられ、其案始めて翻ると云ふ。

〔二〕崔呈秀の傳は明史第三百六卷閩黨傳に載す。

〔三〕霍維華の傳は明史第三百六卷閩黨傳に載す。

徐紹吉・徐景濂の六人は、贈廕祭葬諡俱に全きなり。贈廕祭葬して、諡を予へざる者は、徐大化・范濟世の二人。贈官祭葬する者は、徐揚先・劉廷宣・岳駿聲の三人。官を復して、郵を賜はざる者は、王紹徽・徐兆魁・喬應甲の三人なり。他、王徳完・黃克纘・王永光・章光岳・徐鼎臣・徐卿伯・陸澄源の若き、逆案に入らずと雖も、而も清議の抑ふる所と爲る者、亦、郵を賜ふこと差有り。

(三) 霍維華傳



卷の三十六

汪文言の獄

歙人汪文言、智術有り、俠氣を負ひ、京に入り、貨を輸して監生と爲り、計を用ひて齊・楚・浙の三黨を破り、東宮伴讀王安の賢なるを察し、心を傾けて結納し、與に當世の流品を談ず。光熹の際、外廷は劉一燾に依り、而して安は中に居り、次を以て諸の善政を行ひしは、文言の交關の力、多しと爲す。魏忠賢、既に安の府丞邵輔忠を殺し、遂に文言を劾し、其監生を革す。既に都を出づるや、復た逮して吏に下す。〔一〕末減を得、益、公卿の間に遊ぶ。輿馬常に戶外に填溢す。大學士葉向高、用つて内閣中書と爲し、韓爌・趙南星・楊璉・左光斗・魏大中、皆、與に往來す。會、給事中阮大鍼、左光斗・魏大中と隙有り。遂に給事中章允儒と與に計を定め、同官傅樾に囑して文言を劾し、并に「大中、文言に通じて奸利を爲す」と劾せしむ。魏忠賢大に喜び、立ちどころに文言を詔獄に下す。御史黃尊素、鎮撫劉儵に語りて曰はく、「文言は惜むに足らず。縉紳の禍をして此に由りて起らしむ可からず」と。儵、之を是とし、獄詞、連なる所無し。文言、廷杖して職を褫はれ、牽及する者免るるを獲たり。已にして魏忠

〔一〕光熹。明の光宗と熹宗。  
 〔二〕末減。刑を輕減せらるること。



賢、勢益張り、盡く諸の正人趙南星等を逐ふ。梁夢環遂に再び文言を劾して詔獄に下す。鎮撫許顯純、自ら牘を削りて以て上る。趙南星・楊漣・左光斗・魏大中・李若星・毛士龍・袁化中・繆昌期・鄒維璉・夏之令・王之案・顧大章・周朝瑞・李三才・惠世揚等、牽引せざるは無し。而して漣・光斗・大中・化中・朝瑞・大章を以て楊鎬・熊廷弼の賄を受くと爲す。時に顯純逼りて文言をして諸人を牽引せしむ。文言、五毒備に至れども、終に承せず。顯純乃ち手づから文言の供状を作る。文言、死するに垂なんとして、大呼して曰はく、「爾、妄書する莫かれ。異時、吾當に爾と面質すべし」と。顯純遂に即日之を獄に斃す。(魏大中傳)

時に、賊を受くるに坐する者、大中は三千金、周朝瑞は萬金、袁化中は六千、顧大章は四萬、周起元は十萬に懸坐し、繆昌期は三千、周順昌は三千、周宗建は萬三千、黃尊素は二千八百、李應昇は三千、熊明遇は千二百、而して趙南星も亦、汪文言の獄詞を以て賊萬五千に懸坐し、楊漣は二萬、左光斗は二萬、光斗等が、賄を受くと誣ひらるるや、初め肯て承せず。而して酷刑の斃す所と爲らんことを恐れ、法司に下されて少しく緩むるを得んことを冀ひ、遂に俱に自ら誣服す。忠賢乃ち旨を矯め、五日に一比し、法司に下さず。諸人始めて失計を悔ゆ。(各本傳に)

明末の遼餉・勦餉・練餉

嘉靖中、俺答が入寇するを以て、戸部侍郎孫應奎、已に議して派を加へ、北方の諸府及び廣西・貴州よりの外、銀一百十五萬を増す。(劉劄) 萬歴の末年、遼左、兵を用ひ、又、賦を加ふること五百二十萬。(楊嗣昌傳) 崇禎二年、又、兵餉足らざるを以て、兵部尚書梁廷棟、天下の田賦を増さんと請ふ。是に於て、戸部尚書畢自嚴議し、畝毎に九釐を加ふるの外に於て、(此れ即ち萬歴中) 再び三釐を増す。(梁廷棟・畢自嚴傳) 十年、楊嗣昌、又、請うて二百八十萬を増す。舊額の糧、畝毎に六合を加ふ。計るに石ごとに折銀八錢。帝乃ち詔を下す、「兵を集めざれば、以て賊を平ぐる無し。賦を増さざれば、以て兵に餉する無し。其れ吾が民を累はすこと一年せん」と。當時、之を勦餉と謂ふ。勦餉は一年にして止めんことを期す。十二年、餉盡くれども而も賊未だ平がず。是に於て、又、嗣昌及び督餉侍郎張伯鯨の議に従ひ、勦餉の外、又、練餉七百三十萬を増す。先後共せて千六百七十餘萬を増す。(嗣昌傳) 十五年、蔣德璟、帝に對へて曰はく、「既に舊餉五百餘萬・新餉九百餘萬有り、又、練餉七百三十萬を増す。臣の部、實に咎を辭し難し。今、兵馬仍は未だ練らず、徒らに民の累と爲る

- 【一】 劉劄の傳は明史第二百二卷に載す。
- 【二】 楊嗣昌の傳は明史第二百五十二卷に載す。
- 【三】 梁廷棟の傳は明史第二百五十七卷に載す。
- 【四】 畢自嚴の傳は明史第二百五十六卷に載す。
- 【五】 蔣德璟の傳は明史第二百五十一卷に載す。



のみ」と。(傳)未だ幾くならずして、遂に練餉を罷む。(傳)蓋し帝も亦、民窮し財盡き、催科に困み、益起りて盜賊を爲すを知る。故に之を罷むるなり。

明末、督撫の多きこと

明の中葉以後、陝西には已に三巡撫有り。陝西、一なり。延綏、二なり。甘肅、三なり。山西にも亦、二巡撫有り。山西、一なり。大同、二なり。直隸の宣化にも亦別に一撫を設く。崇禎十四年に至りて、山海關の内外に二督を設く。昌平・保定に、又、二督を設く。是に於て、千里の内に四督有り。又、寧遠・永平・順天・密雲・天津・保定の六巡撫・寧遠・山海・中協・西協・昌平・通州・天津・保定の八總兵有り、星羅棋布し、地として防がざるは無し。(范志完傳)時事孔急にして、固に勢の然らざるを得ざるなり。

明末の巡撫は多く邊道より擢用す

宣德中、于謙、御史より超えて兵部右侍郎に拜せられ、河南・山西に巡撫たり。此れ尙ほ、國初の人を用ふること資格に拘らざるの例に沿ふ。資格既に定まるに迨びては、則ち巡撫は或は僉都御史を用ひ、或は布政使より陞用す。末季に兵事急なるに至りて、凡そ邊道の才を以て見はるる者は、輒ち

擢でて巡撫と爲す。(二)熊汝霖の疏に云はく、『有司の察處する者、濫に邊才を擧ぐるを得ず。監司の察處する者、濫に巡撫を躡ゆるを得ず』と。(三)曹于汴の疏にも亦云はく、『邊道の超擢は常に秩滿つる時に於て、其績を閔實し、濫に取る母かるべし』と。(四)建牙開府熊開元の疏にも亦云はく、『四方の督撫、率ね監司よりし、明日、廷推するに、今日、單を傳へ、吏部、諸を袖中より出せば、諸臣唯唯するのみ』と。此三疏は、各本傳の内に見ゆ。見る可し、是時、巡撫多く監司より擢用せらるることを、今按するに洪承疇は、督糧參政より、延綏巡撫に擢でられ、范志完は、關内僉事より、山西巡撫に擢でられ、楊嗣昌は、山海兵備より、永平巡撫に擢でられ、梁廷棟は、口北道より、遼東巡撫に擢でられ、薛國用は、遼海道より、遼東巡撫に擢でられ、邱民仰は、寧前兵備より、遼東巡撫に擢でられ、宋一鶴は、副使より、胡廣巡撫に擢でられ、馮師孔は、副使より、陝西巡撫に擢でられ、(五)朱之馮は、副使より、宣府巡撫に擢でられ、(六)龍文光は、參政より、四川巡撫に擢でられ、李化熙は、兵備より、四川巡撫に擢でられ、(七)邱祖德は、副使より、保定巡撫に擢でられ、(八)史可法は、副使より、安慶巡撫

明末、督撫の多きこと 明末の巡撫は多く邊道より擢用す

- 【一】 熊汝霖の傳は明史第二百七十六卷に載す。
- 【二】 曹于汴の傳は明史第二百五十四卷に載す。
- 【三】 熊開元の傳は明史第二百五十八卷に載す。
- 【四】 薛國用の傳は明史第二百五十九卷袁應泰傳に附載す。
- 【五】 邱民仰の傳は明史第二百六十一卷に載す。
- 【六】 宋一鶴の傳は明史第二百六十三卷に載す。
- 【七】 馮師孔の傳は明史第二百六十三卷に載す。
- 【八】 朱之馮の傳は明史第二百六十三卷に載す。
- 【九】 龍文光の傳は明史第二百六十三卷に載す。
- 【一〇】 邱祖德の傳は明史第二百七十七卷に載す。
- 【一一】 史可法の傳は明史第二百七十四卷に載す。



に擢でらる。甚だしきは、(一三) 余應桂は、巡按より、湖廣巡撫に擢でられ、(一四) 高名衡は、巡按より、河南巡撫に擢でられ、(一五) 王漢は、知縣行取御史より、即ち河南巡撫に擢でられ、(一六) 楊繩武も亦、御史より、順天巡撫に擢でらるるに至る。嗣昌が兵部尚書と爲るに迫りて、四正・六隅の策を建て、奏して、巡撫の命を用ひざる者は、立ちどころに其兵柄を解き、一監司を以て之に代ふ。是時巡撫を用ふるの大概を見る可きなり。蓋し兵事孔だ亟かにして、倉猝に人を用ふ。固に、拘するに資格を以てし難き者有るなり。

明季、遼左の陣亡の諸將の多きこと

明史の(一七) 羅一貫の傳に、『遼左の軍興りしより、總兵官の陣亡する者十四人。撫順には則ち張承慶、四路に師を出すには則ち杜松・劉綎・王宣・趙夢麟、開原には則ち馬林、瀋陽には則ち賀世延・尤世功、渾河には則ち童仲揆・陳策、遼陽には則ち楊宗業・梁仲善、西平には則ち劉渠・祁秉忠。而して副總兵以下の戰歿すること一貫の如き者は、更に數計す可からずと云ふ』と。然れども此れ尙ほ是れ萬曆・天啓の間の事なり。崇禎中、遵化には則ち趙率教、波羅灣には則ち官維賢、永定門には則ち滿桂・孫祖壽、(皆、崇禎二年) 旅順には則ち黃龍、(六年) 皮島には則ち沈世魁、(七年) 金日觀、(十年) 寧遠には則ち金國鳳、(十二年)

- 【一三】 余應桂の傳は明史第二百六十卷に載す。
- 【一四】 高名衡の傳は明史第二百六十七卷に載す。
- 【一五】 王漢の傳は高名衡傳に附載す。
- 【一六】 楊繩武の傳は明史第二百五十九卷趙光升傳に附載す。
- 【一七】 羅一貫の傳は明史第二百七十一卷に載す。

松山には則ち楊國柱(十四年)、曹變蛟(十五年)、寧遠には則ち李輔明、螺山には則ち張登科、和應薦(十六年)。其他、副將以下、亦、數計す可からず。且つ特に此のみならざるなり。盧象昇・洪承疇の如き、流賊を勦するに、最も功有り。而も一たび 大清の兵に遇へば、死するに非ざれば即ち執へらる。蓋し興朝の運、向ふ所、枯れたるを推き朽ちたるを拉ぐが如し。彼の亡國の帥、自ら必ず之に當れば立ちどころに碎く。明史の謂はゆる『天命、歸する有り、之を爲す莫くして而も爲す者』なり。

明末、督撫の誅戮の多きこと

- 【一八】 鄭崇儉の傳は明史第二百六十卷に載す。
- 【一九】 顏繼祖の傳は明史第二百四十八卷に載す。

鄭崇儉の傳に、『崇禎中、凡そ總督七人を誅す。崇儉及び袁崇煥・劉策・楊一鵬・熊文燦・范志完・趙光忭なり』と。(崇禎二年、王元雅、大清の兵の口に入る。萬曆中、四路に師を喪ひしの經略楊鎬を誅す。五年、天啓中、廣寧に師を喪ひしの巡撫王化貞を誅す。九年、總督梁延棟、事を失ふを以て誅を懼れ、先づ毒を服して死す。四人は尙ほ七人の數の内在らず。九) 顏繼祖の傳に、崇禎中、巡撫の戮せらるる者十一人。薊鎮の王應豸・山西の耿如紀・宣府の李養冲・登萊の孫元化・大同の張翼明・順天の陳祖苞・保定の張其中・山東の顏繼祖・四川の邵捷春・永成の馬成名・順天の潘永圖なり。而して河南の李仙鳳、逮せられて自ら縊るは、與らず。又、崇禎十七年中、兵部尚書凡て十四人、亦、善く全き者有ること罕なり。二年、王洽、獄に下りて死す。九年、張鳳翼、毒を服して死す。十三年、楊嗣昌、自ら縊りて死す。十四年、陳新甲、棄市せらる。其餘、王在晉の如きは、籍を削られて歸り、



高第は効せられて去る。其の致仕を得る者は、惟だ張鶴鳴・熊明遇・馮元鷹等數人のみ。時事周章、人材脆薄にして、刑章又顛覆す。固に國運の然らしむるなり。

四正六隅

韓雍が兩廣の叛猪を征するや、或るひと請ふ、「番騎を以て廣東に趨き、而して大軍は廣西に趨き、路を分ちて撲滅せん」と。雍曰はく、「賊已に數千里に蔓延す。而るに至る所與に戰ふは、是れ自ら敵るるなり。如かず、直に大藤峽を搗き、其巢穴を傾けんには、餘は自ら刃を迎へて解けん」と。後果して此を以て功を成す。崇禎中に流賊

〔二〕韓雍の傳は明史第百七十八卷に載す。

充斥するに及びて、楊嗣昌、則ち四正六隅の説を建て、陝西・河南・湖廣・江北を以て四正と爲し、四巡撫分ち勦して而して専ら防ぎ、延綏・山西・山東・江南・江西・四川を六隅と爲し、六巡撫分ち防ぎて而して協せ勦す。是を十面の網と謂ふ。而して總督・總理の二臣、賊の向ふ所に隨つて専ら征討す。其後、竟に賊を滅ぼす能はず。或は、其の備多く力分れ、雍が要を扼するに如かざるを咎む。知らず、猪獠は四に出でて流劫すと雖も、而も終に巢穴を戀ふ、故に雍専ら其腹心を攻むれば、即ち之を制す可し、流賊は則ち朝秦暮楚、本、定居無し、若し四圍堵截せずして、其の東西に奔突するに聽せ、官軍、後より之を追はば、此れ適以て自ら其力を耗し、而して賊終に滅ぼすを得ざらんことを。嗣昌

の策、固に未だ失せりと爲さざるなり。其先、崇禎七年、陳奇瑜、賊が蜀中に在るを以て、亦先づ四巡撫に檄して會勦せんとし、陝西の練國事は、商南に駐まり、其西北を遏め、隕陽の盧象昇は、房竹に駐まり、其西を遏め、河南の元默は、盧氏に駐まり、其東北を遏め、湖廣の唐暉は、南漳に駐まり、其東南を遏め、而して己は象昇と與に山に入りて之を勦す。崇禎九年、賊盡く永寧・盧氏・内郷・浙川の大山中に趨く。兵部尙書張鳳翼も亦請ふ、「河南・鄖陽・陝西の三巡撫に敕して、各拒防せしめ、軼出せしむる母からしめ、四川・湖廣の兩巡撫、兵を近界に移して聽援し、而して督理二臣、大軍を以て山に入りて之を蹙めん」と。是れ嗣昌の前に、已に此策有り、亦、嗣昌より窺まるに非ざるなり。蓋し必ず外に重兵有りて以て其軼出を防ぎ、而して内、重兵を以て之を蹙めば、盡く殄す可きに庶からん。此れ固に時勢の然らざるを得ざる者なり。奇瑜及び熊文燦兩たび撫に誤りしよりして、流寇遂に制す可からず。然れども徒らに勦して撫せずんば、則ち數十萬の匪徒、亦豈に能く盡く是を殺さんや。又當に痛く殲戮を加へ、死を畏れ、禍を悔いしめ、而して後、一赦を以て其脅従を散じ、農に歸する者は、復た窮治せざるべし。則ち黨與自ら離れ、賊勢孤にして滅ぼし易からん。赦と撫とは同じからず。撫とは其頭目を撫して、而も其部伍を散せず、赦とは其黨與を赦して、而も復た凶會に屬せざるなり。顧ふに先づ痛勦を加ふるに非ずんば、亦豈に

〔一〕陳奇瑜の傳は明史第二百六十卷に載す。  
〔二〕張鳳翼の傳は明史第二百五十七卷に載す。  
〔三〕禍。恐らくは過の誤ならん。



赦を言ひ易からんや。

明末の僭號者は多くは疏屬なり

明末に、福王が國を失ひしより後、諸の僭號者は、多く疏屬に係る。魯王以海は、則ち太祖の子の魯王檀の裔孫なり。崇禎の末、轉じて台州に徙る。張國維等、之を奉じ、國を紹興に監す。後遁れて海に入り、舟山に泊す。又、閩の金門に竄れ、鄭成功の沈むる所と爲る。唐王聿鍵も亦、太祖の子定王樞の裔孫なり。崇禎の末、檀に兵を擧げて王に勤むるを以て、高牆に廢錮せらる。福王立ち、赦されて出づ。南都守られざるや、蘇觀生、鄭鴻達、之を奉じて閩に入り、國を監し、年を隆武と號す。我が朝の兵の執ふる所と爲る。其弟聿鏞、復た廣州に立ち、年を紹武と號す。亦我が朝の兵を執ふる所と爲る。又、唐王、國を監する時、先に靖江王亨嘉有り、自ら廣西に立つ。則ち太祖の從孫の守謙(の子)の裔孫なり。巡撫瞿式耜の誅する所と爲る。又、朱容藩有り、自ら楚の世子・天下兵馬副元帥と稱し、夔州に據る。范文光・劉道貞等、鎮國將軍朱平欄を奉じて蜀王と爲す。未だ幾くならずして、皆敗没す。統計するに、此數人は、崇禎帝に於て、已に極

- 【一】魯王以海の傳は明史第一百十六卷太祖諸子傳朱檀の傳に附載す。
- 【二】唐王聿鍵の傳は明史第一百十八卷太祖諸子傳朱樞の傳に附載す。
- 【三】呂大器の傳は明史第二百七十九卷に載す。
- 【四】樊一蘅の傳は明史第二百七十九卷に載す。

めて疏遠なり。本、宜しく僭號して妄に非分を冀ふべからず。宜なり其の速かに敗るるや。永明王由榔に至りては、則ち神宗の第七子の桂王常瀛の子にして、福王と同じく崇禎帝の從兄弟たり。崇禎帝、曾て封じて永明王と爲す。唐王、俘にせられて後、僭して永歷と號し、廣西・湖南・貴州・雲南に流轉する者、十餘年。後遁れて緬甸に入る。我が朝の兵、緬甸に入る。緬人執へて以て獻す。雲南に死す。

流賊の僞官號

明史の流賊傳に、『李自成、既に襄陽に據り、官爵の名號を翹め、上相・左輔・右弼・六政府・侍郎・郎中・從事等の官有り。要地には防禦使を設け、府には尹と曰ひ、州には牧と曰ひ、縣には令と曰ふ。武官には則ち權將軍・制將軍・威武將軍・果毅將軍等の名有り。陝西に至るに及びて、僞號を稱し、又、天佑殿大學士・六政府尙書・鴻文館・文諭院・諫議・直指使・從政・統會・尙契司・驗馬寺・書寫房等の官を設け、五等の封爵を復す。後、京師を破り、又益官制を改め、六部を六政府と曰ひ、司官を從事と曰ひ、六科を諫議と曰ひ、十三道を直指使と曰ひ、翰林を宏文館と曰ひ、太僕を驗馬寺と曰ひ、巡撫を節度使と曰ひ、兵備を防禦使と曰ふ、今按ずるに、路振飛の傳に、『闖賊節度使呂弼周・防禦使武棟有り、皆、振飛の擒にする所と爲る』と。又、曾亨應の傳

- 【五】永明王由榔の傳は明史第一百二十卷世宗諸子傳朱常瀛の傳に附載す。
- 【一】流賊傳は明史第三百九卷に載す。
- 【二】路振飛の傳は明史第二百七十六卷に載す。
- 【三】曾亨應の傳は明史第二百七十八卷に載す。

明末の僭號者は多くは疏屬なり 流賊の僞官號



に、『亨應先に御史張懋爵の劾する所と爲る。後、亨應、難に死す。而して懋爵、賊に降り、直指使と爲る』と。此れ僞官の名號の、各列傳に見ゆる者なり。張獻忠、武昌に僭號し、亦、尙書・都督・巡撫等の官を設く。既に成都を得、又、左右丞相及び六部・五軍都督府を設く。〔亦、流賊傳〕後、孫可望、黔中に據るや、凡そ諸軍悉く行營と曰ひ、護衛を設けて駕前官と曰ふ。〔可、六部等の官を設けんと欲す。人の其僭を議せんことを恐る。〕李定國、師を桂林に出すや、西勝營張勝・鐵騎右營郭有名・前軍都督高存恩・鐵騎前營王會・武安營陳國能・天威營高文貴・坐營靳統武・右統軍都督王之邦・金吾營劉之謀・武英營廖魚・驃騎營卜寧等有り。〔黃宗義の著はす所の〕鄭成功の海上に横なるや、所部を分ちて七十二鎮と爲す。中軍都督甘輝・左都督文興・鐵騎鎮王起鳳・衝鋒鎮柯朋・禮部鎮陳鳳・前衝鎮黃梧・角宿鎮康澄・援勦左鎮施顯之・理餉鎮王愷有り。又、金武・木武・土武等の鎮有り。又、六官を設け、庶事を分ち理めしむ。舉人潘廣昌を吏戸官と爲し、陳寶鏞を禮官世職と爲し、張光啓を兵官と爲し、浙人程應璠を刑官と爲し、舉人馮澄世を工官と爲す。後、洪旭を以て兵官と爲し、鄭泰を戸官と爲す。其の瓜洲・鎮江に寇する時、中提督甘輝の外、又、左提督翁天佑・右提督禹信・後提督萬禮・總督水師黃安・前鋒鎮余新・正兵鎮韓英・援勦左鎮劉猷・援勦右鎮楊國泰・援勦後鎮黃昭・前衝鋒鎮藍衍・右衝鋒鎮萬祿・後勦鎮楊正・右虎衛陳鵬・左虎衛林勝・監紀推官何平等有り。鄭經の時尙ほ二十八鎮有り。征北將軍吳

〔四〕張獻忠の傳は明史流賊傳に載す。

淑・平北將軍何祐・侍衛馮錫範・左武衛劉國軒・右武衛薛進思・左虎衛許耀・左都督趙得勝・宣毅前鎮江勝・宣毅後鎮陳諒・建威後鎮朱友・援勦左鎮金漢臣・樓船中鎮蕭琛・樓船左鎮朱天貴・吏官洪磊・禮官柯平・兵官陳繩武等の如し。〔野史の鄭成功傳に見ゆ。〕草竊奸宄、一時に横行し、嶠負自ら雄とし、官を設け職を建つるは、適以て自ら其の斃るるを速くなり。永明王、安龍に奔るや、孫可望、一知府をして其糧を給せしむ。冊開に、『皇帝一名、皇后一口』と。李自成死し、其兄の子錦、自成一の妻高氏を奉じて唐王に降るや、猶ほ自成一を稱して先帝と爲し、高氏を太后と爲す。

明の・賊に從ふ官、六等に罪を定む

〔一〕解學龍の傳は明史第二百七十五卷に載す。

〔二〕解學龍の傳に、福王の時、賊に從ふ官の罪を定むるに、唐の六等に倣ふ。其一等、應に磔すべき者は、吏部員外宋企郊、舉人牛金星、平陽知府張麟然、太僕少卿曹欽程、御史李振聲、喻上猷、山西提學參議黎志陞、陝西左布政使陸之祺、兵科給事高翔漢、潼關道僉事楊王休、翰林院檢討劉世芳、十一人なり。二等、應に斬るべくして緩く決する者は、刑科給事光時亨、河南提學鞏煊、庶吉士周鍾、兵部主事方允昌、四人なり。三等、應に絞すべくして贖に擬する者は、翰林修撰兼給事中陳名夏、戶科給事楊枝起、廖國遴、襄陽知府王承曾、天津兵備副使原毓宗、庶吉士何孕光、少詹事項煜、七人なり。四等、應に戍すべくして贖に擬する者は、主事王

明の・賊に從ふ官、六等に罪を定む



孫蕙、檢討梁兆陽、大理寺正錢位坤、總督侯恂、副使王秉鑑、御史陳羽白、裴希度、張懋爵、郎中劉大鞏、員外郭萬象、給事中申芝芳、金汝礪、舉人吳達、修撰楊廷鑑、及び黃繼組、十五人なり。五等、應に徒すべくして贖に擬する者は、通政司參議宋學顯、諭德方拱乾、主事繆沅、給事中呂兆龍、傅振鐸、進士吳剛思、檢討方以智、傅鼎銓、庶吉士張家玉、沈元龍、十人なり。六等、應に杖すべくして贖する者は、員外潘同春、吳泰來、主事張琦、行人王子曜、知縣周壽明、進士徐家麟、向列星、李桐、八人なり。其の北に留まりて再定を俟つ者は、少詹事何瑞徵、楊現光、少卿張若麒、副使方大猷、侍郎党崇雅、熊文舉、太僕卿葉初春、給事中龔鼎孳、戴明說、孫承澤、劉昌、御史涂必泓、張鳴駿、司業薛所蘊、通政參議趙京仕、編修高爾儼、郎中衛周祚、黃紀、孫襄、十九人なり。其の別に再議を存する者は、給事中翁元益、郭充、庶吉士魯臬、吳爾壘(後、史可法と同じ、史可程(即ち可法)の弟、後、宜興に居る)、王自超、白孕謙、梁清標、楊棲鶴、張元琳、呂崇烈、李化麟、朱積、趙頴、劉廷琮、郎中侯佐、吳之琦、員外郎左懋泰、鄒明魁、行人許作梅、進士胡顯、太常博士龔懋熙、王之牧、王臯、梅鸞、姬琨、朱國壽、吳嵩孕、二十八人なり。其の已に旨を奉じて録用する者は、尙書張縉彦、給事中時敏、諭德衛允文、韓四維、御史蘇京、知縣黃國琦、施鳳儀、郎中張振聲、中書顧大成、姜荃林、十人なり。旨有り、「周鍾等は當に緩く決すべからず。陳名夏等は未だ厥辜を蔽はず。侯恂・宋學顯・吳剛思・方以智・潘同春は、罪を擬すること未だ合はず。新榜の進士は、盡く僞命に汚さる。」

當に復た班聯を玷すべからず」と。再び議せしむ。後、又議して、周鍾・光時亨等は、各一等を加ふ。時に馬阮、柄を専らにし、鍾・時亨を殺し、即ち旨を傳ふ。二等の罪斬の者は、謫して雲南の金齒軍に充て、三等の者は、廣西の邊衛軍に充て、四等以下は、俱に民と爲し、永く敍用せず。然れども案内、諸犯多く網を漏れ、一等の者は、皆、賊に隨つて西行す。實に未だ嘗て法を正さざるなり。案するに、福王の時、定むる所の六等は、蓋し一時の聞見に就きて、草率に案を成す。其實は尙ほ遺漏する者多し。李自成が京に入る時、閣臣魏藻德等、百官を率ゐて表賀し、殿前に坐して命を俟ち、羣賊の戲侮する所と爲る。事、明史の列傳に見ゆ。而して六等の中に、  
 庶吉士張端明より、以て御史傅景星に及ぶまで、賊の兵政府侍郎と爲り、陝西監軍道陳之龍が賊の寧夏節度使と爲り、御史柳寅東・張懋爵が俱に賊の直指使と爲るが如きは、此れ皆、文臣の賊に降る者なり。錦衣衛左都督駱養性、賊に降りて原官に仍り、宣化總兵姜瓖・密雲總兵唐通、皆、賊に居庸に降り、盪寇將軍白廣恩、賊に降りて桃源伯に封せられ、副將南一魁・董學禮、賊に降りて總兵と爲るは、此れ武臣の賊に降る者なり。事、我が朝の二臣傳に見ゆ。而して六等の中に、亦、皆、之れ無し。定むる所の案の疎略なることを見る可きなり。定むる所の中に就きて一等の者は、固に賊に隨つて西に去り、二等の中、亦、祇だ周鍾・光時亨の二人のみ法を正し、其

〔二〕 魏藻德の傳は明史第二百五十三卷に載す。



他は仍ほ網を漏れ、三等の中、陳名夏の如きは、我が朝に入り、官、大學士兼吏部尚書に至る。見る可し、六等の案は、固に罪名を懸擬するに過ぎず、實に未だ嘗て能く法を行はざること。其の北に留まりて再定を俟つ者は、本朝に入ること轉た多く、大官に至る有り。梁清標・党崇雅・衛周祚・高爾儼は、皆、大學士に至り、劉昌・龔鼎孳は、皆、尚書に至り、孫承澤は、左都御史に至り、薛所蘊・熊文舉・葉初春は、皆、侍郎に至り、戴明説・張若麒は、皆、京卿に至り、方大猷は巡撫に至る。諸人、福王の時に在り、既に傳聞未だ確ならざるを以て、名を六等の内に麗くるを免るを得、本朝に入りて官位通顯にして、又、其の曾て僞命に汚るるを記する者有る莫し。

皇上、詞臣に命じて、明の臣の我が朝に仕ふる者を以て、二臣傳を作らしむ。其中、賊に降る有る者は、事に據りて直書す。然る後、節を失ふの處、昭然として掩ふ莫し。此れ眞に彰瘡の大公にして、以て萬世の大閑を立つ可し。

時に蘇州の諸生、其郷官の賊に従ふ者を討たんと檄す。奸民、之に和し、少詹事項煜・大理寺正錢位坤・通政司參議宋學顯・員外湯有慶の家、皆、焚劫せらる。常熟、又、給事中時敏の家を焚き、其三代の四棺を燬く。(三) 祁彪佳傳

明代の先後の流賊

盜賊蜂起し、國家を覆すに至るもの、漢には則ち張角等、魏には則ち葛榮等、隋には則ち翟讓等、正史、皆、未だ專傳有らず。唐書には則ち黃巢傳を立て、而して逆臣の中に入る。然れども巢は初より未だ臣と爲らざるなり。明史には、李自成・張獻忠を以て別に流賊傳を立つ。最も允當と爲す。然れども祇だ此二人のみを傳し、而して永樂以後、間を伺うて竊に發する者は、備に載せず、但だ諸臣の列傳の中に附見す。今、特に摘出して以て觀覽に便す。其他、土司の叛服すること常ならず、及び苗犛の巢穴に據りて梗を爲す者は、贅及せず。

唐賽兒

永樂十九年、蒲臺の林三の妻唐賽兒、亂を作し、自ら言はく、「石函の中の寶書・神劍を得、鬼神を役し、紙を翦りて人馬と爲し、相戰闘せしむ」と。徒衆數千、襲うて益都の卸石寨に據る。指揮高鳳、之を捕へんとし、敗歿す。勢遂に熾なり。其黨董彥昇等、莒・即墨を攻め下し、安邱を圍む。總兵官柳升、劉忠を率ゐて賽兒を圍む。賽兒、夜劫す。官軍驚き潰ゆ。忠、戰死す。賽兒逃れ去る。安邱を攻むること益、急なり。知縣張旗等、死守し、下す能はず。莒・即墨の萬餘賊を合はせて來り攻む。都指揮衛青、倭に海上に備へ、之を聞き、千騎を率ゐて馳せ至り、大に賊を破る。城中も亦鼓噪して出づ。賊二千を殺し、四千餘を擒にし、悉く之を斬る。餘賊奔り散す。時に城中、旦夕、支へ



青の救稍や遅かりしならば、城必ず陥りしならん。賽兒は竟に獲られず。(青傳)

劉千斤

成化中、荆襄の賊劉千斤、亂を作す。千斤、名は通、河南の西華の人。縣門の石狻猊重さ千斤、通、隻手にて之を擧ぐ。因つて以て號と爲す。時に流民の、荆襄に聚まる者、通、妖言を以て之を煽し、亂を作さんと謀る。石龍といふ者、石和尚と號し、衆を聚めて剽掠す。通と共に兵を起し、僞りて漢王と稱し、德勝と建元す。朝、尙書白圭に命じて、軍務を提督し、朱永・喜信・鮑政等を率ゐて之を討たしむ。南漳に至りて賊を敗り、勝に乗じて其巢に逼る。通、壽陽に奔る。又退きて大市を保つ。官軍、又、之を敗り、其子聰を斬る。賊退きて後巖に據る。諸軍、四面より之を攻む。遂に通及び其衆三千五百人を擒にし、子女萬一千有奇を獲たり。石龍、劉長子と與に逸れ去り、四川を擾す。圭、兵を分ちて之を覺む。劉長子、龍を縛して以て降る。餘寇悉く平ぐ。(白圭傳)

李鬍子

圭既に劉通を平ぐ。荆襄の間、流民仍ほ屯結す。通の黨、李鬍子、名は原、僞りて平王と稱し、小王洪・王彪等と與に、南漳・房縣・内郷を掠む。流民、之に付き、百萬に至る。總督項忠、之を討ち、先づ人を遣はして山に入り、流民を招諭せしむ。歸する者四十萬。彪も亦、擒に就く。賊仍ほ山砦に伏して出で撃つ。忠、又、李振等を遣はして之を撃たしめ、李原・小王洪等を擒にす。又、流民五十餘萬を招き、安插して籍に著く。(項忠傳)

葉宗留等

正統中、慶元の人葉宗留、麗水の陳鑑胡と與に衆盜を聚む。福建の寶豐縣の銀礦の羣盜自ら相殺し、遂に亂を作す。福建參議竺淵往きて捕へんとし、執へられて死す。宗留、僭して王と稱す。福建の鄧茂七も亦衆を聚めて反す。宗留、鑑胡、之に付き、浙江・江西・福建の境を剽す。參議耿定・僉事王晟及び都督陳榮・劉眞・吳剛等、前後敗没す。遂昌の賊蘇牙・俞伯通、又與に相應す。朝、張驥に命じて、浙江巡撫と爲し、之を討たしむ。驥、官を遣はして撃ちて牙等を斬る。而して鑑胡、方に忿争を以て宗留を殺し、自ら大王と稱し、國を太平と號し、泰定と建元し、浙東を分ち掠す。未だ幾くならずして、茂七死し、鑑胡、勢孤なり。驥、之を招く。遂に降る。別賊蘇記養等も亦、官軍の獲る所と爲る。

(張驥傳)

劉千斤 李鬍子 葉宗留等

【一】 項忠の傳は明史第百七十八卷に載す。  
【二】 張驥の傳は明史第百七十二卷に載す。

【一】 衛青の傳は明史第百七十五卷に載す。  
【二】 白圭の傳は明史第百七十二卷に載す。



鄧茂七

福建の沙縣の人鄧茂七、甲長と爲り、氣を以て郷民を役屬す。其俗、佃人、租を輸する外、例として田主に餽る。茂七、其黨に倡へて餽る無からしめ、而して田主自ら往きて粟を受くるを要す。田主、縣に訴ふ。縣、巡檢に下して之を捕へしむ。茂七、弓兵數人を殺す。上官聞きて官軍三百人を遣はして往きて捕へしむ。盡く殺さる。巡檢も亦死す。茂七遂に大に掠め、自ら剗平王と稱し、官屬を設け、黨數萬人を聚め、二十餘の州縣を陷る。指揮范眞・彭壘等、先後、殺さる。會、左布政使安南の人阮勤、貪濁にして民を漁す。民益々亂に従ふ。巡按汪澄、浙江・江西に檄して會討せしむ。尋いで、賊、降を議するを以て、檄して其兵を止む。賊益々熾なり。茂七、延平を圍む。朝、御史丁瑄に命じて往きて招討せしめ、都督劉聚・僉都張楷をして、大軍をもて其後に繼がしむ。瑄、賊を誘ひて再び延平を攻めしめ、衆を督して撃ちて之を敗り、遂に茂七を斬る。(三) (丁瑄傳)

〔一〕丁瑄の傳は明史第百六十五卷に載す。

李添保

天順中、麻城の人李添保、逋賦を以て逃れて苗中に入り、僞りて唐の太宗の後と稱し、衆萬餘を聚め、僭して王と稱し、武烈と建元し、遠近を掠む。總兵官李震大に之を破る。添保逃れて貴州に入り、復た羣苗を誘うて出で掠む。震、之を擒にす。(三) (震傳)

黃蕭養

天順の末、廣東の賊黃蕭養、亂を作し、廣州を圍む。楊信民、先に廣東に官たり、惠政有り。是に至りて巡撫を以て至り、人をして持して諭し、賊營に入りて之を招かしむ。蕭養素より信民に服す。日を克して、見えんと請ふ。信民、單車にて之に莅む。賊望見して曰はく、「果して楊公なり」と。争うて羅拜し、降らんと願ふ。而して信民尋いで「即ち病みて卒す。會、朝、都督董興に命じて來り討たしむ。蕭養等懼れ、遂に降らす。興、江西・兩廣の兵を調し、侍郎孟鑑、軍務を贊理す。興、天文生馮軾を用ひて隨行せしめ、景泰元年、春、廣州に至る。賊の舟千餘艘、勢甚だ熾なり。而して徵兵未だ盡く集まらず。諸將、師を濟さんと請ふ。軾曰はく、「廣州圍まるること久し。即ち現兵を以て往きて撃たば、猶ほ朽ちたるを拉ぐがごとくならんのみ」と。興、之に従ふ。進んで大洲に至り、賊を撃つ。殺溺して死する者、算無し。餘は多く撫に就く。蕭養、流矢に中りて死す。其父及び黨與を俘にし、皆、誅に伏す。(三) (信民及び興の傳)

〔一〕李震の傳は明史第百六十六卷に載す。

〔二〕楊信民の傳は明史第百七十二卷、董興の傳は第百七十五卷に載す。



劉六・劉七・齊彥名・趙瘋子

正徳中、文安の人劉六、名は寵、其弟七、名は宸、竝に驍悍なり。有司、盜を患へ、寵・宸及び其黨楊虎・齊彥名等を召して盜を捕へしめ、功有り。劉瑾の家人、賄を索むれども得ず、遂に「盜を爲す」と誣ひ、鞏・柳尙を遣はして之を捕へしむ。寵等乃ち大盜張茂の家に投ず。茂、宦官張忠と隣を爲す。茂、之に結ぶ。時に河間の參將袁彪、茂を捕へんとす。茂窘みて救を忠に求む。忠、置酒して茂・彪を招きて宴し、茂を以て彪に囑す。彪遂に敢て捕へず。寵等自首す。尋いで復た叛き去り、城を陥れ將を殺す。朝、馬中錫に命じて、軍務を提督し、張偉等と與に之を討たしむ。諸將儒にして、或は反つて賊と結ぶ。參將桑玉、賊に村中に遇ふ。寵・宸窘みて民家に匿る。而して玉、賂を受け、故らに之を緩くす。頃く有りて齊彥名、大刀を持して至り、數十人を殺傷し、大呼して入る。寵・宸、救至るを知り、出でて數人を殺す。遂に復た熾なり。畿輔より、山東・河南を犯し、湖廣に下り、江西に抵る。又、南よりして北し、直に霸州を窺ふ。楊虎等、河北より山西に入り、復た文安に至り、寵等と合す。縱横數千里、過ぐる所、人無きが如し。中錫、偉、禦ぐ能はず。乃ち招降命を下す。中錫、肩輿にて其營に入る。寵、降らんと請ふ。宸曰はく、「今、奄臣、國を柄す。馬都堂、能く自ら主たらんや」と。遂に罷め去り、焚掠すること故の如し。朝議乃ち侍郎陸完を遣はして出でて師を督し、邊

將卻永・許泰等を調し、邊兵を率ゐて入り勦せしむ。賊を霸州に、信安・阜城に敗る。劉六・七乃ち南して山東の二十州縣を陥る。楊虎、又、北して威縣・新河を殘す。劉六等、沂・莒の間に縱横し、連に宿・遷・虹・永城等の處を陥る。邊兵追ひ及び、小黄河の渡口に至る。虎、溺死す。餘賊、河南に奔り、劉惠を推して首と爲し、總兵白玉の軍を破り、指揮王保を殺し、勢大に熾なり。陳翰といふ者有り、惠を奉じて奉天征討大元帥と爲し、趙燧を之に副とし、翰自ら侍謀軍國重務元帥府長史と爲り、甯龍と與に東西の二廠を立てて事を治め、其軍を分ちて二十八營と爲し、以て二十八宿に應じ、營に各、都督を置く。趙燧は、文安の諸生にして、趙風子と號す。家を擧げて賊を避く。賊、之を得、其妻女に淫せんと欲す。燧怒り、手づから撃ちて數人を殺す。賊、其の勇なるを以て遂に之を奉ず。燧、「淫掠する母かれ、妄に殺す母かれ」と戒む。檄を府縣に移す、「官吏・師儒、走り避くる母かれ。迎ふる者は安堵せん」と。是に由りて、中原を横行し、勢、劉六等の上に出で、連に鹿邑・上蔡・西平を陥れ、遂に舞陽・葉縣を平げ、縦に南頓・新蔡・商水・襄城を掠め、鈞州に至り、馬文升の家在るを以て、之を捨てて去り、泌陽を攻め、焦芳の家を燬き、草を束ねて芳の像を爲りて之を斬る。副總兵馮禎・時源、撃ちて賊を敗る。賊奔りて西平城に入る。官軍、其門を塞ぎ、千餘人を焚死す。餘賊潰えて西す。巡撫鄧璋等、崇王に朝し、宴飲すること三日。賊、散亡を招くを得、勢復た振ひ、鄆陵・滎陽・汜水を陥れ、河南府を圍むこと三日。官軍始めて集まる。賊、官軍の饑る



疲るるを覘ひ、乃ち來り犯す。禎、戰死す。此れ燧等の・河南を亂るなり。劉六・七及び彦名は、則ち山東・畿輔を擾り、亦、數十州縣を陷る。官兵追ひ及ぶ。賊輒ち良民を驅りて前に在らしむ。官兵の殺す所は皆良民なり。故に屢捷を奏すと雖も、而も賊勢、衰へず。是に於て朝命、又、彭澤を以て軍務を提督し、仇鉞と與に河南の賊を辦せしめ、其山東・畿輔の賊は、則ち専ら陸完に委ぬ。澤等、河南に至る。燧等、汝州の寶豐・舞陽・固始・潁州の光山に走る。鉞追うて之に及ぶ。賊大に敗る。湖廣の軍、又、其別部賈勉兒を羅田に破る。賊、六安・舒城に流れ、廬州・定遠に趨き、屢敗る。而して道に楊虎の餘黨數千人に遇ひ、又振ひ、鳳陽・泗宿・睢寧を陷る。諸將連に之を敗り、追うて應山に至る。賊略ぼ盡く。燧、薙髮して逃れて江夏に至り、執へられ、誅に伏す。惠は土地嶺に走り、指揮王謹に射て目に中てられ、自ら縊りて死す。勉兒も亦項城に獲らる。餘黨邢本恕・劉資・楊寡婦等、皆、擒に就く。而して陸完の・山東の賊を辦するや、賊、登萊の海套に入り、又、北に走り、沿途嘯聚して益衆く、巡撫甯臬の兵、敗る所と爲る。賊、又、南して湖廣に走り、舟を奪うて夏口に至り、滿弼等に追ひ及ぶ。劉六、其子仲准と與に水に赴きて死す。劉七・齊彦名、舟に乗りて鎮江に至る。時に河南の賊已に平ぐ。帝、彭澤等に命じて會勦せしむ。賊猶ほ潮に乗じて上下す。操江伯趙宏靖、之に遇うて敗績す。完、鎮江に至り、舟師を分ちて江陰・福山港等の處に備ふ。賊懼れ、通州に至り、颶風大に作る。走りて狼山を保つ。完等、之を攻む。彦名は槍に中りて死す。七は

矢に中り、亦、水に赴きて死す。餘賊盡く平ぐ。(陸完・彭澤・仇鉞・馬文升・馮禎等の傳)

江西の盜

正徳中の流賊は、獨り劉六・七等のみならざるなり。江西にも亦劇盜有り。撫州には則ち王鉦五、徐仰三、傅傑一、揭端三等あり。南昌には則ち姚源の賊汪澄二、王浩八、殷勇十、洪瑞七等あり。瑞州には則ち華林の賊羅光權、陳福一等あり。贛州には則ち大帽山の賊何積欽等あり。朝、陳金に命じて、軍務を總制して之を討たしむ。金、廣西の土官岑瑩・岑猛の土兵を調し、官兵と合し、賊を熟塘に撃ち、東岸に於て、仰三を禽にし、鉦五等を馘る。師を姚源に移し、分ちて參政董朴等に命じ、餘干等の縣を扼し、其の逸出するを防がしめ、親ら大軍を統べて巢を搗く。勇十・瑞七等、皆、誅に就く。勝に乗じて光權を斬る。華林の賊盡く平ぐ。又、大帽山の賊を撃ち、積欽を擒にす。半年の間に、賊を勦して略ぼ盡く。金、置酒高會す。餘賊、諸隘に守兵無きを覘ひ、乃ち土目に賂し、間に乗じて逸出す。時に賊已に麤を絶つこと三日、自ら必死を分とす。貴溪に至りて、始めて一飽を得、遂に徽・衢の間を掠む。金、王浩八を招き降す。偽り降りて以て師を緩くす。而して攻剿すること故の如し。(陳金傳) 東郷の賊も亦、降を副使胡世寧に乞

【一】陸完の傳は明史第百八十七卷、彭澤は第百九十八卷、仇鉞は第百七十五卷、馬文升は第百八十二卷、馮禎は第百七十五卷に載す。  
【二】陳金の傳は明史第百八十七卷に載す。



ひ、新兵と號す。亦剽掠す。罪を懼れ、又叛く。朝命、(三)俞諫を以て來りて金を代らしむ。浩八、貴溪の裴源山に據る。衆又集まる。營を連ぬること十餘里。諫、世寧等をして兵を分ちて其去路を斷たしむ。賊、山に憑りて矢石を發す。官兵幾ど支へざらんとす。諫、(四)副總兵李鉉と與に殊死して戦ふ。賊乃ち走る。追ふこと數十里、浩八を擒にす。其黨胡浩三、既に撫して又叛く。(五)參政吳廷舉往きて諭す。執へらる。居ること三月、盡く其要領を得、浩三を誘ひて其兄浩二を殺さしむ。官兵、亂に乗じて之を攻め、遂に浩三を擒にす。次を以て劉昌三等を平ぐ。而して東郷の賊王垂七、胡念二等、又、官吏を殺し、廩舍を焚く。諫、又、兵を發して之を禽にす。亂乃ち定まる。(俞諫・李鉉・吳廷舉等の傳)

四川の盜

是時、流賊の四川に在る者は、保寧に藍廷瑞有り、順天王と稱し、郾本怒、刮地王と稱し、其黨廖惠、掃地王と稱す。衆十萬、四十八總管を置き、陝西・湖廣の境に蔓延す。廷瑞、惠は、保寧に據らんと謀り、本怒は漢中に據らんと謀り、鄖陽を取りて東下す。(一)巡撫林俊、獬狗の兵及び石柱の土兵を調し、龍灘河に至り、賊の半渡るに乗じて之を撃ち、惠を獲たり。餘賊、陝に奔る。(三)總制洪鐘、令を下して招撫す。降る者萬餘人。賊、又、蓬・

- 【一】 俞諫の傳は明史第百八十七卷に載す。
- 【二】 李鉉の傳は明史第百七十五卷に載す。
- 【三】 吳廷舉の傳は明史第二百一卷に載す。
- 【四】 林俊の傳は明史第百九十四卷に載す。
- 【五】 洪鐘の傳は明史第百八十七卷に載す。

劍の二州を掠む。鐘、陝・豫・楚の兵に檄し、道を分ちて進ましむ。廷瑞、漢中に奔る。官兵之を圍む。廷瑞、人を遣はして降を陳撫藍章に乞ふ。章、賊は本川の人なるを以て、官を遣はして之を護して境を出でしむ。賊既に川に入り、降を乞ひ、而して要求する所多く、營山縣或は臨江市を以て其衆を處らしめんことを欲す。鐘、通判羅賢を遣はして其營に入らしむ。殺さる。鐘乃ち兵を分ちて七壘と爲して之を守る。賊、逸するを得ず。廷瑞、掠むる所の女子を以て、詐りて己の女と爲し、婚を鐘が調來する所の永順の土舍彭世麟に結び、間を得て逃れ去らんことを冀ふ。世麟密に鐘に白す。鐘、計を以て之を圖らしむ。期に及びて、廷瑞、本怒及び其黨二十八人咸來り會す。伏發し、盡く之を擒にす。惟だ廖麻子のみ脱るるを得、其黨曹甫と偕に營山・蓬州を掠む。鐘、又、撫せんと議す。甫、命を聽く。廖麻子、甫が己に背くを忿り、襲うて之を殺し、其衆を并せ、轉じて川東を掠め、合州より江を渡り、州縣を陷る。(鐘)甫の黨方に四に亡命す。思南巡撫林俊、兵を發して撃ちて之を走らす。(傳)朝、彭澤に命じて來りて鐘に代らしむ。澤、總兵時源と偕に數之を敗り、麻子を劍州に禽にす。其黨喻思俸、巴・通の間に竄る。澤、又、之を擒にす。(澤)時に鐘が調する所の永順の土兵恣に暴を爲す。民間謠つて曰はく、「賊兵は梳り、官兵は篋し、土兵は雍す」と。陳金が調する所の廣西の土兵も亦恣横なり。民間謠つて曰はく、「土賊は猶ほ可なり。土兵は我を殺す」と。



曾一本

嘉靖中、海寇曾一本は、本、蜃戸にして、衆を糾めて閩・廣の間に横行す。俞大猷、將に廣西に赴かん  
 とす。總督劉燾、大猷をして閩師に會して夾み撃たしむ。一本、閩に至る。(一)總兵李錫、海に出でて  
 之を禦ぎ、大猷と、賊に柘林澳に遇ひ、三戰して皆捷つ。賊、馬耳澳に通る。復た戰ふ。(二)廣東總兵  
 劉顯及び郭成、參將王詔を率ゐ、師を以て會し、萊蕪澳に次し、三哨に分ちて進む。一本、大舟に駕  
 し、力戰す。諸將連に之を破り、其舟を燬く。詔、一本及び其妻子を生  
 擒し、斬首七百餘。水火に死する者萬計。一本の黨梁本豪も亦蜃戸なり。  
 一本既に誅せらるるや、本豪、海中に竄れ、水戰に習ひ、遠く西洋に通じ、  
 且つ倭兵を結びて助と爲し、千戸通判を殺して以て去る。總督陳瑞、參  
 將黃應甲と謀り、水軍を分ちて二とし、南は老萬山に駐まりて倭に備へ、東は虎門に駐まりて蜃に  
 備へ、別に兩軍を以て外海に備へ、兩軍、要害を扼し、乃ち水軍を率ゐて進み、蜃舟二十を沈め、本  
 豪を生禽す。餘賊、潭洲に奔り、舟二百及び倭舟十を聚む。諸將合追し、先後俘斬千六百、其舟を沈  
 むること二百餘、降者を撫すること二千五百、海賊悉く平ぐ。(李錫・劉  
 顯傳)

【一】李錫の傳は明史第百八十  
 九卷夏良勝傳に附載す。  
 【二】劉顯の傳は明史第二百十  
 二卷に載す。

徐鴻儒

天啓二年、山東の妖賊徐鴻儒・反し、連に鄆・鉅野・鄒・滕・嶧を陥れ、衆、數萬に至る。巡撫趙  
 彥、都司楊國棟・廖棟に任じて、所部に檄し、民兵を練り、要地を守らしめ、家居せる總兵 楊肇基  
 を起し、兵を統べて往きて討たしむ。而して棟・國棟等、鄒を攻め、兵潰え、遊擊張榜・戰死す。彥  
 方に師を兗州に視、賊に遇ふ。肇基至り、急に迎へ戰ひ、棟・國棟をして夾み撃たしめ、大に之を横  
 河に敗る。賊の精銳、鄒・滕の中道に聚まる。肇基、遊兵をして綴して鄒  
 城を敗らしめ、而して大軍を以て賊を紀王城に撃ち、大に賊を敗り、之  
 を嶧山に殪し、遂に鄒を圍む。國棟等、亦、先後、鄆・鉅野・嶧・滕諸縣  
 を收復す。乃ち長圍を築き、鄒を攻むること三月、賊、食盡き、其黨出で  
 降る。遂に鴻儒を擒にす。(楊肇  
 基傳)

【一】楊肇基の傳は明史第二百  
 七十卷馬世龍傳に附載す。  
 【二】熊文燦の傳は明史第二百  
 六十卷に載す。

劉香

崇禎の初、福建に紅夷の患有るや、海盜劉香、之に乗じ、連に閩廣の沿海の邑を犯す。(一)總督熊文燦、  
 招撫せんことを議し、參政洪雲蒸・副使康成祖・參將夏之本・張一傑等を遣はして宣諭せしむ。俱に



執へらる。乃ち降盜鄭芝龍をして香を田尾洋に撃たしむ。香、勢盛まり、雲蒸をして兵を止めしむ。雲蒸・大呼す、「急に賊を撃て。我を顧みる勿かれ」と。遂に害に遇ふ。香、勢窮まり、自ら焚溺して死す。承祖等脱れ歸る。(文燦傳)

### 明祖本紀

明史の太祖本紀は、大概多く之を實録及び御製皇陵碑・世徳碑・紀夢文・西征記・平西蜀文・周顯仙人傳に本づき、此外は、則ち皇明祖訓・皇朝本記・天潢玉牒・國朝禮賢錄・及び陸深の平胡錄・北平錄・平漢錄・平吳錄・平蜀記・黃標の平夏記・張統の雲南機務抄・黃高岱の鴻猷錄・唐樞の國琛集・王世貞の名卿續記・顧璘の國寶新編・徐禎卿の剪勝野聞・王文錄の龍興慈記等の書、無慮數十百種、類ね皆、其採掇に資す。然れども決擇精しからざること南北史の如くならしめば、徒らに異聞を搜りて以て人の耳目を炫し、往往轉た實を失ふに至らん。明史は則ち博く羣書を攪り、而して必ず確核を求む。蓋し之を取ること博くして、而して之を擇ぶこと審かなり。洵に良史と稱す。各家の記述を參觀せずんば、修史者の訂正の苦心を知らざるなり。

### 皇陵碑

明祖の側微の時を敘するには、當に御製の皇陵碑を以て據と爲すべし。蓋し明祖自ら其少日の流離艱苦の況を述べ、甚だしきは、父母を裸葬し、髡髮して沙門たり、食を江淮に乞ふに至るまで、皆諱まざる所なり。則ち其事の確なること知る可きなり、天潢玉牒には、「明祖の母陳太后、麥場に在り、一道士有り、修髯簪冠、紅服象簡、來り坐し、一白丸を撥して大丹と曰ひ、太后に付して之を吞ましむ。已にして娠む有り」といふ。此に據れば則ち道士が丹を授くるは乃ち實事なり。皇朝本紀には則ち云ふ、「太后、夜、夢に、黃冠、麥場の中來り、白藥一丸を取り、之を吞ましむ。覺めて仁祖(即ち明祖)に語る。而して口尙ほ香有り」と。是れ夢中の事なり。高岱の鴻猷錄にも亦、是れ夢と云ふ。明史の本紀、之に従ふ。玉牒に又謂ふ、「明祖の兄南陽王及び子山陽王先に死す。貧しくして葬地無し。同里の劉繼祖、地を以て之に與ふ。時に仁祖先に夢みらく、彼の處に於て室を築くと。今、長子を葬り、後、果して夫妻、亦、同じく此地に葬らる。即ち鳳陽陵なりと云ふ」と。是れ長子先づ葬られ、數年の後、父母隨つて葬らるるなり。然るに皇陵碑に云ふ、「皇考は六十有四に終り、皇妣は五十有九にして亡す。孟兄先に死し、合家、喪を守る。田主徳、我を顧みず、呼叱昂昂たり。忽ち伊兄の慷慨する、此黃壤を惠まる」と。則ち是れ父母兄相繼ぎて旬日の内に死す。故に劉繼祖、其鞠凶を憫み、而して地を捨てて之に與ふ。且つ繼祖の弟方、許さず。若し已に兄を葬るに地有らば、又何ぞ繼祖の贈を煩はさんや。又、徐禎卿の剪勝野聞に、「帝の父母兄相繼ぎて死す。貧しくして、



棺を具ふる能はず、仲兄と謀り、山中に草葬す。途次、縋断ゆ。仲返りて計り、帝を留めて屍を視しむ。忽ち風ふき雨ふり、天大に晦し。明に比りて之を視れば、則ち土裂け屍陥り、已に墳田と成る。伯劉大秀即ち地を與へ、而して責を棄つ」といふ。按ずるに皇陵碑に云ふ、「殞するに棺槨無く、體を蔽ふは惡裳なり」と。是れ草葬は自ら是れ實事なり。天葬の神異に至りては、事本不經なり。碑中竝に一語無し。或は其後、裸葬に因りて附會して此説を爲すか。(玉牒には劉繼祖と謂ひ、野聞には劉大秀と謂ふ。名も亦同じからず)

明祖、殺を嗜まざるを以て天下を得たり

明祖、布衣を以て帝業を成せるは、其の力を得る處、總て、人を殺すを嗜まざるの一語に在り。初め李善長に遇へば、即ち漢高の豁達大度にして人を殺すを嗜まざるを以て勸を爲す。和州を取るに及びて、諸將頗る戢まらず。范常、規するに「一城を得れば、人をして肝腦、地に塗れしむ。何を以て大事を成さん」といふを以てす。即ち諸將を責め、軍中の掠むる所の婦女を搜し、遣りて其家に送らしむ。既に江を渡り、將に太平を取らんとするや、李善長をして「預め禁約の榜文を書せしめ、城に入れば、即ち諸の通衢に懸く。兵皆肅然として、敢て犯すもの母し。故に陶安謂ふ、「明公、(一)神武にして殺さず。天下は平ぐるに足らざるなり」と。將に鎮江を取らんとするに及びて、先づ諸將を坐するに重罪を以てし、善長をして再三、釋さんこと

〔一〕神武にして殺さず。周易繫辭傳の語。

を求めしむ。乃ち令を下す、「廬舎、焚かず、民、酷掠する無くして、方に、罪を免するを許さん」と。是に於て、城に克つの日、民、兵有るを知らず。池州の役に、徐達・常遇春・陳友諒の兵を敗り、三千人を生獲す。遇春、盡く之を誅せんと欲す。徐達、可かず。乃ち以て聞す。而して遇春、其兵を坑すること半に過ぐ。帝、急に命じて之を釋さしむ。是に由りて、達に命じて盡く諸將を護せしむ。遇春、熊天瑞を贛州に圍む。固く守りて下らず。帝、其の多く殺さんことを慮り、先づ戒めて曰はく、「地を得るも民無くば、亦何の益あらん」と。乃ち長圍を築き、半年にして始めて之に克つ。是に於て、諸將、皆、風旨を承順し、威、殺掠を以て戒と爲す。徐達、張士誠を平江に圍む。亦幾ど一年。城將に破れんとす。先づ遇春に約して曰はく、「兵入らば、我は其左に營し、公は其右に營し、殺掠を禁せん」と。故に城破るれども、民亦晏然たり。潘元明、杭州を以て李文忠に降る。李文忠、身づから樵樓に宿す。兵、民の釜を借る者有り。立ちどころに斬りて以て狗ふ。建寧の守將達里麻翟也先不花、降款を何文輝に送る。主將胡美、其の先づ己に詣らざるを怒り、其城を屠らんと欲す。文輝曰はく、「兵至るは、百姓の爲めなるのみ。何ぞ私意を以て人を殺す可けんや」と。美遂に止む。張彬、靖江の南關を攻む。守城者の詬る所と爲り、怒り、其民を屠らんと欲す。楊璟、之を諭す。亦止む。鄧愈が安福を狗ふるや、部下、擄掠する者有り。判官潘樞入りて之を責む。愈、急に令を下して禁止し、軍中の得る所の子女を搜し、悉く之を還す。徐達、元都に克つや、市、肆を易へ

明祖、殺を嗜まざるを以て天下を得たり



す、尤も威令の肅なるを見る。蓋し是時、羣雄竝び起り、惟だ子女玉帛を事とし、生靈を荼毒す。獨り明祖、世を救ひ天下を安んずるを以て心と爲す。故に仁聲義聞、至る所降附し、攻戰の力を省くと大半なり。其後、胡藍二黨の誅戮、四五萬人に至るは、則ち天下已に定まる、故に其雄猜を肆にするを得。又、滇黔を平定し、苗蠻を殺すこと、亦、六七萬に下らざるは、則ち以へらく番夷の性、但だ威を畏るを知るのみ、此に非ざれば、以て懲創するに足らずと。蓋し明祖一人、聖賢・豪傑・盜賊の性、實に兼ねて之を有する者なり。

明祖、法を用ふることも最も嚴なり

明祖、親しく、元末の貪黷懈弛し、生民の害を受くるを見る、故に其の下を馭するや、常に嚴厲を以て主と爲す。枉を矯めて正に過ぐる無きにあらずと雖も、然も以て頽俗を挽きて紀綱を立つるには、固より此振作無かる可からざるなり。其の兵を用ふるの始に當りて、命じて釀酒を禁ず。胡大海方に越を攻む。其子首として之を犯す。王愷、誅する勿くして以て大海の心を安んせんと請ふ。帝曰はく、『寧ろ大海をして我に叛かしむるも、我が法をして行はざらしむ可からず』と。遂に之を手刃す。趙仲中、安慶を守る。陳友諒來り攻む。仲中、城を棄てて走る。常遇春、之を原さんと請ふ。帝許さず、曰はく、『法、行はざれば、以て後を懲らす無し』と。遂に之を誅す。馮勝、高郵を攻む。城

中詐り降る。康泰等をして先づ入らしむ。敵、門を閉ち、盡く之を殺す。帝、勝を召して還らしめ、決して大杖十、歩行して高郵に至らしむ。勝、愧憤し、竟に攻めて之に克つ。見る可し、其威令の嚴にして、搖動す可からざることを。獨り鄧愈、洪州を守る。祝宗康泰反す。愈、備ふるに及ばず、逃げて撫州の門を出づ。帝竟に殺さず、仍ほ往きて守らしむ。豈に事不意に出づるを以てして之を恕するか。抑、其功大なるを以てして、法を執るに忍びざるか。

明祖、儒を重んず

明祖、初の書を知らず、而も好みて儒生を親近し、今古を商略す。徐達往きて鎮江を取るや、秦從龍を訪はしめ、見るを願ふの意を致し、即ち姪文正・甥李文忠をして幣を以て聘せしめ、應天に至れば、朝夕過從し、筆書漆簡を以て、問答すること甚だ密なり。從龍、又、陳遇を薦む。遇、官を受けず。而も之を尊寵すること勳戚に逾えたり。後、江南行中書省を置くや、省中、李善長・陶安より外、又、安思顔・李夢庚・郭景祥・侯元善・楊元杲・阮宏道・孔克仁・王愷・樂鳳・夏煜・毛騏・王濂・汪河等有り、皆、燕見すること時無く、治道を敷陳す。又、劉基・宋濂・章溢・葉琛を聘して至る。曰はく、『我、天下の爲めに四先生を屈す』と。婺州を下して後、又、吳沈・許元・葉瓚玉・胡翰・汪仲山・李公常・金信・徐肇・童冀・戴良・吳履・張起敬等を召し、省中に會食し、日に三人をし

明祖、法を用ふること最も嚴なり 明祖、儒を重んず



て經史を進講せしむ。其後、國家の禮制を定め、大祀には陶安を用ひ、禘祫には詹同を用ひ、時享には朱升を用ひ、釋奠・耕籍には錢用壬を用ひ、五祀には崔亮を用ひ、朝會には劉基を用ひ、祝祭には魏觀を用ひ、軍禮には陶凱を用ひ、一代の典禮、皆、裁定する所なり。尋いで胡惟庸の謀反を以て丞相を廢し、又、四輔の官を設け、王本・杜佑・龔敷・杜敷・趙民望・吳源等を以て之と爲し、隆するに坐論の禮を以てし、諫院・疑議、四輔の官、封駁するを得。又、安然・李幹・何顯周等有り、相繼ぎて之と爲る。帝嘗て謂はく、「儒生の議論を聽けば、以て神智を開發す可し」と。蓋し、帝、本、書を知らず、而も睿哲生成、驟に經書の奥旨を聞き、但だ未だ聞かざる所を聞くを覺え、而して之を實政に施すを以て、遂に百餘年の清晏の治を成す。正徳以前は、猶ほ其遺烈なり。

〔一〕郭子興の傳は明史第百二十二卷に載す。

郭子興が執へらるること

至正十二年二月、郭子興・孫德崖等、濠州を陥る。未だ幾くならずして、徐州の盜魁彭大・趙均用有り、元の兵の敗る所と爲り、亦、濠に奔る。彭は魯淮王と僭稱し、趙は永義王と僭稱し、部衆恣横にして、子興等反つて制せらる。高岱の鴻猷錄に云はく、「彭趙、一日、郭を執へて獄に下す。帝力めて爲めに營救す。彭趙聞きて之を釋す」と。天潢玉牒にも亦云はく、「彭趙、郭を獄に執ふ。

明日、彭帥、之を釋す」と。是れ子興を執ふる者は、彭趙、之を共にするなり。然るに皇朝本紀には則ち云はく、「子興、彭を奉じて趙を輕んず。德崖等、趙の威を恃みて、子興を執へて德崖の家に囚す。帝、子興の次夫人を以て往きて彭に訴へしむ。彭曰はく、「孰か敢て是の若くなる」と。左右を呼びて兵を點す。帝も亦、堅を披し銳を執りて孫の宅を圍み、共に椽を掀げ互を掲げ、子興が足を鉗し項を繫がるを見、人をして負うて歸らしめ、鉗鎖を脱去す」と。是れ趙、子興を執へて、彭、之を脱するなり。其後、帝、兵を和陽に總べ、德崖、寄居せんことを求む。子興至り、其兵、德崖の兵と鬪ふ。子興、德崖を執へ、德崖の兵も亦帝を執ふ。猶ほ此宿憾を以てなり。明史の郭子興の傳は、鴻猷錄に従はずして、専ら皇朝本紀を用ふ。較や確核と爲す。

劉繼祖・汪文

玉牒に又云はく、「帝、父母死し、食無し。時に年十七、皇覺寺に入りて僧と爲る。鄰人汪文、助けて之が禮を爲す。高彬に事へて師と爲す」と。此れ即ち碑に云ふ所の「汪氏の老母、余が爲めに籌量し、子を遣はして相送り、禮を備へて馨香あり。空門に佛を禮し、僧房に出入す」なり。汪文は蓋し即ち汪媼の子ならん。鴻猷錄にも亦謂はく、「帝、汪媼の議に従ひ、身を皇覺寺に托す。汪媼爲めに少しく儀物を具し、僧高彬に師事す」と。鄭曉の今言に云はく、「鳳陽の皇陵に、奉祀二人劉氏・汪



氏有り」と。徐禎卿の翦勝野聞に云はく、「帝、劉大秀が地を施すの恵を念ひ、封じて義惠侯と爲す。又、汪媼の意に感じ、救して世官を授け、皇陵を衛らしむ」と。(明史には劉繼祖に作る。又云はく、「帝、淮安を賜ふ。)

### 張士徳の擒

按ずるに陸深の平吳錄に云はく、「徐達、常州を攻む。張士誠、其弟士徳を遣はして來り援けしむ。士徳、敗走し、坎に遇ひ馬より墜ち、擒にせらる」と。皇朝本記には則ち云はく、「徐達、張士誠の兵を宜興の湖橋に破り、其弟張九六(即ち士徳、今の明史の徐達傳には則ち)を擒にす」と。

### 劉福通殺さる

陸深の平胡錄に、「至正十九年、劉福通、宋主韓林兒を以て安豊に走る。二十三年、張士誠、呂珍を遣はして其城を破り、劉福通を殺す」と。而して平吳錄には則ち云はく、「帝、常遇春等を率ゐて安豊を救ふ。珍、敗走す。福通、韓林兒を奉じ、退きて滁洲に居る」と。按ずるに二錄は、皆、陸深の著はす所なるに、一は則ち「福通殺さる」と云ひ、一は則ち「福通、其主を奉じて滁に居る」と云ふ。何ぞ舛錯すること此の如くなる。高岱の鴻猷錄には則ち云はく、「珍、安豊を攻むること急なり。

劉福通、使を遣はして救を建康に求む。上親ら諸將を率ゐて之を救ふ。至れば則ち珍已に安豊を破り、福通を殺す。上遂に林兒を以て金陵に還ると云ふ」と。按ずるに是時、羣雄多く林兒の龍鳳の年號を奉じ、明祖も亦之を用ふ。令下れば則ち云はく、「皇帝の聖旨、吳王の令旨」と。已に居然として天下の共主なり。福通は其宰相なり。權位并に明祖の右に在り。呂珍已に明の兵の敗る所と爲り、并に元の將忻都を獲、左君弼を走らす。福通をして死せざらしめば、必ず仍ほ林兒を奉じて大位に據り、以て天下を號召せん。其れ肯て退きて滁に居り、人の籬下に寄らんや。是れ珍が福通を殺せること、自ら是れ實事なり。福通既に死し、明祖、林兒を奉じて滁に居れば、則ち已に掌握の中に在り。年を逾えずして林兒死し、遂に年を改めて吳の元年と爲す。(二) 廖永忠の傳に、并に謂ふ、「永忠、林兒を迎へて應天に還る。瓜歩に至れば、其舟を覆して死す」と。則ち鴻猷錄に云ふ所の、「林兒を奉じて金陵に還る」とは、亦誤なり。

### 明祖が江州を取る

明史の趙德勝の傳に、「至正癸卯、太祖、西のかた陳友諒を征し、安慶の水寨を破り、風に乘じて小孤山に浜り、九江を距ること五里。友諒始めて知り、倉皇として遁れ去る」と。是れ、友諒、戰ふに

張士徳の擒 劉福通殺さる 明祖が江州を取る

【一】 廖永忠の傳は明史第三百十九卷に載す。  
【二】 趙德勝の傳は明史第三百十三卷にす。



及ばず、即ち武昌に往くなり。劉基の傳にも亦云はく、「明祖、安慶を攻め、旦より暮に及ぶ。下らず。基、徑に江州に趨かんと請ふ。遂に軍を悉して西上す。友諒、不意に出で、妻子を帥ゐて武昌に奔る」と。亦、國初禮賢錄に見ゆ。然るに御製西征記に、「皖城に抵る。寇舟、戦はず、水陸固く守る。我が師遂に宵晝停まらず。次日午後、直に潯陽に抵る。彼と交戦し、再び衝き再び折く。此の若き者三たび、彼負けて我勝つ。友諒逃遁し、遺將伏降す」と。是れ明の兵到る時、友諒も亦曾て拒戦し、既に敗れて逃るるなり。當に西征記を以て準と爲すべし。(按ずるに明史の廖永忠傳に、「是時、永忠從固し。永忠、城の高下を度り、橋を船尾に造り、名づけて天橋と曰ふ。船を以て風に乗じて倒行し、橋、城に附き、遂に之に克つ」と。是れ惟た交戦するのみならず、抑、且つ城を攻む。友諒をして戦ふを待たず、即ち倉皇として遁れ去らしめば、又、何を用つて橋を船尾に造り、方に城を攻破せんや。)

〔二〕劉基の傳は明史第百二十八卷に載す。

徐達が元君を縦つの誤

陸深の玉堂漫筆に、「徐達が元の順帝を開平に蹙むるや、一角を開き、逸し去らしむ。常遇春、大功無きを怒る。達曰はく、「是れ常て天下に君たり。將に地を裂きて之を封せんとするか、抑遂に甘心せんか。既に皆不可ならば、則ち之を縦つこと固に便なり」と。徐禎卿の翦勝野聞にも亦謂はく、「達、順帝を追ひ、忽ち令を傳へて師を班さしむ。遇春大に怒り、馳せ歸りて、達反すと告ぐ。達、遇春が歸らば必ず謔言有らんことを料り、乃ち亦、軍を引きて歸り、此事を別白して謂はく、「若し

執らへて以て歸らば、將に焉にか之を用ひんとする云云」と。按ずるに洪武元年、達、遇春、通州に至り、八月庚午を以て元都に克つ。順帝已に七月丙寅に於て、建徳門を開きて北に走る。固より未だ故らに縦つの事有らず。二年、春、達方に陝西に在り、鞏昌・臨洮・慶陽等の處を截定す。遇春、通州に元の丞相也速が來り窺伺する有るを以て、乃ち李文忠と與に、師を北平に還し、既に元の兵を敗り、遂に追うて開平に入る。順帝已に北のかた沙漠に走る。遇春歸り、亦、柳河の途次に卒す。是れ開平の役、達未だ行に在らず、遇春、亦、朝に歸りて奏するの事無きなり。且つ達は小心恭謹にして、平江に張士誠を攻むるの時に當りて、使を遣はして事を請ふ。帝、其忠を嘉し、而して『將は外に在れば、君、御せず』といふを以て之を勉む。胡德濟、擴廓を征するに従ひ、令に違ひて敗を致し、斬に當す。達、功臣胡大海の子なるを以て械して京に送る。帝曰はく、『將軍、衛青が蘇建を斬らざりしに效ふのみ。今より繼ぎて、姑息なる母れ』と。是れ達が敢て自ら専らにせざること、知る可し。況んや國を滅ぼすは大事なり、敢て故らに其君を縦たんや。明史に謂はく、『上、汴梁に幸す。時に達、密に帝に請うて謂はく、「元主若し北に走らば、將に之を窮追せんとするか」と。帝曰はく、「元運衰へたり。行くゆく自ら漸滅せん。塞を出づるの後、慎みて封守を固くして可なり」と。此事、較や實を得たりと爲す。然れば達并に未だ順帝を追はざるなり。陸徐の著述、頗る觀る可し。此事は乃ち繆誤すること此の若し。蓋し徒らに之を傳聞に得て、未だ嘗て實録を見ざるなり。

徐達が元君を縦つの誤



新月の詩

黄溥の閒中今古録に、『明祖嘗て諸子に新月の詩を試む。懿文太子云はく、「然く未だ團圓の夜に到らずと雖も、也た清光の九州を照らす有り」と。成祖云はく、「誰か玉指甲を將て、搯破す青天の痕。影は落つ江湖の裏、蛟龍敢て吞ます」と。』鄭曉の今言には、則ち影は江湖に落つを以て、建文君の作る所と爲す。蓋し世の傳ふる所の從亡録に、建文、跡を西南に竄れ、終に禍難に免る。其詩懺に似たるなり。

通州の糧、京に運すること、二傳の載する

所同じからず

土木の變に、英宗既に北狩し、也先將に入寇せんとす。朝議、通州の倉を焚きて以て寇資を絶たんと欲す。後、京軍をして自ら運せしむ。京に到りて數日ならず、京師頓に足る。明史の(一)周忱の傳には、以て此議は本忱より出づと爲す。(三)于謙の傳には則ち又以て謙より出づと爲す。蓋し忱の傳は、之を何良俊の四友齋叢說に本づく。謂はく、『忱適、事を以て京に至り、令して軍士に預め半年の糧を支せしめ、自ら往きて取らしむ。何ぞ付して煨燼と爲すに至らん』と。謙の傳は則ち之を陳沂の畜徳

【一】機は恐らくは當に識に作るべからん。  
【二】周忱の傳は明史第百五十三卷に載す。  
【三】于謙の傳は明史第百七十一卷に載す。

録に本づく。謂はく、『國の命脈は此に在り。城中の有力者に傳示し、盡く之を取らんと。高岱の鴻猷録にも亦謂はく、『謙、令して軍士に預め月糧を支せしめ、贏米を以て之が直と爲す』と。此れ各記する所を記する者なり。蓋し本、忱、此議を建て、而して謙、奏して之を行へるならんのみ。

于謙・王文の死

黄溥の閒中今古録に、『英宗復辟の時、石亨等、「王文・于謙、外藩を迎立せんと謀る」と誣ひ、坐するに大逆を以てす。將に之を市に肆せんとす。謙は「皇天后土」と連呼す。

【一】王文の傳は明史第百六十八卷に載す。

文は但だ云はく、「今已に此に到る。頭を伸起し來りて砍に就かん。連呼して何を爲さん。久しくして自ら明白ならん」と。是れ文が危きに臨みて懼れず、死を視ること歸るが如きこと、謙に過ぐる遠し。然れども明史の(二)文謙の二傳には、謙は竝に皇天后土の呼無し。文は則ち『親王を召すには、須く金牌・信符を用ふべし。人を遣はすには必ず馬牌有らん。内府・兵部、驗す可きなり』と力辨す。謙笑うて曰はく、『亨等の意なるのみ。之を辨するも何の益あらん』と。是れ從容として死に就く者は謙にして、自ら冤枉を辨する者は乃ち文なり。蓋し又各、其平日の人品に就き、而して繋くるに棺を蓋ふの定論を以てするのみ。



喜寧の擒

明史の子謙の傳に、「英宗、虜に陥る時、叛闖喜寧有り、也先に降り、之が謀主と爲り、嘗て之を導きて入寇せしめ、大臣を邀へて出でて駕を迎へしめ、金帛を索むること萬萬を以て計る。後隨つて塞を出で、又、寧夏等の邊を嗾擾す。謙、密に大同の守將に令して禽へて之を戮せしむ」と。是れ謙が計を授くるの功なり。楊俊の傳に、「中朝、喜寧を患へ、寧を禽斬する者を銀二萬兩・爵封侯に購ふ。都指揮江福の獲る所と爲る。宣府の參將楊俊、其功を冒す。景泰帝、邊將の職の當に爲すべき所なるを以て、僅に左都督を加へ、金幣を賜ふ。後事白る。俊の冒陞の官を奪ひ、別に江福を賞す」と。是れ江福が叛を擒にするの功なり。然れど

【一】楊俊の傳は明史第七十三卷に載す。

も正統北狩事蹟・尹直の北征事蹟・高岱の鴻猷錄等の書を閱すれば、則ち惟だ楊俊が功を冒すのみならず、即ち江福も亦功首に非ず、其始謀は乃ち英宗なり。英宗、北に在り、以へらく、寧數也先を嗾して邊を擾せば、則ち和議成る可からず。和成らざれば、則ち己、還期無しと。會、使を遣はして宣府に至りて春衣を索めしめんと欲し、也先に囑して寧を以て往かしめ、而して軍士高磐をして隨ひ行かしめ、密に手諭を以て木片に書し、磐の臂股の間に縛し、以て俊に示さしむ。俊、寧と與に城下に飲む。磐即ち寧を抱きて大呼す。遂に縛して京師に送り、誅に伏す。(蓋し福は是れ磐が寧を抱く時手)

則ち俊と福との功は、皆、倖得に屬す。而して又、之を謙に係くるは、蓋し、其の忠誠にして國の爲めにするを以て、凡そ善事有れば、皆、美を歸するならんのみ。(高磐は、北征事蹟には高旺に作る)

曹吉祥・江彬

太監曹吉祥、雲南・福建を征するに従ひ、朝命、諸降夷の・畿甸に安插する者を以て隨行せしむ。既に京に還り、吉祥、皆結ぶに恩を以てして爪牙と爲す。其姪欽、錦衣衛指揮使に官たり、昭武伯に封せらる。欽の弟鉉・鏞・鐸、皆、大官に至る。英宗復辟の時、欽曾て此輩を以て門を奪ひ、功を冒し官を得ること、數千人に至る。石亨敗るる

【二】曹吉祥の傳は明史第三百四卷宦官傳に載す。

や、功を冒す者皆革せらる。此輩、又、吉祥の庇ふ所と爲り、免るるを得。吉祥、權を招き賄を納れ、肆にして忌む無し。上寢く之を疎んず。欽も亦、恣横を以て上の意を失ひ、別に衛事を以て遂杲に委任す。是に於て、吉祥・欽、亂を爲さんと謀り、天順五年、七月初二夜、將に明日五鼓禁門開くを以て、諸番將を率ゐて一擁して入らんとす。吉祥、内に於て之に應せば、以て志を得可しと。會、馬亮といふ者有り、變を恭順侯吳瑾に告ぐ。瑾、懷寧伯孫鏜と與に、二鼓、門隙の中より、密本奏入す。遂に吉祥を内廷に執ふ。欽等、知らざるなり。期に及びて、百官方待漏院に至りて入朝せんとす。而して門、啓かず。欽、事の洩るるを知り、乃ち諸弟と與に、番將伯顏普華等を率ゐて、先づ



杲の家に至り、杲を殺し、并に瑾及び都御史寇深を朝房に殺し、又、大學士李賢を刃傷す。鏜等、變を聞き、兵を率ゐて來り、大に長安街に戰ふ。吉祥・欽・鉉・鐸・鐸・鐸・鐸、伯顏等、皆、誅に伏す。鏜・瑾等が間に刺して變を告ぐるに非ざらしめば、禍幾ど測られざらんとす。然れども亦、解す可からざる者有り。吉祥方に密に内に應ず。鏜・瑾等、奏入ると雖も、豈に攔截して上聞せしめざる能はざらんや。何を以て能く直に御前に達し、遂に執らへらるるに至る。李賢の天順實錄を觀るに及びて、乃ち知る、吉祥、文墨に通せず、未だ嘗て司禮監を掌らず、故に章奏、其手を経ざること。〔明史の吉祥つて其の司禮監を掌るを稱す。然れども李賢は同時の人に係る。自ら當に賢の説を以て準と爲すべし。〕武宗、江彬を嬖して義子と爲す。通州より京に回るや、彬、邊兵を將ゐて扈行す。而して帝已に病むや、彬、旨を矯めて團營を改めて威武團練營と爲す。帝崩するに及びて、大學士楊廷和、中官をして密に皇太后に啓せしめ、之を誅せんと謀ると雖も、然れども近く肘腋の間に在り、何を以て能く手を束ねて縛に就ける。箬陂の繼世紀聞及び唐樞の國琛集、何良俊の四友齋叢說を觀るに及びて、是時、廷和方に其の變を爲さんことを懼れ、之を王翱に謀る。翱請うて遺詔の内に於て、邊兵の扈從南巡の勞を敘し、而して家を離るること日久しく、俱に通州に至りて給賞して散じ歸らしむ。是に於て、彬の左右、人無く、遂に脱るる能はず。此れ一説なり。高岱の鴻猷錄には則ち云はく、『武宗崩す。廷和等、秘して喪を發せず、武宗の命を以て彬を召して入らしむ。遂に擒に就く』と。此れ又一説なり。按ずる

〔二〕江彬の傳は明史第三百七卷倭倭傳に載す。

に、彬日に豹房に侍し、左右を離れず。豈に帝崩したるに猶ほ知らざる者有らんや。明史の楊廷和の傳に、『是時、彬、重兵を擁して肘腋に在り、天下の之を惡むを知り、心、自ら安んぜず。其黨李琮、家衆を以て反せんことを勸む、「勝たずんば則ち塞外に走れ」と。彬、猶豫して未だ決せず。廷和、皇太后の命を以て彬を捕へ誅せんと謀り、大行の銘旌を題するに因り、乃ち中官溫祥等と謀り、司禮魏彬を脅して入りて皇太后に奏せしむ。良久しくして未だ報せず。之を頃くして報じて曰はく、「彬已に擒にせらる」と。』又、明史の倭倭傳に、『帝崩す。江彬、疾と稱して出でず、衷甲して變を觀る。會、坤寧宮、獸吻に安んず。皇太后、命を傳へ、江彬、工部尚書李銘と與に神を祭る。禮服を以て入り、家人、從ふを得ず。祭畢り、中官張永留めて飯す。皇太后の詔至りて彬を收む。彬、遂に出づる能はず』と。此れ蓋し當日の實事、彬を誅するは武宗晏駕の數日の後に在り。初め、秘して喪を發せず、即日誘ひて彬を誅し、而して後服を成せるに非ざるなり。蓋し彬、不軌の謀有りと雖も、而も素より佈置無し。是を以て、廷和等、間に乘じて害を除くを得たるのみ。

〔三〕豹房。明の武宗の建つる所、以て遊幸の所と爲す。  
 〔四〕楊廷和の傳は明史第百九十卷に載す。  
 〔五〕獸吻。危殆なる地をいふ。虎口といふが如し。

明代の宦官の先後の權勢



明の内監の故事、永樂中、内官を差して五府・六部に至りて事を稟せしむれば、内官、府部の官を離るること一丈にして揖を作す。途に公侯・駙馬に遇へば、則ち馬を下りて旁に立つ。今は則ち府部の官を呼ぶこと屬吏の如く、公侯・駙馬、途に内官に遇へば、轉た廻避す。(陸深の菽園雜記)張吏侍延祥云はく、「内閣、中官を待つ禮、凡そ幾たびか變ず。天順の間、李賢が首相たるるとき、司禮監巨璫至れば、便服を以て之を接見し、事畢れば之を揖して退く。彭文憲、之に繼ぎ、門者來り報すれば、必ず衣冠して之を見、之と列を分ちて坐し、太監の第一人は閣老の第三位に對し、常に其二位を虚しくす。後、陳閣老文は則ち之を送りて閣を出で、商閣老輅は又之を送りて階を下り、萬閣老安は則ち送りて内閣門に至る。今は凡そ調旨等の事は、司禮者間出で、或は少監等をして命を傳へしむるのみ」と。(陸深の金臺記)太監至れば、閣臣、之を花臺に迎へ、之を送りて中門に止まる。李西涯、王鏊に告げて云はく、「此れ定例なり」と。(陸深の玉堂漫筆、又、王鏊の震澤長語に見ゆ。)朱象元云はく、「一の順門上の内官有り、云ふ、我輩、順門上に在り、久しく時事を見るに、凡そ幾たびか變ず。昔日、張先生(字敬)、朝に進めば、我輩俱に打恭せんことを要す。後來、夏先生(言)は、我輩只だ平眼に看著す。今、嚴先生(嵩)は我々と恭し、恭手して纒に進む」と。(何良俊の四友齋叢說)此れ閣部の大臣、内官と交接するに、先後同じからざるの大概なり。王振・汪直・劉瑾・魏忠賢に至りては、則ち長跪叩頭して九千歳と呼ぶ者有り。

權奸の贖賄

震澤長語に『正徳中、劉瑾の籍没の時、金二十四萬錠、又、五萬七千八百兩、元寶五百萬、錠銀八百萬、又、一百五十八萬三千六百兩』と。(以上、金共に一千二百五萬七千八百兩、銀共に二萬五千九百五十八萬三千六百兩、一萬と曰ふ。後漸く増して幾千幾萬に至ると。)留青日札に、『嘉靖の初、錢寧を籍没す。金七十扛、共に十五萬五千兩、銀二千四百九十扛、共に四百九十八萬兩』と。鴻猷錄に、『江彬の籍没の時、公裕に入る者、黃金七十櫃、櫃ごとに一千五百兩、銀二千二百櫃、櫃ごとに二千兩』と。繼世餘聞に、『嚴嵩の籍没の時、金銀珠寶、書畫器物、田房、共に估銀二百三十五萬九千二百四十七兩餘。又、直隸巡按御史孫丕揚が抄する所の嵩の京中の家産、亦、此數に減せず。而して估る所の價、又、十の一に過ぎず。即ち、裘衣共に一萬七千四十一件、僅に估銀六千二百五兩零、帳幔被褥二萬二千四百二十七件、僅に估銀二千二百四十八兩零の如し。則ち其他、知る可きなり。計るに其値、數十倍に下らず。此外、又、賂を權要に行ふ者、十の二三、親戚に寄頓する者、十の三四と云ふ』と。(一)明史の嚴嵩傳に、「嵩の籍没の時、黃金三萬餘兩、白金百餘萬兩、(二)他の珍寶、數計す可からず」と。蓋し猶ほ少く之を言ふなり。)

明代の科場の弊

權奸の贖賄 明代の科場の弊



唐寅、郷試第一に擧げられ、江陰の富人徐經と同じく擧げられ、遂に同じく京に入りて會試す。寅、故、才有り。梁儲、爲めに擧を程敏政に延ぶ。適敏政、李東陽と同じく會試を主る。策題、四子の造詣を以て問と爲す。乃ち是れ許魯齋の一段の文字にして、劉靜修の退齋記に見ゆ。通場の士子、皆、知らず。敏政、二卷を得たるに、獨り條對すること甚だ悉せり。將に以て魁と爲さんとす。而して寅、場を出でて後、亦、疎狂にして自ら炫す。給事中華景、遂に「敏政、題を嚮る」と劾す。時に榜未だ發せず。敏政に詔して、卷を閱する母からしめ、其の録する所は、東陽をして覆閱せしむ。二人の卷、皆、取る所の中に在らず。東陽、以て聞す。言者猶ほ論じて已まず。敏政・景・寅・經俱に獄に下る。經は嘗て敏政に謁見し、寅は嘗て敏政に乞うて序文を作らしむるに坐し、俱に黜けて吏と爲し、敏政も亦、勅して致仕せしむ。(明史の敏政・寅の傳并に何良俊の叢說、景の傳亦、事と言ふ)

- 【一】唐寅の傳は明史第二百八十六卷文苑徐禎卿傳に附載す
- 【二】程敏政の傳は明史第二百八十六卷文苑傳に載す。

と實ならざるを以て、南太僕の主簿に調せらる。蓋し定讞の時、未だ嘗て其關節を實せざるの罪なり。歸安の人韓敬、嘗て業を湯賓尹に受く。賓尹、會試を分校す。敬の卷、他の校官の棄つる所と爲る。賓尹、房を越えて之を搜得し、并に中の五人を取る。他の校官、皆、尤に效ひ、競うて相搜取す。共に十七卷。賓尹、又、敬の卷を以て總裁蕭雲舉・王圖録に強ひて第一と爲す。榜發するや、士論大に譁し。廷對するに及びて、賓尹、又、敬の爲めに資縁して第一とす。賓尹、旋ち考察を以て官を奪は

れ、敬も亦病を告ぐ。事已に三年を隔つ。會進士鄒之麟、順天の郷試を分校し、取る所の童學賢、私有り。御史孫居相、賓尹の事を并せて之を發く。禮官及び都察院に下して議せしむ。而して賓尹に及ばず。(三)給事中孫振基、并せて議せんと請ふ。禮部侍郎翁正春、議して學賢を黜け、之麟を調す。亦、賓尹に及ばず。振基再び疏劾す。乃ち廷臣に下して更に議せしむ。時に賓尹已に官を去り、敬は行人司副に調せらる。(明史の孫振基傳)

- 【三】孫振基の傳は明史第二百三十六卷に載す。
- 【四】王紹徽の傳は明史第三百六卷關黨傳に載す。

按ずるに賓尹は浙黨の中に在り、本、巨魁と爲す。嘗て京察を把持し、麻禧が東林に依附するを以て、即ち之を出して按察司知事と爲す。即ち其の閣中に在るや、房を越えて卷を搜し、并に總裁に強ひて、敬を第一に抜く。廷試に、又、敬の爲めに資縁して大魁とす。居相・振基、連に之を劾す。而して廷臣、皆敢て議せず。既に官を罷めて後、猶ほ能く霍維華をして疏して、「賓尹は宜しく雪ぐべし。敬は宜しく官を復すべし」と言はしむ。見る可し、其權力聲勢、以て一時を奔走せしむるに足るを。故に孫丕揚、賓尹が黨與を召號し、又將に柄を圖らんとするを以て、乃ち其門生王紹徽を并せて、亦之を外に出す。眞に謂はゆる奸人の雄なり。(王紹徽傳)

### 明人の説部

明人の説部



徐禎卿の翦勝野聞に、『明祖、張士誠を擒にして後、江浙行省參政周伯琦を斥して曰はく、「元君、汝に寄するに腹心を以てす。乃ち賊が亂を爲すに資するか」と。先づ之を迎へ、三日大に醉はせて以て其勞に酬い、而して之を戮す」と。按ずるに元史に、平江破れて後、伯琦、故郷に歸りて以て良死す、初めより未だ嘗て戮を破らざるなり。野聞に又云はく、「士誠の司徒李伯昇、先づ國情を以て我が師に輸す。帝、亦以て姦臣と爲して之を誅す」と。然れども湖州の破るるや、滿城、皆、明に降る。濁り伯昇のみ肯せず、曰はく、「張太尉、我を待つこと厚し。何ぞ此を爲すに忍びん」と。已むを得ず、亦降る。平江將に陥らんとするに及びて、伯昇、又、人をして士誠に説かしむ、『身を保ち家を全くするを以て上策と爲す』と。則ち其の故主に惓惓たる、尙ほ 愀然たるに非ず。是を以て既に降りて後、命じて故官に仍らしむ。洪武七年、尙ほ伯昇に命じて屯田山東、北平等の處を掌らしむ。後、又、懿文太子の同知詹事院事を兼ぬ。又、命じて兵を將ゐて湖廣慈利の蠻を討平せしむ。吳良の傳に、『伯昇、又、鄧愈に隨つて廣西の叛蠻を討つ』と。則ち伯昇初めより未だ誅を被らざるなり。而るに野聞は以て戮を被ると爲す。果して何の據る所ぞや。又、王錡の寓圃雜記に、『元に全某といふ者有り、乃ち宋の淵聖皇帝の母舅にして、元に在りて佛を土番に學び、合尊大師と號す。子有り、亦、其教に従ふ。後、元主、坐するに法を説

【一】周伯琦の傳は元史第百八十七卷に載す。  
 【二】愀然。愁無き貌。淡く之を忘れて、以て意と爲さざるを言ふ。  
 【三】吳良の傳は明史第百三十卷に載す。

き衆を聚むるを以てし、皆、之を殺す」と。按ずるに、淵聖は乃ち欽宗の追尊の號にして、元朝に至りて、已に百六十餘年なり。何ぞ尙ほ存するを得ん。合尊大師は乃ち徳祐帝なり。蓋し全某は、徳祐帝の母全太后の兄弟に係るならんのみ。而るに訛して淵聖と爲す。屯毛をも辨せずと謂ふ可し。又徳祐帝、子有り、完善と曰ふ。亦、出家して僧と爲る。然れども未だ殺害の事有らず。此れ明人の小説中の最も陋なる者なり。

長隨

長隨は、本、中官の次等にして、役を大端に受くる者なり。明史の宦官何鼎の傳に、『鼎、宏治中に在りて長隨たり』と。又、王振の傳に、『英宗、土木に陥り、郕王、國を監す。羣臣既に振の黨馬順を擊殺し、又、乞うて王・毛・二長隨を出し、亦之を擊殺す』と。下に又云はく、『王・毛・二中官は、是れ長隨、即ち中官なり』と。(鄭曉の今言に、劉瑾の惡む所と爲り、謫して南京淨軍に充てらる。瑾の黨) 今、俗に謂はゆる長隨は、則ち官場中雇用の僕人に長隨王成等追うて臨濟の小沙灘に至り、之を殺す) して、前明には之を參隨と謂ふ。明史の宦官傳に、『高淮、税を遼東に監す。參隨楊永恩有り、賄を婪り事發はれ、幾ど軍變を激せんとす』と。又、『税監陳奉、武昌に在りて毒を肆にす。衆、奉を殺さんと欲す。逃げて免る。乃ち其參隨十六人を江に投ず』と。又、何景明の傳に、『太監廖巖、

【一】何鼎・王振の傳は明史第百四卷宦官傳に載す。  
 【二】何景明の傳は明史第百八十六卷文苑傳に載す。



關中に鎮し、横甚だし。其參隨、三司に遇ふも、馬を下らず。景明、執らへて之を撻つ』と。

明朝の米價の貴賤

明史の周忱の傳に、『時に京師の百官の月俸、皆、俸帖を持して南京に赴きて米を領す。米賤しき時、俸帖七八石、銀一兩に易ふ。忱請ふ、重く官田を額し、極貧の下戸、準じて銀を納るるに兩毎に米四石に當て、京に解して俸に代へん。民出甚だ少くして、官俸常に足らんと。』王文の傳に、『蘇・松・常・鎮の四府は、糧四石毎に、銀一兩に折す。民甚だ之を便とす。後、戶部復た令して征米は徐淮に輸せしむ。率三石に一石を致す。文、便宜を用つて之を停む』と。張瑄の傳に、『榆林水災あり、瑄請うて王府の祿米を他處に移し、應に榆林に輸すべき者を留めて荒を濟ふ。石毎に値八錢を取りて榆林に輸す。民、皆、便と稱す』と。馬文昇の傳に、『邊に輸する者は、糧一石、銀一兩以上を費す。豐年には糧八九石を用ひて、方に銀一兩に易ふ』と。李敏の傳に、『請ふ、山陝の州縣の歲ごとに糧を各邊に輸する者をして、糧一石毎に、銀一兩を徵し、十九を以て邊に輸せしめ、時値に依りて折せん。軍餉、餘有らば、則ち糴して以て軍興に備へんと。是に由りて、北方の二稅は、皆、銀に折す。敏より始まるなり』と。楊守隨の傳

【一】張瑄の傳は明史第百六十卷に載す。

【二】馬文昇の傳は明史第百八十二卷に載す。

【三】李敏の傳は明史第百八十五卷に載す。

【四】楊守隨の傳は明史第百八十六卷に載す。

に、『王府の祿米、石毎に銀一兩を征す。後、十の五を増す。守隨入りて王に告げ、舊の如くするを得たり』と。何喬新が播州の事情を勘處する疏に云はく、『四川布政司、銀三百兩を發し、時價に照依し、銀一兩毎に、米二石五斗を買ひ、築城夫の口糧を給す』と。是れ明の中葉以前、米價、此の如きに過ぎざるなり。崇禎中に及びて、始めて大に貴し。李繼貞の傳に『崇禎四年、斗米の値銀四錢、民多く賊に従ふ』と。左懋第の傳に、『崇禎の時、山東兵荒あり、米石ごとに二十四兩、河南は乃ち石毎に一百五十兩』と。

【五】何喬新の傳は明史第百八十三卷に載す。

【六】李繼貞の傳は明史第百四十八卷に載す。

【七】左懋第の傳は明史第百七十五卷に載す。



## 補遺

御批歷代通鑑輯覽總裁諸臣、欽みて

上諭を奉ず、「金源肇めて東方に起り、本朝の滿州の地と同一疆域なり。完顔が金の國族たるが如き、今に至りて我が旗籍に隸す。而して今の富察氏は、即ち金の蒲察の轉音なり。此れ其明證なり。間、史冊の載する所の金語を考ふるに、今の國語と、類おほむね多くおほむ昭合す。第ただ音譯、譌を傳へ、遂に岐舛に至る。而して元人の著はす所の金語一篇、又多く臆度して眞を失ふ。勃極烈の如き、即ち今の貝勒にして、衆人を管理するの稱たるに、乃ち解して猶ほ漢に冢宰と云ふがごとしと爲し、附會して當る無し。猛安に至りては、音、今の明安に近し。明安は千なり。千夫の長と相協ふ。謀克の・百夫の長たるは、義、實に通じ難し。或は即ち今の語の穆昆の・族長の稱たる、猶ほ比合す可し。按出虎を以て金と爲すが若きは、國語の愛新と、廻に相同じからず。而して金國語解に又、「金は按春と曰ふ」の文有り。則ち又、今の耳墜の語と相同じく、亦、金と渉る無し。知らず、何を以て謬を踏かむこと此の若くなるか。蓋し金朝の製する所の女眞の大小の字、未だ中外に流傳するを經ず、而して又未だ譯するに漢字を以てするを經ず、其後裔式微にして、遂に考證するに從ま無く、我が朝の・音を審かにし字を辨するの精詳にして、同文の準的と爲すに足るに及ば



ざるのみ。夫れ各國には各、其語有り、各、其字有り。我が滿州と蒙古とは、一字一音にして、即ち其一字一音の義を盡し、従つて一音にして兩字より以て數字に至る有る無し。惟だ漢字は則ち一音、多きこと數字に至る者有り。是に於て、漢字を以て清字を譯する者、意を以て愛憎を爲すを得、毎に惡字を取りて以て貶せらるるを示す。但だ異國異字に於て之を用ふるのみならず、即ち同一の漢文に於ても、頗る是を用ひて抑揚を爲す者有り。此れ倉頡、字を造り、鬼夜哭の語有る所以なり。然れども漢は自ら漢、清は自ら清、漢を以て清を譯するは、原、本文に非ず、庸何ぞ傷まんや。若し其音の正しきを求めば、則ち必ず當に三合音字を用ふべし。本來を失はざるに庶し。而して三合音字は、人の能く盡く曉る所に非ず。茲に通鑑輯覽を批閱するに因りて、金史の・漢人の手に成るを思ふに、音譯に於て既に未だ諳習せず、且つ復た情に任せて毀譽し、動もすれば醜字を以て其詆訾を肆にし、烏珠の必ず兀朮と書するの類の如き、枚擧す可からず。而して貝勒は或は譌りて勃極烈と爲し、或は譌りて孛董と爲す。實に鄙笑す可し。我が國家、中外一統し、治、同文に洽く、金朝の官族人名の・庸陋の者の流傳の誤る所と爲るに忍びず。因つて廷臣に命じ、悉く國語を按じて、其舊名を改正し、仍ほ下に註し、以て參考に資せしめ、史を讀む者をして、心目豁然として、前人の謬妄の惑はす所と爲らざらしむ。特に初見の處に於て、其大凡を發すること此の如し。此を欽めよ」と。臣廿二史劄記を纂輯する時、第だ坊刻の遼宋金元

明の舊史に就きて據と爲す。今、

高宗純皇帝御批歷代通鑑輯覽の有らゆる人名・官名・地名・一一繙譯改正するを蒙り、始めて知る、數百年以來、皆、譌を承け謬を襲ふを。今日方めて本音を得。誠に千古不刊の書にして、史を讀む者、宜しく奉じて準的と爲すべし。第だ恐る、外間坊刻の舊本正に多く、家ごとに喩し戸ごとに曉す能はざるを。臣謹んで逐一録出し、轉じて舊名を以て前に在き、今名を後に在き、人をして舊本は此の如く今本は此の如きを知らしむ。史を讀む者、檢閱に迷はざる可からん。

- 遼 邪律奴哥 (今、訥格) 習泥烈 (今、蕭錫甲) 胡士白山 (今、瑚里巴) 余觀 (今、伊都) 夷列 (今、伊時)
- 白斯不 (今、博碩布) 耶律大石 (今、耶律達) 師姑 (今、錫衰) 撻曷里 (今、達哈拉) 遐買 (今、蕭錫獸)
- 余觀姑楚 (今、餘觀姑) 赦盧幹 (今、阿姥罕) 撻魯 (今、塔魯) 謨葛失 (今、瑪克錫)
- 得里底 (今、達爾丹) 紉鄰 (今、吉林) 詆沙勒 (今、并素勒) 述烈 (今、珠爾) 朴古只沙里 (今、布固)
- 普速完 (今、普蘇完) 可敦 (今、哈吞) 回王畢勒哥 (今、伯勒格) 忽兒珊 (將軍の名號、呼爾察と改む)
- 改) 斡里刺 (今、鄂囉濟) 移刺窩斡 (今、伊喇鄂) 蕭翰 (本名は迪里。遊の太宗、汗に入り、后族小漢に賜ひて蕭翰と曰ふ。自後、后族は、皆、蕭を以て氏と爲す) 徹烈 (今、迪里) 寒眞 (今、罕札) 敵魯 (今、達魯) 阿鉢 (今、阿巴) 郎五 (今、郎馬)
- 兀欲 (今、鄂約) 麻答 (今、滿達勒と改む) 白再榮貪虐 (滿達勒の取る所の財、又之を取る。恒州の人) 津
- 撻 (今、伊約克) 述軋 (今、舒幹) 察割 (今、察罕) 撻烈 (今、塔魯) 涅魯衰 (今、尼魯衰) 裏古



直(今、努古濟) 兀律(今、鳥里) 小哥(今、肖肖格) 化哥(今、化格) 辛古(今、錫古) 燕燕(今、葉葉) 寅古(今、英格) 忽沒里(今、華賦哩) 耶律禪珠喇(今、耶律琮) 克沙骨慎思(今、格什) 昌朮(今、禪珠喇) 撻馬(尾從の官號、今、達噶拉と改む) 巴速董(今、巴爾斯濟) 耶律斜軫(今、耶律色) 于越(官號、今、裕) 曷魯(今、曷魯) 耶律休哥(格と改む) 夷离董(今、額勒金) 縉思(鳥蘇と改む) 奚底(今、希達) 乙辛隱(今、伊遜伊) 咄李(今、綽里特) 勃古哲(今、博郭濟) 蒲奴隱(今、布尼雅) 蒲古只(今、布格齊) 詳穩(今、詳衰) 達烈哥(今、特爾格) 打里(今、達哩) 黨項(勒浪、今、塔克) 合利(今、浩利) 吐蕃(潘羅支、今、巴喇木と改む) 奴瓜(今、耶律諾) 迷般囑(今、密班珠) 連吉(今、日巴勒) 者龍(今、札巴) 厮鋒督(今、斯榜多) 散觀(今、索都) 胡突衰(今、呼塔噶) 闍母(今、多昂摩) 特母哥(今、特默格) 撒贊(今、雅里) 阿古哲(今、阿固齊) 斡布(後、名を宗幹と改む) 斡萬不(今、斡喇布) 蒲盧虎(今、博勒郭) 撻懶(今、達寶) 撒离梅(今、色勒默) 洪郭達呼布(今、達呼布) 黃摑(今、洪郭) 星顯(今、錫馨) 三寶奴(今、三寶努) 尤虎(時、珠赫) 齊勤(又、七斤に作る) 火魯虎必喇(地名、今、和爾) 畏吾兒(國名、今、輝) 別失八里(地名、今、巴什) 慶山奴(今、慶善努) 納合買住(今、納哈塔邁) 粘合合打(今、鈕祜祿哈) 獨吉千家奴(今、通吉遷嘉) 胡沙(今、和碩) 萬奴(今、鄂諾勒) 烏古孫兀屯(今、烏古遷鄂) 唐括合打(達と改む) 留哥(今、留格) 醜奴(今、綽諾) 烏古論奪刺(里道喇と改む)

金

石古乃(今、錫固納) 斜烈(今、色塔默) 紇兒(今、和爾) 抹撻搏多(今、穆延盡) 搜温(今、索袁と改む) 札達(今、卓達) 筆什爾(今、必什時) 查拉爾(今、札拉喇) 素蘭(今、蘇呼) 銀青(伊木と改む) 花道(成名、今、和) 昔烈(今、錫喇) 寅答虎(今、音達輝) 阿海(又、阿哈と名づく、今、布薩安貞と改む) 夾谷石里哥(今、瓜爾佳錫) 李朮(今、富珠哩) 蒲刺都(一名富拉塔、今、德裕と改む) 必蘭阿魯帶(今、必嚙阿魯帯と改む) 徒單百家(今、圖克坦拜) 僕散掃吾出(今、布薩薩固) 佗滿胡士門(今、圖們和) 埒爾錦(庫哩德と改む) 訛出虎(今、恩微痕) 巴士魯(今、巴圖魯) 訛可(今、鄂和) 牙吾答(今、要赫德) 移喇(今、伊喇) 八狗(今、巴噶) 訛魯古必喇(今、額不哀必) 移刺衆家奴(今、伊喇重嘉) 伯開(布木と改む) 卜吉(今、博濟) 胡里(今、呼爾噶) 斡不答(今、鄂博臺) 合達(今、哈達) 納合六哥(今、納哈塔祿) 移刺蒲阿(今、伊喇豐阿) 陳和尚(一名、舞舞、字は良佐) 速不台 兀良合(皆、今、格と改む) 蘇布特、烏梁 兩訛可(一名、草火訛可、一名、板子) 六兒(今、祿爾) 斡烈(今、沃哩) 兀林答(鳥林海と改む) 按得木(今、阿達茂) 定住(今、鼎珠) 口温不花(今、琨布哈) 別里古台(今、伯勒格特) 兀典(今、圖克坦烏) 阿里合(今、阿里哈) 納合合閏(今、納哈塔赫) 石盞女魯歡(今、什嘉紐勒) 徒單益都 白撒(今、博宗) 撒合輦(今、薩哈廉) 阿虎帶(今、阿固岱) 赤盞合喜(今、遲嘉略齊) 徒單益都 封仙(今、豐新) 阿朮魯(今、鄂卓羅) 衆僧奴(今、重僧努) 珠顆(今、珠赫) 合周(今、哈華) 久住(今、玖珠) 斜卯愛實(今、錫瑪喇愛) 把奴(今、博諾) 奴申(今、訥蘇肯) 習

補遺



蒙古

捏阿不(今、薩尼雅) 都喜(今、德希) 木甲塔失不(今、珠喜塔克) 官奴(今、富察固) 乞奴(今、齊諾)  
(布と改む) 烏古論忽古(今、烏庫哩) 野驢(今、郭葉魯) 女奚烈完出(今、鈕祜祿溫) 烏古孫愛實(今、錫と改む) 拷佬(今、烏古哩) 李朮魯(今、富珠哩) 兀沙惹(今、烏色) 兀林答胡士(今、烏凌噶)  
(錫と改む) 玉山兒(今、裕色爾) 夾谷久住(今、瓜爾佳玖) 韓難河(今、鄂諾河) 李端又兒(今、勃端察) 阿蘭果火(今、阿倫郭) 脫奔咩哩噠(今、托本默爾)  
(と改む) 也速該(今、伊蘇克) 跌甲溫盤陀山(今、特里裏布達) 秦赤烏(今、秦楚特) 畏羅(今、衛拉特) 察兀禿魯(官名。今、察袞) 帖麥該(地名。今、特) 太陽罕(今、迪延汗) 蔑里月倫(今、鄂楞) 成吉思汗(今、青吉斯) 尤赤(今、卓齊特) 察合台(今、察罕台) 窩濶台(今、窩格)  
(と改む) 木華黎(今、穆呼哩) 札刺爾(今、札拉爾) 孔溫窟哇(今、喀根郭) 怯台(今、奇爾台) 哈台(今、哈斯台) 薄察(今、布札爾) 拖雷(今、圖類) 蕭也先(今、蕭額森) 吾也先(今、烏葉爾)  
(と改む) 察噶察華(今、察克察) 三哥拔都(今、僧格巴) 宏吉利(今、鴻吉哩) 塔忽珊竹(今、薩勒珠) 唆魯忽禿(今、蘇呼圖) 撒爾塔(今、薩里台) 兀胡乃太不花(今、烏呼爾爾合) 安赤(今、達呼) 默德那(今、默迪納) 派噶木巴爾(今、排哈木巴) 密里(今、密爾) 札拉丁(今、札)  
(と改む) 密里汗(今、瑪里克) 幹脫羅兒(地名。今、鄂托) 迭里密(地名。今、達) 班勒訖(地名。今、巴喇爾哈) 塔里寒(今、塔爾哈) 達嚕噶齊(掌印官) 撒馬兒罕(今、賽馬爾) 侯小叔(今、侯孝)

幹可(今、翁科) 阿魯帶(今、阿魯岱) 博爾朮(今、博果濟) 納忽阿兒蘭(今、納固爾放) 博兒忽(今、博勒呼) 許兀慎(今、厚新) 赤老溫(今、齊拉袞) 撥里班曲律(今、都爾本庫魯克と改む) 即ち木(今、猶ほ華言の四傑のごときなり。子孫、皆、宿衛を領し、四集賽と號す。舊、四怯薛に作る。) 亦臘喇翊昆(雙現と改む) 霍博(地名。今、和) 庫鐵(今、珠古) 蒙哥(今、莽賽扣) 木兒哥(今、默爾根) 忽觀都(今、瑚圖克) 忽必烈(今、呼必賚) 旭烈(今、轄魯) 阿里不哥(今、阿里克布) 回古乃(今、輝爾古) 塔察爾(今、塔齊爾) 倂蓋(今、布展と改む) 濶端(今、庫騰) 唐兀烏密(密と改む) 曲也法律(今、綽依辰) 欽察(國名。今、奇卜) 寬定(地名。今、庫) 木思海(亦、地名。今、濟) 玉里吉(今、伊勒吉) 拔都(今、巴都) 幹羅思(今、俄羅斯) 也烈贊(城名。今、額) 乃馬真(氏と改む) 脫烈哥(今、托里格) 訛鐵錫湖蘭(地名。今、烏特古呼蘭と改む) 奧都刺合蠻(瑪爾と改む) 失烈門(今、錫里瑪) 曲出(今、庫春) 月里麻思(今、瑪斯と改む) 也可那顏(今、伊克那) 牙刺瓦赤(今、伊勒噶克) 汪吉宿滅禿里(地名。今、昂吉蘇) 幹兀立海迷失(今、烏拉海額) 橫相乙兒(地名。今、杭錫) 兀良合台(達と改む) 沒脫赤(地名。今、摩) 乞里吉忽帖尼(地名。今、奎騰) 忙哥(今、莽噶) 那摩(西僧の名。今、) 也速兒(今、約素爾) 李里又(今、布爾察)  
(赦拉と改む) 唆火脫(今、蘇固圖) 孫哥(今、伊遜克) 也速兒(今、約素爾) 賽典赤(今、賽音鄂德) 珊竹帶(地名。今、沙卜) 紐璘(今、擲時) 阿答胡(今、阿都固) 乞石迷(齊と改む)



抄馬那顏(今、綽勒們諾) 密里霍者(今、密刺伯和) 李忽蘭吉(今、李呼哩雅) 阿  
(地名。今、克什) 尤(今、阿珠) 苦徹拔都兒(今、哲辰巴圖) 脫忽斯(今、托郭斯) 眞金(今、精吉木) 邁鐵赤(今、默德)  
(今、改) 合魯氏(今、赫魯氏) 渾都海(今、渾塔噶) 乞台不花(今、奇塔特布) 八春(今、巴崇)  
(今、改) 八思巴(僧名。今、帕) 薩斯迦(今、薩斯嘉) 族欵(今、足克袞) 朶栗赤(今、多爾濟) 阿合馬(今、阿哈)  
(瑪特) 不魯花(今、布拉噶) 玉龍答失(今、玉龍哈) 安童(今、安圖) 和禮霍孫(今、和爾郭)  
(改) 匿贊馬丁(今、爾智密迪)

蒙古

國號を改めて元と曰ふ。(宋の度宗の咸淳七年、元の世祖の至元八年) 賽典赤瞻思丁(今、賽音諾德齊展) 烏馬兒(今、烏)  
(改) 阿里海涯(今、阿爾哈) 合刺(今、哈喇) 伯顏(今、巴延) 博羅權(今、博羅干) 忙兀(今、恭郭)  
(改) 畏答(今、鄂約達) 遜都思(今、安塔海) 塔出(今、達春) 阿刺罕(今、阿樓罕) 那木罕  
(今、諾摩罕) 合失大王(今、和碩王) 宋都斛(今、蘇都爾) 奧魯赤(今、鄂羅齊) 忙兀台(今、蒙)  
(改) 昂吉兒(今、昂吉爾) 野蒲(今、葉普爾) 濶里吉思(今、哈丹克時) 楊璉真伽(僧名。今、嘉木揚)  
(改) 昔里吉(今、錫喇勒) 阿力麻里(地名。今、阿爾) 幹魯權(今、鄂爾坤) 也的迷失(今、葉特密) 也速  
(今、伊遜岱) 抹速忽(今、瑪蘇庫) 四集賽(分番宿衛の官。博勒呼、博爾濟、穆呼) 火敦腦兒  
(河源。又、鄂敦塔拉と名づ) 也孫幹論(今、也孫鄂洛) 騰乞里塔(蒙古、天を謂ひて騰格哩と爲し、山峰  
(今、鄂端諾爾と改む) 燕鐵木兒(今、雅克特穆) 完者都(今、烏哲勒) 相答吾兒(今、桑阿)  
(改) 阿里伯(今、阿勒巴)

納刺速丁(今、納刺蘇爾) 太卜(今、台布) 也罕的斤(今、伊克特) 匣刺魯(今、錫喇婁) 甕  
(改) 古刺帶(今、昂吉爾) 索羅(今、博羅) 亦麻都丁(今、尼瑪多卜) 阿魯渾薩里(今、謂爾根薩) 不  
(改) 魯迷失海牙(今、博羅哈思) 撒的迷失(今、撒題勒密) 桑哥(今、僧格) 膽巴(今、丹巴) 功嘉葛  
(今、恭噶喇) 突甘思且麻(今、思圖克達) 哈刺哈孫幹刺納兒(今、哈刺哈) 徹里(今、徹里克)  
(改) 燕只台吉(今、延濟克) 太赤(今、哈喇齊) 要東木(今、納蘇穆) 脫脫忽(今、托克托) 阿必失合  
(今、阿必錫) 麥尤督丁(今、莽珠迪) 乃顏(今、納延) 阿沙不花(今、阿實克布) 納牙(今、納恰)  
(改) 金家奴(今、錦嘉努) 鐵哥(今、特格) 玉昔鐵木兒(今、約蘇特) 阿八赤(今、阿巴齊) 昔都兒  
(今、薩都爾) 月的迷失(今、博羅哈思哈雅と名づ) 火魯哈孫(今、和洛霍斯と改む) 土土哈班都察  
(今、改) 撒的迷失(今、薩題勒迷) 不魯迷失海牙(今、博羅哈思) 怯伯(今、奇卜) 甘麻刺  
(今、噶瑪拉) 合刺帶(今、哈喇台) 亦怯烈(今、伊奇哩) 札忽帶(今、札呼岱) 完澤土別燕(今、旺札)  
(改) 亦里迷失(今、伊克穆) 百查兒(今、布札爾) 明里鐵木兒(今、穆爾特穆) 阿徹忽突(地名)  
(今、哈斯圖) 月赤察兒(今、伊徹察) 亦里吉篤(今、伊勒吉) 色辰(今、薛禪) 禿魯麻(罪囚を釋し  
(今、改) 三不刺(地名。今、賽音) 伯括吾氏(今、巴約特) 托里斯(今、托里實) 小薛(錫  
(今、改) 蠻子台(今、曼濟岱) 阿老瓦丁(今、阿拉威迪) 萬僧(今、烏遜) 牀兀兒(今、綽和爾)  
(改) 俺答(今、譜達) 孛伯(今、博拜) 特靈台(今、特爾特) 也不干(今、額布根) 也速答兒(今、伊  
(今、改)



海山(今、海桑) 答刺麻八刺(今、達爾麻巴) 立智理威(今、勒芝刺) 薛超兀兒(今、薛緯)  
(と改む) 忽憐(今、阿什) 楊漢英(名を賽音布) 迷兒火者(卓と改む) 八都馬辛(沁と改む) 馬兀  
(と改む) 合刺(今、馬烏赫) 阿忽台(今、阿呼岱) 愛育黎拔力八達(巴特喇と改む) 押忽(大珠の名。今、  
(と改む) 完者篤(今、額勒哲依) 禿刺(今、圖喇) 闊闊(今、庫庫) 牙忽都(今、雅呼圖) 馬謀沙(今、茂  
(と改む) 沙的(今、錫迪) 潤潤出(今、庫克楚) 博達(今、撥緯) 和世球(即ち明宗、武宗の長子。) 答思  
(と改む) 不花(今、塔斯布) 乞台普濟(奇と改む) 教瓦班(西僧の名。今、置) 三布瓦丁(今、三布幹)  
(と改む) 欵徹(今、庫齊) 三布瓦(今、三布幹) 脫虎脫(今、托克托) 保八(今、保巴) 忙哥鐵木爾(今、  
(と改む) 不里牙敦(今、布琳尼) 脫憐(今、托琳) 迸不刺(今、班巴爾) 阿刺納失里(今、喇特  
(と改む) 鐵里(西僧。今、德) 阿兒思蘭(今、阿爾薩) 旺兀察都(今、翁郭察) 曲律(今、庫魯克) 旺  
(と改む) 畢(今、旺布) 烏馬兒(今、烏瑪喇) 木兒火赤(今、瑪拉噶) 鐵木迭兒(今、特們德) 只孫衣(今、  
(と改む) 雍古(今、永固特) 咬住(今、約爾珠) 禿忽魯(今、圖固勒) 護都沓兒(今、呼都克托)  
(と改む) 呢匣馬丁(今、羅智密迪) 滅里吉歹(特と改む) 碩德八刺(即ち英宗。今、碩) 釐日(今、哩日)  
(と改む) 教化(今、嘉輝) 阿思罕(今、阿斯罕) 脫里伯(今、圖魯卜) 察阿台(今、察克台) 伯答沙(今、  
(と改む) 買住(今、邁珠) 阿木哥(今、阿穆噶) 脫不台(今、圖布台) 月魯帖木兒(今、伊噶特穆)  
(と改む) 卜領勒多禮伯臺(布凌錦都爾伯) 普顏篤(布延圖と) 乞失監(齊克慎堅) 禿禿哈(今、圖圖爾) 八

爾吉思(今、巴爾積) 乃刺忽(今、蘇拉圖) 塔失海牙(今、塔斯哈) 黑驢(今、赫魯) 脫忒哈(今、  
(と改む) 亦列失八(巴と改む) 帖赤(今、塔齊爾) 胥益兒哈呼(珙と改む) 鎖咬兒哈的迷  
(と改む) 失(今、索約勒哈達) 迭里威失(蘇と改む) 奴兒干(今、尼噶罕) 圖帖陸爾(今、托克特穆爾、圖  
(と改む) 亦啓烈(今、伊奇哩) 益里海涯(雅と改む) 鐵失(今、特克錫) 赤斤鐵木兒(今、徹辰特穆) 也  
(と改む) 先鐵木兒(今、額森特穆) 按梯不花(今、阿爾古布) 探忒(今、塔坦) 幹羅斯(今、烏魯斯) 失禿  
(と改む) 兒(今、錫達爾) 旭邁傑(今、舒馬爾) 別烈迷失(錫と改む) 焉速忽(今、延斯固) 買奴(滿努  
(と改む) 禿滿(今、圖們) 紐澤(今、寧珠) 馬刺(今、瑪喇勒) 曲呂不花(今、奇爾布) 兀魯思不  
(と改む) 花(今、烏魯斯布) 鎖禿(今、寧珠蘇) 八八罕(今、巴巴罕) 阿速吉八(今、阿蘇奇) 左塔不台(今、  
(と改む) 塔失帖木兒(今、塔什特穆) 也先捏(今、額森蘇) 阿刺忒納失哩(今、喇特納) 鐵木哥  
(と改む) 朵朶(今、多木達) 明理董阿(今、恭資托) 別不花(今、拜布哈) 王不憐吉台(今、  
(と改む) 乃馬台(今、蘇瑪岱) 蔑理吉斛(特と改む) 脫別台(今、托博台) 曲烈(今、奇拉爾)  
(と改む) 別鐵木兒(今、拜特穆) 王禪(今、旺辰) 松山(今、蘇克織) 懷王圖卜特穆爾(即ち  
(と改む) 鐵木兒補化(今、特穆爾布) 撒敦(今、薩敦) 唐其勢(今、騰吉斯) 潤不花(今、庫  
(と改む) 忽喇台(今、呼喇台) 探馬赤(今、特默齊) 馬札兒(今、穆齊爾) 自當(今、則丹) 不花帖  
(と改む) 木兒(今、布哈特穆) 囊加台(今、囊嘉岱) 寬徹(今、庫齊) 瑠阿不刺(勒と改む) 奴兀倫(今、  
(と改む)



輪(今、改) 唐兀氏(今、唐古特氏と改む) 護都篤(今、胡土克圖と改む) 欽察台(今、奇徹台と改む) 阿兒思蘭海牙(今、阿爾薩蘭と改む) 阿榮(今、鄂允と改む) 鐵木兒脫(今、特穆爾圖と改む) 輦眞乞刺思(西僧の名、今、年札克喇錫と改む) 懿璘質班(明の子、今、額琳沁巴勒と改む) 禿堅(今、圖沁と改む) 伯忽(今、布固と改む) 阿禾(今、阿瑚と改む) 乞住(今、克楚と改む) 帖木爾不(今、特穆爾布と改む) 小雲失(今、碩裕實と改む) 八不沙(今、必巴什と改む) 雲都思帖木兒(今、溫都素特穆爾と改む) 脫脫木兒(今、托克托穆爾と改む) 只兒哈郎(今、濟爾噶朗と改む) 也的迷失脫迷(今、伊德爾瑪實特默と改む) 觀音奴(今、觀音努と改む) 野里牙、又、野里海牙(今、阿爾雅と改む) 馬兒(今、瑪爾と改む) 阿刺忒納答刺(今、喇特納達喇と改む) 香山(今、沙と改む) 捌思班(今、緯斯巴と改む) 也速也不干(今、伊蘇伊伯根と改む) 古納答刺(今、古嚕喇特納と改む) 阿魯渾撒里(今、鄂爾根薩里と改む) 燕帖古思(今、雅克特古思と改む) 怯烈(今、克時と改む) 必刺都古象失(今、必喇圖庫圖齊と改む) 玉珍達八的刺板的(今、木津達巴迪爾班第と改む) 必刺忒納失里沙津愛護持(今、布理訥實喇音沙津阿固齊と改む) 僧家奴(今、僧嘉努と改む) 札牙篤(今、濟雅圖と改む) 妥懽帖睦爾(即ち順帝、今、托歡特穆爾と改む) 邁來的(今、瑪里達と改む) 阿魯渾帖木兒(今、阿哩袞特穆爾と改む) 伯牙吾(今、巴約特と改む) 眞哥(今、珍格と改む) 普化(今、布哈と改む) 泰不花(今、台哈布と改む) 伯牙吾台(今、巴約特と改む) 丑的(今、緯台と改む) 党兀班(今、丹巴と改む) 佛家閭(今、佛嘉律と改む) 搠斯監(今、緯斯嚴と改む) 汪家奴(今、旺嘉努と改む) 沙刺班(今、錫哩巴と改む) 燕者不花(今、楊珠布と改む) 世傑班(今、沙克宜巴と改む) 月可察兒(今、依克徹爾と改む) 只兒瓦歹(今、珠爾噶岱と改む) 月魯不花(今、阿嚕布と改む) 也里牙(今、阿爾雅と改む) 不答失里(今、布特達錫爾と改む) 月濶察兒(今、伊克徹爾と改む) 薩薩(今、庫庫と改む) 吾者野人(今、烏哲勒額森と改む) 鐵木兒達

什(今、特穆爾達什と改む) 別兒怯不花(今、博爾克布哈と改む) 燕只吉解(今、延濟克台と改む) 忽都不花(今、瑚圖克布哈と改む) 朶爾直班(今、多爾濟巴勒と改む) 亦憐眞班(今、額琳沁巴勒と改む) 朶兒只班(今、多爾濟巴勒と改む) 翰勒海壽(今、烏蘭海蘇と改む) 哈麻(今、哈瑪爾と改む) 雪雪(今、蘇蘇と改む) 脫忽思(今、托郭斯と改む) 拔實(今、巴克什と改む) 伯帖木兒(今、拜特穆爾と改む) 楔哲篤(今、奇齊業圖と改む) 禿魯(今、圖魯と改む) 禿赤(今、圖齊と改む) 達識帖木爾(今、達什特穆爾と改む) 寬徹哥(今、琨徹格爾と改む) 丑悶(今、超爾と改む) 禿堅不花(今、圖沁布哈と改む) 徹里不花(今、齊里克布哈と改む) 兀忽失(今、烏格什と改む) 徹徹帖木兒(今、徹辰特穆爾と改む) 密爾麻(今、瑪爾默と改む) 和謨(今、和謨克と改む) 阿思蘭(今、阿斯蘭と改む) 察罕帖木兒(今、察罕特穆爾と改む) 晃火帖木兒(今、鴻和特穆爾と改む) 完者帖木兒(今、旺札勒特穆爾と改む) 和尙(今、華善と改む) 阿里渾察(今、阿里袞徹爾と改む) 普化(今、布哈と改む) 泰不華(今、台哈布と改む) 伯牙吾台(今、巴納特と改む) 丑的(今、緯台と改む) 慶童(今、慶同と改む) 党兀班(今、丹巴と改む) 佛家閭(今、佛嘉律と改む) 完者不花(今、旺札勒と改む) 寬徹普化(今、庫沁布哈と改む) 愛猷識理達臘(今、阿裕錫哩達喇と改む、即ち順帝の太子) 汝中柏(今、儒克忠巴勒と改む) 紐的該(今、努都爾岱と改む) 緒不花(今、緒布哈と改む) 班格(今、伴哥と改む) 不蘭奚(今、布喇奇と改む) 帖木補花(今、特穆爾布哈と改む) 兀都蠻(今、烏德美と改む) 達國珍(今、達克津と改む) 伯顏(今、巴延と改む) 普顏不花(今、布延哈と改む) 竹貞(今、珠占と改む) 壽童(今、碩通と改む) 哈喇魯(今、哈喇魯特と改む) 燕赤不花(今、伊齊布哈と改む) 朶列(今、都時と改む) 崔完者帖木兒(今、旺札勒特穆爾と改む) 石抹宜孫(今、舒穆魯伊遜と改む) 迪烈(今、德里札と改む) 厚孫(今、和遜と改む) 朴不花(今、布木と改む)



布哈と改む。伯顏不花的片(今、巴延布哈德、克津と改む。) 大聖奴(今、達勝努と改む。) 也先忽都(今、額森呼圖、克と改む。) 擴廊帖木兒(今、庫庫特穆爾と改む。) 木兒古徹兀(地名。今、穆爾、固楚と改む。) 塔思帖木兒(今、塔斯特穆爾と改む。) 馬合謀(穆特と改む。) 貊高(今、摩該と改む。) 伯撒里(今、巴咱爾と改む。) 老的沙(今、羅達錫と改む。) 也速(今、伊蘇と改む。) 答蘭帖木兒(今、達蘭特穆爾と改む。) 眞保(今、珍布と改む。) 上都馬(今、瑪勒と改む。) 那海(今、金諾海と改む。) 伯達兒(今、畢德爾と改む。) 八思兒(今、巴咱爾と改む。) 脫烈伯(今、圖魯卜と改む。) 虎林赤(今、和爾齊と改む。) 滿尙賓(今、瑪實貝と改む。) 掩篤刺哈(今、溫都爾罕と改む。) 脫因帖木兒(今、托音特穆爾と改む。) 侯伯顏達世(今、侯巴延達と改む。) 沙藍答兒(今、錫喇岱と改む。) 神保(今、神寶と改む。) 朶耳麻(今、多爾瑪と改む。) 迭里彌實(今、德爾密と改む。) 阿里衰(察罕帖木兒の父。) 也兒結尼(額爾吉訥と改む。) 黑厮(今、赫色と改む。) 迭兒必失(今、德爾畢と改む。) 朴賽因不花(今、富森賽音、布哈と改む。) 滿川(今、穆辰と改む。) 阿兒溫沙(今、阿爾烏遜と改む。) 卜顏帖木兒(今、布延特穆爾と改む。) 牙罕沙(今、揚沙と改む。) 伽隣眞(西僧の名。今、結琳沁と改む。) 禿魯帖木兒(今、圖魯特穆爾と改む。) 演撲兒(今、延微爾と改む。) 倚納(淫喪の夥伴。今、伊納克と改む。) 皆即兀該(無きを言ふ事。) 大幹耳(大家産を謂ふ。今、大鄂爾多と改む。) 洪丑驢(今、洪超爾と改む。) 哈刺章(今、哈喇章と改む。) 桑哥失里(今、桑圖錫里と改む。) 答失八都魯(今、達什巴圖魯と改む。) 火赤溫(今、和實衰と改む。) 絆住馬(今、珠爾馬、克と改む。) 陳也先(今、陳額森と改む。) 蠻子(今、曼濟哈、雅と改む。) 劉哈喇不花(今、劉哈刺布、哈と改む。) 雪雪(今、蘇蘇と改む。) 慶生(今、齊克慎と改む。) 蓋里伯(今、爾布と改む。) 韓扎兒(今、哈扎噶、爾と改む。) 沙不丁(今、沙布迪、音と改む。) 上都罕(今、沙達哈、爾と改む。) 阿魯渾河(今、鄂爾坤、河と改む。)

哈喇河(今、圖拉河と改む。) 別篤山(今、畢道山、皆、黃河の源。) 長加奴(今、昌嘉努、と改む。) 何瑣南普(今、何素諾、温布と改む。) 卜納刺(今、伯納時、と改む。) 喃加巴藏卜(今、納木扎勒巴、勒藏布と改む。) 南哥思丹八亦監藏(今、納木喀薩丹、嘉木燦と改む。) 脫古思帖木兒(元の順帝の孫。今、特、古斯特穆爾と改む。) 俄力思(今、額時蘇、と改む。) 巴者(今、拜哲、と改む。) 伯顏子仲(今、巴延資、中と改む。) 脫火赤(今、托和齊、と改む。) 愛足(今、接珠、と改む。) 忽都帖木兒(今、瑚圖克特、穆爾と改む。) 亦憐眞(今、額淋沁、と改む。) 達里麻(今、達爾瑪、と改む。) 達的(今、托迪、と改む。) 乃刺吾(今、蘇喇固、と改む。) 劉探馬赤(今、劉特默、齊と改む。) 一禿河(今、伊圖河、と改む。) 地保努(今、迪保努と改む。即ち元の順帝の曾孫。) 天保奴(今、添保努、と改む。) 也速迭兒(今、伊遜岱、爾と改む。) 咬住(今、耀珠、と改む。) 坤帖木兒(今、琨特穆爾、と改む。) 鬼力赤(今、郭勒齊、と改む。) 兀良哈(今、烏梁海、と改む。) 進都山(今、伊都山、と改む。) 徹徹兒山(今、察察爾山、と改む。) 孛林帖木兒(今、布琳特穆爾、爾と改む。) 買的里八刺(今、密迪と改む。元の順帝の孫、順帝の嗣君阿魯裕錫哩達賴。) 哈禿兀(今、哈拉、固と改む。) 火眞(蒙古人。永樂、中の番將。) 安克帖木兒(哈密王。今、恩克、特穆爾と改む。) 脫烈干(韃靼人。今、圖、嚙根と改む。) 阿魯台(今、阿魯、台と改む。) 察罕達魯花(今、察罕達爾、噶と改む。) 瓦刺灰(進北の降人。今、鄂爾和と改む。) 哈里麻(西僧の名。封じて、大寶法王と爲す。) 瓦刺(蒙古の部落、と改む。) 馬哈木(今、馬哈木、特と改む。) 把禿孛羅(今、巴圖博、囉と改む。) 煖苔失(今、諾衰達、什と改む。) 本雅失里(今、布尼雅錫、元の、と改む。) 別失八里(地名。今、巴什、伯里と改む。) 兔力帖木兒(哈密王。今、推勒、特穆爾と改む。) 婁達衰(涼州の番酋。今、老的沙と改む。) 答里巴(衛拉特汗。今、塔爾巴と改む。) 忽蘭忽失溫(衛拉特地名。今、和拉和錫衰と改む。) 康哈里孩(地名。今、剛哈、拉海と改む。) 屈律兒河(今、顏の境内に在り。今、啓拉爾河と改む。) 也先土于(蒙古人。今、額、森托子と改む。) 答蘭訥木兒(地名。今、達蘭納、穆爾河と改む。) 潤潤納活兒(庫庫、諾爾と改む。) 母納山(今、穆納山、と改む。) 阿卜只俺(今、鄂博爾濟、延と改む。) 托都不花(元の後。今、托克托布哈、爾台の所屬。) 也先



(今、額森と改む) 喃哥(今、訥格と改む) 困即來(今、琨濟榜と改む) 完者脫歡(今、旺扎勒托と改む) 皮兒馬(今、丕勒馬と改む)  
(今、哈瑪爾と改む) 乞兒蠻(今、奇里瑪と改む) 革干帖木兒(今、格根特穆と改む) 孛來(韃靼部の人。今、保喇と改む) 麻兒  
(今、穆爾格爾と改む) 毛里孩(今、瑪拉噶と改む) 孛汗(今、博汗と改む) 烏林台巴剌(今、烏林台巴丹と改む。是を準噶爾の始と爲す) 把塔木兒  
(今、巴圖穆爾と改む) 罕慎(今、哈商と改む) 劉巴堅參(亦、番僧。今、把置勒木燦と改む) 卜列革(今、布拉噶と改む) 把塔木兒  
(今、改む) 阿力(今、阿里と改む) 速檀(今、蘇勒坦と改む) 牙蘭(今、伊蘭と改む) 七克力(今、默克と改む)  
(今、改む) 脫羅干(今、羅陵と改む) 亦思馬因(今、伊斯瑪音と改む) 辛愛(昔達の子。今、錫林阿と改む) 桃松泰(韃の女、錫林阿の妾。今、改む)  
(今、改む) 吉能(即ち濟農なり。濟農は、本、蒙古の王號。舊分ちて吉囊に作る。吉能は今仍て濟農と改む。舊分ち韃靼の小王子の後) 把都兒(今、巴圖爾と改む) 通罕(今、托干と改む) 老把都(今、把圖爾と改む) 土蠻(今、土默特と改む)  
隆慶の初め、濟農、河套に據り、西陲諸部の長と爲り、屢、入寇す。乃ち王崇古を以て三邊を總督せしむ。  
把漢那吉(昔達の孫。今、巴噶奈濟と改む) 一克哈屯(昔達の妻。今、伊克哈敦と改む) 禎兒都司(今、鄂爾多斯と改む。蓋し即ち今の鄂爾多斯の地)  
昆都力(弟、老巴噶、本、昔達の弟。昆都埒赫と改む) 朶顏長克(今、朶顏察克と改む) 董狐狸(今、董呼哩と改む) 長昂(今、長安と改む) 張其  
哈刺(今、章齊略と改む) 切盡台吉(吉と改む) 黑石灰(今、哈斯坦と改む) 委政(今、韋微と改む) 煖土(今、諾木と改む)  
拱士(今、恭圖と改む) 卜言台周(今、布延台珠と改む) 把速亥(今、蘇巴爾と改む) 炒花(今、綽哈と改む)

國譯廿二史劄記 下終

廿二史劄記卷二十

陽湖趙翼撰

唐代宦官之禍

東漢及前明宦官之禍烈矣。然猶竊主權以肆虐天下。至唐則宦官之權。反在入主之上。立君弑君廢君。有同兒戲。實古來未有之變也。推原禍始。由於使之掌禁兵。管樞密。所謂倒持大阿而授之以柄。及其勢已成。雖有英君察相。亦無如之何矣。身在禁闈。社鼠城狐。本易竊弄威福。此即不典兵。不承旨。而燕閒深密之地。單詞片語。偶能移動主意。軒輊事端。天下已靡然趨之。如高力士貴幸時。徵侍者願一見。如天。肅宗在東宮。亦以兄事之。諸王公主呼爲翁。戚里諸家尊曰善。將相大臣皆由之以進。嘗建佛寺道觀各一所。鐘成。宴公卿。一扣者納禮錢十萬。有至二十扣者。李輔國貴幸時。人不敢斥其官。直呼爲五郎。李揆當國。以子姓事之。嘗矯詔遷上皇於西內。至憂鬱以崩。他如魚朝恩。忌郭子儀功高。譖罷其兵柄。程元振。譖來瑱。賜死。李光弼。遂不敢入朝。又譖裴冕。罷相。貶施州。以致方鎮解體。吐蕃入寇。代宗倉黃出奔。徵諸道兵。無一不至者。此猶是未掌兵權。未築樞要以前事也。案代宗欲除輔國。而懼已典兵。然代宗由廣平王爲元帥。即位後。猶有帥府之名。令輔國爲元帥。行自德宗徵涇師之變。禁軍倉卒不及徵集。還京後。不欲以武臣典禁兵。乃以神策天威等軍。置護軍中尉中護軍等官。以內官竇文場。霍仙鳴等主之。於是禁軍全歸宦寺。其後又有樞密之職。凡承受詔旨。出納王命。多委之。於是機務之重。又爲所參預。案李吉甫傳。憲宗初。有中書小吏滑渙。與樞密使劉

唐代宦官之禍



守謙掌密命。是樞密之職。蓋始于德宗之末。憲宗之初。又嚴道美傳樞密使。無事。惟三極含藏。書而已。其後遂有堂狀。貼黃。決事。與宰相等。一已足攬權樹威。挾制中外。況二者盡為其所操乎。其始猶假寵竊靈。挾主勢以制下。其後積重難返。居肘腋之地。為腹心之患。即人主廢置。亦在掌握中。僖宗紀贊。謂自穆宗以來八世。而為宦官所立者七君。今案本紀。憲宗時太子寧薨。中尉吐突承璀欲立豐王暉。而暉母賤不當立。乃立遂王宥為皇太子。憲宗崩。宦官陳宏志殺承璀及暉。以皇太子即位。是為穆宗。舊書王守澄傳。憲宗崩。守澄與馬進潭。梁守謙等。冊立穆宗。蓋皆與陳宏志同謀者。是穆宗之立。由陳宏志等之力也。然穆宗猶是憲宗時已立為皇太子。而宏志等翊戴之。尚非擅立。敬宗夜獵還宮。與中官劉克明。田務成。許文端。軍將蘇佐明。王嘉憲。石定寬等二十八人飲。帝醉入室更衣。殿上燭忽滅。劉克明等同害帝。蘇佐明等矯制立絳王。樞密使王守澄。中尉梁守謙。率禁軍討賊。誅絳王。迎江王即位。是為文宗。是文宗之立。由王守澄等之力也。然此猶敬宗未有太子。故討賊立君。亦尚出于正。至文宗在時。已立敬宗子成美為皇太子矣。及大漸宰相李瑋。樞密使劉宏逸等。又奉密旨。以成美監國。乃中尉仇士良。魚宏志。矯詔廢成美。立穎王瀍為皇太子。即位。是為武宗。是武宗之立。由仇士良等之力也。此則廢先帝所立之太子。而擅易之。其惡更非陳宏志。王守澄等比矣。武宗崩。中尉馬元贇立光王怡為皇太子。即位。是為宣宗。時武宗未有太子。是宣宗之立。由馬元贇之力也。宣宗疾大漸。以夔王滋屬樞密使王歸長。馬公孺等。而中尉王宗實及元實。矯詔立鄆王為皇太子。即位。是為懿宗。是懿宗之立。由王宗實等之力也。懿宗大漸。中尉劉行深。韓文約立普王為皇太子。即位。是為僖宗。是僖宗之立。由劉行深等之力也。僖宗大漸。羣臣以吉王保最賢。且長。欲立之。觀軍容使楊復恭。率兵迎壽王為皇太子。即位。是為昭宗。是昭宗之立。由楊復恭之力也。統計此六七代中。援立之權。盡歸宦官。宰相亦不得與知。且不特此也。憲敬二帝。至為陳宏志。劉克明等所弑。昭宗又為劉季述所幽。近侍之凶悖。

至斯而極。其間非無賢哲之主。有志整飭。如憲宗。無所寵假。呂全如擅取樟材治第。遂獄自殺。郭旻醉觸夜禁。即杖殺之。凶餒稍戢。然其後竟遭弑害。文宗欲倚李訓。鄭注誅宦官。甘露之變。反為仇士良等肆逆。橫殺朝士。橫屍闕下。帝亦惴惴不保。僅而獲免。宣宗始稍黜其權。初延英奏事。帝與宰相可否。樞密使在旁。得與聞。及田或矯上旨。有所改易。帝始令延英召對。兩中尉先降。樞密使候于殿西。俟宰相奏事畢。案前受事。稍防矯詐之弊。至懿僖又如故矣。文宗嘗以周赧漢獻受制強臣。而已受制家奴。謂不如赧獻。對周墀泣下。學士崔慎由夜直。忽仇士良召至祕殿。令草詔更立嗣君。慎由以死拒之。士良引至小殿見帝。士良等歷數帝過。帝俯首而已。劉季述錮昭帝於少陽院。亦以杖畫地責帝曰。某日某事。爾不從我。罪一也。至數十不止。楊復恭之反也。既令其養子守信為神策軍使。又令守貞守忠及姪守亮為節度使。以樹內外之援。與守亮書曰。承天門乃隋家舊業。兒但積粟訓兵。不必進奉。吾於荆榛中立壽王。既得位。乃廢定策國老。有如此負心門生天子。此可見下陵上替之極也。卒之朝廷綱紀。為所敗裂。國勢日弱。方鎮日強。宦寺雖握兵。轉不得不結外藩為助。於是韓全誨等劫天子。遷鳳翔。倚李茂貞。致朱全忠攻圍逾年。力窮勢迫。帝與茂貞乃殺全誨等四人。韋處廷等二十二人。以求和。又殺小使李繼彝等十人。城門既開。又殺中官七十餘人。全忠又令京兆誅黨與百餘。既還京師。遂盡殺第五可範以下八百餘人。哀號之聲。聞於路。諸道監軍。亦即所在賜死。蓋不減東漢末之誅宦官。至有無鬚而誤死者。唐室宦官之局。至此始結。而國亦亡矣。宋景文謂灼木攻蠹。蠹盡而木亦焚也。而抑知其始實由于假之以權。掌禁兵。筭樞要。遂致積重難返。以至此極也哉。

### 中官出使及監軍之弊

中官出使及監軍。累朝皆有之。然其害亦莫有如唐之甚者。小則索賄賂。大則釀禍端。令就



新舊唐書案之。高力士傳。是時中人出使。或修功德。市鳥獸。使還。所獲動巨萬計。京師甲第名園。良田美產。占者什六七。此猶不過。藉禁近之勢。以贖財也。安祿山將反。楊國忠等力言於帝前。帝使宦官輔璆琳覘之。得厚賂。言祿山不反。於是祿山益得征繕稱兵矣。封常清在東都。戰敗奔陝。勸高仙芝退守潼關。中人邊令誠奏其敗退狀。而二大將同日受戮矣。僕固懷恩負氣訴冤。代宗使中人駱奉先諭之。奉先不受。宴竊馬馳歸。而懷恩以疑懼而決反矣。李寶臣方奉命討田承嗣有功。代宗使中人馬承倩勞之。寶臣贈絹少。承倩詢而擲於途。寶臣顧左右有慚色。於是轉與承嗣連衡拒命矣。德宗晚年。姑息藩鎮。每帥守物故。必先遣中使往覘軍情。其副貳有物望者。輒厚賂使之保奏。德宗因而授之。由是節度使之除拜。亦出其口矣。武宗討澤潞時。太原將楊弁激眾叛。武宗使中人馬元貫往諭。得其賄歸。言太原有十五里明光甲。不可討。賴李德裕折之。始語塞。是轉為叛者。脅授旄節矣。此中官出使。徒縱其納賄。而無益于國事。且反以釀禍者也。又有中使監軍之弊。自開元天寶間。討吐蕃諸國。已有宦者監大將之軍。至魚朝恩為觀軍容使。邛山之戰。李光弼欲據險而陣。朝恩令陣於平地。遂致大敗。光弼傳。據裴度韋臯李德裕等所奏。大概監軍者。先取銳兵自衛。儒者出戰。戰勝則先報捷。偶勦則凌挫百端。侵撓軍政。將帥不得專主。每督戰輒建旗自表。小不勝則捲旗去。大軍往往隨之奔北。故劉闢之叛。杜黃裳請不用監軍。專委高崇文討之。然白居易疏。謂韓全義討淮西。賈國良監之。高崇文討蜀。劉貞亮監之。是黃裳雖奏。而監軍仍未撤也。居易傳。裴度討吳元濟。始奏去監軍。主將得專兵柄。法令既一。戰皆有功。遂平淮蔡。度傳。其後會昌中。討劉稹。李德裕亦奏監軍不得干軍事。每兵百人。聽以一人為衛。由是號令精整。遂平澤潞。德裕傳。觀此。則中使監軍。有害無利。昭然可見。此猶是臨戰時。用以監察。尚有說也。其尋常無事時。各藩鎮亦必有中使監軍。如陸長源死。監軍俱文珍密召宋州刺史劉全諒入

汴。以靖其亂。長源傳。王承宗死。諸將請王承元主留務。承元曰。天子使中貴人監軍。當與議。監軍以衆意贊之。承元乃受。承元傳。是亦未嘗無靖難解紛之益。然其中賢者百不一。而恃勢生事之徒。踵相接也。在河朔諸鎮者。既不能制其判亂。徒為之請封請襲。而在中州各鎮者。則肆暴作威。或侵撓事權。或誣構罪戾。姚南仲帥鄭滑。為監軍薛盈珍誣奏。有裨將曹文治不平。殺其奏事者而自刎。以明南仲之枉。南仲入朝。德宗曰。盈珍擾軍政邪。南仲曰。如盈珍者在。在在之。雖羊杜復生。不能治軍理人也。南仲傳。洪州監軍誣奏刺史李位謀逆。追赴京。付仗內訊。賴薛存誠力請付外。始得白。存誠傳。楊於陵帥嶺南。為監軍許遂振誣奏。憲宗即令貶於陵官。賴裴珀諫。始改吏部侍郎。珀傳。此牽掣藩臣之弊也。監軍王定遠。有德於節度使李說。軍政皆專決。將吏悉自補授。以田宏代彭令茵。令茵不伏。定遠即斬之。埋屍馬糞中。家人請屍不得。說奏之。定遠抽刀刺說。說走而免。說傳。劉承偕監澤潞軍。侮節度使劉悟。三軍憤噪。欲殺承偕。悟救而免。穆宗問裴度何以處之。度奏。惟有斬承偕耳。度傳。此激變軍士之弊也。嚴綬在太原。軍政一出。監軍李輔光。綬但拱手而已。後入朝。適賜食廊下。有中使馬江朝來。賜櫻桃。綬在鎮時。曾識江朝。至是不覺屈膝。綬傳。可見監軍之積威肆橫。非一朝一夕之故。其所由來者漸矣。因記宦官掌兵承旨之禍。而并及出使監軍二事。亦前代得失之林也。

### 唐宦官多閩廣人

唐時諸道進閩兒。號私白。閩嶺最多。如高力士本高州馮盎之後。嶺南討擊使李千里進之。後吐突承璀及楊復光皆閩人。時號閩為中官區藪。咸通中。杜宣猷為閩中觀察使。每歲時遣吏致祭。其先時號為敕使墓戶。宣猷傳



唐節度使之禍

唐之官制莫不善於節度使。其始察刺史善惡者。有都督。後以其權重。改置十道按察使。開元中。或加採訪觀察處置黜陟等號。此文官之統州郡者也。其武臣掌兵。有事出征。則設大總管。無事時鎮守邊要者。曰大都督。自高宗永徽以後。都督帶使持節者。謂之節度使。然猶未以名官。景雲二年。以賀拔延嗣為涼州都督。河西節度使。節度使之官。由此始。然猶第統兵。而州郡自有按察等使。司其殿最。至開元中。朔方隴右河東河西諸鎮。皆置節度使。每以數州為一鎮。節度使即統此數州。州刺史盡為其所屬。故節度使多有兼按察使。安撫使。支度使。者。既有其土地。又有其人民。又有其甲兵。又有其財賦。於是方鎮之勢日強。安祿山以節度使起兵。幾覆天下。及安史既平。武夫戰將。以功起行陣。為侯王者。皆除節度使。大者連州十數。小者猶兼三四。所屬文武官。悉自置署。未嘗請命於朝。力大勢盛。遂成尾大不掉之勢。或父死子握其兵。而不肯代。或取舍由於士卒。往往自擇將吏。號為留後。以邀命於朝。天子力不能制。則含羞忍恥。因而撫之。姑息愈甚。方鎮愈驕。其始為朝廷患者。祇河朔三鎮。其後淄青淮蔡。無不據地倔強。甚至同華逼近京邑。而周智光以之反。澤潞亦連畿甸。而盧從史劉稹等以之叛。迨至末年。天下盡分裂於方鎮。而朱全忠遂以梁兵移唐祚矣。推原禍始。皆由於節度使掌兵民之權故也。自宋以文臣知州事。歷代因之。遂無復弱幹強枝之患。宋太祖及趙普之計。慮深矣。而議者徒謂宋之弱由此。是但知禦侮力薄。不足以自強。而不知消患於未萌。苟非外有強敵。內有流寇。則民得安耕牧。不至常罹兵革之苦。其隱然之功。何可輕議也。

方鎮兵出境即仰度支供餽

諸方鎮各擅土地賦稅。足以養軍。乃朝廷用之討叛。則一出本境。即須朝廷給以衣糧。此國力所以困于用兵也。討王廷湊時。諸鎮兵十五萬。纔出境。即仰度支。乃置南北供軍院。由度支轉運。往往多為賊所截。不得至院。傳。延湊討李同捷時。諸軍在野。朝廷特置供軍糧料使。日費寢多。諸帥每有小捷。輒張其數。以邀賞。實欲困朝廷而緩賊也。繒帛征馬。賜之無算。同捷劉總出軍討王承宗。取其武強縣。遂持兩端。以利朝廷賞賜。承宗其實心為國者。惟李鄴。以淮南兵二千討李師道。糧餉未嘗仰給于有司。鄴傳。王智興之討李同捷。亦自備五月糧。智興朝廷皆特褒之。伐叛討逆。國家固不可惜費。而如唐之驕藩鎮。則國力為之敝。而賊勢亦益以張。故討李師道時。魏博田宏正。請自黎陽渡河。裴度以為不可。曰。黎陽渡河。既離本界。便至滑州。徒仰度支供饋。不如且在河北。養威。俟霜降後。於揚劉渡河。即可直抵鄆州。賊境也。度傳。討劉稹時。李德裕亦奏言。向來朝廷伐叛。兵纔出界。便費度支供餉。故逗撓以困國力。或密與賊通。取一縣一柵。以為勝捷。所以師出無功。今當令王元逵何宏敬。只取州勿取縣。未幾果平賊。德裕此亦伐謀之術也。

方鎮驕兵

秦漢六朝以來。有叛將無叛兵。至唐中葉以後。則方鎮兵變。比比而是。蓋藩帥既不守臣節。毋怪乎其下從而效之。遂帥殺帥。視為常事。為之帥者。既慮其變。而為肘腋之患。又欲結其心。以為爪牙之助。遂不敢制以威令。而徒恃厚其恩施。此驕兵之所以益橫也。今就新舊書各傳觀之。劉元佐傳。汴軍自李忠臣以來。士卒驕甚。至元佐益厚賞賜。故百姓重困。其後殺



大帥肆抄劫皆狂於利而然也。李質傳：汴軍牙兵二千人，皆日給酒食，物力為之屈。郗士美傳：澤潞自盧從史以來，日具三百人膳，以食牙兵。王式傳：徐州自王智興召募凶豪之卒二千，號銀刀、鵬旗、門槍、挾馬等軍，後漸驕。節度使姑息不暇，田牟鎮徐州，與之雜坐，酒酣撫背，時把板為之唱歌，其徒日費萬計，每有賓宴，必先飲以酒食，祁寒暑雨，卮酒盈前，然猶誼噪動謀，逐帥溫璋來為節度，士卒素聞其嚴，皆憂疑，璋開誠撫諭，終不釋，給以酒食，未嘗瀝口不期月，遂逐璋。適王式以義成忠武軍破浙東賊仇甫而歸，上即以式來鎮徐，徐卒頗懼，居三日，式勞兩鎮兵使還，既，擐甲執兵，即令圍驕卒盡殺之，凡三千餘人，由是凶徒盡殄。又溫造傳：興元軍殺節度使李絳，詔造為節度使，途遇征蜀兵回，造諭以自從，至則大宴，問興元軍殺絳狀，即令征蜀兵盡殺之，凡八百餘人，以百級祭絳，三十級祭死事官，餘投之漢江，蓋驕之極，至於肆無忌憚，則亦不得不草薶而禽獮之矣。然主帥有能以正自持，亦有不恃殺戮而能靖之者。李質為汴軍兵馬使，以日給二千人食為多費，會新帥韓充將至，質曰：若俟韓公至，頓去二千人食，人情必怨，乃停日膳而迎充，郗士美以澤潞日給牙兵三百人食為非法，曰：兵衛牙職也，安得廣費，遂罷之，而二軍亦未有敢鼓噪者，此又在乎主將之足以服人也。

盜殺宰相有一事

唐代盜殺宰相有二事。一元和十年，盜殺武元衡刺裴度，傷而免。一開成三年，盜射傷李石，以馬逸得脫。按元和、中朝廷討吳元濟，而王承宗請赦之，使人白事中書，頗不恭，元衡叱去，未幾元衡早朝，出靖安里第，夜漏未盡，賊乘暗呼曰：滅燭射元衡中肩，又擊其左股，徒御格鬪不勝，皆駭走，遂害元衡，批顛骨持去，邏司傳噪，盜殺宰相，連十餘里，達朝堂，未知主名，少頃馬逸歸，乃審知。元衡裴度出通化里，盜三以劍擊度，初斷鞞帶，次中背，纔絕單表，復微傷其首，度墮馬，會度帶氈帽，故瘡不至深，賊又揮刃追度，度從人王義持賊，連呼甚急，賊斷義手而逸，度已墮溝中，賊謂度已死，乃捨去。度傳：是日憲宗駭悼，罷朝，哀慟，詔金吾府縣大索，或傳言曰：無搜賊，窮必亂，又投書於道曰：毋急我，我先殺汝，許孟容言於帝曰：國相橫屍路隅，而盜不獲，為朝廷辱，帝乃下詔，能得賊者賞錢千萬，授五品官，積錢東西市，以募告者，於是神策將王士則、王士平等捕得張宴等十八人，言為承宗所遣者，皆斬之。元衡時王承宗李師道皆遣人在京竊發，斷陵廟之戟，焚芻橐之積，未幾東都防禦使呂元膺執李師道留邸賊門，察警嘉珍自言始謀殺元衡者，會宴先發，故籍以告師道，而竊其賞，帝令密誅之。元膺而李師道傳則謂察嘉珍即害元衡者，後田宏正誅李師道，閱其簿書，果有賞殺元衡之款。靖宏傳：此元和、中事也。文宗遭甘露之變，宰相王涯等皆為宦官仇士良所殺，遂以李石為相，石持正，立朝不少貶，朝廷賴之。石居親仁里，將曙入朝，盜發於尚父郭子儀宅，引弓追及矢，纔及膚，馬逸而回，盜已伏坊門，斷石馬尾，石竟以馬逸得還私第，上聞駭愕，是日京師大恐，常參官入朝者九人而已，已而知仇士良遣人所為也，帝亦知之，而無可如何，石遂乞罷相去。此開成中事也，而開成之賊終不得，蓋元和、係藩鎮遣人竊發，故神策將士得捕誅之，開成則宦者所為，而神策軍即宦官所掌，故不能得賊也。

六等定罪三日除服之論

安祿山之變，唐臣貴如宰相陳希烈，親如駙馬張垆，皆甘心從賊，靦顏為之臣，此即處以極刑，豈得為過，乃廣平王收東京後，希烈等數百人押赴長安，崔器定儀注，陷賊官皆露頭跣足，撫膺頓首於含元殿前，令扈從官視之，并概請誅死，李峴爭之，謂非維新之典，偽官內或



陛下親戚。或勳舊子孫。概處極法。恐乖仁恕。況殘寇未平。尙多陷賊者。若盡行誅。是益堅其從賊之心。乃議六等定罪。器視舊書謂峴此奏。全活無算。新書亦謂因此衣冠更生。賊亦不能使人歸怨天子。皆峴力也。是皆以器爲過當。峴爲持平。案是時蕭華自賊中歸。奏云。任賊官有爲安慶緒驅至河北者。聞廣平王宣恩命。釋放。皆相顧悔恨。及聞崔器議刑太重。衆心又搖。器傳李勉亦奏。肅宗曰。元惡未除。黜汚者衆。皆欲澡心歸化。若盡殺之。是驅天下以資凶盜也。由是全活者衆。蓋當日時勢。或有不得不從輕典者。然一時權宜。用以離搆賊黨。則可。若竟以峴所奏爲正論。則非也。堂堂大一統之朝。食祿受官。一旦賊至。即甘心從賊。此而不誅。國法安在。乃當時無不是李峴而非崔器何也。又如代宗崩。遺詔吏民。三日釋服。常衰以爲吏者。府史之類。固當與庶民同例。至朝臣則宜以二十七日爲準。崔祐甫謂吏即指官僚而言。百官皆當三日除服。夫大行甫殯。過密方深。雖有遺詔。臣子何忍遽行。即吉。常衰之議。自是正論。而當時又無不是祐甫而非常衰者。蓋自六朝以來。君臣之大義不明。其視貪生利己。背國忘君。已爲常事。有唐雖統一區宇。已百餘年。而見聞習尙。猶未盡改。顏常山盧中丞張睢陽輩。激於義憤者。不一一數也。至宋以後。始知以忠義爲重。雖力所不及者。猶勉以赴之。豈非正學昌明之效哉。

### 間架除陌宮市五坊小使之病民

德宗初。用楊炎爲相。定兩稅之法。天下受其利。初唐制。租庸調法。自開元以來。不爲版籍。丁口轉死。田畝換易。貧富升降。悉非向時。而戶部歲以空文上之。又戍邊者。蠲其租庸。六歲免歸。元宗事夷狄。戎者多死。邊將諱不以聞。故貫籍不除。王鉷爲戶口使。以其籍存而丁不在。是隱課不出。乃案舊籍。積二十年。責其租庸。民遂大困。至德後。天下兵起。科斂凡數百名。廢

者不削。重者不去。百姓旬輸月送。無有休息。吏因爲奸。富人丁多者。以官學釋老。得免。貧人無所託。則丁存。故課免於上。而賦增於下。天下盡蕩爲浮人。鄉居地著者。百不四五。楊炎乃請爲兩稅法。凡百之費。先度其數。而賦于民。秋夏兩入之。其租庸雜徭悉省。而丁額不廢。其田畝之稅。以大歷十四年爲準。而均收之。天下果便之。炎傳是帝頗能用入理財。稍紓民患矣。乃後因用兵。河南北。月費百餘萬緡。聽盧杞趙贊等計。令商賈本錢過千萬者。貸其餘以濟軍。軍罷。取償於官。乃令京兆暴責大搜。疑占列不盡。則苦掠之。人自經者相望。然僅得八十萬。又質庫及儲粟者。四貸其一。亦僅至二百萬。而市已皆閉肆。於是設間架除陌之令。屋二架爲間。上者二千。中千。下五百。吏執籌入室計之。隱不盡者。二架。即抵罪。告者以錢五萬賞之。其公私貿易。舊法率千錢算二十。乃請加至五十。主僧註所售。入其算。其自相市者。令自言。有隱不盡。率千錢沒二萬。告者以萬錢賞之。由是主僧得操其權。告訐紛起。上所入不得半。而恨誹之聲滿天下。及涇師亂。呼於市曰。不奪爾商人儻質矣。不稅爾間架除陌矣。于是帝奔奉天。長安失守。李晟收京。始歸宮闕。是亦可稍鑒前車。以求民莫乃。又用裴延齡李實等。橫征百出。延齡詭言。左藏乾隱二千萬。請置別庫爲羨餘。以充天子私費。乃大搜市廛。延齡傳奪所入進獻。以實其言。逮捕匠徒。迫脅就功。號曰救索。弗酬其直。名曰和雇。弗與之庸。延齡傳李實爲京兆尹。暴斂苛索。民不聊生。優人成輔端戲作誹語曰。秦地山河二百年。何期如此。賤田園。一頃麥苗五石米。三間堂屋二千錢。謂民皆賣田屋。以輸賦也。實奏劾以賤工謗國殺之。實傳此朝官之以培克爲事也。又聽宦官主宮市。置數十百人。閱物塵左。謂之白望。無詔文驗核。但稱宮市。則莫敢誰何。大率與直。十不償一。又邀闈闔所奉及脚直。至有重荷趨肆而徒返者。有民賣一驢。薪宦人以數尺帛易之。又取它費。且驅驢入官。民願納薪辭帛而去。不許。民恚曰。惟有死耳。遂擊宦者。有司執之以聞。帝黜宦者。賜民帛十匹。然宮市不廢也。



諫臣交章論皆不納。京兆吳湊奏宮中所須。責臣可辦。不必差宮使。亦不報。會張建封入朝。言之始稍戢。建封。且。不。特。此。也。又。聽。宦。官。縱。五。坊。小。使。肆。毒。於。外。每。歲。秋。按。鷹。犬。於。畿。甸。所。至。邀。索。供。饋。小。不。如。意。至。張。羅。網。于。民。家。門。及。井。不。令。出。入。汲。井。水。曰。驚。我。供。奉。鳥。雀。又。羣。聚。於。酒。食。家。肆。飲。啖。將。去。留。蛇。一。篋。誠。之。曰。吾。以。此。蛇。供。鳥。雀。可。善。飼。之。無。使。飢。渴。主。人。重。賂。之。乃。肯。攜。蛇。去。裴。度。傳。鄂。縣。令。崔。發。聞。門。外。喧。鬪。聲。吏。白。五。坊。小。使。擊。百。姓。發。命。吏。捕。之。時。已。曠。黑。天。子。聞。之。怒。收。發。繫。獄。御。樓。之。日。囚。發。雞。竿。下。有。內。官。五。十。餘。人。持。杖。毆。發。破。面。折。齒。詔。囚。皆。釋。而。發。不。放。李。渤。具。疏。極。論。之。渤。傳。德。宗。非。甚。暗。乃。縱。其。下。虐。民。至。此。蓋。由。於。天。資。好。利。而。喜。昵。小。人。其。流。毒。遂。至。於。此。也。

### 豪宴

大歷二年。郭子儀入朝。代宗詔賜軟脚局。宰臣元載。王縉。僕射裴冕。第五琦。黎幹等。各出錢三十萬。宴於子儀之第。時田神功亦朝覲在京。并請置宴。於是魚朝恩。及子儀。神功等。更迭治具。公卿大臣列於席者百人。一宴費至十萬貫。子儀傳。亦可見是時將相之侈也。

### 名父之子多敗德

房杜為唐一代名臣。而元齡子遺愛。如晦子荷。皆以謀反誅。上官儀贊高宗廢武后。事不成。被誅。而其孫女婉兒沒入宮。附武后為所寵。又助韋后為逆。狄仁傑子景暉。官魏州。以貪暴為民所惡。并毀仁傑生祠。宋璟直聲震天下。而其子渾等流蕩無行。為物議所薄。李泌為賢相。而其子繁。乃黨於裴延齡。陽城劾延齡。屬繁書疏稿。繁即默誣以告延齡。使得先奏。此皆名父之子。而敗德墜其家聲。不可解也。惟李義府附武后。而其子湛。乃與張柬之等誅張易之。

之兄弟。可謂能幹盡者。李世勣將死。謂其弟弼曰。我見房元齡杜如晦。高季輔。辛苦作得門戶。亦望垂裕後昆。竝遭癡兒破家蕩盡。我子如有操行不倫者。急即打殺。然後奏聞。其望子保家之心。可謂切矣。然世勣附武后。以固位。保門戶。而其子敬業起兵討武后。被族。雖不能保家。亦可謂能雪先人之恥者。

### 李勣子孫

李勣子孫。舊書本傳。謂勣子敬業起兵討武后。既敗死。坐夷族。而其子孫有逃入吐蕃者。貞元中有蕃將徐舍人。掠延州。謂僧延素曰。我本英公五代孫也。遭武后之變。吾祖舉義不成。子孫流落。如此三世矣。雖代居職任。而思本之心。未嘗忘。是世勣子孫。無復有在中國者。然衛次公傳。次公為兵部侍郎。故英公李勣大理卿。徐有功之孫。皆有累不得調。次公曰。子之祖。勣在王室。寧限常格乎。即優補之。是勣之後人。仍有仕於唐者。

### 安祿山執送京師之事

張九齡傳。范陽節度使張守珪。以裨將安祿山討奚契丹。敗。執送京師。請行朝典。九齡判云。稷直出軍。必誅莊賈。孫武教戰。亦斬宮嬪。守珪軍令若行。祿山不宜免死。上特捨之。九齡奏。祿山面有反相。請因罪誅之。上曰。卿勿以王夷甫知石勒故事。誤害忠良。遂放歸。是祿山以罪送京。實有其事。然考張守珪傳。竝無此事。新舊書。祿山傳。亦但云。祿山敗。當斬。祿山呼曰。公不欲滅兩蕃耶。奈何殺壯士。守珪遂宥之。後以其捉生多獲。拔為裨將。并養之為子。新舊書。亦。是。亦。無。執。送。京。師。之。事。也。是。時。大。將。生。殺。在。手。欲。殺。則。殺。既。不。殺。而。宥。之。何。又。送。京。請。行。朝。典。疑。此。乃。傳。聞。之。訛。非。實。事。也。然。祿。山。反。後。元。宗。在。蜀。思。九。齡。之。先。見。下。詔。褒。贈。詔。詞。



有云。先覺合于著策。即指此事也。又劉禹錫貶逐在外。以逐臣不得與善地之例。係九齡為相時所奏。故追怨之。謂曲江能識胡維有反相。足為名臣。然迄無後。豈非建言禁錮逐臣之報耶。是祿山送京。當斬被赦。又係當時共見共聞之實事矣。

### 睢陽殉節尚有姚闡

睢陽之難。張巡許遠固千古共知。其次則南霽雲雷萬春尚在人口。而不知殉難者尚有姚闡也。闡本姚崇之從孫。與巡遠同守。據舊書本紀云。尹子奇陷睢。害張巡。姚闡許遠。是闡尚敘在遠之上。新書本紀亦云。安慶緒陷睢陽。太守許遠。張巡。鄆州刺史姚闡。左金吾衛將軍南霽雲皆死之。是本紀皆有闡也。即新舊書巡傳內。亦稱與闡同被執。見殺。遠傳內。又稱與闡同守。經年。巡遠傳後。又皆有闡傳。未死之前。詔拜巡御史中丞。遠侍御史。闡吏部郎中。既死之後。詔贈巡揚州大都督。遠荊州大都督。闡潞州大都督。是三人者。同守城。同殉難。同加官。同贈卹。無一不同。而今但傳巡遠二人。闡則莫有舉其姓氏者。豈所謂幸不幸耶。案巡遠竝傳。本始于韓愈。而新書巡遠傳。未謂睢陽人至今祠享。號雙廟云。則稱巡遠為雙忠。而不及闡者。自唐已然。或守城之功稍遜。故耶。然既同死於守城。而身後名迥異。未免向隅。故特表而出之。案巡遣南雷二將。敗賊寧陵時。尚有別將二十五人。石承平。李辭。陸元鎮。朱珪。宋若虛。楊振威。耿慶。馬日升。張維清。廉坦。張重孫。景趨。趙連城。王森。喬紹俊。張恭默。祝忠。李嘉隱。翟良輔。孫廷皎。馮顏。見新書巡傳。餘四人失其名。後皆死巡之難。則巡死時同被戮之三十六人中。石承平等亦皆在內。今既尚有姓名在巡傳。則巡遠廟內。應增祀闡在正位。又增祀石承平等。在從祀班也。

### 唐初三禮漢書文選之學

六朝人最重三禮之學。唐初猶然。張士衡從劉軌思受毛詩周禮。又從熊安生劉焯受禮記。皆精究大義。當時受其業者。推賈公彥。士衡公彥撰周禮義疏五十卷。儀禮義疏四十卷。公彥子大隱亦傳其業。又有李元植從公彥授禮學。撰三禮音義行於世。公彥王恭精三禮。別為義證。甚精博。蓋文懿文達。皆當世大儒。每講必編舉先儒義。而暢恭所說。孔穎達傳。王元感嘗撰禮記繩愆。徐堅劉知幾等深嘆賞之。元感王方慶尤精三禮。學者有所咨質。必究其微。門人次為雜禮答問。方慶他如褚无量。韋道。高仲舒。唐休璟。蘇安恆。皆精三禮。見各本傳。今諸儒論著。見於新舊書者。如王方慶張齊賢論每月皆告朔之說。舊方慶傳。王元感三年之喪。以二十七月。張柬之以二十五日。一本鄭康成說。一本王肅說也。新齊賢傳。史元燦議禘祫三年五年之別。韋縉朱子奢議七廟九廟之制。子奢韋萬石。沈伯儀。元萬頃。范履冰等議郊丘明堂之配。沈伯儀傳。皆各有據。依不同勸說。其據以論列時政者。如人慮履冰元行沖論父在為母三年服之非。彭景直論陵廟日祭之非。康子元駁許敬宗先燔柴而後祭之非。黎幹駁歸崇敬請以景皇帝配天地之非。唐紹蔣欽緒。褚无量。駁祝欽明皇后助祭郊天之非。陳貞符論地隱章懷懿節愍四太子廟。四時祭享之非。皆見各本傳。李淳風辨太微之神。不可為天。見蕭德言傳。韋述議堂姨舅不宜服。見韋縉傳。無不援引該博。證辨確切。可為千百世之準。其後元行沖奉詔。用魏徵類禮列於經。與諸儒作疏。成五十篇。將立之學官。為張說所阻。行沖又著論辨之。大歷中。尚有仲子陵。袁彝。韋彤。韋蒞。以禮名家。學此可見唐人之究心三禮。考古義以斷時政。務為有用之學。而非徒以炫博也。次則漢書之學。亦唐初人所競尚。自隋時。蕭該精漢書。嘗撰漢書音義。為當時所貴。該傳。包愷亦精漢書。世之為漢書學者。以蕭



包二家為宗。禮傳。劉臻精於兩漢書。人稱為漢聖。臻傳。又有張沖撰漢書音義十二卷。于仲文撰漢書刊繁三十卷。是漢書之學。隋人已究心。及唐而益以考究為業。顏師古為太子承乾注漢書。解釋詳明。承乾表上之。太宗命編之祕閣。時人謂杜征南。顏祕書。為左邱明。班孟堅忠臣。其叔游秦先。撰漢書決疑。師古多取其義。此顏注漢書。至今奉為準的者也。師古房元齡以其文繁難省。又令敬播撮其要。成四十卷。當時漢書之學大行。又有劉伯莊撰漢書音義二十卷。秦景通與弟暉。皆精漢書。號大秦君。小秦君。當時治漢書者。非其指授。以為無法。又有劉納言。亦以漢書名家。敬播傳。姚思廉少受漢書學於其父察。思廉傳。思廉之孫班。以察所撰漢書訓纂。多為後之注漢書者。隱其姓氏。攘為己說。班乃撰漢書紹訓四十卷。以發明其家學。姚壽傳。又顧允撰漢書古今集二十卷。允傳。李善撰漢書辨惑三十卷。善傳。王方慶嘗就任希古受史記漢書。希古遷官。方慶仍隨之卒業。方慶傳。他如郝處俊好讀漢書。能暗誦。處俊傳。裴炎亦好左氏傳漢書。炎傳。此又唐人之究心漢書。各稟承舊說。不敢以意為穿鑿者也。至梁昭明太子文選之學。亦自蕭該撰音義始。入唐則曹憲撰文選音義。最為世所重。江淮間為選學者。悉本之。又有許淹。李善。公孫羅。相繼以文選教授。由其學大行。淹羅各撰文選音義。行世。善撰文選註解六十卷。表上之。賜絹一百二十四匹。至今言文選者。以善本為定。杜甫詩亦有熟精文選理之句。蓋此固詞學之祖也。

### 唐古文不始于韓柳

新書文苑傳序。唐興百餘年。諸儒爭自名家。大歷貞元間。美才輩出。搢紳道真。涵泳聖涯。於是韓愈倡之。柳宗元李翱皇甫湜等和之。唐之文。完然為一代法。此其極也。是宋景文謂唐之古文。由韓愈倡始。其實不然。案舊書韓愈傳。大歷貞元間。文字多尚古學。效楊雄董仲舒

之述作。獨孤及梁肅最稱淵奧。愈從其徒。游銳意鑽仰。欲自振於一代。舉進士。投文公卿間。故相鄭餘慶為之延譽。由是知名。是愈之先。早有以古文名家者。今獨孤及文集尚行於世。已變駢體為散文。其勝處有先秦西漢之遺風。但未自開生面耳。又如陸宣公奏議。雖亦不脫駢偶之習。而指切事情。纖微畢到。其氣又渾灑流轉。行乎其所以不得。不行。此豈可以駢偶少之。此皆在愈之前。固已有早開風氣者矣。

### 唐前後米價貴賤之數

貞觀時斗米三錢。魏徵傳。元宗東封泰山之歲。東郡米斗十錢。青齊米斗五錢。本紀。自安史之亂。兵役不息。田土荒蕪。兼有攤戶之弊。如李渤疏所言。渭南縣長源鄉。本有四百戶。今纔百戶。閩鄉縣本有三千戶。今纔千戶。由於均攤逃戶。十家之內。五家逃亡。即令未逃之五家。均攤其稅。如石投井。不到底不止。渤傳。是以逃亡愈多。耕種愈少。代宗永泰元年。京師斗米一千四百。本紀。畿甸按穗。以供宮廚。劉晏傳。至麥熟後。市有醉人。已詫為祥瑞。較貞觀開元時。幾至數十百倍。讀史者於此。可以觀世變也。至如攻戰之地。城圍糧絕。尤有不可以常理論者。魯吳守南陽。賊將武令珣田承嗣等攻之。累月米斗至四五十千。有價無米。一鼠值四百。吳傳。安慶緒被圍于相州。斗米錢七萬。慶緒傳。黃巢據長安。百姓遁入山岩。累年廢耕耘。賊坐守空城。穀價涌貴。斗米三十千。官軍皆執山岩民賣於賊為食。一人直數十萬。巢傳。楊行密圍揚州。城中草根木實。皮囊革帶俱盡。外軍掠人來賣。人五十千。張雄有軍糧。相約交市金一斤。通犀帶一條。得米五升。高駢傳。

### 長安地氣

唐古文不始于韓柳 唐前後米價貴賤之數 長安地氣



地氣之盛衰。久則必變。唐開元天寶間。地氣自西北轉東北之大變局也。秦中自古為帝王州。周秦西漢遞都之。符秦姚秦西魏後周。相間割據。隋文帝遷都於龍首山下。距故城僅二十餘里。仍秦地也。自是混一天下。成一大一統。唐因之。至開元天寶。而長安之盛極矣。盛極必衰。理固然也。是時地氣將自西趨東北。故突生安史。以兆其端。自後河朔三鎮。名雖屬唐。僅同化外羈縻。不復能管指相使。蓋東北之氣將興。西方之氣已不能包舉而收攝之也。東北之氣始興而未盛。故雖不為西所制。尚不能制西。西之氣漸衰而未竭。故雖不能制東北。尚不為東北所制。而無如氣已日薄。一日帝居遂不能安。於是元宗避祿山。有成都之行。代宗避吐蕃。有陝州之行。德宗避涇師。有奉天梁洋之行。地之輒輓不安。知氣之消耗漸散。迨僖宗走成都。走興元。走鳳翔。昭宗走莎城。走華州。又被劫於鳳翔。被遷於洛。而長安自此夷為郡縣矣。當長安夷為郡縣之時。契丹安巴堅已起于遼。此正地氣自西趨東北之真消息。特以氣雖東北趨。而尚未盡結。故僅有幽薊而不能統一中原。而氣之東北趨者。則有洛陽汴梁。為之迤邐潛引。如堪輿家所謂過峽者。至一二百年。而東北之氣積而益固。於是金源遂有天下之半。元明遂有天下之全。至我朝。不惟有天下之全。且又擴西北塞外數萬里。皆控制于東北。此王氣全結于東北之明證也。而抑知轉移關鍵。乃在開元天寶時哉。今就唐書所載。開寶以後。長安景象日漸衰耗之處。撮而敘之。可以驗地氣之變也。

唐人詩所咏長安都會之繁盛。宮闕之壯麗。以及韋曲鶯花。曲江亭館。廣運潭之奇瑋異。錦華清宮之香車寶馬。至天寶而極矣。安祿山兵陷長安。宮殿未損。收京時戰於香積寺。賊將張通儒守長安。聞敗即遁。未暇焚剽。惟太廟久為賊所焚。故肅宗入京。樂殿。都會之雄麗如故也。代宗時吐蕃所燔。惟衢衙廡舍。而宮殿仍舊。朱泚之亂。李晟收京時。諸將請先拔外城。然後北清宮闕。晟曰。若收坊市。地隘入囂。非計也。賊兵皆在苑中。自苑擊之。賊走不暇。則

宮闕保安。乃自光泰門入。泚果遁去。遠方居人。至有越宿始知者。則并坊市亦無恙矣。故晟表有云。鐘簾不驚。廟貌如故。蓋地運尚有百餘年。故不至一旦盡掃也。黃巢之亂。九衢三內。宮室尚宛然。自諸道勤王兵破賊後。入城爭貨相攻。縱火焚掠市肆。十去六七。大內惟含元殿獨存。此外惟西內南內。及光啓宮而已。僖宗在蜀。詔京兆尹王徽修復。徽稍稍完聚。及奉表請帝還。其表有云。初議修崇。未全壯麗。則非復舊時景象可知也。及昭宗時。因王重榮李克用沙苑之戰。田令孜劫帝出奔。焚坊市。并火宮城。僅存昭陽蓬萊二宮。還京後。坐席未暖。又因李茂貞之逼。奔華州。岐軍入京。宮室靡闕。鞠為灰燼。自中和以來。王徽葺構之功。至是又掃地而盡。於是長安王氣衰歇無餘矣。見李晟王徽田令孜及黃巢等傳。

### 黃巢李自成

流賊有適相肖者。黃巢初從王仙芝為盜。仙芝被戮。巢始為盜魁。李自成亦先從高迎祥為盜。迎祥被擒。自成始為盜魁。相似一也。巢以草賊起事。陷京師。據宮闕。僭號改元。自成亦以草賊起事。陷京師。據宮闕。僭號改元。相似二也。巢未入京以前。其鋒不可當。入京僭位後。逆運已滿。未幾一敗塗地。自成自襄陝向京。凶威亦無敵。入京僭位後。逆運亦滿。未幾亦一敗塗地。相似三也。巢因民謠有逢儒則肉師必覆之語。遂戒軍中不得害儒者。所俘民稱儒者輒捨之。至福州。殺人如麻。過校書郎董樸家。令曰。此儒者。乃滅火弗焚。自成所用牛金星。乃舉人不第者。每肆毒於進士官。而戒軍中勿害舉人。至河南。賊將誤殺一縣令。或告曰。此舉人也。羣駭而去。其相似四也。巢入長安。令唐官三品以上竝停。四品以下俱復舊任。自成入京。亦令三品以上竝停。四品以下仍舊。其相似五也。豈賊中有入知巢之故事而仿之耶。又巢敗奔狼虎谷。為林言所斬。事見唐書及通鑑。而小說家謂巢實未死。後為僧於嵩洛間。自



題其像。有鐵衣著。盡著僧衣之句。自成竄九宮山。為村民擊死。事見明史。而論者謂其部兵尚有數十萬。何至斃于村民之手。遂亦有傳其為僧於武當者。此二賊先後事迹。何適相肖也。

廿二史劄記卷二十終

廿二史劄記卷二十一

陽湖趙翼撰

薛居正五代史

宋太祖開寶六年四月。詔修梁唐晉漢周書。其曰五代史者。乃後人總括之名也。七年閏十月書成。凡一百五十卷。目錄二卷。監修者為司空同中書門下平章事薛居正。同修者為盧多遜。扈蒙。張澹。李昉。劉兼。李穆。李九齡。見宋史及晁公武讀書且皆本各朝實錄為稿本。此官修之史也。其後歐陽修私撰五代史記七十五卷。藏於家。修沒後。熙寧五年。詔求其書刊行。見宋史。於是薛歐二史。竝行於世。至金章宗泰和七年。詔止用歐史。於是薛史漸湮。惟前明永樂大典。多載其遺文。然已割裂淆亂。非薛史篇第之舊。恭逢我皇上開四庫館。命諸臣就永樂大典中。甄錄排纂其缺逸者。則採宋人書中之徵引薛史者。補之。於是薛史復為完書。仍得列於正史。遂成二十三史之數。今覆而案之。雖文筆迴不逮歐史。然事實較詳。蓋歐史專重書法。薛史專重敘事。本不可相無。以四五百年久晦之書。一旦復出。俾考古者得參互核訂。所以嘉惠後學。誠非淺鮮也。

薛史全採各朝實錄

五代雖亂離。而各朝俱有實錄。梁貞明中。詔李琪。張袞。郤殷象。馮錫嘉。修太祖實錄。共成三十卷。尋以事多漏略。又詔敬翔補緝。翔乃別成三十卷。名曰大梁篇遺錄。與實錄竝行。見薛李



瑛及敬此梁祖實錄。貞明中所成也。其庶人友珪及末帝實錄。則周時補修。說見後。後唐明宗天成四年。詔盧質何  
 瓚韓彥暉纂修武皇以上。及莊宗實錄。瓚奏張昭名昭。宋史有傳。有史才。嘗私撰同光實錄。  
 又欲撰三祖志。并藏唐昭宗賜武皇制詔九十餘。請以昭為修撰。并其所撰送史館。從之。昭  
 以懿獻及武皇不踐帝位。乃為紀年錄二十卷。莊宗實錄三十卷。上之。見薛史唐紀。及五代此  
 唐武皇以上。載紀及莊宗實錄。乃天成中所成也。薛史李愚傳。明宗時。愚監修國史。與諸儒修  
 莊宗實錄。不載何挺劉昫疏。昫德之。是清泰二年。命史官修明宗實錄。次年監修國史。姚顛  
 實錄。并有諸臣列傳。不特朝廷政事也。史官張昭。李祥。吳承範等。修成三十卷。上之。見薛史唐紀。及吳承  
 史官張昭。李祥。吳承範等。修成三十卷。上之。見薛史唐紀。及吳承此明宗實錄。清泰中所成也。  
 其因帝廢帝實錄。則周晉在漢前。而晉祖實錄。反成在後。後周廣順元年七月。史官賈緯等  
 以所撰晉高祖實錄三十卷。少帝實錄二十卷。上之。此晉二帝實錄。皆周廣順中所成也。漢  
 乾祐二年二月。詔左諫議大夫賈緯等。修高祖實錄。是年十月。監修國史蘇逢吉。史官賈緯  
 等。修成二十卷。上之。見漢紀。此漢祖實錄。乾祐中所成也。其隱帝實錄。亦周顯周顯德三年。詔兵  
 部尚書張昭纂修太祖實錄。五年。昭等修成二十卷。上之。六年。世宗崩。王溥請修世宗實錄。  
 以扈蒙。張澹。王格。董淳為纂修官。見周紀及宋史王溥傳。此周太祖實錄。皆顯德中所成。而世宗實錄。  
 亦是時所修也。其梁庶人友珪及末帝等實錄。亦皆周代所修。顯德三年。詔張昭補修梁末  
 帝及唐清泰帝兩朝實錄。昭奏本朝太祖歷試之事。在漢隱帝時。請先修隱帝實錄。以全太  
 祖之事。又梁末帝之上。有郢王友珪弒逆數月。未有紀錄。請仿宋書元凶劭之例。書為元凶  
 友珪。唐清泰帝前。尚有閔帝。在位四月。亦未有編紀。并請修閔帝實錄。其清泰帝請書為廢  
 帝。從之。見周紀及五代會要。宋史張昭傳。此梁庶人友珪及末帝唐閔帝漢隱帝實錄。皆周顯德中所  
 補修也。可見五代諸帝。本各有實錄。薛居正即本之以成書。故一年之內。即能告成。今案其  
 紀載。不惟可見其採取實錄之跡。而各朝實錄之書法。亦并可概見焉。

薛史書法迴護處

梁太祖紀。朱瑄朱瑾救汴。後帝即朱溫以其有力於己。厚禮而歸之。瑄瑾以帝軍士勇悍。懸金  
 帛誘之。軍士利其賞。赴之者衆。帝乃移檄讓之。瑾等來使不遜。乃命朱珍侵曹伐濮。案通  
 鑑考異及五代史補。朱溫常患兵力不足。敬翔說令麾下詐為叛逃。即奏於唐帝。并告四  
 鄰。以追叛為名。可以拓地廣衆。溫大喜從之。是兗郟本無誘兵之事。特溫託詞以為兵端也。  
 而薛史云。是真謂瑄瑾以誘兵啓釁矣。歐史則直書宣歐史瑄瑾助汴。已破秦宗權。東歸  
 王。朱溫時已封王。移檄兗郟。誣其誘汴亡卒。乃發兵攻之。  
 天祐元年七月。帝發東都至河中。八月壬寅。昭宗遇弒於大內。遺制以輝王柷為嗣。十月帝  
 至洛陽。臨於梓宮。祇見於嗣君。案李彥威即朱友恭氏叔琮等傳。溫既遷唐昭宗於洛陰。遣敬  
 翔至洛。今彥威叔琮行弒。以龍武兵夜入叩宮。奏事。夫人裴正一開門。問奏事何得。以兵入。  
 牙官史太殺之。直趨椒蘭殿。昭宗方醉起走。太持劍逐而弒之。是昭宗之被弒。實溫使彥威  
 等行事也。而薛史云。溫在河中。昭宗遇弒於大內。一若昭宗之弒。無與於溫者。下又云。溫至  
 洛。臨於梓宮。祇見於嗣君。一似能曲盡臣節者。歐史則直書溫遣朱友恭。氏叔琮。蔣元暉等  
 行弒。昭宗崩。  
 二年十一月。天子唐昭宗命帝即朱溫為相國。總百揆。以宣武等二十一道為魏國。進封帝為魏  
 王。兼備九錫之命。帝讓相國魏王九錫。案孔循傳。唐哀帝即昭宗封溫魏王。備九錫。拒不受。  
 蔣元暉柳燦馳謂溫曰。自古革易之際。必先建國。備九錫。然後禪位。溫曰。我不由九錫。作天  
 子可乎。是溫急於篡國。非讓殊禮也。而薛史云。則似溫真能辭讓矣。歐史則云。溫怒不受。  
 是歲唐昭宣帝卜祀天於南郊。溫怒。以為蔣元暉等欲延唐祚。昭宣帝懼。遂改卜郊。薛史不



書。又是歲溫遣人告蔣元暉私侍何太后遂殺元暉。弑太后薛史亦不書。昭宣帝禪位後。梁封爲濟陰王。開平二年正月弑之。薛吏亦不書。乾化二年。溫爲其子友珪所弑。薛史亦不書。但書友珪葬太祖於伊闕。號宣陵。

唐明宗紀。帝奉莊宗命討趙在禮。至鄴城。夜有軍士張破敗等。鼓噪逼營。曰。城中兵何罪。直畏死耳。今已與城中約。欲主上帝河南。令公帝河北。帝力拒之。亂兵益擐甲露刃。環帝左右。安重誨霍彥威躡帝足。請詭許之。因爲亂兵擁入城。夕乃得出。帝欲歸藩。上章圖再舉。重誨等謂元行欽已棄甲而去。行欽亦以兵攻鄴。開兵變。別拔營去。不知其所奏如何。正當赴闕自陳。以杜讒口。帝從之。至相州。獲官馬二千匹。元行欽已以蜚語入奏。及至汴。有姚彥溫來投。謂主上已惑行欽之言。事勢已離。不可再合。帝曰。卿自不忠。言何悖也。莊宗尋爲郭從謙所弑。帝急入洛。時魏王繼岌征蜀未還。帝謂朱守殷曰。公善巡撫。以待魏王。吾奉大行梓宮。禮畢即歸藩矣。而羣臣上箋勸進。至再三請監國。帝始從之。據此則明宗遇軍變。後率兵向京師。竝無反心。祇欲自訴。迨莊宗被弑。猶欲俟其子繼岌至而奉之。可謂純臣矣。然考當日情事。有不盡然者。明宗性本淳實。兵變之初。固不肯因爲利。即兵變後。欲歸藩待罪。欲上章申理。亦屬實情。於是時惟有隻身歸朝。庶明心跡。而明宗武夫。豈能知此。方外忱於元行欽之奏。其反內惑於石敬瑭安重誨等之勸。其反勢當騎虎難下之時。不得不爲挺鹿走險之計。則當其率兵而南。固已變計決反。非真欲面訴於莊宗之前也。天下豈有欲自訴不反。而轉舉兵向闕者。本紀所云赴闕自陳。可不辨而知其飾說也。且是時甫一舉足。反形已露。康義誠曰。今從衆則有歸。守節則將死。明宗納其言。義誠傳。非決計反。則何以納其言也。鄒琮在營中。安重誨欲徵四方兵。琮歷數諸道屯兵之數。附口傳檄。相次而至。琮傳。王晏球率兵戍瓦橋關。明宗招之。即以兵來會。晏球傳。非決計反。則何以徵諸道兵也。至相州。即掠官馬以益軍矣。至河上。則

劫上供船絹帛以犒軍矣。既先以三百騎付敬瑭。使速入汴。石晉傳。又養子從珂。自橫水率兵。與王建立。倍道馳至。由是軍聲大振。帝其抗逆之跡。已不待言。而本紀猶謂其入汴入洛。猶懷退讓。蓋當時實錄。例有隱諱。修史者但照本抄錄。不復改訂耳。歐史則書軍變後。嗣源入於魏。與在禮合。以其兵南。遣石敬瑭將三百騎爲先鋒。嗣源至鉅鹿。掠馬三千以益軍。是明著其反逆之跡。可謂直筆。而其先本無欲反之意。則於石晉紀及霍彥威傳內見之。是又不沒其初念。以見其倉卒被逼。不同於郭威之自澶州入也。

漢隱帝紀。帝密詔李洪義誅王殷。又詔郭崇誅郭威。王峻。而洪義不敢發。反以詔示威。威即召王峻。郭崇及諸將校。至曰。君等當奉行詔書。斷予首以報天子。崇等曰。此必李業等所誣。構事可陳論。何須自棄。於是爭勸威入朝。乃率衆南行。周太祖紀亦云。帝郭威。途次又謂將校曰。吾此來萬不得已。然以臣拒君。寧論曲直。汝等不如奉行前詔。我以一死謝天子。實無所恨。是郭威本志。似尙能守臣節者。案魏仁浦傳。郭威得洪義所示密詔。即召仁浦於臥內。仁浦教威倒用留守印。更爲詔書。令威誅諸將校。以激怒之。將校皆憤然效。用遂舉兵渡河。是威方更詔書以欺衆。詎肯以天子誅己之詔。出示諸將。使奉詔殺己乎。本紀所云。誣飾顯然。歐史帝紀。則直書郭威反。

周太祖紀。漢隱帝遣慕容彥超。拒郭威於劉子坡。王師敗。威謂宋延渥曰。爾國親。可速往衛主上。明日望見帝旗在高坡之上。謂隱帝在其下。即免胄而前。左右勸止之。威曰。吾君在此。又何憂焉。及至。則隱帝已去矣。案劉子坡之戰。隱帝親在陣中。威果欲自訴。何不於是時釋甲趨謁。乃方遣何福進。王彥超。李筠等。大合騎以乘之。既敗。王師豈有明日又欲束身見主之理。且明日清晨。隱帝已爲郭允明所弑。又安得有旌旗在高坡之上。其爲飾說。亦不待辨也。



隱帝既崩。郭威遣人迎湘陰公贊來即位。已而威至澶州。兵變入京。王峻聞贊已至宋州。慮左右變生。遣郭崇以七百騎往衛之。按十國春秋。崇至宋州。贊召見於樓上。判官董裔說贊曰。崇瞻視舉措。必有異謀。不如殺之。贊猶豫不決。崇遂幽贊於外館。是峻之遣崇。本欲害贊於途也。而本紀反云衛之。尤屬矛盾。歐史則直書王峻遣郭崇以七百騎逆贊於宋州。殺之。

### 薛史失檢處

唐莊宗之被弑也。弟存霸自河中奔太原。存渥亦自洛與劉后奔太原。薛史符彥超傳。謂存霸至太原。與呂鄭二內官謀殺留守張憲。及其部將符彥超。彥超覺之。部下大噪。憲出奔。軍士殺存霸及呂鄭。而張憲傳。則謂存渥奔太原。左右見其馬已斷飾。必戰敗而逃者。因欲殺呂鄭。繫存渥以觀變。憲不可。而彥超已誅呂鄭。軍士大亂。是一事也。彥超傳則以為存霸。憲傳則以為存渥。殊屬兩歧。案存渥出奔。行至風谷。為部下所殺。惟存霸。髮為僧。求彥超庇護。而軍士殺之。是與呂鄭同被殺者。乃存霸。非存渥也。歐史則憲彥超二傳。皆書存霸。又南唐劉仁贍死守壽州。薛史則列在周書。蓋以其有降表至周。世宗加以官秩。既沒。又贈卹極隆。故列之於周臣也。然仁贍固守無二志。其子崇諫勸之降。即斬以徇。及病甚。不知人事。副使孫羽詐為仁贍書以降。且昇至周營。世宗嘉其忠於所事。加爵進官。詔出而仁贍已卒。是仁贍實未嘗降也。薛史周紀。既書劉仁贍上表乞降。令其子崇讓請罪。仁贍傳亦云。仁贍病急。翻然納款。末又云。先斬其子崇諫。其後出降。乃欲保其後嗣。抑有由焉。是真謂仁贍之初抗節。而終改節矣。若非歐史辨明。豈不受誣千載邪。符彥饒斬白奉進之兵。奉進來責彥饒。麾下兵噪而殺奉進。已而軍將馬萬等作亂。縛彥饒送京。誣其通范延光謀反。晉祖遂使人

殺之於途。薛史竟稱彥饒通延光反。伏誅。歐史則直書其事。謂以反誅非其罪也。可見薛史全據各朝實錄。而不復參考事之真偽。此歐史之所以作也。

### 薛史亦有直筆

薛史雖多迴護處。然非亦有不廢公道者。列傳諸臣。多與居正同仕前朝。否則其子孫亦有與居正同官於宋者。趙延壽子廷贊。仕宋為廬延等州節度使。而延壽傳不諱其背晉附遼。求為遼太子之事。崔協子頌。仕宋為諫議大夫。而協傳直書任圖譏其沒字碑。符存審子彥卿。仕宋封魏王。而存審傳不諱其少時犯罪將就戮。以善歌得妓者。救免之事。王繼宏子永昌。仕宋為內諸司使。而繼宏傳載其曾為高唐英將。唐英待之甚厚。後竟殺唐英。自為留後。曰吾儕小人。若不因利乘便。何以得志。尹暉子勳。仕宋為防禦使。而暉傳不諱其反戈推戴唐廢帝之事。傳贊并謂因倒戈而杖鉞。豈義士之所為。趙在禮孫廷勳。仕宋歷岳蜀二州刺史。而在禮傳載其在宋州貪暴。及移鎮。民相賀曰。拔去眼中釘矣。在禮聞之怒。又乞留宋一年。每戶徵錢一千。號拔釘錢。後契丹入汴。索在禮貨財。在禮不勝憤。以衣帶就馬。懸自縊死。安審琦三子。皆仕宋為顯官。而審琦妾通於隸人。遂與之通謀。殺死審琦之事。傳中亦不諱。此足見其直筆。不以同官而稍有瞻徇也。他如高漢筠子貞文。仕宋為開封尹。而漢筠傳歷敘其潔己愛民。則以漢筠本良二千石也。高行周子懷德。仕宋為駙馬都尉。而行周傳敘其歷官政績。則以行周本能以慎重自處者也。此薛史之終不可沒也。

### 薛歐二史體例不同

薛史梁祖紀。開首即以帝稱之。歐史則先稱朱溫。賜名後稱全忠。封王後稱王。僭位後始稱



帝蓋薛則仿宋齊梁陳書之例。歐則仿史記之例也。薛史於各國僭大號者立僭偽傳。其不僭號而自傳子孫者立世襲傳。歐則概列為世家。亦仿史記也。薛史凡除官自宰相至於刺史皆書於本紀。幾同腐爛朝報。歐史則但書除拜宰相及樞密使。其餘不書。以省繁冗也。五代革易頻仍。惟梁唐創業各三十餘年。故其臣有始終在一朝者。其他未有不歷仕數朝。薛史則以死於某朝者。即入於某朝傳內。如張全義朱友謙袁象先等。事蹟多在梁朝。而編入唐書。楊思權佐唐廢帝篡位。而編入晉書。馮道歷唐晉漢周皆為相。而編入周書。歐史則以專仕一朝者。係於某朝。其歷仕數朝者。則另為雜傳。以敘其歷宦之蹟。此又創例之最得者。

歐史不專據薛史舊本

歐史雖多據薛史舊本。然采證極博。不專恃薛本也。宋初薛史雖成。而各朝實錄具在。觀通鑑考異。尚引梁太祖梁莊宗實錄。則歐公時尚在可知也。歐史郭崇韜傳贊云。余讀梁宣底。則實錄之外。又有宣底等故籍。皆不遺也。劉昫之舊唐書。修成亦未久。其所援據底本。方藉以修新唐書。凡唐未交涉五代之事。又足資考訂。至宋初諸臣。記五代事者尤多。案宋史。范質嘗述朱梁至周。為通鑑六十五卷。質傳。王溥亦采朱梁至周。為五代會要共三十卷。溥傳。王子融集五代事。為唐餘錄六十卷。子融路振探五代九國君臣事跡。作世家列傳。振傳。鄭向以五代亂亡。史多缺漏。著開皇紀三十卷。向傳。此外又有孫光憲北夢瑣言。陶岳五代史補。王禹偁五代史闕文。劉恕十國春秋。龔穎運歷圖。見於宋藝文志。及晁公武讀書志者。皆在歐公之前。足資考訂。其出自各國之書。如錢儼之吳越備史。備史遺事。湯悅之江南錄。徐鉉之吳錄。王保衡之晉陽見聞要錄。又皆流布。而徐無黨注中所引證之唐撫言。唐新纂。九國志。五代春秋。鑑戒錄。紀年錄。三楚新編。紀年通譜。閩中實錄等書。又皆歐所參用者。蓋薛

史第據各朝實錄。故成之易。而記載或有沿襲失實之處。歐史博採羣言。旁參互證。則真偽見。而是非得。其真。故所書事實。所紀月日。多有與舊史不合者。卷帙雖不及薛史之半。而訂正之功倍之。文直事核。所以稱良史也。

歐史書法謹嚴

不閱舊唐書。不知新唐書之綜核也。不閱薛史。不知歐史之簡嚴也。歐史不惟文筆潔淨。直追史記。而以春秋書法。寓褒貶於紀傳之中。則雖史記亦不及也。其用兵之名有四。兩相攻曰攻。如梁紀孫儒攻楊行密於揚州是也。以大加小曰伐。如梁紀遣劉知俊伐岐是也。有罪曰討。如唐紀命李嗣源討趙在禮是也。天子自往曰征。如周紀東征慕容彥超是也。攻戰得地之名有二。易得曰取。如張全義取河陽是也。難得曰克。如龐師古克徐州是也。以身歸曰降。如馮霸殺潞將李克恭來降是也。以地歸曰附。如劉知俊叛附於岐是也。立后得其正者。曰以某妃某夫人為皇后。如唐明宗紀。立淑妃曹氏為皇后是也。立不以正者。曰以某氏為皇后。如唐莊宗紀。立劉氏為皇后是也。凡此皆先立一例。而各以事從之。褒貶自見。其他書法。亦各有用意之處。如梁紀書弒濟陰王。王即唐昭宣帝也。不曰昭宣帝。而曰濟陰王。遜位後梁所封之王。書之以著其實。又書弒以著梁罪也。襄州軍亂。殺其刺史王班。不書王班死之。而以被殺為文者。智不足以衛身而被殺。不可以死節予之也。殺王師範。不曰伏誅。而曰殺者。有罪當殺。曰伏誅。不當殺。則以兩相殺為文也。郢王友珪反。反與叛不同。叛者背此附彼。反則自下謀上。惡逆更大也。反不書日者。反非一朝一夕。難得其日也。梁太祖唐莊宗皆被弒。故不書葬。唐明宗考終。宜書葬矣。以賊子從珂所葬。故亦不書也。梁紀天雄軍亂。節度使賀德倫叛附於晉。亂首係張彥。而書德倫者。責在貴者也。而德倫究不可加以首惡。而



可責以不死。故書叛附於晉也。唐滅梁。敬翔自殺。翔因梁亡而自殺。可謂忠矣。不書死之。而但書自殺。以梁祖之惡。皆翔所爲。故不以死節予之也。除官非宰相樞密使。不書。說見前。而唐紀書教坊使陳俊爲景州刺史。內園栽接使儲德源爲憲州刺史者。著其授官之太濫也。明宗紀先書皇帝即位於柩前。繼書魏王繼岌薨。見其即位時。君之子尚在。則其反不待辨而自明也。又書郭從謙爲景州刺史。既而殺之。從謙弒莊宗。乃不討而反官之。見明宗之無君也。其罪本宜誅。乃不書伏誅而書殺者。明宗亦同罪。不得行誅。故以兩相殺爲文也。秦王從榮以兵入宮。其罪當誅。故其死書伏誅也。漢紀隱帝崩。即書漢亡。隱帝被殺後。尚有李太后臨朝。及迎湘陰公贇嗣位之事。漢猶未亡也。而即書漢亡。見太后臨朝等事。皆周所假託。非漢尙有統也。周太祖紀。書漢人來討。周祖篡漢得位。崇之於周。義所當討。故書討也。世宗紀。書帝如潞川。攻漢。不曰伐而曰攻者。曲在周也。此可見歐史本紀書法。一字不苟也。其列傳亦有折衷至當者。死節分明。如王彥章。裴約。劉仁贍。既列之死節傳矣。尙有宋令詢。李遐。張彥卿。鄭昭業等。皆一意矢節。以死殉國。而傳無之。則以其事迹不完。不能立傳故也。然於本紀。特書死之。以表其忠。固不在傳之有無矣。張憲留守太原。莊宗被弒。後皇弟存霸來奔。或勸憲拘存霸。以俟朝命。張昭又勸其奉表。明宗憲皆涕泣拒之。已而存霸爲符彥超軍士所殺。憲出奔沂州。薛史書憲坐棄城賜死。歐獨明其不然。然以其不死於太原。故亦不入於死事傳。但書憲出奔沂州。見殺而已。藥彥稠。王思同。皆以兵討潞王從珂。爲從珂所執而死。乃思同入死事傳。而彥稠不入。則以思同詞義不屈。係甘心殉國者。彥稠第被執見殺。不可竟以死節予之也。於此可見歐史之斟酌至當矣。

### 歐史傳贊不苟作

歐史紀傳各贊。皆有深意。於張承業傳。則極論宦官之禍。而推明郭崇韜之死。由於宦官之譖。使崇韜不死。其所將征蜀之兵。皆在麾下。明宗能取莊宗之天下。而代之哉。追原禍本。歸獄貂璫。可謂深切著明矣。唐六臣。張文蔚等。押傳國寶。遜位於梁。此事與朋黨何涉。而傳贊忽謂此時君子盡去。小人滿朝。故其視亡國易朝。恬不知怪。而所以使君子盡去者。皆朋黨之說中之也。蓋宋仁宗時。朝右黨論大興。正人皆不安其位。故借以發端。警切時事。不覺其大聲疾呼也。至晉出帝紀贊。深明以姪爲子。而沒其本生父爲非。謂出帝本高祖兄敬儒之子。當時以爲爲高祖子。則得立。爲敬儒子。則不得立。於是深諱其所生而絕之。以欺天下。以爲真高祖子也。禮曰。爲人後者。爲其父母服。自古雖出繼爲人後。未有絕其本生而不稱父母者。余書曰。追封皇伯敬儒爲宋王者。以見其絕天性。臣其父而爵之也。於晉家人傳贊。又反復申明之。則以當時濮議紛呶。朝臣皆以英宗當考仁宗。而以本生濮王爲伯。歐公與韓琦等獨非之。故因是以深斥其非禮也。可見歐史無一字苟作。

### 歐史失檢處

歐史亦有失檢處。唐昭宗之被弒也。李彥威傳。則云梁祖遣敬翔至洛。與彥威等謀弒之。李振傳。又云梁祖遣振至洛。與彥威等謀弒之。此必有一誤。梁本紀書朱友謙叛。殺同州節度使程全暉。而全暉傳則云全暉奔京師。是紀傳兩不符合。薛史則紀傳皆稱奔京師。當不誤也。羅紹威傳。魏博自田承嗣始有牙軍。歲久益驕。至紹威時。已二百年。案承嗣至紹威。實止百五十年。歐史所云。亦行文之誤。鄭遨傳。遨與李振善。方振貴。顯遨不一顧。振得罪南竄。遨







之物乃止。光遠傳。符彥饒率兵戍瓦橋關。裨將張諫等迎彥饒為帥。彥饒僞許之。約明日以軍禮見於南衙。遂伏甲盡殺亂者。彥饒傳。郭威自澶州入京。有步軍校因醉揚言。昨澶州馬軍扶策。今我步軍亦欲扶策。威聞急擒其人斬之。令步軍皆納甲仗。始不為亂。周本紀。此皆擁立未成。故其事未甚著。然亦可見是時軍士策立天子。竟習以為常。推原其始。蓋由唐中葉以後。河朔諸鎮。各自分據。每一節度使卒。朝廷必遣中使往察軍情。所欲立者。即授以旄節。見唐書藩鎮傳。至五代。其風益甚。由是軍士擅廢立之權。往往害一帥。立一帥。有同兒戲。今就唐末及五代計之。黃巢之亂。武寧節度使支詳遣時溥率兵赴難。兵大呼反。逐支詳。推溥為留後。溥傳。青州王敬武卒。三軍推其子師範為留後。師範傳。義武王處存卒。軍中推其子郃為留後。李克用之起也。康君立等推為大同軍防禦使。朱瑄本鄆州指揮使。軍中推為本州留後。天雄軍亂。囚其節度使樂彥貞。并殺其子從訓。聚而呼曰。孰願為節度使者。羅宏信出應之。牙軍遂推為留後。宏信傳。夏州李思諫卒。軍中立其子彝昌為留後。趙在禮之被逼而反也。軍士皇甫暉因戍兵思歸。劫軍將楊仁晟為帥。仁晟不從。暉殺之。又推一小校。小校不從。亦殺之。乃攜二首詣在禮曰。不從者視此。在禮不得已從之。遂為其帥。如此類者。不一而足。計諸鎮由朝命除拜者。十之五六。由軍中推戴者。十之三四。藩鎮既由兵士擁立。其勢遂及於帝王。亦風會所必至也。乃其所以好為擁立者。亦自有故。擁立藩鎮。則主帥德之畏之。旬犒月宴。若奉驕子。雖有犯法。亦不敢問。如魏博牙兵是也。說見後。擁立天子。則將校皆得超遷。軍士又得賞賜。剽掠如明宗之立。趙在禮即授滄州節度使。皇甫暉亦擢陳州刺史。楊思權叛。降廢帝。於鳳翔時。先謂廢帝曰。望殿下定京師後。與臣一鎮。勿置在防禦團練之列。乃懷中出一紙。廢帝即書可。邠寧節度使。後果與尹暉皆授節鎮。同時立功之相里金王建立。亦擢節度使。周祖即位。亦以佐命之王峻為樞密使。郭崇為節度使。此將校之所以利於擁立也。至軍士

之得重賞。恣劫奪。更無紀極。明宗之入洛也。京師大亂。焚剽不息。明宗亟命止焚掠。百官皆敝衣來見。本紀。廢帝之反。惑帝遣兵討之。幸左藏庫賞軍。人各絹二十匹。錢五千。軍士負物揚言於路曰。到鳳翔更請一分。唐書誠傳。王師既降。廢帝許以事成重賞。軍士皆過望。及入立。有司獻庫籍甚少。廢帝大怒。自諸鎮至刺史。皆進錢帛助賞。猶不足。乃率民財佐用。囚繫滿獄。又借民屋課五月。虛實李專美等傳。諸軍猶不滿欲。相與謠曰。去卻生菩薩。扶起一條鐵。本紀。先是帝在鳳翔。許入洛後。人各賞百緡。至是以禁軍在鳳翔降者。楊思權等。各賞馬二駝。一錢。七十緡。軍士二十緡。在京者十緡。通鑑。周太祖初至滑州時。王峻諭軍士曰。我得公處分。俟入京。許爾等旬日剽掠。眾皆踴躍。本紀。及至汴。自迎春門入。諸軍大掠。烟火四發。明日王峻郭崇曰。若不禁止。比夜化為空城矣。由是命諸將斬其尤甚者。晡時乃定。本紀。而前滑州節度使白再榮。已為亂軍所害。侍郎張允墜屋死。隱帝紀。安叔千家賞已掠盡。軍士猶意其有所藏。箠掠不已。傷重歸於洛陽。叔千傳。時有趙童子者。善射。憤軍士剽掠。乃大呼曰。太尉志除君側之惡。鼠輩敢爾。乃賊也。持弓矢。據巷口。來犯者輒殺。由是保全者數十家。後周祖聞民間有趙氏。當有天下之謠。疑此童子。遂使人誣告殺之。五代史補。又趙鳳見居民無不剽之室。亦獨守里門。軍不敢犯。鳳傳。是周祖犯闕時。居民得免劫奪者。惟此二趙之里。其他自公卿以下。無不被害也。此軍士之利於擁立也。王政不綱。權反在下。下凌上替。禍亂相尋。藩鎮既蔑視朝廷。軍士亦脅制主帥。古來僭亂之極。未有如五代者。開闢以來。一大劫運也。

廿二史劄記卷二十一終



# 廿二史劄記卷二十一

陽湖趙翼撰

## 五代樞密使之權最重

唐中葉以後始有樞密院。乃宦官在內廷出納詔旨之地。昭宗末年朱溫大誅唐宦官。始以心腹蔣元暉為唐樞密使。此樞密移於朝士之始。溫篡位。改為崇政院。敬翔李振為使。凡承上之旨。皆宣之宰相。宰相有非見時。而事當上決者。則因崇政使以聞。得旨則復宣而出之。然是時止參謀議於中。尙未專行。事於外。至後唐復樞密使之名。郭崇韜安重誨等為使。樞密之任。重於宰相。宰相自此失職。見歐史郭崇韜傳贊今案唐莊宗時崇韜為使。明宗時安重誨為使。晉高祖時桑維翰為使。漢隱帝時郭威為使。當崇韜為使時。宰相豆盧革以下皆傾附之。以崇韜父諱宏。遂奏改宏文館為崇文館。重誨為使時。過御史臺門殿直馬延悞衝其前導。重誨即臺門斬延。而後奏。是時四方奏事。皆先白重誨。然後聞。重誨與任圜不協。則因朱守殷反。即誣圜通謀。而先殺之。忌潞王從珂。則嗾其部將楊彥溫逐出之。明宗遣藥彥儔致討。命生致彥溫。欲親訊其由。而彥稠希重誨旨。即殺彥溫以滅口。宰相馮道等亦希重誨意。數言從珂失守。宜坐罪。明宗不聽而止。郭威為使時。率兵平三叛。歸西京。留守同中書門下平章事王守恩。官已使相。肩輿出迎。威怒之。即以頭子命白文珂代之。守恩方在客次待見。而吏已馳報。新留守視事於府矣。守恩遂罷。可見當時樞密之權。等於人主。不待詔敕。而可以易置大臣。其後出鎮魏州。史宏肇又令帶樞密使。以往蘇逢吉力爭之不得。於是權勢益重。遂至稱兵犯關。莫不響應也。

## 五代姑息藩鎮

唐自失河北後。河朔三鎮。朝命不行。已同化外。羈縻。至末季。天子益弱。諸侯益強。朝廷尤以姑息為事。卒至尾大不掉。區宇分裂。鼎祚遽移。梁祖以梟桀之資。驅策羣下。動以誅戮從事。如氏叔琮。朱友恭。王重師。朱珍。鄧季筠。胡規。黃文靜。李讜。李重允。范居實等。皆披堅執銳。為開國功臣。一有疑忌。輒斬艾隨之。固未嘗稍事含忍也。及末帝即位。漸不能制其下。楊師厚在魏博。朝廷常有隱憂。而不敢過問。師厚死。乃私賀於宮中。華溫琪為定昌節度使。奪人妻。為其夫所告。帝下詔曰。若便行峻典。謂予不念功勳。若全廢舊章。謂予不念黎庶。為人君者。不亦難乎。乃召溫琪。入為金吾大將軍。此可以見其曲事調停。略無威斷矣。莊宗登極。歷年未久。明宗嘗因諸侯邸吏驕恣。杖遣示懲。可謂能整飭紀綱者。自唐末諸藩之邸吏在京者。每茶酒而不相見。至是虛文紀為中丞。邸吏入見。文紀據牀端。笏臺。臺吏通名贊拜。而出。皆愧怒。明宗聞之。問趙鳳。邸吏何官。曰。知縣發遞。知後之流也。明宗曰。然則吏卒耳。安得慢吾法。官皆杖而遣之。見文紀傳。然姑息之弊。實起於是時。高季興擅竊夔州。帝遣西方鄴討之。以霖潦班師。李彝超據夏州。不受代。帝遣安從進討之。以芻糧不繼。班師。安重誨慮孟知祥據蜀。遣李嚴往監軍。知祥即斬嚴以叛。嚴傳董璋與知祥分據兩川。攻陷遂閬二州。帝遣石敬瑭討之。又以饋餉不給。引還。帝遣人往諭。璋改過。璋不聽。璋傳。知祥抗命既久。范延光奏曰。陛下若不屈意招撫。彼亦無由自新。帝曰。知祥吾故人也。撫之何屈意之有。乃以詔賜知祥。知祥始上表謝。明宗紀及知祥傳。是明宗之於強藩。已多所包容。不能制馭矣。至石晉尤甚。幾有冠履倒置之勢。楊光遠奉命討范延光。兵柄在手。以為晉祖畏己。輒干預朝政。或抗有所奏。晉祖亦曲意從之。光遠傳。張彥澤為節度使。所為不法。從事張式諫。不聽。出奔。彥澤使人面奏。謂彥澤不得張式。恐致不



測晉祖亦不得已與之。傳朝廷之尊反為臣下所脅制。然此猶事之小者也。安重榮在鎮州。以晉祖厚事契丹。數加非笑。謂謂中國以事外蕃。上表欲與兵攻契丹。并執契丹使者。馳書各鎮。謂契丹貪傲無饜。將與之決戰。帝諭止之不從。重榮謂帝無如之何。遂與襄州安從進謀反。傳從進在襄州。南方貢輸道襄者。輒留之。帝欲徙之青州。使人告以虛。青州以待從進。曰。移青州在漢江南。即赴任。帝亦優容之。傳威令不行。武夫悍將。桀傲至此。固由於兵力不足。以相制。然周世宗登極後。諸鎮咸惕息。受驅策。則又不繫乎兵力之強弱。而制馭天下。自有道矣。

五代藩郡皆用武人

五代諸鎮節度使。未有用勳臣武將者。遍檢薛歐二史。文臣為節度使者。惟馮道暫鎮同州。桑維翰暫鎮相州。及泰寧而已。兜鑿積功恃勳。酷刑暴斂。荼毒生民。固比比皆是。乃至不隸藩鎮之州郡。自朝廷除刺史者。亦多以武人為之。歐史郭延魯傳。謂刺史皆以軍功拜。論者謂天下多事。民力困敝之時。不宜以刺史任武夫。恃功縱下。為害不細。薛史安重榮傳。亦云自梁唐以來。郡牧多以勳授。不明治道。例為左右羣小所惑。賣官鬻獄。割剝蒸民。誠有慨乎其言之也。故雖以唐明宗之留心吏治。懲貪獎廉。吏有犯贓。輒置之死。曰貪吏者民之蠹也。鄧州陶玘。亳州李鄴。皆以贓污論死。又嘗下詔。褒廉吏石敬瑭。安從阮張萬進孫岳等。以風厲天下。然出身軍伍。本不知撫循風氣。已成淪胥莫挽。相里金傳云。是時諸州刺史。皆用武人。多以部曲主場務。漁蠹公私。以利自入。金為沂州刺史。獨禁部曲。不與民事。厚加給養。使主家務而已。此亦非有循績可紀。而當時已以金為治行之最。則民之罹於塗炭。可知也。自宋太祖易以文臣牧民。而後天下漸得甦息。歷代因之。皆享國久長。民不思亂。豈非設官立法之善。有以出水火而登之衽席哉。

五代藩帥劫財之習

五代之亂。朝廷威令不行。藩帥劫財之風。甚於盜賊。強奪枉殺。無復人理。李匡儻為晉軍所敗。遁滄州。隨行輜重。妓妾奴僕甚眾。滄帥盧彥威殺之於景州。盡取其貲。晉紀張筠代康懷英為永平節度使。懷英死。筠即掠其家貲。有侯莫陳威者。嘗與溫韜發唐諸陵。多得珍寶。筠又殺威而取之。筠弟錢守京兆。值魏王繼岌滅蜀歸。而明宗兵起。錢即斷咸陽橋。繼岌不得還。自縊死。遂悉取其行橐。先是王衍自蜀入京。莊宗遣宦者向延嗣殺之於途。延嗣盡得衍貲。至是明宗即位。誅宦者。延嗣亡命。錢又盡得其貲。由是筠錢兄弟。皆擁貲鉅萬。筠傳馬全節敗南唐將史承裕。擒以獻闕下。承裕曰。吾掠城中所得百萬。將軍取之矣。吾見天子。必訴而後就刑。全節懼。遂殺之。全節傳高允權為延州令。其妻劉景巖孫女也。景巖家於延。良田甲第甚富。允權心利之。乃誣景巖反而殺之。允權傳李金全討安州。至則亂首王暉已伏誅。金全聞其黨武彥和等為亂時。劫貲無算。乃又殺而奪之。金全傳張彥澤降契丹。奉德光命先入京。乃縱軍大掠。又縊死桑維翰。悉取其貲。彥澤傳成德節度使董溫其為契丹所擄。其牙將祕瓊殺其家而取其貲。瓊為齊州防禦使。道出於魏。范延光伏兵殺之。以戍卒悞殺。聞後延光叛。而又降挈其帑歸河陽。楊光遠使子承勳推之墮水死。盡取其貲。光遠傳楊光遠後亦叛。而復降。其故吏悉取其寶貨名姬善馬。獻李守貞。光遠傳歐史謂瓊殺溫其取其貲。延光殺瓊而取之。延光又以貲為光遠所殺。而光遠亦不能。有也。可見天道報施。雖亂世亦不爽。且多財為害。亂世尤易召禍。白再榮在鎮州。劫奪從契丹之官吏。鎮人謂之白麻荅。及歸京師。遇周祖兵入軍士至其家。悉取其財。已而前啓曰。我輩嘗事公。一旦無禮至此。何面目見公乎。乃斬



之而去。再祭則以人事言之。非分取財。更殺身之道也。

### 五代幕僚之禍

五代之初。各方鎮猶重掌書記之官。蓋羣雄割據。各務爭勝。雖書檄往來。亦恥居人下。視國者并於此觀其國之能得士與否。一時遂各延致名士。以光幕府。如李襲吉為李克用書記。克用討王行瑜。而不得入覲。襲吉為作表云。穴禽有羽。聽舜樂以猶來。天路無梯。望堯雲而不到。昭宗大嘆賞之。又為克用修好於朱溫。中有句云。毒手尊拳。交相於暮夜。金戈鐵馬。踐於明時。溫謂敬翔曰。李公斗絕一隅。乃得此名士。若吾之智算。得襲吉之筆才。虎傅翼矣。由是襲吉之名大著。是時梁有敬翔。燕有馬郁。華州有李巨川。荆南有鄭準。鳳翔有王超。錢塘有羅隱。魏博有李山甫。皆有文稱。襲吉其後馮道由書記入相。桑維翰由書記為樞密使。固華要之極選也。然藩鎮皆武夫。恃權任氣。又往往凌蔑文人。或至非理戕害。鄭準為荆南成納書記。以語不合。解職去。納怒。潛使人殺之於途。五代是時諸侯方重書記。已肆虐如此。此外副使判官之類。更何論矣。今見於薛歐二史者。西方鄴為節度使。所為非法。判官譚善達數諫之。鄴怒。誣以事下獄死。鄴襄州節度使劉訓。以私忿族副使胡裴。誣以欲謀亂也。人士冤之。訓房知溫為節度使。多縱其左右排辱幕僚。知溫高行珪為節度使。性貪鄙。副使范延策諫之。乃誣奏延策謀叛。并其子殺之。行珪高行周鎮鄴城。其副使張鵬。一言不合。為行周所奏。詔即處斬。行周王繼宏鎮相州。殺判官張易。以譌言聞。是時藩郡凡奏刑殺。皆順其命。故當時從事。鮮賓客之禮。重足一跡。事之猶不能免禍。漢而尤慘者。張彥澤鎮彰義。為政苛暴。掌書記張式諫之。彥澤怒。引弓射之。式走而免。遂出奔。彥澤使二十騎追之。曰。不來即取其頭來。式至邠州。節度使李周為奏留之。詔流式商州。彥澤奏以必得式為期。晉

祖不得已與之。彥澤乃剖心決口。斷手足而斬之。彥澤此幕僚之禍最酷者也。惟史匡翰鎮義成。好讀書。接下以禮。幕客有關徹者。使酒怒。自謂匡翰曰。近聞張彥澤變。張式未聞。史匡翰斬關徹。恐天下談者。未有比類。匡翰不怒。引滿自罰而慰之。時稱其寬厚。由是觀之。士之生於是時者。繫手絆足。動觸羅網。不知何以全生也。

### 五代鹽麴之禁

五代橫征無藝。洪容齋隨筆。記朱溫以夷門一鎮力征。而得天下。士雖苦戰。民則樂輸。末帝與唐莊宗對壘於河上。民雖困於輦運。亦未至流亡。由賦斂輕而田園可戀故也。及唐莊宗任吏人孔謙為三司使。峻法以剝下。厚斂以奉上。於是賦斂日重。而歷代因之。今即據鹽麴二事。可見其大概也。凡鹽鑛戶應納鹽利。每斗折納白米一斗五升。晉初始令折錢收納。竈戶所納如此。鹽價之貴可知也。海鹽界分。每年收錢一千七萬貫。以區區數十州之地。而收價如此。其價更可知也。每城坊官。自賣鹽鄉村。則案戶配食。依田稅輸錢。其私販之禁。十斤以上即處死。刮鹹煎鹽者。不論斤兩皆死。凡告者。十斤以上。賞錢二十千。五十斤以上。三十千。百斤以上。五十千。其法令之嚴可知也。晉高祖知鹽貴之病民。乃詔計戶徵稅。每戶自一千至二百文。分五等。聽商人販鹽。民自買食。一時頗以為便。出帝時。又令諸州郡稅鹽。過稅斤七錢。住稅斤十錢。蓋已案戶徵鹽錢。不便改法。乃又加徵商稅。使利歸於官也。漢乾祐中。青鹽一石。抽稅一千文。鹽一斗。是又加重於出帝時矣。周廣順中。始詔青鹽一石。抽八百文。鹽一斗。白鹽一石。抽五百文。鹽五升。然鹽價既因抽稅增貴。而案戶所徵之鹽稅。又不放免。是一鹽而二稅。民益苦之。此鹽法之大概也。其酒麴之禁。孔循曾以麴法殺一家於洛陽。私麴皆死。明宗乃詔鄉村人戶。於秋田苗上。每畝納錢五文。聽民自造麴釀酒。其城坊亦聽自造。



而權其稅。長興中。又減五文為三文。尋仍詔官自造麴。減舊價之半。賣民釀酒。漢乾祐中。私麴之禁。不論斤兩皆死。周廣順中。仍改為五斤以上。然五斤私麴。即處極刑。亦可見法令之酷矣。此麴法之大概也。以上俱見薛史。即此二事。峻法專利。民已不堪。命況賦役繁重。橫征百出。加以藩鎮之私斂。如趙在禮之拔釘錢。每戶一千。劉銖之加派。秋苗每畝。率錢三千。夏苗畝二千。民之生於是時者。可勝慨哉。

### 五代濫刑

五代亂世。本無刑章。視人命如草芥。動以族誅為事。梁祖以舊怨。使人族王師範於洛。師範設席與宗族飲。謂使者曰。死者人所不免。然恐少長失序。下愧先人。酒半。命少長以次就戮。師範傳。唐莊宗既滅梁。詔梁臣趙巖等竝族於市。除妻兒骨肉外。其疏屬僕隸竝釋。莊宗紀。又命夏魯奇族誅朱友謙於河中。友謙妻張氏。率其家屬二百餘口。見魯奇曰。請別骨肉。無致他人橫死。友謙傳。汴州控鶴指揮使張諫謀叛。既伏誅。又集其黨三千人竝族之。并誅滑州長劍等軍士數百人。夷其族。明宗紀。漢三司使王章被殺。有女適張貽肅。病已踰年。扶病就戮。章傳。是族誅之法。凡罪人之父兄妻妾子孫。并女之出嫁者。無一得免。非法之刑。於茲極矣。而尤莫如漢代之濫。史宏肇為將。麾下稍忤意。即搃殺之。故漢祖起義之初。宏肇統兵先行。所過秋毫無犯。兩京帖然。未嘗非其嚴刑之效。隱帝時。李守貞等反。京師多流言。宏肇督兵巡察。罪無大小皆死。有白晝仰觀天者。亦腰斬於市。凡民抵罪。宏肇但以三指示吏。吏即腰斬。又為斷舌。決口。斫筋。折足之刑。於是無賴之輩。望風逃匿。路有遺物。人不敢取。亦未嘗非靖亂之法。然不問罪之輕重。理之是非。但云有犯。即處極刑。枉濫之家。莫敢上訴。軍吏因之為奸。嫁禍脅人。不可勝數。故相李崧之弟嶼。有僕葛延遇。乾沒嶼貲。嶼責之。延遇遂告崧。嶼通李守

貞謀反。坐是族誅。何福進有玉枕。遺奴賣之。江南奴隱其價。福進答之。奴即誣告福進通吳。宏肇輒治福進棄市。帳下分取其妻子。而籍其家財。於是前資故將之家。姑息僮奴。無復主僕之分。宏肇傳。此京師之濫刑也。蘇逢吉為相。以天下多盜。自草詔。凡盜所居。本家及鄰保皆族誅。或謂盜無族誅法。況鄰保乎。乃但去族字。由是鄆州捕賊使者張令柔。殺平陰縣十七村人。皆盡。衛州刺史葉仁魯。帥兵捕盜。有村民十數。方逐盜入山。仁魯并疑其為盜。斷其脚筋。宛轉號呼而死。逢吉傳。劉銖立法深峻。左右有忤意。即令人倒曳而出。數百步。體無完膚。每杖入雙杖對下。謂之合歡杖。或杖人如其歲數。謂之隨年杖。銖傳。此又藩郡之濫刑也。毒痛四海。殃及萬方。劉氏父子二帝。享國不及四年。楊史蘇劉諸人。亦皆被橫禍。無一善終者。此固天道之報施昭然。而民之生於是時。不知如何措手足也。

### 五代諸侯貢奉多用鞍馬器械

用兵之世。武備是亟。故五代藩鎮貢獻。多以鞍馬器械為先。梁紀開平二年。大明節。內外臣僚。各以奇貨良馬上壽。清明宴。以鞍轡馬及金銀器為獻者。殆千萬。午日獻者。巨萬。馬三千蹄。已又詔諸道進獻。不得以金寶裝飾。戈甲劍戟。至於鞍勒。亦不用塗金。及雕刻龍鳳。可見是時貢獻。專以戎備為重也。歐史云。自唐莊宗以來。方鎮進獻之事。稍作。至於晉。而添都助國之物。動以千計。其來朝奉使。買宴贖罪。無不出於貢獻云。今按莊宗甫滅梁。河南尹張全義。即進暖殿物。後遂寵冠羣臣。命劉皇后拜之為父。自是貢獻貲財之風大起。明宗南郊。詔兩川進助郊禮物五十萬。則并有明下詔徵者矣。明宗紀。開成中。任圜奏故事。貢獻雖以進馬為名。卻將綾絹金銀。折充馬價。今乞從之。五代會要。則并明令折價矣。晉天福三年。諸鎮皆進物以助國。及高祖崩。節度使景延廣。李守貞。郭謹等。皆進錢粟。助作山陵。晉紀。蓋後唐以後。又



無不用財物也。然進戎備之例亦未停止。周太祖詔諸州不得以器械進貢。先是諸道州府各有作院。課造軍器。逐季搬送入京。既留上供錢帛應用。又於部內廣配土產物。民甚苦之。除上供軍器外。節度使刺史又多私造。以進貢為名。悉取之於民。至是始罷之。周本貢獻專以戎器馬匹。似亦適於時用。而非無名。乃其害已如此。何況唐晉之竭民財以充進奉也。

案是時。又有以進獻而免禍得官者。袁象先在梁時。鎮宋州。積貲千萬。入唐。輦其貲賂將相。奉宮闈。遂有寵。其卒也。長子正辭。當唐廢帝時。進其父錢五萬緡。領衢州刺史。晉祖時。又獻五萬緡。求為真刺史。乃拜雄州。雄州在靈武西。正辭不欲行。復獻數萬緡。乃得免。出帝時。又獻三萬緡。帝欲與內郡。未授而卒。象先李嗣昭鎮昭義。妻楊氏善積財。嗣昭夾城之圍。多賴以濟。嗣昭歿。子繼韜謀反。遇赦入朝。楊氏以銀數十萬隨之行。厚賂皇后及伶人宦官。遂得解。莊宗轉龍繼韜。又一子繼忠。家於晉陽。貲尚鉅萬。晉祖起兵時。貸以充用。既入立。甚德之。以繼忠為沂棣單三州刺史。楊氏平生積財。嗣昭父子三人皆賴之。嗣昭房知溫歷諸鎮節度。積貲鉅萬。其卒也。子彥儒獻其父錢三萬緡。絹布三萬匹。金百兩。銀千兩。遂拜沂州刺史。知溫歐史所謂功臣大將死。子孫率以家財求刺史。物多者得大州善地。蓋是時風氣如此。

### 魏博牙兵凡兩次誅戮

魏博六州。號天雄軍。自田承嗣盜據後。召募牙兵。皆豐給厚賜。年代既久。父子相襲。姻黨膠固。變易主帥。如兒戲。自田氏後。百五十年。主帥廢置。出於其手。如史憲誠何全暉韓君雄樂彥禎。皆其所立。小不如意。則舉族被誅。唐天德元年。樂彥禎為牙兵所囚。彥禎子從訓。乞兵於梁以攻之。彥禎遂被殺。從訓亦戰死。牙兵因立羅宏信。宏信雖為主帥。而兵愈驕橫。迫其

子紹威嗣襲。心益懼。欲盡誅之。而畏其強。不敢發。乃遣親吏臧延範密告梁祖。會梁女之適羅氏者死。梁祖乃遣馬嗣勳以千人入魏。聲言助葬。實兵仗於橐中。肩橐而入。夜半與紹威親軍攻牙兵。盡殺之。死者七千餘人。嬰孺亦不留。此魏兵第一次誅戮也。其後梁祖令楊師厚屯魏州。梁祖崩。師厚逐節度使羅周翰。紹威子而據其地。梁主友珪即命為天雄軍節度使。師厚復置銀槍效節軍。皆選驍銳。恣餼養。復故時牙兵之態。又將為梁患。會師厚死。趙巖與邵贊為末帝畫策。分相魏為兩鎮。以相澶衛為昭德軍。張筠為節度使。魏博貝仍為天雄軍。賀德倫為節度使。分魏兵之半入昭德。德倫促之就道。親戚相訣別。效節軍將張彥曰。朝廷以我軍府強盛。設法殘破之。乃與衆執德倫置之樓上。末帝遣使宣諭。彥不聽。使者再往。彥裂詔書於地曰。梁主聽人穿鼻。遂逼德倫降於唐。莊宗時方為晉王。梁由是失河北。德倫既降。陰遣人訴彥於莊宗。莊宗斬彥而後入。即以魏軍自衛。號帳前銀槍軍。自是與梁戰。河上數有功。胡柳之役。逐梁兵下土山。皆其力也。許滅梁而重賞。及梁亡。雖數賜予。猶懷怨望。莊宗令楊仁晟率之戍瓦橋關。同光四年代歸。又有詔令駐貝州軍士。以貝魏相去一舍。而不得歸。咸怨皇甫暉。因倡亂。殺楊仁晟等。而逼趙在禮為帥。入魏州。莊宗遣李嗣源討之。會軍變。與魏軍合。嗣源犯關。莊宗遂至弒亡。皆此軍肇禍也。明宗即嗣源既即位。在禮懼禍。求解去。明宗乃遣房知溫率魏效節九指揮使戍盧臺。不給兵甲。惟長竿繫幟。以束隊伍。明年遣烏震往代知溫戍軍。夾水東西為兩寨。震至。與知溫會東寨。效節軍為變。知溫亟乘馬出。亂軍擊殺震。執轡留知溫。知溫給以馬兵。皆在西。今獨步軍。何能為也。即登舟渡入西寨。以騎兵盡殺亂者。明宗詔悉誅其家屬於魏州。凡三千餘家。驅至漳河上殺之。漳水為之變色。魏之驕兵。至是而盡。此第二次誅戮也。見梁唐各本紀。及羅紹威符道昭馬嗣勳楊師厚賀德倫趙在禮皇甫暉烏震房知溫等傳。



一軍中有五帝

唐莊宗為晉王時與梁軍拒於河上垂十年時李嗣源明宗為大將莊宗與之謀取鄆州嗣源請獨當之乃以騎五千襲取鄆梁軍破德勝南柵莊宗悉軍救之嗣源為先鋒擊破梁軍明宗是明宗在軍中也嗣源子從珂廢帝嘗從戰於河上屢立戰功莊宗呼其小字曰阿三不獨與我同年其敢戰亦類我德勝之戰從珂以十數騎雜梁軍奔入梁壘斧其眺樓嗣源以鐵騎三千乘之梁軍大敗胡柳之戰又從莊宗奪土山軍勢復振廢帝是廢帝亦在軍中也時嗣源壻石敬瑭晉高祖常在嗣源帳下號左射軍梁將劉鄩急攻清平莊宗馳救為鄩所圍敬瑭以十數騎橫梁馳取之莊宗拊其背而壯之又從莊宗擊敗梁將戴思遠於德勝渡又從戰胡盧套肩護嗣源而退從戰楊村寨解嗣源之危從取鄆以五十騎突入東門晉紀是晉祖亦在軍中也而劉知遠漢高祖時方為敬瑭裨校德勝對柵時敬瑭為梁人所襲馬甲斷知遠輟騎以授之自跨斷甲者殿而歸漢紀是漢祖亦在軍中也計是時唐莊宗明宗廢帝晉高祖漢高祖皆在行間一軍共有五帝此古來未有之奇也

五代諸帝皆無後

梁祖朱溫子彬王友裕早卒郢王友珪以弑逆被誅養子博王友文為友珪矯殺均王友貞嗣位是為末帝唐兵入自殺於建國樓康王友孜末帝時先以謀反誅賀王友雍福王友璋建王友徽歐史謂此三人不知所終薛史亦不載其卒而王禹偁五代史闕文謂唐莊宗入盡誅朱氏則友璋等皆被殺也通鑑則謂唐師將至末帝疑兄弟乘危謀亂盡殺之是梁祖後無子孫也唐武皇李克用有子落落及廷鸞洹水晉州二戰皆為梁所擒殺見於梁本紀

而薛史宗室傳歐史家人傳俱不載其見於二史者長子莊宗存勗為郭從謙所弑陸王存義以郭崇韜壻先為莊宗所殺永王存霸申王存渥國變後俱逃太原為軍士所殺通王存確雅王存紀為霍彥威所殺惟邕王存美薛王存禮薛史謂皆不知所終通鑑則謂存美以病風偏枯得免居於晉陽是武皇後僅存一廢疾之子也莊宗子魏王繼岌聞莊宗之變自縊死繼岌繼嵩繼蟾繼曉薛史謂竝不知所終惟清異錄謂唐福慶公主下降孟知祥莊宗諸子削髮為僧間道走蜀知祥以公主之姪厚待之則莊宗子有延於蜀者明宗長子從審莊宗改為繼璟為元行欽所殺次秦王從榮以率兵入宮為安從益所殺宋王從厚即位是為愍帝失國後以酖死從璨先以戲登御榻為安重誨陷死許王從益廢居於洛契丹主北歸蕭翰令知南朝軍國事漢祖入洛賜死愍帝有子重哲見明宗紀而薛歐二史皆無傳蓋亦不知所終是明宗後無子孫也廢帝長子重吉為愍帝所殺次雍王重美同廢帝自焚死是廢帝後無子孫也晉高祖子劼王重允本高祖弟號王重英皆高祖起兵時為唐廢帝所誅楚王重信壽王重義皆為張從賓所殺齊王重貴本高祖兄即位是為出帝後降契丹北遷夔王重進陳王重杲早卒少子重睿從出帝北遷重信有二子及出帝子延寶延煦皆隨北遷不知所終是晉帝後亦無子孫在中國也漢祖長子魏王承訓先卒次承祐嗣位是為隱帝為郭允明所弑次陳王承勳以廢疾不得立廣順初卒是漢祖後無子孫也周祖起兵於鄴漢以兵圍其京邸子青哥意哥皆被誅是周祖後無子孫也世宗以養子嗣位其子宜哥喜哥三哥先在京邸同為漢所誅次恭帝遜位於宋次熙謹宋乾德二年卒次熙讓熙誨不知所終而恭帝遜位後又十四年而殂周子孫封崇義公歷宋三百餘年世襲不替比於諸帝獨幸矣



### 周祖四娶皆再醮婦

周祖初為軍校會唐莊宗崩。明宗出其宮人各歸家。有柴氏者。莊宗嬪也。住逆旅。有一丈夫過。氏問逆旅。此何人。曰郭雀兒也。氏識其非常人。遂以所攜貲半與父母。留其半嫁周祖。資其進身。見東都事略。而薛歐二史皆不載其出自唐宮。即世宗之姑也。後歿。周祖即位。追諡為聖穆皇后。有楊氏者。已嫁石光輔。光輔卒。周祖之柴夫人適棄世。遂聘之。氏初不肯。使其弟廷璋見周祖。廷璋歸。為言周祖姿貌異常。不可拒。乃嫁之。後卒。追冊為淑妃。周祖又娶張氏。張氏亦先嫁武從諫之子而寡。適周祖之楊夫人歿。乃納為繼室。周祖起兵於鄴。張氏與兒女俱在京邸。為漢所誅。後追冊為貴妃。周祖既為帝。有董氏者。舊與楊夫人為鄉親。楊常舉其賢。已嫁劉進超。適嫠居。周祖憶楊之言。又娶焉。是為德妃。統計前後四娶。皆再醮婦。亦不可解也。

### 寵待功臣改賜鄉里名號

新唐書朱滔將叛。劉惲諫之曰。司徒兄弟。恩遇極矣。今昌平有太尉鄉司徒里。不朽業也。云。是唐時寵待功臣。本有賜鄉里名號之例。案劉子元傳。好著述。封居巢子。兄弟六人。俱有才名。而朝廷因之舉。及唐末而益濫。唐昭宗以朱溫有功。封沛郡王。詔改其鄉錦衣里為沛王里。梁開平中。錢鏐奏改其所居臨安縣之廣義鄉為衣錦鄉。梁紀見此皆出於特恩也。唐長興元年。詔羣臣職位。帶平章事侍中書令者。並與改鄉里名號。則并著為成例矣。後唐晉天福三年。詔帶使相節度使者。自楊光遠以下七人。並改鄉里名號。又詔宰臣趙瑩。桑維翰。李崧。亦改鄉里名號。荆南節度使高從誨。本貫汴州浚儀縣王畿鄉表節坊。詔改為擁旌鄉。浴風里。晉紀。馮道長樂老傳。自敘。因官貴。敕以其所生來蘇鄉。改為元輔鄉。朝漢里。改為孝行里。

後於河南置宅。又敕其所居三州鄉改為上相鄉。靈臺里改為中台里。及官益進。又改上相鄉為太尉鄉。中台里為侍中里。此隨官而屢改也。天福四年。中書奏以太原潛龍莊改為慶長宮。使相鄉改為龍飛鄉。都尉里改為神光里。使相都尉名號。蓋皆未即位前所賜。至是又改焉。觀馮道之隨官改鄉名。則帝王潛邸。自亦宜改稱矣。

### 張全義馮道

張全義媚事朱溫。甚至妻妾子女為其所亂。不以為愧。及唐滅梁。又賄賂唐莊宗。劉后。伶人宦官等。以保祿位。馮道歷事四姓十君。視喪君亡國。未嘗屑意。方自稱長樂老。敍己所得階勳官爵。以為榮。二人皆可謂不知人間有羞恥事者矣。然當時萬口同聲。皆以二人為名臣。為元老。晉天福中。全義子繼祚。同張從賓等謀反。當族誅。李濤上言。全義有再造洛邑之功。乞免其族。通鑑。詔繼祚顯從。叛亂難貸刑章。乃瞻先臣實有遺德。遽茲乏祀。深所軫懷。所有祖父墳墓祠堂。可交付其骨肉。晉紀。此全義之宥及後嗣也。耶律德光入汴。責劉繼勳為晉出帝謀絕兩國之好。繼勳諉之。馮道德光曰。此老子不是好閹人。母相引。繼勳。郭忠恕亦謂道至謂與孔子同壽。本傳。此道之望重一世也。以朝秦暮楚之人。而皆得此美譽。至身後尙繫追思。外番亦知敬信。其故何哉。蓋五代之亂。民命倒懸。而二人獨能以救時拯物為念。除本傳所載。不必再述外。其見於他書及別傳者。全義事朱梁。以免兵革。招復流亡。使得仰父母。子每出行。見新麥新繭。輒喜。民竊言王不好聲伎。惟見好蠶麥。則笑耳。洛陽雜記。楊凝式贈全義詩曰。洛陽風景實堪哀。昔日曾為瓦子堆。不是我公重葺理。至今猶是一堆灰。五代觀此亦可見其勞來安集之功也。馮道在唐明宗時。以年歲頻稔。勸帝居安思危。以春雨過多。



勸帝廣敷恩宥。唐紀對耶律德光則言此時百姓佛出救不得。惟皇帝救得。論者謂一言而免中國之人夷滅。通鑑在漢祖時牛皮禁甚嚴。匿者死。有二十餘人當坐。道力爭得免。洛陽且秦王從榮敗時。其僚屬俱應坐罪。道獨以任贊王居敏等素以正直為從榮所惡。力言出之。唐記史圭以銓事與道不協。道反薦圭為刑部侍郎。圭傳韓惲性謹厚。道為相。嘗左右之。惲傳是道之為人。亦實能以救濟為心。公正處事。非貌為長厚者。統核二人之素行。則其德望為遐邇所傾服。固亦有由。至於歷事數姓。有玷臣節。則五代之仕宦者。皆習見以為固然。無足怪。鄭韜傳。謂自襁褓迄懸車。凡事十一君。越七十載。無官謗。無私過。士無賢不肖。皆頌之。以歷事十一君之人。而尚謂無官謗。可見當時風氣。絕無有以更事數姓為非者。宜全義及道之訾議不及也。

五代人多以彥為名

彥本美名。故人多以之為名。然未有如五代時之多者。唐末本有宰相徐彥若。左拾遺徐彥。供奉官史彥瓊。宦官支彥勳。魏博凡言州鎮者。皆其節度使。樂彥禎。東川顧彥朗及弟彥暉。彥瑤。其著於梁者。鐵槍王彥章。人所共知也。然同時統兵大將。又有謝彥章。此外則滄州盧彥威。左龍武統軍李冠彥卿。鄜州李彥容。靜勝軍李彥韜。昭本名溫。宣義軍霍彥威。又滄州盧彥威。左龍武統軍李彥威。即朱。都指揮使楊彥洪。蔡州刺史王彥溫。大將李彥柔。左天武使劉彥圭。左僕射押牙王彥洪。楊劉守將安彥之。幽州騎將高彥章。蔡州軍校張彥珂。雷滿之子彥恭。彥雄。彥威。唐晉間有中書焦彥賓。供奉官劉彥瑤。宦官馬彥珪。伶官史彥瓊。右監門衛上將軍王彥璘。兵馬都監夏彥朗。皇城使李彥紳。宮苑使史彥容。遊奕將李彥暉。龍驤指揮使姚彥溫。馬步軍使馬彥超。樞密李虔徽之客邊彥溫。步軍指揮使藥彥稠。戶部尚書韓彥暉。薛史作暉。河中

安彥威。義成李彥舜。安國楊彥珣。彰義張彥澤。昭順姚彥章。鎮州副使李彥珂。興元副使符彥琳。鄭州刺史白彥球。天平軍副使李彥贊。河陽行軍司馬李彥珣。靈州將王彥忠。西川董璋。有將李彥釗。安重榮有將趙彥之。杜重威之子名彥超。晉漢間有秦寧慕容彥超。保大軍張彥超。徐州王彥超。同州張彥贊。知安陽州符彥倫。丹州指揮使高彥珣。如京使甄彥琦。監軍楊彥朗。何彥超。先鋒指揮使史彥超。步軍指揮使宋彥筠。河東行軍司馬張彥威。沂州刺史房彥儒。汾州刺史武彥宏。慶州刺史郭彥欽。登州刺史郭彥威。鎮州副使李彥琦。元從都押牙蘇彥存。後宮都押牙李彥弼。魏州刺史常彥卿。徐州守禦使康彥環。西京判官時彥澄。保寧軍都頭劉彥章。安州軍校武彥和。彰義張萬進之子名彥球。同州指揮使成殷之子名彥璋。漢周間有符彥圖。彥超。彥卿。彥饒。彥能。皆符存審之子。又尚輦奉御金彥英。本高。監軍。李彥從。內客省使李彥額。左衛上將軍扈彥珂。金吾衛上將軍張彥成。水部員外郎韓彥卿。鎮州副使趙彥鐸。此皆見於薛歐二史者。此外則劉守光有將史彥璋。楊行密有壽州將王彥威。軍使彭彥章。南唐有壽州大將劉彥貞。楚州將張彥卿。袁州刺史袁彥章。徐知訓有行州刺史安彥進。蜀有先鋒使尚彥暉。招討使高彥儔。副使呂彥珂。使价趙彥韜。客將王彥球。酒吏刁彥能。南漢有大將伍彥儔。指揮使暨彥贊。宦者許彥真。北漢有遼州刺史傅廷彥。石州刺史安彥進。蜀有先鋒使尚彥暉。招討使高彥儔。副使呂彥珂。使价趙彥韜。客將王彥球。袁彥超。閩有學士廖彥若。楚馬殷有左相姚彥章。大將姚彥暉。劉彥韜。朗州帥雷彥恭。彥雄。虔州將李彥圖。甚而遼有鄭州刺史王彥徽。寰州刺史趙彥辛。武州刺史王彥符。牙校許彥欽。党項亦有拓跋彥昭。威州有拓跋彥超。回鶻有首領楊彥詢。南寧蠻有酋長莫彥珠。亦見薛歐二史。至宋初猶然。陳橋兵變。有軍校羅彥瓌。王彥昇。後有龍捷指揮使趙彥徽。武信軍節度使崔彥進。步軍指揮使靳彥朗。晉陽巡檢穆彥璋。伐北漢時。有防禦使張彥進。伐南漢時。有部將再彥衰。伐蜀時。有部將高彥容。折彥贊。又杜太后之兄子彥超。彥珪。彥遵。彥鈞。彥



彬太宗時尙有供奉官陳彥詢崇化副使閻彥進征并州時有尙食使石彥贊征契丹時有沙州觀察使杜彥圭此又見於宋史者統計五代至宋時名彥章者七人彥超者十一人彥威者七人彥卿者七人彥進者四人彥溫彥韜者各三人競相仿倣各以彥爲名亦一時風尙也

廿二史劄記卷二十一終

廿二史劄記卷二十三

陽湖趙翼撰

宋遼金三史

元順帝時命托克托舊史名脫等修遼宋金三史自正三年三月開局至正五年十月告成以如許卷帙成之不及三年其時日較明初修元史更爲迫促然三史實皆有舊本非至托克托等始修也各朝本有各朝舊史元世祖時又已編纂成書至托克托等已屬第二三次修輯故易於告成耳遼史在遼時已有耶律儼本在金時又有陳大任本說見遼史條內此遼史舊本也金亡後累朝實錄在順天張萬戶家後據以修史見金史條內此金史舊本也宋亡後董文炳在臨安主留事曰國可滅史不可滅遂以宋史館諸記注盡歸於元都貯國史院董文炳傳此宋史舊本也元世祖中統二年王鶚請修遼金二史詔左丞相耶律鑄平章政事王文統監修尋又詔史天澤亦監修其金朝衛紹王記注已亡失則王鶚采當時詔令及楊雲翼等所記足成之亦見命條內及宋亡又命史臣通修三史事見元史條內此元世祖時纂修三史之本也故至正中阿魯圖托克托等進遼史表云耶律儼語多避忌陳大任詞乏精詳世祖皇帝敕詞臣撰次三史首及於遼進金史表云張柔歸金史於先王鶚采金事於後進宋史表云世祖皇帝拔宋臣而列政途載宋史而歸祕府既編載定之勳尋奉纂修之旨可見元世祖時三史俱已修訂而元史托克托傳并謂延祐天歷間又屢詔修之則不惟修之於世祖時而世祖後又頻有修輯矣蓋宋金雖各有國史然其末年正當國亡時豈復尙有記載是必



元朝命史官采掇而史官以耳目所接。略記較親。故金宋亡國時。紀傳更覺詳悉。大概金宣宗以前。宋度宗以前之史。皆金宋舊史也。金哀宗及宋德祐景炎祥興之史。則元代中統至元及延祐天歷所輯也。其所以未有成書者。托克托傳云。以義例未定。或欲以宋為世紀。遼金為載記。或以遼立國在宋先。欲以遼金為北史。宋太祖至靖康為宋史。建炎以後為南宋史。各持論不決。故耳。至順帝時。詔宋遼金各為一史。於是據以編排。而紀傳表志。本已完備。故不三年遂竣事。人但知至正中修三史。而不知至正以前。已早有成緒也。

### 宋遼金三史重修

宋史繁蕪。遼金二史。又多缺略。昔人多有欲重修者。元末周以立因三史體例未當。欲重修而未。能明正統中。其孫敘思繼先志。乃請於朝。詔許自撰。詮次數年。未及成而卒。明史周嘉靖中。廷議更修宋史。以嚴嵩為禮部尚書兼翰林學士董其事。嚴嵩然亦未有成書也。其修成者。惟柯維騏合三史為一史。以宋為主。而遼金附之。并列二王於本紀。褒貶去取。義例頗嚴。閱二十年始成。名曰宋史新編。又祥符王維儉。字損仲。嘗苦宋史蕪穢。手自刪定為一書。傳。儉是二人者。皆嘗修成矣。然維騏本未及梓行。維儉之書。據列朝詩序。謂損仲家圖籍已沈於汴梁之水。其本稿吳興潘昭度曾鈔得副本。而曹學佺傳。謂潘曾絃巡撫南贛。得惟儉所修宋史。邀晉江曾異撰。新建徐世溥更定。未成而罷。則此副本雖未遭汴水之厄。亦終歸散失也。今時代愈遠。宋金書籍可資考訂者。流傳益少。雖有志纂輯。亦無從下手矣。

### 宋史事最詳

唐宋金三朝史官記載。其職頗重。五代李穀奏言。起居注創於累朝。時政記興於近代。然後

採其事實。編作史書。薛史。宋汪藻亦疏云。書榻前議論之詞。則有時政記錄。柱下見聞之實。則有起居注。類而次之。謂之日歷。修而成之。謂之實錄。宋史此近代國史底本之大概也。自唐文宗。每召大臣論事。必命起居郎起居舍人執筆。立於殿階螭頭之下。以紀政事。見李穀蒙疏。後唐明宗。因史館趙熙等奏。亦令以詔書及處分公事。令端明殿學士韓昭允錄。送史館。其內廷之事。詔書奏對。不到中書者。令樞密院直學士李專美錄。送史館。唐本紀。晉天福中。宰臣趙瑩。周顯德中。宰臣李穀。皆援例奏請行之。薛史。故實錄之前。皆有日歷。宋初因扈蒙奏請。凡發自宸衷。可書簡策者。竝委宰臣及參知政事。每月輪抄。以備史官撰集。乃詔盧多遜典其事。宋史。自是宋代史事。較為詳慎。有一帝必有一帝日歷。日歷之外。又有實錄。實錄之外。又有正史。足見其記載之備也。今案宋史本紀。太平興國三年。命修太祖實錄。史官為李昉。蒙李穆。郭贊。宋白等。沈倫為監修。共成五十卷。見倫防等傳。又詔軍國政要。令參知政事李昉等錄。送史館。真宗初。命錢若水等修太宗實錄。十卷。盧琦等撰。又詔呂端。錢若水重修太祖實錄。仁宗詔呂夷簡。夏竦。修先朝國史。王曾為提舉。天聖八年。書成。夷簡上之。英宗命韓琦。修仁宗實錄。神宗熙寧二年。修成。琦上之。是年神宗命學士呂公著。修英宗實錄。修成後。曾公亮上之。十年。又詔修仁宗英宗史。惟神宗實錄。凡數次改修。哲宗元祐元年。命呂大防等纂修。以司馬光家藏記事為本。六年。修成。七年。又修神宗史。此第一次所修也。紹聖元年。章惇用事。請重修神宗史。蔡卞亦言。先帝盛德大業。實錄所記。多疑似不根。乞重刊定。乃詔以蔡卞為修撰。卞專取王安石日錄。遂盡改元祐所修。貶原修官呂大防范祖禹。趙彥若。黃庭堅等。三年。書成。惇上之。此第二次所修也。徽宗時。又詔修神哲二朝實錄。及二朝史。皆蔡京。蔡卞司其事。欽宗初。已命改修宣仁后謗史。未及成。道高宗時。隆祐太后為帝言。宣仁后之賢。古今未有。因姦臣誣謗。建炎初。雖下詔辨明。而史錄未經刪定。恐無以慰在天之靈。帝悚然。即諭朱勝



非曰神哲兩朝史多失實宜召范冲刊定冲乃為考異一書明示去取舊文以墨書刪去者以黃書新修者以朱書世號朱墨史哲宗實錄又別為一書名辨誣錄徐勣傳神宗正史五載臣好惡不同一主司馬光一主王安石故議論紛然蔡崇禮亦疏言神宗實錄未成勣謂元祐紹聖史所修已成書未本出蔡下手多所附會哲宗實錄則蔡京提舉編修變亂是非難以為據冲既修成趙鼎上之此第三次所修也徽宗實錄則紹興八年始修十一年書成秦檜上之其後又有修欽宗實錄則隆興中蔣芾等所修而高宗和議成先命史館編修靖康建炎忠義錄後又有魏杞等所上神哲徽三朝正史陳俊卿虞允文等上神哲徽欽四朝會要趙雄等上神哲徽欽四朝國史志王淮等上神哲徽欽四朝列傳則皆孝光兩朝所續成也高宗實錄直至淳熙十五年始修時高宗已崩故也寧宗慶元三年書成京鏗等上之嘉泰二年陳自强等又上高宗實錄及正史然高宗時自有日歷紹興二十六年以秦檜所修日歷未嘗詔重修之孝宗隆興元年詔修太上皇帝聖政記二年書成命進德壽宮時高宗為太上皇其孝光寧三朝實錄皆成於理宗時然光宗受禪即詔修壽皇聖政日歷慶元三年書成進於壽康宮時光宗為太上皇其後又有李心傳宗受禪亦詔修太上皇聖政日歷慶元三年書成進於壽康宮時光宗為太上皇其後又有李心傳所修高孝光寧四朝國史史嵩之所上中興四朝國史謝方叔所上中興四朝志傳亦皆理宗時成書也理宗實錄成於度宗咸淳四年賈似道上之度宗亦有時政記七十八冊此可見宋朝重史事之大概也其士大夫所著尚有不勝數者高宗時汪藻嘗編元符庚辰至建炎已酉三十年事迹蔡崇禮曾奏取其書入史館孝宗時李燾著續通鑑長編自建隆至治平一百八十卷後又續成六百八十七卷洪邁入史館修四朝帝紀又修一祖八宗一百七十八年為一書理宗端平二年又詔太學生陳均編宋長編綱目淳祐十一年又詔龍圖閣學士樓昉所著中興小傳百篇宋十朝綱目并撮要二書付史館謄寫又王偁有東都事略李丙有丁未錄徐夢莘有三朝北盟會編自政和七年海上之盟訖紹興三十一年完顏亮

之斃上下四十五年共三百五十卷此皆收入史館以資纂訂者其他名臣傳言行錄家傳遺事之類未上史館者汗牛充棟更無論矣故宋一代史事本極詳備而是非善惡迴護諱飾處亦坐此

### 宋史多國史原本

宋代國史國亡時皆入於元元人修史時大概祇就宋舊本稍為排次今其跡有可推見者道學傳序云舊史以邵雍列於隱逸未嘗今置於張載傳後方技傳序云舊史有老釋符瑞二志及方技傳今去二志獨存方技外國傳序云前宋史有女直傳今既作金史義當削之夏國傳贊云今史所載諡號廟號陵名兼採夏國樞要等書其與舊史有牴牾者則闕疑以俟此可見元人就宋舊史另為編訂之迹也然有另為編訂而反失當者如張憲傳開首即云飛愛將也蓋舊史憲傳本附於岳飛傳之後故從飛敘入今憲另為一卷不附飛後則此語殊無來歷又牛阜傳後總敘岳飛之功謂飛命阜及王貴董先楊再興等經略東西京汝穎陳蔡諸郡又遣梁興渡河糾合忠義社取河東北州縣未幾李寶捷於曹州董先捷於穎昌劉政捷於中牟張憲復淮寧府王貴部將楊遇復南城軍梁興會太行忠義破金人於垣曲及沁水金張太保李太保等以其眾降又取懷衛二州金人大擾未幾岳飛還朝下獄死世以為恨云案此乃總敘飛功非敘阜功也而在阜傳末可見舊史亦以阜傳附飛傳之後故阜傳末又累敘飛功而結之以下獄死今阜傳亦另為一卷不附於飛而阜傳末總敘飛功之處卻未移在飛傳後遂覺阜傳反多此贅詞此徒以意為割裂而未及訂正之失也葉夢得既入文苑傳則其著述如石林燕語避暑錄話之類自應敘入乃通篇但述吏績無一語涉文字此必舊史本在列傳元人排次時以其素有文名遂將原傳撥入文苑又未增其



能文之處也。其有不全據舊史而另纂增入者。如唐恪傳後。謂當時蔡京王黼用事。援引者多。如余深薛昂吳敏王安中趙野等。國史皆逸其事。今附著於此。是余深等五傳。舊史所本無也。康保裔傳。保裔戰歿。來援者惟張凝李重貴。後重貴仕至鄜州防禦使。改左領軍大將軍。致仕。凝加殿前都虞候。卒贈彰德軍節度使。蓋舊史凝與重貴二人。不另立傳。故附於保裔傳也。又王翊傳後附。文州守劉銳。通判趙汝彞。相誓死守。被圍旬有五日。汲道絕。兵民水不入口者半月。至吮妻子血。城垂陷。汝彞猶提刀入陣。中十六矢。被執死。銳先殺其妻。父子三人。登文王臺自刎死。此亦舊史銳與汝彞不另立傳。故附見翊傳也。今張凝李重貴各有專傳。劉銳趙汝彞兩人合爲一傳。可見此四人傳。亦舊史所本無。而元人增之者也。既增此四人傳。則康保裔王翊傳內附書之處。應刪節以免繁複。乃仍舊文而不刪。此又元人未及審訂之失也。其有全用舊史。而非刺謬處。則於傳贊內著論以別之。如謝深甫傳。通首敘述居然一代名臣。無可訾議。而編次時。則入於胡紘陳自強卷內。傳贊謂其當韓侂胄嚴禁僞學。善類爲之一空。深甫秉政。與之同時。且嘗劾陳傅良趙汝愚等。顯與正士爲難。是傳則君子而贊則小人矣。趙雄傳。謂孝宗意嚮張栻。雄與虞允文沮抑之。傳贊則謂雄與允文協謀用兵。與張栻持論相同。而以舊史沮抑張栻之說爲誣。是傳則小人而贊則君子矣。可見各傳皆宋舊史原本。修史時悉仍其舊。特於贊內另別其是非。此又見修史者雖不及改正。而尚存褒貶之公也。第此等增傳及辨正之處。其爲世祖時抑係順帝時。則無從推考。大約王翊傳附見劉銳趙汝彞。此世祖時所修也。銳汝彞之另立傳。則順帝時所修也。又如陳宜中傳。記其往占城而不返。馬廷鸞傳。記其國亡後七年而始沒。此亦必順帝時所修。若世祖時則宜中廷鸞存歿尙未知。何由預書耶。

### 宋史各傳迴護處

元修宋史。度宗以前多本之宋朝國史。而宋國史又多據各家事狀碑銘。編綴成篇。故是非有不可盡信者。大奸大惡如章惇呂惠卿蔡確蔡京秦檜等。固不能諱飾。其餘則有過必深諱之。卽事蹟散見於他人傳者。而本傳亦不載。有功必詳著之。卽功績未必果出於是人。而苟有相涉者。亦必曲爲牽合。此非作史者意存忠厚。欲詳著其善於本傳。錯見其惡於他傳。以爲善善長而惡惡短也。蓋宋人之家傳表誌行狀。以及言行錄筆談遺事之類。流傳於世者甚多。皆子弟門生。所以標榜其父師者。自必揚其善而諱其惡。遇有功處。輒遷就以分其美。有罪則隱約其詞以避之。宋時修國史者。卽據以立傳。元人修史。又不暇參互考證。而悉仍其舊。毋怪乎是非失當也。昔吳縝作新唐書糾繆。不旁採他書。卽新唐書中。自爲抵牾者。抉摘以資辨證。今亦仿此例。摘出數十條於後。觀者可以覽焉。

李綱 靖康圍城之事。姚平仲欲劫營。以士卒不得速戰爲言。李綱主其議。令城外兵俱聽平仲節度。遂及於敗。姚平仲傳據此則劫營之計。李綱實與其謀。而綱傳則謂平仲密奏斫營。夜半中使傳旨。使綱策應。似綱初不知者。蓋因平仲之敗。以見失策不在綱。此事本載綱所著靖康傳信錄。史館卽據以立傳也。

呂好問 靖康之變。朝臣多污張邦昌僞命。高宗以鄧肅在圍城中。目擊其事。令肅陳奏。肅請分三等定罪以待制。而爲僞朝執政者置一等。乃王時雍徐秉哲吳开呂好問莫儔李回共六人。肅傳見鄧傳。是好問罪在一等。其欲爲僞朝佐命可知也。乃好問傳不載其從逆之事。反備書諫阻張邦昌母干大位。及趣邦昌遣使迎高宗等事。

韓世忠 世忠固一代名將。然少年時。意氣用事。亦多有可議者。王明清避亂錄。杭妓呂小



小以罪繫獄。會錢塘守邀世忠飯。世忠為言而出之。連飲巨觥。搗妓以去。又明清揮塵錄。王淵有妓周氏。為趙叔近所得。陳通之亂。叔近招降之。淵遣張俊韓世忠討通。并斬叔近。以妓歸淵。淵以賜俊。俊不敢受。乃予世忠。案此二事。皆出於明清所記。或因其以京口娼梁氏為妻。遂附會之。呂小小事不見他書。周氏事見宋史趙叔近傳。但言以周歸淵。不言歸世忠也。則明清所記。或近於誣。至於宋史各傳。世忠屯鎮江。劉光世屯建康。以私忿欲交兵。常同劾其驕狠無忌。憚。見常傳。是時光世部將王德擅殺世忠部將。會詔移屯。世忠遂遣兵襲其後。并奪建康守府廩。見趙鼎傳。及移屯時。光世懼世忠扼其路。乃趨白鷺。世忠果遣人襲之。見劉光張浚以世忠所部。逼逐諫臣。墜水死。因劾奏。奪其觀察使。見張浚傳。滕康亦劾世忠奪御器械。逼死諫臣。乃止罰金。何以懲後。見滕康傳。世忠又飲於內侍李廙之家。刃傷弓匠。見魏弘傳。此皆世忠少年粗豪之過。亦不必諱。而世忠傳不載。

張浚 浚一生不主和議。以復讐雪恥為志。固屬正人。然李綱入相時。宋齊愈以附逆伏誅。浚為御史。劾綱以私意殺侍從。且論其買馬招軍之罪。見高宗紀。浚又嘗薦秦檜可任大事。見趙鼎傳。陳東伏闕上書。已被誅。浚又奏胡珵筆削東書。以布衣挾進。退大臣之權。遂追勒編置。蓋浚乃黃潛善客。理則李綱客也。見戴植傳。浚又嘗與岳飛論呂祉王德。鄺瓊兵事不合。飛因解兵奔喪歸。浚奏其意在併兵。以去要君。遂命張宗元權其軍事。見高宗紀。汪伯彥既貶。浚以伯彥舊嘗引己。遂與秦檜援郊祀恩。起伯彥知宣州。見汪伯彥傳。今浚傳皆不載。惟殺曲端一事。略見傳中。而又謂端部將張忠彥降金。故下端於獄。似非枉殺者。葉夢得 夢得初為蔡京客。京倚為腹心。嘗為京立元祐黨籍。分三等定罪。後知應天府。以京黨落職。見毛注。強淵明。建安元年。夢得知杭州。軍校陳通作亂。夢得被執。見高宗紀。今夢得傳不載。

胡安國 安國本秦檜所薦用。呂頤浩引朱勝非以傾秦檜。胡安國即劾勝非不當復用。安國求去。檜三疏留之。頤浩欲去檜。席益曰。胡安國在講筵。宜先去之。蓋安國力言檜之賢於張浚也。見秦檜傳。今安國傳不載。

劉一止 一止秦檜黨也。檜置修政局。或有言局當廢者。一止與林待聘力言不可廢。見秦檜傳。今一止傳不載。

何鑄 鑄嘗與羅汝楫劾岳飛。見羅汝楫傳。又嘗為秦檜劾王居正。為趙鼎之黨。遂奪職奉祠。見王居正傳。又劾張九成黨趙鼎。見張九成傳。又劾廖剛與陳淵等為朋比。見廖剛傳。今何鑄傳皆不載。反云治岳飛獄。力辯其冤。謂不當無故殺一大將。似能主持公道者。

李顯忠 宿州之敗。因破宿州時。顯忠欲私其金帛。不以犒軍。與邵宏淵忿爭。遂致師潰。見胡銓傳。今顯忠傳。乃謂宏淵欲發倉庫犒軍。顯忠不可。祇以現錢充賞。士皆不悅。遂致潰。一似顯忠之愼。重倉庫。竝無私意者。然論罪時。顯忠之謫獨重。則其激變非無因也。孝宗紀亦云。顯忠戰於宿州。宏淵不援。顯忠失利。諸將以顯忠宏淵二將不協。遂大潰。是亦為顯忠諱。

岳珂 珂守當塗。制置茶鹽。自詭興利。橫斂百出。商旅不行。國計反詘於初。又置貪刻史。開告訐之門。以罔民而沒其財。民李士賢有稻二千石。囚之半載。見徐慶卿傳。袁甫劾珂貪黷無檢。總餉二十年。焚林竭澤。見袁甫傳。今珂傳俱不載。

史彌遠 韓侂胄用兵。將危及社稷。楊皇后本與侂胄有隙。使榮王曦入奏。寧宗不答。后乃使其弟楊次山。陰結史彌遠錢象祖等謀之。侂胄方早朝。彌遠使中軍統制夏震率兵擁至玉津園擊殺之。彌遠等方以其事入奏。帝猶不信。既知其已死。乃下詔罷其官。然後再下詔誅之。見楊皇后傳。是時彌遠欲誅侂胄。皇后皇子從中主之。彌遠以告象祖。李壁謂有御筆行事。象祖欲奏審。壁恐遲則事泄。彌遠乃使震亟殺之。見韓侂胄傳。合數傳參觀。是當日先誅侂胄。



後奏帝。帝始降旨罷其官。再加誅也。而彌遠傳則謂兵端既開。人皆畏侂胄。不敢言。彌遠力陳危迫之勢。皇子詢即榮入奏。乃罷侂胄。既而臺諫給舍章論侂胄。乃就誅。召彌遠對。咸和殿。似乎先奏請得旨。而後行誅者。此固諱其擅殺之迹。而寧宗本紀亦書開禧三年十一月甲戌。詔韓侂胄輕啓兵端。可罷平章事。乙亥。禮部侍郎史彌遠。以密命。令殿前統制夏震。誅侂胄於天津園。一如彌遠傳所敘。此蓋實錄書法本如是。不欲以大臣擅殺見朝廷之威柄下移也。則彌遠傳諱其擅殺一節。猶似有說。至其擁立理宗一事。則隱諱更甚。寧宗自皇子詢薨後。即養宗室子貴和為皇子。賜名竑。彌遠買美人善琴者納之。使伺皇子動靜。竑嬖之。一日指輿地圖曰。此瓊崖州。他日當置彌遠於此。又嘗書几曰。彌遠當決配八千里。美人以告彌遠。乃陰謀立沂王子貴誠。使鄭清之傳之。寧宗崩。彌遠在禁中。宣貴誠至。柩前舉哀。畢。然後召竑。封為濟王。出居湖州。見濟王夫以先帝預立之儲君。擅敢廢罷。而所立者。並非先帝所識之人。雖以唐宦官之定策國老。門生天子。尚不至如此之恣橫。則彌遠之罪。上通於天。無可諱飾者。乃寧宗本紀。並不著其廢立之罪。但云帝崩。史彌遠傳遺詔立姪貴誠為皇子。更名昀。即皇帝位。封皇子竑為濟陽王。出居湖州。一似倉猝之際。寧宗別有遺命。而彌遠奉行者。蓋其時彌遠正柄政。史館實錄皆所監修。故書法本是如此。而彌遠傳則後人所修。應無所忌。乃亦只以寧宗崩。擁立理宗七字了此公案。而此等奸謀逆節。絕無一語載入。益可見宋舊史皆本各家表誌行狀。據以立傳。而元人修史。又悉仍其舊。略無訂正也。

賈涉 李全既降於宋。與金兵戰。涉為制置使。以朝命許殺太子者賞節度使。殺駙馬者賞觀察使。全以所得金牌上於涉。謂殺四駙馬所得者。涉遂奏授觀察使。其實四駙馬不死也。季先死。全欲併將其軍。詭稱其軍有三千虛籍。覆之可省費。涉遂付以兵。將遣人覆實。全忽報昨聞邳州有警。已遣七千人往赴矣。遂不得覆。全往山東。涉勸農出郊。暮歸。全軍在楚州。

者。遮道不得入。涉使人語全妻楊氏。楊氏揮之退。涉始入城。見李全傳今賈涉傳皆不載。反謂李全得玉璽以獻朝廷。賞以節度使。涉嘆曰。朝廷但知官爵可以得其心。豈知驕則至於不可勸耶。是竝能駕馭羣盜矣。此傳亦必其子似道當國日。史館所立。而元人因之不改者也。

鄭清之 趙范趙葵 端平初。宋遣將孟珙與蒙古兵共滅金。其時宋與蒙古本敦鄰好。竝無嫌隙。忽焉興師入洛。規復中原。兵端遂由此起。據賈似道傳。滅金時。珙與蒙古約。以陳蔡為界。師未還。趙范謀發兵據殺函復中原地。元兵擊敗之。是開釁者。范實為禍首也。然是朝命已令范知開封府。東京留守。其弟葵知應天府。南京留守。全子才知河南府。西京留守。則廟堂已有主此謀者。據王萬傳。鄭清之當國。謀乘虛取河洛。又真德秀傳。鄭清之挑敵兵。民死者數十萬。中外大耗。是此事實。趙范兄弟任之於外。鄭清之主之於內也。乃趙范傳不載其主謀用兵事。反云滅金後。范言於理宗曰。宣和與上海之盟。厥初甚美。迄以取禍。不可不鑑。趙葵傳亦載其所奏云。國家兵力未贍。姑從和議。俟根本既壯。恢復中原。據此則二人又似能審度時勢。不肯輕舉生事者。鄭清之傳亦不載其主謀開邊事。反載理宗因邊警甚懼。清之密疏。謂陛下憂悔太過。恐累剛大之志。則竝似能持危定傾。補救於事後者矣。蓋皆因兵端既起之後。國家之禍日深。作家傳者。各自諱其始謀之失。國史因之故也。至如李宗勉傳。謂端平中出師汴洛。宗勉言不可。崔與之傳。謂朝廷取三京。與之頓足浩嘆。喬行簡傳。謂收復三京。行簡憂事力之不繼。趙汝談傳。謂朝議出師。汝談力言不可。及三京收復。汝談有憂色。未幾洛師果敗。此又因用兵後。禍敗相尋。作傳者各為著其先見之明也。

各傳附會處

李繼隆傳。徐河之捷。遼將裕悅。官名。舊史作于越。率騎八萬來戰。繼隆與尹繼倫列陳以待。敵衆方



食繼倫出不意擊走之。案繼倫傳。是時繼倫領兵巡路。遼裕悅耶律休格舊史名數萬騎遇之。不顧而南。繼倫曰。是蔑視我也。彼捷則將驅我北去。不捷亦且洩怒於我矣。乃銜枚夜躡其後。天未明至徐河。休格方會食將戰。繼倫從陣後出其不意突擊之。休格大敗走。是繼倫之突擊。竝未與繼隆同列陳也。而繼隆傳云與繼倫列陣以待。此不過欲著繼隆之功耳。

余靖傳。狄青破儂知高後。即班師。靖留廣西。遣人入特磨道。獲智高母子三人。獻闕下。案蕭注傳。智高走大理。其母與二弟寓特磨道。注偵得之。悉擒送闕下。是獲智高母子者。乃注之功。余靖特以鎮廣西為其長官耳。而靖傳則以此功全屬之於靖。竝略不及蕭注。李綱傳。徽宗以金兵日逼。命皇太子為開封牧。綱謂吳敏曰。建牧豈非欲委以留守乎。然非傳以位號不可。敏曰。監國可乎。綱以肅宗靈武建號。不出於明皇。使後世惜之為對。明日敏遂以禪位事進說。并謂李綱亦有此議。是傳位之議。本起於綱也。案敏傳。徽宗將內禪。蔡攸探知上意。引敏入對。遂并薦綱入見。則內禪之意。本出於徽宗。蔡攸傳。帝欲內禪。親書傳位東宮字。授李邦彥。邦彥不敢承。以付攸。攸屬其客吳敏。遂定議。又李熙靖傳。道君皇帝曰。外人以內禪為吳敏功。不知乃自吾意。不然言者且滅族矣。合數傳觀之。是內禪本出於徽宗。而綱傳所云。或非實事也。或綱議適與帝合。遂贊決耶。

案張端義貴耳錄。徽宗聞金人破燕。即命當直學士黃中。令草詔罪己。并傳位太子。明日詔出。淵聖登極。又記徽宗語。謂詔中處分。蔡攸盡道不是。只傳位一事。要做他功勞。此亦見內禪出自帝意之一證。

李綱傳。出為湖廣宣撫使。荆湖江湘之間。盜賊不可勝計。多者至數萬人。綱悉蕩平之。又張浚傳。浚至潭州。楊么賊衆二十餘萬。相繼來降。湖寇盡平。案是時長沙有劉忠。擁衆數萬。

韓世忠誅之。曹成驢湖湘道賀等州。岳飛平之。楊么又飛所擊斬者也。今悉歸功於綱與浚。而諸將之攻討。略不及焉。雖綱為宣撫。浚為督視。諸將之功。即其功。然竟抹煞諸將。全以蕩平諸賊為綱與浚之功。且綱傳則功屬綱。竝不及浚。浚傳則功屬浚。又不及綱。

岳飛傳。軍中得烏珠舊史名。諜者飛伴認為己所遣之諜。作蠟書約豫同誅烏珠。封其股納之。令致豫諜者歸。以書示烏珠。烏珠大驚。馳白其主。遂廢豫。又張浚傳。鄺瓊叛奔劉豫。浚亟遣蠟書貽瓊。金人果疑豫。尋廢之。案劉豫先賂金元帥達蘭舊史名。得立為帝。後出師侵宋。輒敗。屢請金兵為援。金領三省事宗磐曰。先帝立豫者。欲豫開疆保境。我得按兵息民也。

今豫進不能取。退不能守。兵連禍結。從之則豫收其利。而我受其弊。奈何許之。於是始有廢豫意。會豫又請兵。金乃令達蘭烏珠偽稱南侵。至汴宣詔廢之。是豫之廢。因其進不能取。且屢請兵也。今乃以歸功於張浚。岳飛之兩封蠟書。真所謂牽連附會者也。王倫傳。紹興七年。倫使金。至睢陽。劉

豫欲案觀國書。倫力拒之。至涿州。見達蘭。具言豫欲索國書。無狀。且謂豫忍背本。他日安保不背大國。是年冬。豫遂廢。是又以廢豫歸功於倫之奉使矣。李顯忠傳。金主亮南侵。將濟江。王權自和州遁歸。詔以顯忠代權。命虞允文趣顯忠交軍。於是有采石之捷。顯忠遣萬人渡江。盡復淮西州郡。亮切責諸將。諸將弑之。案虞允文傳。允

文奉命往趣顯忠赴權軍。允文至采石。權已去。顯忠未來。我師三五星散。解鞍坐道旁。允文念坐待顯忠。則悞國事。遂招諸將。勉以忠義。諸將皆死戰。得大捷。明日又敗敵於楊林口。顯忠始至。是采石之捷。無與於顯忠也。而顯忠傳。謂因趣顯忠交軍。故有此捷。遂若功出於顯

忠者。亮因采石之敗。即趨瓜洲。剋日渡江。未渡而被弑。亦非關顯忠之復淮西。而責諸將也。且是時海陵去采石。即至瓜洲。其間時日有幾。顯忠豈能盡復淮西。當是海陵被弑後。乘金兵之退而復之耳。乃必謂海陵因顯忠復淮西。切責諸將遂被弑。此又曲說也。

賈涉傳。李全取海州及密濰。收登萊二州。又結青州張林。以濱棣淄濟沂等州來降。自是恩



博景德至邢洛十餘州相繼請降。涉傳檄中原。以地來歸。及反戈自效者。朝廷爵土無所吝。案是時金國衰亂。盜賊各分據。李全乘此北行。金元帥張林據青莒密登萊濰淄濱棣寧海濟南等州。全往招之。遂來降。其表云。舉七十城之全齊。歸三百年之舊主。是時實李全功也。而係之涉傳。竟似涉發蹤指示者。

廿二史劄記卷二十三終

廿二史劄記卷二十四

陽湖趙翼撰

宋史數人共事傳各專功

貝州王則之亂。討平之者。明鑑文彥博也。而鄭驥傳則云。王則反。討平之。竟似驥一人之功矣。又楊燧傳。謂燧攻貝州。穴城以入。賊平。功第一。劉闡傳。又謂闡從攻貝州。穿地道。闡先入。衆始從。遂登陴。引繩度師。遲明師畢入。貝州平。功第一。則即穴城一事。又各擅第一功矣。夏竦卒。賜諡文正。司馬光。劉敞。俱駁之。光傳曰。光謂諡之美者。莫如文正。竦何人。足以當之。乃改諡文莊。略不及敞之同議。則似光一人所駁矣。敞傳又曰。敞疏三上。乃改諡文莊。亦略不及光。又似敞一人所改矣。孝宗崩。光宗以疾不能過宮。成服。趙汝愚擁立寧宗一事。據汝愚及趙彥逾傳。是時宰相留正去位。中外洶洶。汝愚謀立嘉王。宗。即寧宗。欲倚殿帥郭杲為用。以告彥逾。彥逾嘗有德於杲。遂承命以汝愚謀告杲。杲乃領兵衛寧宗即位。是此謀本出汝愚。而彥逾共成之。厥後汝愚因此擁立之功。為侂胄所忌。得禍最烈。正以此也。而葉適傳。則謂是時趙汝愚計無所出。適責知閣門事。蔡必勝不得坐視。蔡乃與宣贊舍人傅昌朝。知內侍省關禮。知閣門事韓侂胄三人定議。適亟白汝愚。汝愚乃遣侂胄關禮。以內禪事奏。太皇太后。明日因禪祭。遂立嘉王即位。則此謀又係葉適與蔡必勝等定議。後以告汝愚者矣。按紹熙其首謀。畫策。或紹熙行禮記所云。非當日實事。

宋史數人共事傳各專功



宋史各傳錯謬處

袁彥傳有劉仁贍降之語。張保續傳亦有劉仁贍率將卒出降之語。薛居正五代史周顯德四年。世宗親征壽州。劉仁贍上表乞降。是薛史原有此語。然薛史僅鈔實錄而未及詳考事實。至歐史則已辨明仁贍之不降。實副使孫羽以仁贍病篤詐為其書以降者。所以特列仁贍於死節傳。今宋史袁彥等傳尚云然。豈元人修史時并歐史亦不檢對耶。韓世忠傳世忠屯焦山。謂烏珠舊史名元尤至。必登金山龍王廟觀虛實。乃今百人伏廟中。百人伏岸側。果有五騎闖入。廟兵喜先鼓而出。僅得二人。逸其三。中有絳袍玉帶。既墜而馳者。訪之即烏珠也。按金山在水中。豈能騎而入。又騎而逃。此必誤也。輿地記勝謂伏兵北固山龍王廟。此較近理。乃作傳者於此等處亦不訂正。曹友聞傳元兵攻武休關。敗都統李顯忠軍。遂入興元。按顯忠係紹興中歸宋。卒於乾道中。距友聞與蒙古兵戰時已六七十年。安得尙統軍耶。或另有一李顯忠。然史又不分析言之。陳宜中傳遣張全合尹玉麻士龍援常州。玉士龍皆戰死。全不發一矢奔還。文天祥請誅之。宜中釋不問。文天祥傳亦謂朱華尹玉等戰五牧。敗兵渡水。挽全軍舟。全軍斬其指。皆溺死。全不發一矢走歸。是張全竝未戰也。而尹玉傳乃云。淮將張全。廣將朱華。大戰於五牧。則全又在力戰之內矣。功罪混淆。莫此為甚。又劉師勇與姚嘗守常州。數月城陷。師勇拔柵戰且行。其弟馬慙慙躍不能出。師勇舉手與訣而去。是師勇守常至城破始去也。事見張世傑傳。及元史伯顏傳并鄭所南集。而王安節傳則謂師勇復常州。後即赴平江。使安節在常拒守。又似師勇未嘗與常州之難者。此又一史中自相矛盾之處也。呂蒙正傳贊謂國朝三次入相者。惟趙普呂蒙正。然蒙正之後。又有張士遜呂夷簡文彥博。皆三次入相。蔡京并四次入相。蒙正傳贊所云亦未深考。

宋史列傳又有遺漏者

一代之臣甚多。自非大奸大忠。原不能悉載。然有必宜載而反遺漏者。俞文豹清夜錄靖康之變。上皇將赴金軍。中書舍人姜堯臣極諫不可往。番使以骨朶擊之。死。曹助北狩錄四太子求王婉容為黏罕子婦。婉容自刎死。此二事忠節凜然。史傳所必宜載者。而列傳皆無之。彭義斌自山東起義。隨李全來歸。即與趙范趙葵破金兵。義斌獨擊至下灣渡。掩金人於淮。見實傳。後因李全亂。楚州制置使許國走死。義斌斬全使大罵。誓必報此讐。會全攻恩州。義斌即出戰。敗之。全求制置使徐晞稷書與義斌連和。義斌致書趙善湘曰。不誅全。恢復不成。但能遣兵扼淮。斷其南路。必可滅賊。賦平之後。義斌戰河北盱眙。諸將戰河南神州。可復也。見李全傳。趙范亦謂善湘曰。義斌燧全如山壓卵。然必請而後討者。知尊朝廷也。見趙全貽書制置司。誣義斌叛。朝廷雖知義斌之功。憚全未欲行賞。義斌俟朝命不至。拓地而北。進攻東平。嚴實潛求救於蒙古。將博羅罕。而與義斌連和。義斌亦欲藉實取河朔。而後圖之。遂以兄禮事實。不奪其兵。而留青崖峒所掠實之家屬。不還。進攻真定。降金將武仙。衆至數十萬。既下真定。道西山而北。博羅罕兵始至。義斌分兵與實。陽助而陰伺之。實危急。即赴博羅罕軍。與之合。與義斌戰於內黃之五馬山。義斌兵敗被執。史天澤說之降。義斌厲聲曰。我大宋臣也。肯為他人屬耶。遂死之。見元史嚴實傳。後朝廷討李全。詔有云。彭義斌以忠拓境。大展皇略。已加贈典追封。見李全傳。是義斌之忠義勳績。比趙立李寶魏勝等更有過之。則宋史何得無傳。乃僅散見於李全等傳。而不另立專傳。豈非闕漏耶。又吳縝作新唐書糾謬。至今尙傳其書。而宋史無傳。劉克莊詩集文集為宋末一大家。今亦無傳。此皆史家之疎也。



宋史排次失當處

宋史又有不必立傳者。歐公五代史不立韓通傳。為本朝諱也。宋史補之。而以李筠李重進並列。為周三臣是矣。他如張從恩。扈彥珂。薛懷讓。藥元福。皆五代時人。從恩入宋。改封許國公。其入宋史可也。彥珂懷讓元福當宋初。即病歿。趙昂李穀。寶貞固。李濤。趙上交。張錫。張鑄。邊歸讜。劉濤等。並未官於宋。則傳之何為。或以五代史無傳。不得不於宋史存之。然李穀李濤在五代。尚有事蹟可紀。其餘本不足書。乃一概入之列傳。仍不過敘其歷官。如今仕途之履歷而已。此亦成何史策。宋臣中宣繒。別之傑。鄒應龍。金淵。張礪。饒虎臣。戴慶炯等。亦但敘履歷。絕無一言一事。則傳之何為。其他編次之失。更有當改定者。張憲。牛皋。楊再興。皆岳飛部將。舊史本附飛傳。後元人修史。另編為卷。說已見前。劉子羽。胡世將。與吳玠兄弟在蜀。同功共事。應與玠相次。今亦各為卷。此猶曰官有文武之別也。解元。成閔。皆韓世忠部將。宜附世忠後。郭浩。楊政。皆吳氏部將。用兵與吳氏相終始。宜附玠後。今皆另編為卷。蓋亦元人改舊史而排次耳。王友直。李寶。皆自北起義來歸。既同列一卷。李顯忠亦自鄜延起事。間關數國。冒死南投。功名尤著。魏勝起兵。漣水。據海州。以歸。與寶共事。此數人者。應彙列為一卷。以顯忠為首。勝寶友直次之。而今皆各為卷。秦檜擅國十九年。凡居政府者。莫不以微忤斥去。惟王次翁始終為檜所憐。則次翁應附檜傳。後陳自強之附韓侂胄。與次翁之附秦檜。一也。則自強亦應附侂胄後。乃皆編入列傳。不著奸黨何也。權邦彥。徽欽時人。卒於高宗紹興三年。乃廁於寧宗諸臣之列。汪若海。張運。柳約。亦皆欽高時人。而廁於理宗諸臣之列。林勳。劉才邵等。皆高孝時人。並廁於德祐末造。李庭芝諸人之列。不幾顛倒時代乎。南唐世家。既立韓熙載傳矣。劉仁贍。皇甫暉。姚鳳。皆完節於南唐者。何以不為立傳。以附於熙載後。南唐

徐鉉。北漢楊業。後仕於宋。既入之宋臣傳矣。南唐之周惟簡。西蜀之歐陽迴。亦皆仕宋。歷官多年。何以又不入宋臣傳。而仍附南唐西蜀世家之後乎。此皆自亂其例者。想見元人修史。草率從事。徒以意為排次。不復詳細審訂也。

史家一人兩傳

史傳人物太多。修之者非一人。不暇彼此審訂。遂有一人而重出者。如顧寧人指出元史列傳中第八卷之速不台。即第九卷之雪不台。十八卷之完者都。即二十卷之完者拔都。三十卷之石抹也先。即三十九卷之石抹阿辛。皆是一人兩傳。可見修史者之草率從事。然蒙古以國語為名。譯作漢字。但取其音之同。而字不必畫一。致有此誤。猶有說也。若舊唐書列傳之七十二。既有楊朝晟。九十四又有楊朝晟。五十一既有王求禮。一百三十七又有王求禮。宋史列傳之一百十六。既有李熙靖。二百十二又有李熙靖。考其事蹟。實係一人。並非偶同姓名者。是修史之草率。更甚於明修元史時。至如遼史有三耶律托卜嘉。舊史名耶律。不也。一在列傳第二十六。一在第二十九。一在第四十一。又有兩蕭罕嘉努。舊史名蕭。一在列傳第二十六。一在第三十三。又有兩蕭塔喇噶。舊史名蕭。一在列傳第十五。一在第二十二。金史又有兩達蘭。舊史名。一在列傳第十。又名古雲。一在第十五。又有四羅索。舊史名。一在列傳第十。其三在五十七。同為一傳。當時已以大婁室中婁室小婁室別之。又有兩額爾克。舊史名。亦同為一傳。當時亦有草火訛可。板子訛可之別。此則名雖同而人各別。蓋遼金元皆以國語為名。諸人國語之名本同故耳。至如金史之碎不剌。即元史之速不台。即元將之圍汴京。北去。宋史之兀良哈解。即元史之兀良合台。即征交趾。由西北歸者。此又修史時各據所譯漢字入傳。不暇彼此訂正也。



監板宋史脫誤處

余家所有宋史二本。係前明南北監板各一。其中誤字落句不一而足。如尤表傳。高宗崩。靈駕將發引。忽議配享。洪邁請用呂頤浩。韓世忠。趙鼎。張浚。表言祖宗典故。既耐然後議配享。今忽定於靈駕發引之前。不加詳議。恐無以服勳臣子孫之心。乃詔更議。後卒用四人者。時楊萬里亦謂張浚當配食。爭之。不從。補外。表轉禮部侍郎。云云。按萬里所著誠齋揮塵錄。謂洪景盧以浚殺曲端一事。輟其配享。是邁乃輟浚者。今傳反云邁請用浚。又按楊萬里傳。高宗崩。洪邁不俟集議。配享。獨以呂頤浩等姓名上。萬里疏詆之。力言張浚當與。是邁本未以浚入配享。尤表傳所云張浚。當是張俊之誤也。配享兼用文武。邁既請用呂頤浩。趙鼎。兩文臣。則武臣必是韓世忠。張俊耳。又曹勛傳。紹興二十九年。勛副王倫為稱謝使。至金。金主將侵淮。助與倫歸。言和好無他。按倫自建炎元年。即為通問使。至金。紹興二年。粘罕使倫歸報。七年再使金。回。八年又往。偕張通古來。九年再充使。奉迎梓宮。太后被拘河間。十四年。金人欲官之。不從。乃縊死。是倫之死。在紹興十四年。安得二十九年。尚有與曹勛同使之事。及閱王綸傳。二十八年。金將渝盟。邊報杳至。二十九年。朝論欲遣泛使覘之。綸請行。曹勛副之。至金館禮甚隆。歸言鄰國恭順。皆陛下威德所致。然是時金已謀犯江。特以善意給綸耳。據此始知助所副者乃王綸。非王倫也。又張邵傳。邵初使金。遇秦檜於濰州。及歸。上書言檜忠節。後其弟祁下獄。將株連邵。會檜死得免。此數語上下不貫。邵既有德於檜。檜自黨護之。檜死則不能免株連矣。乃反云檜死得免。此必有脫落字句處。皆刊刻時校讐不精之故也。當別求善本改之。

趙良嗣不應入奸臣傳

馬植燕人。以取燕策于童貫。入奏。徽宗寵之。賜姓名李良嗣。又賜以國姓。圖燕之議由此起。斯固召禍首謀。然良嗣但建此策。聽不聽則在乎廟堂之持議也。及良嗣奉使由海道至金。與金太祖約。金取中京大定府。宋取燕中析津府。自是凡數往返。會金太祖殂。金人欲變元約。但予以燕京及薊景檀順涿易六州。良嗣言元約山後山前十七州。今如此信義安在。金人不從。良嗣又奉使往曰。本朝徇大國多矣。豈平灤一事不能相從耶。金又不從。俟良嗣又至。以答書稿示良嗣曰。燕京係我朝兵力攻下。其租稅當輸我朝。良嗣曰。租隨地出。豈有予地而不予租稅者。金人曰。燕租六百萬。今只取一百萬。不然。還我涿易。良嗣曰。我朝自以兵下涿易。今乃云爾。豈無曲直耶。是良嗣銜命往來。能以口舌抗強鄰。通鑑綱目。故宋史本傳。亦謂往返六七。頗能緩頰盡心。與金爭議。使無收納張覺之事。金人亦難遽起兵端。而中華疆土。復歸版圖。良嗣方且當入功臣傳中。乃張覺之叛。金來降。主國計者。貪近利而味遠計。輒輕為招納。良嗣方苦口爭之。以為失歡強鄰。後不可悔。而舉朝醉夢。卒不聽從。果致金兵得以藉口。不惟新得之地盡失之。并至鑿與北狩。神州陸沈。此則王黼輩之貪功喜事。謀國不臧。於良嗣無與也。乃事後追論禍始。坐以重辟。已不免失刑。修史者又入之奸臣傳中。與蔡京等同列。殊非平情之論也。

王倫

王倫使金。問關百死。緒成和議。世徒以胡銓疏斥其狎邪小人。市井無賴。張燾疏斥其虛誕。許忻疏斥其賣國。遂衆口一詞。以為非善類。甚至史傳亦有「家貧無行。數犯法。幸免之語。不



知此特出於一時儒生不主和議者之詆譏。而論世者則當諒其心。記其功而憫其節也。倫本王旦弟。最之後。初非市儈里魁。其奉使在建炎元年。是時金人方擄二帝北去。凶燄正熾。誰敢身入虎口。倫獨慷慨請行。其膽勇已絕出流輩。及至金。被留。久之。尼瑪哈粘罕名使烏陵思謀至。倫即以和議動之。欲使其還兩宮。歸故地。尼瑪哈雖不答。然和議實肇端於此。即洪皓之以畏天保。天語悟室。猶在後也。已而尼瑪哈有許和意。紹興二年。先遣倫歸。次年即遣李永壽王翊來。值劉豫內犯。議遂中格。七年。徽宗鄭后計至。復遣倫充使奉迎。并乞河南陝西地。是冬。豫既廢。倫入見金主。金遂以烏陵思謀。石慶。偕倫來議。八年。再使金。金即遣張通古等來。許歸梓宮。母后。及河南陝西地。九年。倫充使再往金。竟以河南陝西地先付之。設使金不渝盟。則存歿俱歸。境土得復。倫之功。豈南渡文武諸臣所可及哉。祇以金人自悔失策。旋毀前議。倫遂被拘於河間。其後和議再成。遂不得身預其事。然創議於敵。勢方張之時。與收功於兩國將平之日。其難易既不同。且倫之議和。則請帝后疆土全歸。而未議及歲幣。迨秦檜主和。則寸土不歸。反歲輸銀絹二十五萬兩。匹徒得一母后二旅。柩而已。其難易更不可以道里計。而況李永壽等之來。賴倫以雲中舊識。稍損其驕倨。張通古等之來。又賴倫委曲調護。使秦檜就館受書。以免屈萬乘之尊。是其周旋於事勢難處之會。即朱弁洪皓輩。有不能及者。蓋弁皓僅完臣節。倫則兼濟國事。其所任為獨難。故皓歸亦極言倫以身殉國。棄之不取。緩急何以使人實深服。其心力俱殫也。及被拘六年。金人欲用為平灤三路都轉運使。其時兩國和議久成。化讐為好。即受金官職。亦非反顏事仇。況家本莘縣。鄉土已屬於金。於私計亦甚便。乃力拒不受。甘被其縊死。金史謂倫已受官。又辭。乃縊死。宋史則謂不受官。不惟謀國之忠。歷百艱而不顧。而殉國之烈。甘一死而不撓。視弁皓等得歸。故國身受寵榮者。其身世尤不幸。志節尤可悲也。而區區身後之名。又以市井無賴數語。傳為口實。至今耳。

食者。幾視為倖功裨閭之人。此不可不急為別白也。

宋初降王子弟布滿中外

角力而滅其國。角材而臣其人。未有不猜防疑忌。而至於殺戮者。獨宋初不然。周保權被擒。授千牛衛上將軍。葺京城舊邸院居之。湖南高繼冲納土。但令王仁贍知軍府事。而仍令繼冲鎮其地。迨繼冲入朝。改授武寧軍節度使。徐宿觀察使。鎮彭門。凡十年。其叔高保衡。歷知宿懷同汝四州。及光化軍。其臣孫光憲亦官黃州刺史。梁延嗣亦官復州防禦使。荆南劉銀戰敗被擒。仍封恩赦侯。賜第居京師。進封彭城郡公。南漢李煜。城破始降。封違命侯。居京師。後封隴西郡公。其子弟多授大將軍衛將軍等官。從善為通許監軍。從誦歷知隨復成三州。季操歷知淮陽漣水二軍。蔡舒二州。仲寓官郢州刺史。十餘年。其臣徐鉉等皆官於京師。更無論也。南唐孟昶既降。賜第京師。封秦國公。尋卒。子元喆。歷知貝定二州。又為鎮州兵馬鈐轄。移滑州。以病求小州。乃移滁州。而卒。元珪。歷官宋曹兗鄆都巡檢。出知滑州。其臣伊審徵官靜難軍節度使。移鎮延安。趙彥韜授興州刺史。移澧州。母守素。歷知趙州容州。兼本管諸州水陸轉運使。西蜀陳洪進納土。後封杞國公。賜第居京師。子文顯。仍知泉州。移知青齊廬三州。文顯歷知房康同耀徐衡六州。文顯歷知海濮濰沂黃五州。文瑛。歷知登舒二州。漳泉。錢俶納土。後封淮海國王。賜禮賢宅。居京師。後出為武勝軍節度使。改封南陽國王。子惟濬。屢加諸鎮節度使。常居京師。惟治。知真定軍府。兼兵馬都部署。惟濟。歷知絳潞二州。又為永州團練使。改成德軍。惟演。仕至同中書門下平章事。出判許州。俶弟儼。判和州。吳。歷知宋壽泗宿四州。其臣僚孫承祐。知大名府。改知滑州。沈承禮。知密州。吳越劉繼元。降。封彭城郡公。賜京城甲第一區。授保康軍節度使。其臣李暉。歷知廣許孟三州。馬峰。分司西京。北漢。統計



諸降王及諸降臣無一不保全者此等僭偽竊據之徒歸降本非素志況新造之邦民志未定國勢易搖豈能一無顧慮乃其主皆賜第京師居肘腋之地其子弟臣僚又皆分職州郡掌兵民之權而廟堂之上不聞操切猜防入仕新朝者亦帖然各效其勤無反側不靖之意於此見宋太祖太宗并包天下之大度震服一世之神威非詐力從事者所可及也後之論者往往謂宋開國之初即失於弱豈知不恃詐力以為強者其強更甚也哉

### 宋諸帝御集皆建閣藏貯

宋諸帝御集各建閣藏貯自真宗始真宗晚年以所著詩文示丁謂等曰朕聽覽之下以翰墨自娛雖不足垂範亦平生遊心於此也謂等請鏤板宣布共七百二十二卷竝作天章閣貯之自後諸帝御集皆倣此例而閣名各不相襲英宗建寶文閣藏仁宗御集神宗以英宗御書亦附於內哲宗建顯謨閣藏神宗御集元祐二年已詔蘇轍劉攽等編次神宗御集四年徽宗建徽猷閣藏哲宗御集高宗建敷文閣藏徽宗御集孝宗建煥章閣藏高宗御集寧宗建華文閣藏孝宗御集又建寶謨閣藏光宗御集理宗建寶章閣藏寧宗御集度宗建顯文閣藏理宗御集每帝各建一閣雖頗繁費然亦足昭敬謹且見諸帝文治之盛也又每閣皆置學士直學士待制等官俾專職掌以上皆見本紀如神宗以章衡為寶文閣待制謂之曰卿為仁宗朝魁甲寶文藏御集之處未始除人今以處卿是也見衡傳

### 錄名臣後

真宗錄唐白居易後利用為河南府教授元稹七世孫為台州司馬裴度孫坦為鄭州助教又錄唐長孫無忌段秀實等孫皆教官仁宗錄唐狄仁傑張九齡郭子儀顏真卿後神宗錄

唐魏徵狄仁傑段秀實後皆見本紀按舊唐書段秀實傳自貞元後凡赦書褒忠必以秀實為首又貞元六年赦書授顏真卿一子五品官文宗時又以真卿曾孫宏式為同州參軍五代史劉遂清傳唐朝渾郭顏段之後每一赦出以一子出身率為常制是唐及五代時已有此制宋蓋仿而行之也

### 宋皇后所生太子皆不吉

真宗由皇太子登極其母則李賢妃也仁宗由皇太子登極其母則李宸妃也神宗之為皇太子其母本高皇后然生帝時尚在英宗潛邸未為后也哲宗由皇太子登極其母朱德妃亦非后也惟欽宗生時其母王氏已冊為后故欽宗以嫡長為皇太子後即位竟北遷於金南渡後光宗母係郭皇后寧宗母係李皇后然誕育時亦皆在潛邸未為后也惟度宗后全氏正位中宮後生德祐帝咸淳三年立全氏七年生帝甫登極即國亡統計有宋一代皇后正位後所生太子祇靖康德祐二帝而二帝皆為失國之君此理之不可解者又有已立為太子而不得繼統者太宗之昭成太子元禧真宗之悼獻太子祐哲宗之獻愍太子茂猶皆死後追贈未嘗及身為儲君也其生而立為太子者欽宗嫡子諶朱后所生時雖尚未為后然正妃也故諶為嫡皇孫當時已稱祖宗以來所未有欽宗登極後立為皇太子後竟隨北去高宗之元懿太子勇潘賢妃所生苗劉之變為所擁立改元明受高宗復辟後立為皇太子未幾殤孝宗之莊文太子楷郭后所生嫡長子乾道元年立為皇太子年二十四薨寧宗之景獻太子詢本宗室子開禧初立為皇太子年二十九薨再育宗室子貴和為皇子賜名竑雖未加太子之號然已居儲貳繼體攸屬後為史彌遠擅廢降封鎮王不得其死是不惟正后所生太子不吉即非正后所生而冊為太子者亦不皆吉也



宋初考古之學

考古之學。至南宋最精博。如鄭樵、李燾、王應麟、馬貴與等是也。然宋初制誥之臣。已多博雅。乾德三年。范質等三相俱罷。將獨相趙普。而無宰相書敕。帝以問陶穀。穀曰。古來宰相。未嘗虛位。惟唐文宗甘露之變。數日無相。左僕射令狐楚奉行。今尚書亦南省官。可以書敕。寶儀曰。非承平令典也。皇弟開封尹。同平章事。即宰相也。可書敕。從之。儀之論固是。然古來偶有朝無宰相之故事。穀獨能記之。又普獨相。後太祖欲置之副。而難其名稱。問穀。下宰相一等。有何官。穀曰。唐有參知機務。參知政事。遂以薛居正、呂餘慶為參知政事。倉猝一問。即能援引故事。可見熟於典故。腹笥中無不有也。太祖改年號乾德。以為古所未有。後於宮中得乾德錢。以問寶儀。儀對以魏蜀。曾有此號。詢知果自蜀中來者。始嘆曰。宰相須用讀書人。太宗時。皇子元傑封吳王。行揚州、潤州、大都督府長史。張洎謂六朝皇子封王。以郡為國。置傅相。內史等。佐王為治。或王子不之國。則內史行郡事。唐改為長史。凡親王授大都督。不之鎮。而朝命大臣臨郡者。即有長史之號。謂親王之上佐也。如段文昌出鎮揚州。云淮南節度副大使。知節度事。兼揚州大都督府長史。李載義出鎮幽州。云盧龍軍副大使。知節度事。兼幽州大都督府長史是也。今王既為大都督。又為長史。則是王自為上佐矣。即此數條。可見諸臣於朝章國典。無不究心有素。倉猝問。即有據依。足資朝廷制作之討論也。又錢俶薨。諡忠懿。張洎為覆狀。有受寵若驚。居元無悔語。張必駁之。謂元龍無悔。非臣子所宜言。洎對狀曰。易之九三。王弼注云。處下體之極。居上體之下。因時而惕。故愈於上九之亢。正義云。九三居下體之極。是人臣之體。其能免元龍之咎者。以慎守免禍也。是人臣能免元極之禍也。漢書梁商傳贊云。地居元滿。而能以謹厚自終。楊植作許由碑云。鑄銖九有元極。一夫杜鴻漸讓元帥。

表云。祿位元極。過踰涯量。盧杞作郭子儀碑云。居元無悔。其心益降。張說作祁國公碑云。一無目牛之全。一無元龍之悔。皆就人臣而言也。乃詔洎援引故實。歷歷有據。罰必一月俸。以一亢字而援引典故。辯博如此。其學可知。神宗有殿名宣光。哲宗問林希。古有此名否。希對曰。此石勒殿名也。乃更名顯承。此又諸臣熟於經史之學。原原本本。非以口給也。自朝章國故之不講。則有如蔡京誤以唐太宗為宋太宗。而廢尚書令者矣。徽宗謂尚書令太宗曾為之。未嘗為尚書令。惟唐太宗曾為之。今誤以唐太宗為宋太宗。乃蔡京當國。不學無術之故也。見京傳。自經義史學之不講。則有如章惇謂北郊祀地。只可謂之社。而欲廢北郊大禮者矣。惇以北郊止可謂之社。黃履曰。天子祭天地。皆稱郊。故詩序之。遂定。然則北宋文學之臣。稽典故。援經史。俱確有據依。豈後代所可及哉。

宋初嚴懲賊吏

宋以忠厚開國。凡罪罰悉從輕減。獨於治賊吏最嚴。蓋宋祖親見五代時貪吏恣橫。民不聊生。故御極以後。用重法治之。所以塞濁亂之源也。按本紀。太祖建隆二年。大名府主簿郭顛。坐賊棄市。乾德三年。員外郎李岳陳偃殿直成德鈞。皆坐賊棄市。蔡河綱官王訓等。以糠土雜軍糧。磔於市。太子中舍王治。坐受賊殺人棄市。開寶三年。將軍石延祚坐監倉與吏為姦。賊棄市。四年。將軍桑進興。洗馬王元吉。侍御史張穆。左拾遺張恂。皆坐賊棄市。劉祺賊輕。杖流海島。六年。中允郭思齊。觀察判官崔絢。錄事參軍馬德林。俱坐賊棄市。此太祖時法令也。太宗太平興國三年。泗州錄事參軍徐璧。坐監倉受賄出虛券棄市。侍御史趙承嗣。隱官錢棄市。又詔諸職官。以賊論罪。雖遇赦不得殺。永為定制。中書令史李知古。坐受賊改法杖殺之。詹事丞徐選。坐賊杖殺之。御史張白。以官錢糶賣棄市。汴河主糧吏。奪漕軍糧。斷其腕。徇河干三日斬之。是太宗法令猶未弛。然寇準謂祖吉王淮。皆侮法受賊。吉賊少乃伏誅。淮以參



政王沔之弟盜主守財至千萬止杖豈非不平耶則是時已有執法曲縱者至真宗時棄市之法不復見惟杖流海島如員外郎盛梁受贓流崖州著作郎高濤以贓杖脊配沙門島蓋比國初已弛縱矣仁宗本紀則并杖流之例亦不復見蘇頌傳知金州張仲宣坐枉法贓應死法官援李希輔例杖脊配海島頌奏仲宣贓少應減神宗曰免杖而黥之可乎頌引刑不上大夫為對遂免黥永為定制自是宋代命官犯贓抵死者例不加刑當時論者謂頌一言而除黥刺以為仁人之言其利溥見頌傳益可見姑息成風反以庇奸養貪為善政其於不肖官吏之非法橫取蓋已不甚深求繼以青苗免役之培克花石綱之攘奪遂致民怨沸騰盜賊競起宋江等三十六人橫行河朔官軍萬人不敢捕方臘之亂凡得官吏必恣行殺戮斷截肢體探取肺肝或熬以鼎油或射以勁矢備極慘毒以泄其憤陳遵疏所謂貪污嗜利之人倚法侵牟不知紀極怨痛結於民心故至此也見陳遵及方臘傳南渡後高宗雖有詔按察官歲上所發摘贓吏姓名以為殿最然本紀未見治罪之人惟孝宗時上元縣李允升犯贓貸死杖脊刺面配惠州牢城籍其貲失察上司俱降黜廣東提刑石敦義犯贓刺面配柳州籍其家知潮州會造犯贓貸死南雄編管籍其家參知政事錢良臣以失舉贓吏奪三官是時法令雖比國初稍輕而從積玩之後有此整飭風氣亦為之一變真德秀所謂乾道淳熙間有位於朝者以饋賂及門為恥受任於外者以苞苴入都為恥皆孝宗之遺烈也理宗雖亦詔監司以半歲將劾去贓吏之數來上視多寡為殿最守臣助監司所不及則以一歲為殿最見本紀是亦頗能留意綜核者然是時湯燾疏言苞苴有所未有之物故民罹昔所未有之害苞苴有不可勝窮之費故民有不可勝窮之憂見燾傳則知廟堂之詔已為具文而官吏之賂削如故也賈似道亦疏言裕財之道莫急於去贓吏藝祖杖殺朝堂孝宗真決刺面今當而行之見似道傳以似道之狂謬尙知贓吏之不可不重懲而追思藝祖孝宗之遺法然則是

### 廿二史劄記卷二十五

陽湖趙翼撰

#### 宋封王之制

宋初臣下少封王者石守信卒封武威郡王王審琦卒封琅琊郡王高懷德卒封渤海郡王王景生封太原郡王卒封岐王此皆前代功臣位本崇重一旦傾心與朝宣力藩鎮故榮之以茅土也其佐命功臣惟趙普卒封真定郡王曹彬卒封濟陽郡王而已普後加封韓王至徽宗時追封王安石舒王蔡確汝南郡王封爵始濫時宰相何執中卒封清源郡王鄭居中卒封華原郡王甚至奄人童貫亦生封廣陽郡王名器猥褻莫此為甚南渡後武臣封王者韓世忠生封咸安郡王後追封蘄王張俊生封清河郡王後追封循王楊存中生封同安郡王後追封和王吳玠生封新安郡王後追封信王其死後追封者吳玠涪王岳飛鄂王寧宗時封劉光世安成郡王孝宗時封又加封鄜王文臣封王者秦檜生封建康郡王後追封申王史浩追封會稽郡王又加衛王韓侂胄生封平原郡王史彌遠生封會稽郡王死又追封越王鄭清之亦追封魏郡王諸武臣多戰功疏封尙有說文臣以權寵得之亦太猥褻矣此外則后族有封王者其始皆子孫尊崇母后之族如太祖追封杜太后弟審進為京兆郡王真宗追封母李太后父英常山郡王仁宗追封真宗潘后父美鄭王郭后弟守文譙王是也章獻明肅劉后父通追封魏王則以后垂簾故李宸妃弟用和封隴西郡王亦以仁宗生母故惟仁宗張貴妃追册溫成皇后父堯封封清河郡王此為人主自封后族之始仁宗慈聖光獻曹后乃曹斌女孫神



宗時追封其曾祖芸魏王。祖彬韓王。父玘吳王。后弟侑亦封濟陽郡王。則并及四代矣。英宗宣仁聖烈高后。神宗追封其父繼勳康王。兄遵甫楚王。高宗又追封后弟士遜士林。姪公紀公繪皆為王。神宗欽聖向后弟宗回永陽郡王。宗良永嘉郡王。皆徽宗時封。哲宗孟后父彥弼咸寧郡王。弟忠厚信安郡王。則高宗時封。徽宗王后。鄭后無封。章賢妃為高宗生母。高宗封其弟淵平樂郡王。欽宗朱后父伯材恩平郡王。則欽宗所封也。高宗吳后父近吳王。弟益大寧郡王。蓋新興郡王。孝宗郭后父城榮王。弟師瑀永寧郡王。皆子為帝後所封。光宗李后三代皆封王。則光宗時封。寧宗楊后弟次山永陽郡王。其二子谷石亦皆封王。亦寧宗時封。理宗謝后三代皆王。則度宗時封。

### 宋待周後之厚

宋太祖為軍士擁戴。既登極。遷周恭帝及符太后於西宮。易其帝號曰鄭王。太后曰周太后。作周六廟於西京。遣官遷其神主。命周宗正郭玘以時祭享。又遣工部侍郎艾穎拜嵩陵太祖。慶陵世宗。建隆三年。鄭王出居房州。開寶六年。鄭王始殂。距禪位已十四年矣。宋祖素服發哀。輟朝十日。諡曰恭帝。命還葬慶陵之側。陵曰順陵。仁宗嘉祐四年。詔取柴氏譜系。於諸房中推最長一人。歲時奉周祀。尋錄周世宗從孫柴元亨為三班奉職。先是加恩郭氏。至周世宗後。每郊祀錄其子孫一人。至和四年。遂封柴詠為崇義公。給田十頃。奉周室祀。竝給西京周廟祭享器服。神宗又錄周世宗從曾孫思恭等為三班奉職。熙寧四年。崇義公柴詠致仕。子若訥襲封。徽宗詔柴氏後已封崇義公。再官恭帝後。為宣教郎。監周陵廟。世為三恪。南渡後高宗又令柴叔夜襲封崇義公。理宗又詔周世宗八世孫承務郎柴彥穎襲封崇義公。此皆見於本紀及續通鑑長編者。蓋柴氏之賞。延直與宋相終始。其待亡國之後。可謂厚矣。

矣。

### 宋郊祀之費

宋制每三歲一親郊。大小各官皆得蔭子。趙思誠疏言。寒士在部。須待數年之闕。今親祠之歲。任子約四千人。十年之後。須萬二千員。則寒士有三十年不得選者。是郊祀恩蔭已極。冗濫此外。又有賞賚。計每次縉錢五百餘萬。大半以金銀綾絹繩紬。平其直給之。景德郊祀。至七百餘萬。東封又八百餘萬。祀汾上又百二十萬。丁謂為三司使。著景德會計錄。自後歷代郊祀。常以為準。仁宗享明堂。并增至一千二百萬。後以西夏用兵。國計日絀。乃詔裁減郊祀。所賜銀絹。舊三四千者減一千。一千者減三百。百減二十。特著為令。然寶元元年。會計京師所入金帛。一千九百五十萬。而出者二千一百八十五萬。是歲以郊祀故。出入之數。視常歲過多云。則亦未為大減也。俱見食貨志。神宗時。司馬光曾疏請聽百官辭。南郊賞賚。不許。人主敬天。精意以享。何貴於恩澤之多。乃浮費如此。是人主昭事之典。反為百官倖恩之端。真屬無謂。且歲一親郊。古今大禮。今反以浮費之多。不得不改為三歲一舉。是又因百官之沾被。成人主之怠弛。尤不可之大者也。按范鎮疏云。賦役繁重。轉運使又於常賦外。進羨錢以助南郊。無名斂率。不可勝數。然則南郊之費。大概出於外僚科斂所進之羨餘。是又因百官之濫恩。而陵萬民之財力。立制抑何謬耶。

### 宋制祿之厚

宋史職官志載。俸祿之制。京朝官。宰相樞密使。月三百千。春冬服各綾二十四匹。絹三十匹。綿百兩。參知政事樞密副使。月二百千。綾十四匹。絹三十匹。綿五十兩。其下以是為差。節度使。月



四百千。節度觀察留後三百千。觀察二百千。綾絹隨品分給。其下亦以是為差。凡俸錢並支一分見錢。二分折支。此正俸也。其祿粟則宰相樞密使月一百石。三公三少一百五十石。權三司使七十石。其下以是為差。節度使一百五十石。觀察防禦使一百石。其下以是為差。凡一石給六斗。米麥各半。熙寧中。又詔縣令錄事等官。三石者增至四石。兩石者增至三石。此亦正俸也。俸錢祿米之外。又有職錢。御史大夫六曹尚書六十千。翰林學士五十千。其下以是為差。職錢惟給京朝官。外任者元豐官制行。俸錢稍有增減。其在京官司供給之數。皆併為職錢。如大夫為郎官者。既請大夫俸。又給郎官職錢。視國初之數已優。至崇寧間。蔡京當國。復增供給食料等錢。如京僕射俸外。又請司空俸。視元豐祿制更倍增矣。俸錢職錢之外。又有元隨儉人衣糧。在京任宰相樞密使。在外任使。宰相樞密使各七十人。參知政事至尚書左右丞各五十人。節度使百人。留後及觀察使五十人。其下以是為差。衣糧之外。又有儉人餐錢。中書樞密及正刺史以上儉人。皆給衣糧。餘止給餐錢。朝官自二十千至五千。凡七等。京官自十五千至三千。凡八等。諸司使副等官九等。此外又有茶酒廚料之給。薪蒿炭鹽諸物之給。飼馬芻粟之給。米麵羊口之給。其官於外者。別有公用錢。自節度使兼使相以下。二萬貫至七千貫。凡四等。節度使自萬貫至三千貫。凡四等。觀察防團以下。以是為差。公用錢之外。又有職田之制。兩京大藩府四十頃。次藩鎮三十五頃。防團以下。各按品級為差。選人使臣無職田者。別有茶湯錢。建炎南渡。以兵興。宰執請俸錢祿米權支三分之一。開禧用兵。朝臣亦請損半支給。皆一時權宜。後仍復舊制。此宋一代制祿之大略也。其待士大夫。可謂厚矣。惟其給賜優裕。故入仕者不復以身家為慮。各自勉其治行。觀於真仁英諸朝。名臣輩出。吏治循良。及有事之秋。猶多慷慨報國。紹興之支撐半壁。德祐之畢命疆場。歷代以來。捐軀殉國者。惟宋末獨多。雖無救於敗亡。要不可謂非養士之報也。然給賜過優。究於國計易耗。恩逮於百官者。惟恐其不足。

財取於萬民者。不留其有餘。此宋制之不可為法者也。

宋祠祿之制

宋制設祠祿之官。以佚老優賢。自真宗置玉清昭應宮使。以王旦為之。後旦以病致仕。乃命以太尉領玉清昭應宮使。給宰相半俸。祠祿自此始也。在京有玉清昭應宮。景靈宮。會靈觀。祥源觀等。以宰相執政充使。王曾以次相為會靈觀使。曹利用以樞密使領景靈宮。班在曾上。後曾錢。玉清昭應宮。月百千。景靈宮。七千。祥源觀。五十千。見職官志。丞郎學士充副使。庶僚充判官。都監提舉提點等。各食其祿。初設時。員數甚少。後以優禮大臣之老而罷職者。日漸增多。熙寧中。王安石欲以此處異議者。遂著令。宮觀限員數。以三十月為一任。又詔杭州洞霄宮。亳州明道宮。華州雲臺觀。建州武夷觀。台州崇道觀。成都玉局觀。建昌軍仙都觀。江州太平觀。洪州玉隆觀。五嶽廟。並依舊山崇福宮。舒州仙靈觀。置管幹提舉等名。以此食祿。仍聽從便居住。又詔除宮觀者。母過兩任。其兼用執政恩例者。母過三任。紹興以來。士大夫之從駕南來者。未有闕以處之。乃許承務郎以上。權差宮觀一次。月得供給各依資序。降一等支。不限員數。後以陳乞者多。又定令稍復祖宗條法之舊。一任以定法。再任以示恩。紹興五年。慶壽宮。合宮。觀。嶽廟。已滿。不應再陳。京官二年。選人三年。皆於優厚之中。寓限制之意。見職官志。

宋恩蔭之濫

蔭子固朝廷惠下之典。然未有如宋代之濫者。文臣自太師及開府僕同三司。可蔭子若孫。及期親大功以下親。并異姓親及門客。太子太師至保和殿大學士。蔭至異姓親。無門客。中大夫至中散大夫。蔭至小功以下親。無異姓親。武臣亦以是為差。凡遇南郊大禮。及誕聖節。



俱有蔭補。宰相執政蔭本宗異姓及門客。醫人各一人。太子太師至諫議大夫蔭本宗一人。寺長貳監以下至左右司諫蔭子或孫一人。餘以是為差。此外又有致仕蔭補。曾任宰相及見任三少使相者蔭三人。曾任三少及侍御史者蔭一人。餘以是為差。此外又有遺表蔭補。曾任宰相及現任三少使相蔭五人。曾任執政官至大中大夫以上蔭一人。諸衛上將軍四人。觀察使三人。餘以是為差。由斯以觀。一人入仕。則子孫親族俱可得官。大者并可及於門客。醫士可謂濫矣。官志見職然此猶屬定例。非出於特恩也。天聖中詔五代時三品以上告身存者子孫聽用蔭。則并及於前代矣。明道中錄故宰臣及員外郎以上致仕者子孫授官有差。則并及於故臣矣。甚至新天子即位。監司郡守遣親屬入賀。亦得授官。且傳則更出於常蔭之外矣。曹彬卒。官其親族門客親校二十餘人。李繼隆卒。官其子。又錄其門下二十餘人。雷有終卒。官其子八人。此以功臣加蔭者也。李沆卒。錄其子宗簡為大理評事。壻蘇昂。兄之子朱濤。竝同進士出身。王旦卒。錄其子弟姪外孫門客常從授官者數十人。諸子服除。又各進一官。向敏中卒。子壻竝遷官。又官親校數人。王欽若卒。錄其親屬及所親信二十餘人。此以優眷加蔭者也。郭遵戰歿。官其四子。并女之為尼者。亦賜紫袍。任福戰歿。官其子。及從子。凡六人。石珪戰歿。官其三子。徐禧戰歿。官其家十二人。此又以死事而優恤者也。范仲淹疏。請乾元節恩澤。須在職滿三年者始得蔭。子則仲淹未奏以前。甫蒞任即得蔭矣。閣日新疏。言羣臣子弟以蔭得官。往往未離童齒。即受俸。望自今二十以上始給。職官志。凡蔭。嫡子孫。年過十五。弟姪須過二十。此蓋續定之制。龔茂良亦疏。言慶壽禮行。若自一命以上覃轉。不知月添給俸幾何。是甫蔭即給俸矣。朱勝非疏。述宣和中諫官之論曰。尚從竹馬之行。已造荷囊之列。則甫蔭得服章服矣。熙寧初。詔齊密等十八州及慶渭等四州。竝從中書選授。母以恩例奏補。則他州通判皆可以蔭官奏補矣。金安節疏。言致仕遺表恩澤。不宜奏異姓親。使得高貴為市。則恩

蔭并聽其鬻賣矣。以上俱見其間雖有稍為限制者。神宗詔諸臣年七十以上。直除致仕者。不得推恩子孫。官志見職又詔任子自一歲一人者。改為三歲一人。自三歲一人者。改為六歲一人。孝宗詔七十不請致仕者。遇郊不得蔭補。又詔終身任官觀人。毋得奏子。此雖略為撙節。然所減損究亦有限。朝廷待臣下固宜優恤。乃至如此。猥濫非惟開倖進之門。亦徒耗無窮之經費。竭民力以養冗員。豈國家長計哉。

### 宋恩賞之厚

宋制祿賜之外。又時有恩賞。李沆病。賜銀五千兩。王旦馮拯王欽若之卒。皆賜銀五千兩。此以宰執大臣也。雷有終平蜀有功。特給廉鎮公用錢。歲二千貫。既歿。宿負千萬。官為償之。此以功臣也。戴興為定國軍節度使。賜銀萬兩。歲加給錢千萬。王漢忠出知襄州。常俸外增歲給錢二百萬。此以藩鎮大臣也。若李符為三司使。賜銀三千兩。李沆宋湜王化基。初入為右補闕。即各賜錢三百萬。湜知制誥。又賜銀五百兩。錢五十萬。楊徽之遷侍御史。賜錢三十萬。魏廷式為轉運使。賜錢五十萬。宋搏為國子博士。賜錢三十萬。班僅庶僚。非有殊績。亦被橫賜。甚至魏震因溫州進瑞木。作賦以獻。遂賜銀二千兩。母亦太濫矣。仁宗崩。遺賜大臣。各直百餘萬。司馬光率同列上言。國有大憂。中外窘乏。不宜用乾興故事。若遺賜不可辭。宜許侍從進金錢。助山陵費。不許。此可見宋代恩賞之大概也。南渡後。吳玠卒。賜錢三十萬。蜀將郭浩楊政。各賜田五十頃。魏勝戰死。賜銀千兩。絹千匹。宅一區。田百頃。吳玠卒。高宗已為太上皇。賜銀千兩。蓋南宋幅員狹而賦稅少。匪頒亦稍減矣。

### 宋冗官冗費

宋恩賞之厚 宋冗官冗費



宋開國時設官分職。尚有定數。其後薦辟之廣。恩蔭之濫。雜流之猥。祠祿之多。日增月益。遂至不可紀極。真宗咸平四年。有司言減天下冗吏十九萬五千餘人。所減者如此。未減者可知也。王禹偁言。臣籍濟州。先時止有一刺史。一司戶。未嘗廢事。自後有團練推官一人。又增置通判。副使。判局。推官。而監酒榷稅。又增四人。曹官之外。又益司理。一州如此。天下可知。楊億疏言。員外加置。無有限數。今員外郎至三百餘人。郎中亦百數。自餘太常國子博士等。又不下數百人。率為常參。不知職業之所守。祇以恩澤而序遷。見志宋祁疏言。朝廷有三冗。天下官無定員。一冗也。州縣不廣於前。而官倍於舊。請立限員。以為定法。其門廩流外貢舉等科。俟闕官時。計員補吏。又曰。使相節度。為費最多。節相之建。或當邊鎮。或臨師屯。公用之錢。所以勞衆享賓也。今大臣罷黜。率叨恩除。坐糜邦用。莫此為甚。請自今非邊要無師屯者。不得兼節度。已帶節度者。不得留近藩及京師。見祁傳范坦亦言。戶部歲入有限。今節度使至八十餘員。留後至刺史。又數千人。自非軍功得之。宜減其半俸。見坦傳按向經傳。方鎮有公使錢例。私以自奉。去則盡入其餘。大臣罷退。多優以節度空名。待制以下。亦或帶留後刺史等銜。其應得之分例。亦與現任者同。故祁坦皆欲減之。此又冗官之上。更加冗費也。徽宗時。盧策疏言。皇祐所入三千九百萬。而費纔三之一。治平四千四百萬。而費五之一。熙寧五十萬。而費盡之。今諸道隨月所需。汲汲然不能終日矣。此猶北宋全盛之時。已如此。南渡以後。幅員既少。而耗費更多。廖剛疏言。劉晏以一千二百萬貫供中原之兵。而有餘。今以三千六百萬貫供川陝一軍。而不足。川陝兵數六萬八千四百四十九人。內官員萬一千七員。兵士所給錢。比官員不及十分之一。則冗員在官不在兵。見剛傳此軍官之冗費也。汪應辰疏言。班直轉官三日。而堂吏食錢萬緡。工匠洗器。僅給百餘千。而堂吏食錢六百千。聖顯仁神御半年。功未及半。而堂吏食錢已支三萬。銀絹六百兩。足。見應辰傳此堂吏之冗費也。舉此類推。國力何以支乎。

### 南宋取民無藝

宋初國用雖濫。然主皆恭儉。吏治亦清。尚無甚病民之事。自王安石行青苗等法。而民始受害。時又有免役錢。有常平積利錢。然猶為富國強兵起見也。至徽宗時。蔡京當國。專以豐亨豫大之說。蠱惑上心。動引周官惟王不會為詞。遂至取民無藝。是時賦稅之外。有御前錢物。朝廷錢物。戶部錢物。哀斂各不相知。肆行催索。又有大禮進奉銀絹。有贍學糶本錢。亦見蔡京傳文粹中疏言。朝廷支用。一切取給於民。陝西上戶。多棄產而居京師。河東富人。多棄產而入川蜀。是西北之受害可知。甚至花石綱之擾。運一石。民間用三十萬緡。而東南又大困。南渡後。因軍需繁急。取民益無紀極。有所謂經制錢者。本宣和末。陳亨伯為經制使。創雜征之法。因以為名。建炎中。高宗在揚州。四方貢賦不至。呂頤浩葉夢得言。亨伯常設此制。宜仿行之。以濟緩急。於是課添酒錢。賣糟錢。典賣田宅。增牙稅錢。官員請給頭子錢。樓店務增三分房錢。令各路憲臣領之。通判掌之。紹興五年。孟庾提點財用。又請以總制司為名。因經制之額。增折為總制錢。州縣所收頭子錢。貫收二十三文。以十文作經制上供。以十三文充本路用。他雜稅亦一切仿此。其征收常平錢物。舊法貫收頭子錢五文。亦增作二十三文。除五文依舊法外。餘悉入總制。乾道中。又詔諸路出納貫添收十三文。充經總制錢。自是每千收五十六文矣。此二項通謂之經總制錢。又有所謂月椿錢者。紹興二年。韓世忠軍駐建康。呂頤浩等議。令江東漕臣。每月椿發大軍錢十萬緡。供億漕司。不量州軍之力。一例均科。於是州縣橫征。江東西之害尤甚。又有所謂板帳錢者。輸米則收耗利。交錢帛則多收糜費。幸富人之犯法。而重其罰。恣胥吏之受贓。而課其入。索盜賊則不償失主。檢財產則不及卑幼。亡僧絕



戶不俟覈實而入官。逃產廢田。不為消除而抑納。有司固知其非法。而以板帳錢太重。不能不橫征也。淳熙五年。湖北漕臣言。紹興九年。詔財賦十分為率。留一分以充上供。自十三年始。每年增二分。鄂州元額錢一萬九千五百七十餘緡。今增至十二萬九千餘緡。岳州舊額五千八百餘緡。今增至四萬二千一百餘緡。民力凋敝。實無從出。此在孝宗有道之時。已極腹削之害也。以上皆見食貨志此外又有和買折帛錢。先是咸平中。馬元方建言。方春預支錢與民。濟其乏。至夏秋。令輸絹於官。是先支錢而後輸絹。民本便之。其後則錢鹽分給。又其後則直取於民。林大中疏言。今又不收其絹。令納折帛錢。於是兩難折一縑之直。見大中傳是南渡後之折帛。比青苗法更虐矣。趙開總四川財賦。盡征權之利。至大變酒法。麴與釀具。官悉自置。聽釀戶以米赴官自釀。斛輸錢三千。頭子錢二十二。其釀之多寡。不限以數。惟錢是視。時張浚駐兵興元。期得士死力。以圖克復。旬犒月賞。費用不貲。盡取辦於開。開於食貨。算無遺策。供億常有餘。而遺法訖為蜀中百年之害。見開傳至賈似道創議買公田。平江江陰安吉嘉興常州鎮江六郡。共買田三百五十餘萬畝。令民以私家之租為輸官之額。見似道傳於是民力既竭。國亦隨亡。統觀南宋之取民。蓋不減於唐之旬輸月送。民之生於是時者。不知何以為生也。

### 宋軍律之弛

五代自石敬瑭姑息太過。軍律久弛。喪師蹙地。一切不問。周世宗鑒其失。高平之戰。斬先逃之樊愛能。何徽。及將校七十餘人。於是驕將惰兵。無不知懼。所以南取江淮。北定三關。所至必勝也。宋太祖以忠厚開國。未嘗戮一大將。然正當興王之運。所至成功。固無事誅殺。乃太宗真宗以後。遂相沿為固然。不復有馭將紀律。如太宗雍熙四年。劉廷讓與契丹戰於君子館。廷讓先約李繼隆為援。及戰而繼隆不發一兵。退保樂壽。致廷讓一軍盡沒。廷讓僅以數騎脫歸。是繼隆之罪。必宜以軍法從事。而太宗反下詔自悔。而釋繼隆不問。真宗咸平三年。契丹入寇。宋將傅潛擁步騎八萬。不敢戰。閉城自守。部將范廷召求戰。不得已分兵八千與之。仍許出師為援。廷召又乞援於康保裔。保裔援之力盡而死。而潛之援兵不至。帝僅流潛於房州。是時錢若水謂潛既不能制勝。朝廷又不能用法。力請斬之。不聽。仁宗時。夏人寇塞門。若水中兵纔千人。趙振在延安。有衆八千。若水被圍已五月。告急者數至。振僅遣百人往。若遂陷。若水高延德。監押王繼元。皆沒於賊。龐籍奏劾振。乃僅貶白州團練使。俱見各本傳兵凶戰危。非重賞誘於前。嚴誅迫於後。誰肯奮死決勝。乃繼隆等擁重兵。坐視裨將之覆軍喪命。而不顧軍政如此。尚何以使人。此宋之所以不競也。

### 宋科場處分之輕

唐時有通榜例。陸贄知貢舉。以崔元翰梁肅文藝冠時。凡肅元翰所薦皆取之。唐書如崔羣以梁肅薦。為公輔器。贄遂取中是也。羣傳韓愈負文名。遇舉子之有才者。輒為延譽。并言於知貢舉之人。往往得售。故士爭趨之。文獻通考然通榜必視其才。時尚無糊名之例。見名甄拔。果當其才。人亦服其公。而無異議。其以徇私得中者。唐錢徽知貢舉。段文昌屬以楊渾之。李紳亦託以周漢賓。及榜發。皆不中選。而取中有李宗閔之壻蘇巢。楊汝士之弟殷士。文昌遂奏徵取士不公。穆宗命王起白居易重試。內出題目。孤竹管賦。鳥散餘花落。詩。舉子多不知出處。被黜者孔溫業趙存約等十人。遂貶徽江州刺史。李宗閔劍州刺史。楊汝士開江令。舊唐書是唐時科場之處分本輕。至五代時。鄭珪舉進士。數不中。張全義為之屬。有司乃及第。見歐陽文忠公傳桑維翰應舉。亦張全義言於有司得第。洛陽雜記崔悅將知貢舉。有舉子孔英者。素有醜



行。宰相桑維翰謂稅曰。孔英來矣。稅不喻其意。反疑維翰屬之。乃考英及第。見薛史此以勢利舞弊者。後唐清泰中。盧導知貢舉。將鎖院。劉濤薦薛居正。必至台輔。導取之。後果為相。宋史薛居正傳。李度工詩。有醉輕浮世事。老重故鄉人之句。樞密使王樸錄其句薦之。知貢舉申文炳遂擢度第三人。宋史李度傳。此亦通榜之餘風。雖非以勢利起見。然知其入而取之。究亦弊也。聶嶼與趙都同赴舉。都納賂於鄭莊。報明日當登第。嶼聞不捷。乃大詬來人以恐之。莊懼。俾俱成名。薛史莊傳。是竟以賄賂得第矣。五代亂世。此等作奸舞弊之事。習以為常。固無足怪。其有稍示懲罰者。同光三年。禮部侍郎裴皞知貢舉。所取新及第進士符蒙正等。于物議。特詔翰林學士盧質覆試。王澈改第一。桑維翰第二。符蒙正第三。成僚第四。既無黜落。裴皞免議。周廣順中。趙上交知貢舉。有新進士李觀。不當策名。物議喧然。中書門下以觀所試詩賦失韻。遂黜之。并謫上交官。由侍郎降詹事。見上顯德中。劉濤考試不精。楊樸劾之。世宗命翰林學士李昉覆試。黜者七人。濤坐降謫。見上又劉溫叟考進士。得十六人。有譖之者。帝怒。黜十二人。溫叟左遷。見上是五代時。雖有科場處分。不過降秩。宋初因之。開寶中。李昉知貢舉。貢士徐士廉擊登聞鼓。訴昉用情。帝怒。特命覆試。多黜落者。昉責授太常卿。見本紀真宗時。三司使劉師道以弟幾道舉進士。屬考官陳堯咨。時已糊名考校。乃於卷中為識號。遂擢第。已而事泄。詔幾道落籍。永不預舉。師道責忠武軍行軍司馬。堯咨責單州團練使。此五代及宋科場處分大概也。惟王欽若知貢舉。有任懿者。託素識欽若之僧惠。奏賂以白金二百五十兩。會欽若已入院。僧屬其門客。達於欽若。妻李遣奴祁睿入院。書懿名於其臂。及白金之數。以告欽若。遂得中。後事泄。欽若反委罪於同知舉官洪湛。湛遂遠貶。見欽若及湛傳以有賂賄故。處分較重。然納賄舞弊。僅至竄謫。科場之例。亦太弛縱矣。

定罪歸刑部

宋太祖嘗謂宰相曰。五代諸侯跋扈。有枉法殺人者。朝廷置而不問。人命至重。姑息藩鎮。當如是耶。自今諸州決大辟。錄案奏聞。付刑部覆視。遂著為令。此建隆三年所定也。見本紀自有此制。天下重獄。皆須候部覆覈。宜無有擅殺者矣。然李及知秦州。有禁卒白晝擄婦人金釵於市。吏執以來。及方觀書。詰問得實。即命斬之。觀書如故。見及傳張詠知益州。有小吏以罪械其頸。吏恚曰。非斬某。柵不得脫。詠即命斬之。見詠傳范正辭奉詔料州兵。送京。有王興者。憚行。以刃傷其足。正辭斬之。與妻詣登聞鼓院上訴。太宗以正辭有威斷。特擢之。見正辭傳王濟知睦州。有狂僧突入州廡。出妖言。濟與轉運使陳堯佐。按實斬之。見濟傳呂公弼知成都。營卒犯法。扞不受杖。曰。寧以劍死。公弼曰。杖者國法。劍汝自請。乃杖而斬之。見公弼傳文彥博知益州。方宴擊毬。聞外喧甚。乃卒長杖一卒。不伏。呼入問狀。令引出與杖。又不受。復呼入斬之。竟毬乃歸。見彥博傳舒亶為臨海尉。有民冒逐後母。至亶前。命殺之。不服。亶起手斬之。投効去。見亶傳定罪既歸刑部。乃尚有擅殺如數公者。按鄭穀疏。謂軍法便宜。止行於所轄軍伍。其餘當奏朝廷。然則軍政原有便宜行法之條。如張詠在益州。正當王均李順等叛亂之後。固宜用重典。以儆凶頑。其餘亦皆軍士之玩法者。故不妨概以便宜處之。歟。舒亶以小吏而擅殺逆子。雖不悖於律。而事非軍政。官非憲府。生殺專之。亦可見宋政之太弛也。

宋遼金夏交際儀

金史有交聘表。凡與宋夏高麗和戰慶弔之事。開卷瞭如。然宋之與為鄰者。比金較多。則宋史益宜有交聘表。乃反無之。此修史者之疏也。大概兩國交際。每重在儀節之間。澶淵之盟。



宋為兄。遼為弟。故遼使常稍屈。宋史程琳傳。契丹遣蕭蘊杜防來蘊。出坐位圖示琳曰。中國使者坐殿上高位。今我位乃下。請升之。琳曰。此真宗所定。不可易也。乃已。然則真宗初定和議時。宋使至遼。燕享之禮。較尊於遼使之至宋矣。然遼人亦往往故自尊大。不肯稍屈。程師孟使遼。至泳州。契丹來迎者。正席南面。泳州官西向。而設宋使席東向。師孟不肯就坐。叱僮者易之。乃與迎者東西相向。見師孟傳。吳奎使契丹歸。遇契丹使於途。契丹以金冠為重。紗冠次之。舊時兩使相見。必重輕適均。至是契丹使服紗冠。奎乃亦殺其儀以見。見奎傳。沈立使契丹。適其國。行冊禮。欲令從其國服。否則見於門。立曰。北使來南。未嘗令其變服。況門見耶。乃止。見立傳。哲宗崩。遼使來弔祭。胡宗炎逐境上。使者不易服。宗炎以禮折之。須其聽命。乃相見。見宗炎傳。遼道宗遣使以己像來求徽宗畫像。未報。而道宗殂。天祚帝立。復以為請。宋使張昇往。欲先得其新主像。乃諭之曰。昔文成弟為兄屈。尚先致敬。況今伯父耶。天祚帝乃以己像先來。見昇傳。此宋遼兄弟之國。使命往來故事也。至宋與金交際之儀。則前後不同。據金史。使張通古至江南。宋主欲南面使通古北面。通古不肯。索馬欲北歸。宋主乃設東西位。使者東面。宋主西面。受書詔拜起。皆如儀。見金史張通古傳。然宋史本紀。通古至。帝以方居諒闇。難行吉禮。命秦檜攝冢宰。受書以進。又檜傳及王倫李彌遜勾龍如淵等傳。皆言金使來朝議。洵洵。檜迫於公議。屬王倫力言於通古等。聽檜就館受書。以省吏朝服導引。納其書禁中。自是當日實事。而通古傳所云拜詔如儀者。或通古歸自詔之詞也。至宋孝宗與金世宗重定和議。則改奉表為國書。稱臣為姪。凡報聘皆用敵國禮。見孝宗紀。然金使至宋。宋主尚有起立受書之儀。金完顏仲初為報問使。仲奏請與宋主相見儀。世宗曰。宋主起立接書。則授之。及至宋如禮。見完顏仲傳。孝宗嘗欲改受書儀。遣范成大至金陳奏。世宗不允。後金遣完顏璋賀宋正旦。宋使人就館取書而去。璋還。杖一百。除名。金遣梁肅來請問。宋仍以書謝。見金史完顏璋傳。完顏璋賀宋正旦。宋使人就館取書而去。璋還。杖一百。除名。金遣梁肅來請問。宋仍以書謝。見金史完顏璋傳。

正旦。宋仍欲變接書儀。仲誨不可。乃仍用舊儀。按此事宋史有錯誤處。孝宗紀云。璋來賀正旦。聽仍舊。是璋初未嘗失禮也。而金史璋傳。以使命事失禮。歸杖黜。則在宋虧禮之處。自是實事。宋史所云。以太上皇詔。始仍舊禮者。蓋次年劉仲誨賀正旦之事。誤記於璋至之日耳。已而金使烏林答天錫來賀會慶節。要孝宗降榻問金主起居。帝不許。天錫跪不起。宰相虞允文請帝還內。令使者明日隨班上壽。見宋史孝宗紀。蓋又因宋就璋館取書之事。故欲宋加禮。以為報復。而孝宗遽起入內。亦一時機變也。又金黃久約為賀。宋生日副使。適宋館伴正使病。欲以館伴副使代正使行事。久約曰。倘副使亦病。則將以都轄掌儀等行禮乎。竟令正使獨前行。已與館伴副使聯騎。見金史黃久約傳。蓋兩國交際儀節。有關國體。故各不肯自屈耳。至兩國使臣朝賀時。則皆有山呼舞蹈之禮。金海陵愛宋使山呼聲。使神衛軍習之。見金史蔡松年傳。是宋使至金山呼也。金張暉使宋。以世宗大行在殯。受賜不舞蹈。見金史張暉傳。是金使至宋。非國喪亦舞蹈也。又兩國彼此有避諱之法。金海陵立太子光英。宋改光化軍為通化軍。光州為蔣州。金章宗以完顏匡為賀宋正旦使。命權易名弼。以避宋諱。見金史本紀。此又彼此避諱故事也。至西夏之於宋初。李繼遷德明父子。本臣屬於宋。自元昊自立為帝。不復稱臣。後議和。但稱男邦。泥定國兀卒。兀卒者。譯言吾祖也。宋以詞不順。未之許。後再定和議。宋冊為夏國主。約稱臣。奉正朔。改所賜敕書為詔。而不名。使至其國。用賓客禮。然使至常館於宥州。不令至興靈。而元昊自帝其國中。自若也。宋史楊告傳。告為西夏節度使。元昊嘗封之。其於遼金二朝。亦稱臣。而交際之儀稍異。金世宗問張汝弼曰。夏高麗皆稱臣。我使者至高麗。與王抗禮。夏王則立受使者拜。何也。左丞完顏襄曰。遼夏本甥舅國。夏以遼公主故。受使者拜。本朝與夏約。遵用遼禮。故耳。汝弼曰。行之已數十年。不可改也。世宗從之。見金史張汝弼傳。此可見西夏之於遼金。雖稱臣而受其使拜。與宋所定與使臣賓主相見之禮不同矣。及金哀宗時。重與夏國議和。則夏并不復稱臣。但以兄事金。各用本國年號。遣使來聘。奉書稱弟而已。見金史哀宗本紀。劉豫受金冊。



為齊帝時金宗翰等議。既為藩輔。奉表稱臣。則朝廷詔至。當避正殿。與使者抗禮。金太宗詔曰。既為隣國之君。又為大朝之子。惟使者始至。躬問起居。及歸時。有奏則起立。餘竝行帝禮。此又劉豫為子皇帝之儀注也。

廿二史劄記卷二十五終

廿二史劄記卷二十六

陽湖趙翼撰

歲幣

宋真宗與遼聖宗澶淵之盟。定歲幣之數。銀十萬兩。絹二十萬匹。仁宗時。遼興宗以求地為兵端。再與定盟。加歲幣。銀絹各十萬兩。夏主元昊既納款。賜歲幣。銀絹茶綵共二十五萬五千。南渡後。高宗與金熙宗和議成。歲幣。銀絹二十五萬兩。匹。孝宗再與金世宗議和。改為銀絹二十萬兩。匹。開禧用兵。既敗。寧宗再與金章宗議和。增為銀絹三十萬兩。匹。至金哀宗時。宋停其歲幣。後數年金亡。元太宗曾遣王楸來徵歲幣。銀絹二十萬兩。匹。宋不與。按宋之於金。歲幣外。每金使至。又有餽贈大使。金二百兩。銀二千兩。副使半之。幣帛稱是。此例廟堂之上。亦知之。故路伯達使宋回。上所得金銀。以助邊費。見金史。路伯達傳。梁肅使宋回。以所得禮物多。至推排物力時。自增六十貫。金史。梁肅傳。金使至夏國者。夏國餽贈。視詔書幾道為多寡。完顏綱為賜夏主生辰使。章宗特命賚三詔。以厚之。金史。完顏綱傳。金史。路伯達傳。贊曰。受歲幣禮也。使者至。燕享亦禮也。納其賄可乎。乃習以為常。莫有知其非者。出則云。酬勞效。歸則云。增物力。上下惟利是視。此何理耶。

和議

義理之說。與時勢之論。往往不能相符。則有不可全執義理者。蓋義理必參之以時勢。乃為



真義理也。宋遭金人之害，擄二帝，陷中原，為臣子者，固當日夜以復讐雪恥為念。此義理之說也。然以屢敗積弱之餘，當百戰方張之寇，風鶴方驚，盜賊滿野，金兵南下，航海猶懼其追，幸而飽掠北歸，不復南牧，諸將得以剿撫寇賊，措設軍府，江淮以南，粗可自立，而欲乘此偏安甫定之時，即長驅北指，使強敵畏威，還土疆而歸帝后，雖三尺童子，知其不能也。故秦檜未登用之先，有識者固早已計及於和。洪皓以樂天畏天語悟室，猶第使臣在金國之言也。紹興五年，將遣使至金，通問二帝，胡寅言國家與金世讐，無通使之理。張浚謂使事兵家機權，日後終歸於和，未可遽絕。是浚未嘗不有意於和也。陳與義云：和議成，豈不賢於用兵。不成則用兵，必不免。是與義亦未嘗不有意於和也。高宗謂趙鼎曰：今梓宮太后淵聖皆在彼，若不與和，則無可還之理。此正高宗利害切己，量度時勢，有不得不出於此者。厥後半壁粗安，母后得返，不可謂非和之效也。自胡銓一疏，以屈己求和為大辱，其議論既愷切動人，其文字又憤激作氣，天下之談義理者，遂羣相附和，萬口一詞，牢不可破矣。然試令銓身任國事，能必成恢復之功乎？不能也。即專任韓岳諸人，能必成恢復之功乎？亦未必能也。故知身在局外者，易為空言，身在局中者，難措實事。秦檜謂諸君爭取大名以去，如檜但欲了國家事耳。斯言也，正不能以人而廢言也。其後隆興又議恢復矣，呂本中言大抵獻言之人，與朝廷利害絕不相關，言不酬，事不濟，則脫身去耳。朝廷之事，誰任其咎？湯思退亦云：此皆利害不切於己，大言誤國，以邀美名。宗社大計，豈同戲劇？斯二人者，雖亦踵檜之故智，然不可謂非切中時勢之言也。統宋一代論之，燕雲十六州淪於契丹，太祖太宗久欲取之，自高粱河岐溝關兩敗之後，兵連禍結，邊境之民爛焉。澶淵盟而後兩國享無事之福者，且百年。元昊跳梁，雖韓范名臣不能制，亦終以歲幣餌之。而中國始安枕。當北宋強盛時已如此，況南渡乎？且南渡之初，非不戰也，富平一敗，喪師數十萬，并陝西地盡失之。卒歸於和而後已。及金

亮淪盟，兵叛身弑，此時宜可乘機進取，乃宿州一潰，又棄唐鄧海泗，而卒歸於和。其後開禧用兵，更至增歲幣，函送韓侂胄之首，而後再定和議。此和與戰利害之較然者也。及與蒙古共滅金，兩國方敦鄰好，使早定和議，堅守信誓，當不至起釁召侮。乃忽思用武，收復三京，兵端遂開。然元太宗猶使王檝來議歲幣，其時蒙古尙未有意於混一，可以財帛餌也。而舉朝泄泄付之不理，致蜀地先失，鄂亦被兵。元世祖以皇弟統兵在鄂，賈似道已密遣宋京求和。世祖遂撤兵去，似道歸。又以援鄂為己功，深諱議和，不復踐夙約。世祖猶遣郝經來修好，更錮之真州，不答一書，不遣一使。於是遂至亡國。是宋之為國，始終以和議而存，不和議而亡。蓋其兵力本弱，而所值遼金元三朝，皆當勃興之運，天之所興，固非人力可爭，以和保邦，猶不失為圖全之善策，而耳食者徒以和議為辱，妄肆詆譏，真所謂知義理而不知時勢，聽其言則是，而究其實則不可行者也。

按宋南渡後，亦未嘗無可乘之機。其一在金廢劉豫，以地予宋，而烏珠舊史名又興兵來取之時，宋則劉錡有順昌之捷，韓世忠圍淮陽，有洳口鎮潭城，千秋湖之捷。且曰兵勢最重處。臣請當之。岳飛有郾城之捷，穎昌之捷，已進軍至朱仙鎮，遣將經略京東，西汝穎陳蔡諸郡。且曰直擣黃龍府，與諸君痛飲耳。吳璘在蜀，亦有石壁砦百通坊，剡家灣臘家城之捷。使乘此勢策勵諸將進兵，河以北雖不可知，而陝西河南地未必不可得。乃當時君相方急於求成，遽令班師，遂成畫淮之局。此一失也。其一在金亮瓜洲被弑之後，軍潰而歸，中原鼎沸，南有魏勝李寶之起義，北有移剌窩幹之叛亂。金世宗雖賢，登極未久，國勢易搖。宋則孝宗為君，張浚為相，皆銳意恢復者。使有韓岳諸人，以訓練之兵，討離攜之衆，自當大有克捷。而諸宿將已無在者，僅一劉錡，老病垂死，吳璘亦暮氣不振。所恃李顯忠邵宏淵輩，望輕才薄，纔得靈虹，至宿州輒大潰。於是三京終不可復。此又一失也。統前後



觀之前則有將帥而無君相。後則有君相而無將帥。此固天意所以分南北也。明邱濬會後。不得不和之論。為世儒所訕笑。今此論母乃。其儘乎。然通觀古今者。必見及此也。

### 西夏番鹽

鄭文寶傳。諸羌少樹藝。但用池鹽與邊民交易穀麥。後餽運為李繼遷所鈔。文寶乃建議。請禁番鹽入邊。令商人販安邑解縣兩池鹽。以給陝西民食。則戎人困而繼遷可不戰而屈。詔從之。乃設禁。有私市者抵死。行之數月。犯者益衆。戎人乏食。屢入寇掠。而商人販解鹽者多出唐鄧襄汝間。得善價。關隴民轉至無鹽以食。太宗知其事。遣錢若水視之。遂弛其禁。此宋初聽番鹽入邊故事也。其後因元昊強肆。則又禁番鹽以困之。孫甫傳。元昊稱臣。乞歲賣青鹽十萬石。甫疏言。自德明時。已乞放行青鹽。先帝以其亂法不聽。及再請。乃遣其弟入質。而許之。蓋鹽乃中國之利。西戎之鹽。味勝解池。既開其禁。則流於民間。無所隄防。梁鼎亦疏云。議者多謂邊民舊食西夏青鹽。其價甚賤。及禁青鹽。以困賊。令商賈入粟。運解鹽於邊。其價與番鹽不相遠。故番鹽不能售。令若令解鹽與內地同價。則民必冒禁復市。青鹽乃資盜糧也。是二說者。皆以禁斷番鹽為邊界要策。按夏國傳。元昊既納款。宋許置榷場於保安軍。及高平砦。第不通青鹽。是宋自西夏用兵後。不復許番鹽入境也。然當中外分界之時。固不可不嚴其禁。若中外一統之世。則又不妨聽其入邊。在番人既可藉以資生。而邊民又得免於食貴。亦良法也。所慮番鹽與中國鹽價貴賤太懸。則日久不能無弊耳。

### 宋宰相屢改官名

宋承唐制。以同平章事為真宰相之任。初無定員。上相為昭文館大學士。監修國史。其次為

集賢殿大學士。或置三相。則昭文集賢及監修國史各除。國初范質為昭文學士。王溥監修國史。魏仁浦集賢學士。是也。其三師太師太保太尉三公司徒司空則為宰相加官。神宗新官制。置侍中中書令。而尚書令不設。即以尚書令之貳左右僕射為宰相。左僕射兼門下侍郎。以行侍中之職。右僕射兼中書侍郎。以行中書令之職。政和中。改左右僕射為太宰少宰。仍兼兩省侍郎。靖康復改為左右僕射。建炎三年。呂頤浩請左右僕射並加同中書門下平章事。門下中書二侍郎改為參知政事。廢尚書左右丞。從之。乾道八年。詔尚書左右僕射可依漢制。改為左右丞相。刪去侍郎。中書令尚書令之職。以丞相充。此宋代宰臣先後名稱不同之故事也。恐閱史者易於淆惑。故錄出之。平章事之稱。本始於唐。按舊唐書高宗永淳元年。以郭待舉岑長倩郭正一魏元同為同中書門下承奉進止平章事。上謂崔知溫曰。待舉等歷任尚淺。且令預聞政事。未即與卿等同名稱。自是外司四品已下。知政事者。遂以平章為名。是平章事本非真相也。其後遂以平章事為宰相之職。宋因之。有時特置平章軍國重事。或稱同平章軍國重事。則以處老成碩德。如文彥博呂公著是也。開禧元年。韓侂胄為丞相。乃又加平章軍國事之名。說者謂省重字。則所預者廣。去同字。則所任者專。時陳自強為右丞相。請以侂胄序班丞相之上。於是平章軍國事乃又超越丞相矣。其後賈似道亦為之。德祐中。王爚進平章軍國重事。陳宜中為左丞相。留夢炎為右丞相。是又於兩相之上。特設此官。蓋沿侂胄似道之班位。而又稍變其制也。宋末平章在丞相之上。元則丞相在平章之上。元制中書省左右丞相皆蒙古人為之。不以授漢人。漢人惟為平章政事。亦稱宰執。如王文統許衡是也。此又平章在丞相下之明證也。

### 宋節度使

西夏番鹽 宋宰相屢改官名 宋節度使



節度使本唐藩鎮官名。宋初猶存此官。然無所職掌。專以待勳賢。故老及宰相罷政者。或宰相樞密使出判大府。亦繫此銜。謂之使相。元豐新官制。始改為開府儀同三司。其後仍復此官。如文彥博以太師充護國軍山南西道節度使。致仕是也。至徽宗時。則宰相在朝者。亦兼此官。如左僕射蔡京兼安遠軍節度使。是也。南渡以後。則功臣為大帥者為之。并有兼兩鎮三鎮者。如韓世忠兼鎮南武安寧國節度使。張浚兼靜江寧武靜海節度使是也。

繼世為相

再世為相。漢推韋平。唐推蘇李。已屬僅事。宋則有三世為相者。呂蒙正相太宗。其姪夷簡相仁宗。夷簡子公著。哲宗時亦為相。傳贊謂世家之盛。古所未有。南宋則史浩相孝宗。其子彌遠相寧宗。理宗。浩孫嵩之。彌遠理宗時亦為相。其再世為相者。韓琦歷相仁英神三帝。其子忠彥。徽宗時亦為相。按琦固名相。忠彥亦不失父風。史氏則彌遠擅廢立為無君。嵩之謀起復為無父。家門雖盛。而名節有虧。若呂氏奕世勳猷。輝映史冊。可謂極盛矣。而公著於重圭襲組之後。不以門閥自高。益能守正不撓。為時名相。尤不可及也。

三入相

宋史呂蒙正傳贊謂國朝三次入相者。惟趙普及蒙正。然蒙正後。又有王欽若。張士遜。呂夷簡。文彥博。陳康伯。亦皆三次入相。蔡京并至四次入相。宋史所云。尚未深考也。今錄於左。

趙普 乾德三年為門下侍郎。太平興國初。再入相。  
呂蒙正 太平興國初。再入相。  
王欽若 太平興國初。再入相。  
張士遜 太平興國初。再入相。  
呂夷簡 太平興國初。再入相。  
文彥博 太平興國初。再入相。  
陳康伯 太平興國初。再入相。

四次入相

張士遜 太平興國初。再入相。  
呂夷簡 太平興國初。再入相。  
文彥博 太平興國初。再入相。  
陳康伯 太平興國初。再入相。  
蔡京 崇寧二年。以右僕射入相。尋一免。至都開堂。宣和二年。令致仕。六年。又再拜左僕射。三年。出居杭州。

兩次入相

張齊賢 太平興國初。再入相。  
李昉 太平興國初。再入相。  
向敏中 太平興國初。再入相。  
陳堯叟 太平興國初。再入相。  
陳執中 太平興國初。再入相。  
馮拯 太平興國初。再入相。  
賈昌朝 太平興國初。再入相。  
李迪 太平興國初。再入相。  
王會 太平興國初。再入相。  
富弼 太平興國初。再入相。  
范純仁 太平興國初。再入相。

繼世為相 三入相 四次入相 兩次入相